
1 / 167

Miel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1 / 167

【Nコード】

N1314K

【作者名】

Miel

【あらすじ】

なんとも頼りない召還方法で、神殿ぎゅつぎゅつ詰め的人数で異世界に

やってきた万里子。

消去法で減らされたが、残ったのは2人。でも求める姫は、1人。

本物はどちらなのか？

緊迫した空気の中、見た目が地味な万里子はポイツと放置される。

「姫じゃない」と言われたのに、元の世界に戻れない……。

ちよっと面倒くさがりで、目立つ事が大嫌い！脇役万歳！！な主人公が、

異世界で地道に生きてゆこうと心に決める。

が、それは周りが許さない。

いつの間にか個性的な人達に囲まれ、それでもマイペースな万里子のゆっくりゆっくり進む物語。

1・サトウマリコが呼ばれた日(前書き)

突然思いついて書いてみました。

逆ハーを目指します。

いずれは・・・そうなるかと・・・。多分。

1・サトウマリコが呼ばれた日

日本の、とある街に、佐藤万里子という、日本人としてはありふれた名前の女子高生がおりました。

彼女は、名前同様、とても平凡な容姿で中肉中背、成績は中の中。クセのある頑固な真つ黒な髪は、染める事も諦める程で、顔立ちも・
・悪くは

無いのですが、これといって印象に残るものではありませんでした。家から30分以内で着く高校5校の内の、3番目の偏差値の学校に通う、

佐藤家の3兄弟の真ん中の子でした。

そんな彼女の1つ上の兄のは、この辺りでは超進学校と言われる学校に通う秀才で、

1つ下の妹は、万里子の高校よりも少し偏差値は低い学校に通っておりましたが、

万里子とは違い、柔らかい栗色の髪が美しく、目鼻立ちが整って小顔の妹は

高校のミスコンに1年生にして選ばれる程の容姿の持ち主でした。

そんな兄弟を持つ万里子です。

努力しても、誰の目にも留まらず、いつも手柄は兄弟の物。ちよっと卑屈な性格になってしまったのは仕方ありません。

それでも、兄弟仲がとても良かったので、そんなに捻くれずに、かえって常に

脇役という気楽さが居心地良く感じておりました。

とある日曜日のこと。

隣の市にある父の実家に、法事の為一家で訪れる事になりました。

この家にすむ伯母の名前もまり子といい、同じ名前だった為、特に

万里子は

可愛がってもらっておりました。

伯母のまり子は売れないファンタジー小説家。万里子は、まり子の1番のファンで、

特に異世界トリップ物が大好きでしたので、伯母に会える事はとても楽しみに

していました。

伯母の家には、父の他の兄弟も集まり、それぞれが子供を連れて来ていたので、

リビングダイニングはすぐにいっぱいになりました。

そんな時です。

万里子は、足元がふわっとした気がしました。

キッチンに立っているはずなのに、床の感触を感じられないのです。

眩暈？そう思った万里子は、思わず隣に居た伯母の手をとります。

次の瞬間。

朝のラツシユもびっくりな、ぎゅっぎゅっ詰めの中におりました。

先ほどまで感じていたフローリングの感触は無く、ひんやりと石の冷たさを感じます。

先ほどまで、一緒にキッチンの手伝いをしていた妹を探しますが、見当たりません。

見知った親戚の顔も無く、見知らぬ女性ばかりでした。

ふと、眩暈を感じた瞬間に伯母の手を取った事を思い出し、未だ握り締めている

手の先に、視線を移します。

そこには、先ほどまでの自分と同じようにキョロキョロと辺りを窺っている、

伯母のまり子がおりました。

「伯母さん、ここ、どこ？」

不安げに伯母に尋ねますが、不安が伝染したのか、他の女性達も一斉に「何？」

「ここはどこ？」「どうしてこんな所に？」と騒ぎ出しました。

聞こえてくるその声は、子供のような声もあれば、老女のような、しがわれた声もありました。

高校生としての平均身長の158cmの万里子は、少し埋もれ気味で周りの状況が

よく分かりません。

万里子よりもだいぶ長身のまり子は、

「女性ばかりだわ。部屋の周りに、不思議な服を着た人達が居る。大体が・・・男性ね」

と、万里子の質問に応えるでもなく、目にしたものをそのまま言いました。

「なんだか・・・服装からしてファンタジーっばいわ！もしかしたらこれは、

私達、『召還』されたんじゃないかしら？」

ファンタジー小説家のまり子は、好奇心に目を輝かせています。

その時です。

「これは・・・どういう事だ？」

とても柔らかい印象の音が響き渡りました。声の印象は優しいのですが、言葉は鋭く、咎めるような口調でした。

その後に、老人の音が響きます。

「予言の通りに、姫を迎えるべく儀式を行ったのですが・・・」

老人の声は、とても困っていました。

予言？儀式？姫？

日常では聞かない言葉が出てきて、万里子は伯母の発言も的外れで

はないかも

しれない・・・と不安が増しました。

それでも冷静でいられるのは、隣の伯母の存在でした。

周りの女性は、知り合いも居ないようで、騒ぎはどんどん大きくなります。

「予言通り、サトウマリコなる姫を呼んだのです」

万里子はちよつと、呆れました。

日本に、一体何人のサトウマリコが居ると思っっているのだろう。

いや、海外にだって沢山居るだろう。それ程にありふれた名だ。

この人達は、その事を知らないのだろうか。

ピンポイントで、その姫と言う人だけを呼べば良いものを、どうやら名前だけを頼りに

儀式を行ったため沢山の『サトウマリコ』が呼ばれてしまったようでした。

8

そうか・・・だから伯母さんも・・・そう思って伯母を見たのですが

「何言ってるのかしら。やっぱり異世界って言葉が違うのねえ。惜しいわ」

え？

万里子は驚きました。どうやら、伯母のまり子は彼らの会話が理解できなかったようなのです。

「1人だ。姫は、1人だけなのだぞ！こんな・・・167人も居ては、わからないではないか！」

今度は野太い声が、慌てたように言いました。

「どうやら、サトウマリコという名の人間は、地球上に167名いるらしい。」

現実逃避のため、万里子はそんな事を考えていました。

自分が、言葉を理解できるのは何かの間違いだ。姫以外は帰してくるはず。

伯母と一緒に、伯母の家に帰るのだ。そう信じていたからです。

「条件を絞りましょう・・・」

「そう老人は言うと、今度は万里子にも理解できない位、つぶやくような声で何やら言葉を紡ぎ始めました。」

「ちよつと！何やら儀式めいたものが始まったわ！」

小説のネタになるとでも思ったのでしょうか。伯母の目がキラキラして、その老人に見入っています。

やはり、言葉が理解できていないのだ・・・

「きつと、呼びたい人以外は帰してくれるのよ」

「そう言うけど、」

「そうよね、こんなに沢山彼らも求めていなかったわよね。」

よし、じゃあ万里ちゃん、どちらかが残ってしまったら、帰った方

が親族に説明する事。良い？」

「え？一緒に帰ろうよ・・・」

何を言うのだ。この伯母は。いくら貴重な体験でも、帰らなかったら小説に

書けないのだ。

さすがに呆れたが、次の瞬間・・・

「あつ、杖を振り上げたわ！」

自分の頭の上から、実況中継をする伯母。

タン！

音が響いたと思ったその瞬間、

・・・・・・伯母は、視界から消えていた。

あんなにぎゅぎゅだった部屋に、今は自分だけ・・・・・・

いや、離れたところに、同じ年頃の女の子がもう1人。

残されたのは、たったの2人だけだったのです。

1・サトウマリコが呼ばれた日(後書き)

読んでいただき、ありがとうございます。
のんびり更新していくつもりです。

今度も読んでいただければ嬉しいです！

2・ふたりのサトウマリコ

向こうのサトウマリコさんは、見たところ万里子と同年代のようでした。

ただ、万里子と違っていたのはその容姿。

普段化粧を殆どしない万里子とは正反対。化粧に命をかけているような

女性でございました。

あれは絶対まつげエクステやってるな・・・そう万里子が確信した程に、

まつげバサバサの強烈な目力の持ち主だったのでございます。

服装は目にも鮮やか、ちょっとチカチカする位の色使いで、法事の為に

黒を基調とした服装をしていた万里子とはこれまた正反対。

自分の意思でつけている装飾品といえば、時計ぐらいでしょうか・・・。

そう、自分の意思でつけていたのは腕時計だけでございます。

ふたりのマリコの、何より大きな違いはその髪。

もう1人のマリコは、見事な金髪で更にちょっと盛ってて頭までもキラキラと

目には厳しい感じになっておりました。

遺された日本人はあたしとあの子だけなのに・・・会話が成り立つ自

信が、ナイ・・・。

とりあえず、万里子は状況を見守る事にしました。

派手な兄弟のお陰か、周りで何が起こっても、とりあえず静観する
ような

冷静さがいつの間にか身についていたようです。

それに・・・そのド派手な身なりで、周りの現地の人と思われる方
々は、

一様に彼女の方に注目していました。

「いやあー！ナンなの！？ちょっと、アタシも戻してよ！」

ナマハゲ・・・もとい、派手なマリコがこの状況をようやく受け入れ
たのか、
騒ぎ出します。

それも気にせず、彼女の周りに集まった、色とりどりのローブ（の
ようなもの）を
着た

中年～老人の男性達は口々に話しました。

「おお！この見事な金の髪！」

「まるで後光を差しているかの如き、存在感のある髪！」

いや・・・盛ってるだけでは・・・。

思わず噴出しそうになった。イカンイカン。

とりあえず、「姫」なるものは、彼女に決定らしいから、あたしはさっさと

戻してもらおう。

そう万里子は考えておりました。

そうこうしてる間にも、盛り上がりつつある彼らからは

「神秘的な紫の瞳!」(へー。カラコンもしてたのか。この距離じや見えないや。)

「見事な衣装!」(・・・目にも痛い蛍光イエローですが・・・)などと賛辞が相次いでおり、治まるまでの間、万里子は心の中で突っ込みまくって

おりました。

まあ、せつかくの「姫」こんな黒尽くめの地味子ではさすがに彼らも嫌だろう。と思っっていると・・・

「待て」

杖を持つ、一番お年寄りに見える老人が、彼らの会話を止めました。

「候補はもうひとりおる。姫はお一人じゃ。確実に、選ばねばならん。この世界のためにも・・・」

「では、サク様。どうされると・・・?」

「もう一度、やってみよう」

派手なマリコを取り囲んでいた彼らから、視線が注がれる。

まさか・・・まさか、呼ばれたのは自分なのか！？
でも、もしかしたら自分の輪郭も歪んだかもしれない。それに、自分自身で気付いていないだけかもしれない。

そう言い聞かせました。実際は、どっしり石の床に座り込んだ感触は一切揺るがなかったのですが・・・。

幸い、彼女の輪郭が一瞬歪んだ事は、他の人達の目には留まらなかつたようでした。

なんせ、ほぼ全員が万里子が消えると信じていた為、「消えるであろう黒尽くめの万里子」を見守っていたからです。

ですが相変わらず残っているのは2人。

「姫は、体の中心に赤く光る石を持っておる。これは、2人ともにあると言つことか？」

光る石・・・

体の中心・・・

「！！！！」

万里子はハツとして思わずおなかを押さえました。

2人ともが、部屋に居た人間の中でも屈強な男に腕を取られ、サクの前に連れて行かれます。

「すまんが、確認させてもらっよ」

な、何を!?

でも・・・わかっていました。生まれた時からあった、コレの事だ・

先刻から持っていた「まさか自分では・・・」という思いは、もはや確信になりつつ
ありました。

が、ワケの分からない事に巻き込まれるのも嫌だし、何より『あたし』は望まれていない。

だから、何も言いませんでした。
だって。まだこの場にもう1人候補がいる。まだ、自分じゃない可能性はある。

背後から両手を取られ、自由を奪われます。

目の前に来たサクが、そっと万里子の服の裾に手をかけました。

そっと、裾をめくると・・・

「・・・あるな」

やっぱり・・・コレの事だったのだ。

チラリと、まだわめいているマリコに目を向けると・・・
めくるまでもなく、マリコのおなかは見えておりました。

体の中心にある赤く光る石、とは、万里子の居た世界では「へそピ

アス」と言われるモノによく似ていたのです。

勿論、マリコのは真正銘のへそピアスでした。

黒尽くめの万里子の物は・・・なんでも、生まれた時からついてた。と言う代物でした。

病院に行ってもワケがわからず、取ることも出来なかった物です。

それでも、見た感じへそピアスとそっくりでしたので、この場に居る人間も、

どうしたものか、困っているようです。

「こちらが姫に違いない！さあ、任命の儀式を！」

しびれを切らした1人が、マリコを指差し進言しました。

えっ！？そんな適当でいいの！？と万里子は思いましたが、やっぱり巻き込まれたくないし何をやらされるか分かったものでも無いし、自分がイマイチ歓迎されていない

感じあつて、立候補する事は止めておく事にしました。

言葉も分からず、突然指差されたのでまたも騒ぐマリコでしたが、サクに優しく杖でオデコに触れられ、なにやらつぶやかれると、言葉が理解できる

ようになつたようでした。

周りに集まった人々に、口々に「姫！」と言われると、さっきまでの騒ぎはどこへやら。

まんざらでもない顔をしています。

サクは万里子にも、術をかけました。

元から言葉は分かっていたのですが、まあ余計な事は言わない方がいいだろうな。

そう思い、されるがまま、術をかけられていました。

そしてサクに言われます。

「そなたが姫では無いようだが、先ほどの術でも帰せないのなら、悪いがもう方法が無い。、姫とこのままこちらに留まっておくれ」

てつきり、お役御免とばかりに帰してもらえるのだと思っていた万里子でしたが・・・

帰す方法がない。そう言われ、結局この世界に残る事になるのでした。

しかも、「望まれた者にくっついて来た子」として。

この様子を、思案気に見つめる者が1人。

この者だけが、3度目の術でマリコの輪郭が歪んだ事、体の中心に埋め込まれた

赤い石の存在を持ち出され、万里子がつさにおなかを押さえた事・

・

こちらの人間の話す事に、噴出しそうになったりいちいち表情を変えていた事。

つまり、術をかける前から言葉を理解していた事を・・・
全て気付いていました。

本物の姫は、黒尽くめの万里子である事を。

3 お持ち帰り宣言

帰れない……

その事を実感すると、床の石の感触が突然冷たく感じられ、ぶるりと大きく震えました。

寒い……。ここは、今冬？

日本は今、秋でしたので、万里子は半袖のブラックのセーターとこれまた

ブラックの膝丈のギャザースカートを穿いていました。まさに、『THE・地味』といったところでございます。

そして足は素足でしたし、キッチンに居たものですから靴も履いておらず。

石の冷たさに震え上がるのも仕方のない事でした。

寒い……。

思わず、両腕をさすります。

すると、手にお玉を持っている事に気付きました。

つ、使えねえ……！

がっかりです。チラリとマリコを見ると、言葉が通じるようになつた為、散々我俣を言っているようでした。

「寒いんだけど！」

すぐさま、見るからに新しいローブが用意されました。

胸が大きく開き、くびれ強調のヘソ出しＴシャツにミニスカートでは日本に

居たとしても寒かったと思うけど……。

またもや心でツッコミを入れます。

ただ、外出中に召還されたらしいマリコは、こちらも露出度は高いですがそれでもミニールを履き、

大きなバッグを持っていたので万里子はとても羨ましく思いました。

「さあ、お荷物を持ちましょう」

「宮殿に参りましょう」

「王もあなたをお待ちです」

相変わらず、マリコに対するちやほやは続きます。

ひとり放置されておりました万里子でしたが、寒さには勝てません。

くしゅん！

あまりの寒さに、くしゃみをしてしまいました。

石で出来た建物に、それはわんわんと響き渡ります。

それをきっかけに、再び万里子に全員の視線が注がれます。

そして、「ああ……こいつも居たんだった」と、一様に面倒くさそうな表情になります。

召還されたのは2人居るにも関わらず、自分だけがちやほやされて

いるこの現実には
すっかり有頂天のマリコは、すっかり上から目線。未だ石の床に座り込んでいる
万里子を鼻で笑いました。
マリコは、自分こそが姫と呼ばれ、万里子はあくまでもついで。その話を
信じてしまったようです。

「サク様、この娘はどうされるおつもりです？」

「この国の常識も無ければ、働く事もできませんまい」

「では、貴殿の館で下働きとして受け入れたらどうだ？」

「どこぞの者とも分からぬ娘を受け入れるなど!！」

寒さが増した気がします。

ものっすごい厄介者扱いされてる……。

頼みの綱だった、サク様、と呼ばれる老人も困ったように眉間にシワを寄せました。

「あー!じゃあアタシのメイドにしてくんない!？」

マリコがその、ちょっと耳障りな高い声で男たちの会話を止めました。

「めいど?」

「はて・・姫、その『めいど』とは何でございませう?」

「アタシ専用の、うーん、何?の?下僕?」

あの。それって男に対して使う言葉なんだけど！

酷い言われようにも関わらず、相変わらぬ鋭いツッコミを見せる万里子では

ございましたが、本当に専用召使にされてはたまりません。

内心かなり焦っております。

すると。

「私の館に連れてまいりましょう」

静かな、柔らかい声が万里子を包みました。

ふと、声がした方を向きますと・・・

あれ？女性も居たんだ・・・。

すらりと背の高い、細いその身を淡い水色のローブに身を包んでいるとても美しい

女性でした。

白い陶器のようななめらかな肌、深い、深い青の瞳、その青が映える、白銀の

クセひとつない腰までの長く美しい髪を持っていました。

ゆっくり、ゆっくりと万里子に近づきます。

マリコには一切、目を向けませんでした。

「よろしいですね？」

サクに、了解を求めるように問いかける美人に対し、サクは少し迷いを見せましたが

「あなたがそうおっしゃるのなら・・・」

そう、答えました。

やった！召使脱出！

いや・・・こちらの美人さん家でも召使なのかもしれないけど・・・
あの子専用にならなだけマシ！

ほっとした万里子でした。

「私は、ジルと申します。」

ジル、と名乗った美人さんは優雅に膝をつき、万里子の目線に高さ
を合わせ、

ふわり。と微笑みました。

「さあ、参りましょう」

先ほどまでのざわめきは何処へやら。

シンと静まり返ったこの石造りの部屋から、ジルは連れ出してくれる
ようでしたので

万里子はすぐさま、その女性にしては少し大きな手に自分の手を乗
せました。

が、すっかり冷えた足は簡単には言う事を聞かず、立ち上がろうと

した万里子は

足がもたつき、倒れそうになりました。

ジルはとっさに手を引き、自分の体全体で万里子を受け止め、支えました。

そこで万里子はやっと気付くのです。

この人、お、男だ!!!!!!!!!!!!!!

3 お持ち帰り宣言（後書き）

1 人目、登場？

4・消えた赤い星

男だ！

こんなに綺麗なのに、男なんだ！

見たままの印象通り、恋愛経験も無ければ、手を繋いだ経験も親類を除いては

小学校の遠足の時だけ。という万里子は、ジルの腕の中で自身も石になったかのように、カチーンと固まってしまいました。

「ああ・・・すっかりお体が冷えて・・・」

ジルは、そんな動かなくなった万里子を、さつさと腕に抱き上げ、部屋を出て行きました。

まるで、万里子以上に、ジルがこの空間に万里子を居させたくないと思っっているかのように、それはそれはすばやい動きで、万里子はされるがまま。でございまして。

「・・・大丈夫ですか？」

あの儀式が行われていた部屋を出て、少しすると長い長い階段があ

りました。

一見華奢な印象を与えるその女性的な風貌の割りに、逞しい体つき
のジルは
長い長い階段をものともせず、万里子を抱きかかえたまま上つてい
きます。

「あの、重いですよね？歩きますから・・・」

「重い？いいえ。姫は重くなんてありませんよ。

神殿は地下深くにありますから、余計寒かったでしょう？もう少し
で地上に出ますよ」

まるで、地上に出たら暖かい。というような口調だが・・・肌で感
じる空気は冷えたままだった。

この世界は、ずっと冬なのだろうか？

ぶるり。万里子はまた大きく震えました。

「この世界は、今は冬なのですか？」

「冬？いいえ。今は季節で言うと、夏ですよ。ですが、今は1年中
殆ど変わりません」

「なぜ、ですか？」

「ヤンテが姿を消してしまっただからです」

「・・・ヤンテ」

はて、何の事だろう。言葉は分かるつもりだったが、この言葉は聞いた事がない。

不思議そうに言い返した万里子に、ジルは丁寧に説明しました。

「ヤンテ、とはこの地に昼と夜、そして季節を与えていた存在です。空高くにある、赤い星ですよ。

それが17年前に突然姿を消しました。

それからはずっと冬のように寒く、作物も育たない。夜のような暗闇が続き、

飢えた人々は略奪を働き、国は荒れました。

この国は、ヤンテに見離された。もう終わりだと人々は悲しんだ。

そんな時に、予言があったのです。体に赤い石を持つヤンテの姫が現れるとね」

静かに話しながら、小さな扉を開け、古びた石の螺旋階段を上るジル。

待って。何か・・・何かが引っかかる。

先ほどから、ジルの言葉が万里子の頭の片隅に引っかかっています。

先ほど通った、扉の向こうを、人々の騒がしい声が通り過ぎました。その中には、一緒にこちらにやってきたマリコの甲高い声も聞こえます。

「私達は、裏口から出ますよ」

「え？」

頭が混乱する。何かが、引っかかって、それが頭の中でもがいている。

アタマガイタイ――――！

「裏口、ですか？」

「ええ。今頃は外は大変な騒ぎになっているでしょうからね」

「え？」

「着きましたよ。この扉を開ければ、外に出られます。姫、まだ寒いですか？」

そういえば。

「い、いえ。少し暑い位です」

ジルは満足気に微笑むと、万里子を抱いたまま器用にドアを開けました。

ずっと、冬がつづく暗闇の世界へ――――

の、はずが。

そこは日の光が眩しい位に降りそそぐ明るい世界。

ただ、ジルの言った通り、国の荒れた様子が日の光に晒されており

ました。

木々は枯れ、草も無く大小の石がむき出しの地。

「やはり……」

感極まったかのようにつぶやくジルを見て、やっと、引つかかって
いた言葉を

思い出した万里子は・

「！！ジ、ジルさん……さっき、何て言いました？」

「ヤンテですか？」

万里子の胸は、苦しい位に高鳴っておりました。

「いえ！あたしの事、何て呼びました？」

「姫、と。……あなたが、本物の姫でしょう？」

4・消えた赤い星（後書き）

ジルは、白いか黒いのか・・・？

5・忘れていた痛み

空には、大きな赤い太陽のような星が。

万里子とジルの頭上高くから、2人に強い日差しを浴びせておりました。

先ほどまでの冷気はどこへやら。

万里子は、背中が汗ばむのを感じました。

でもそれは、この暑さの中、未だ抱きかかえられジルに体を密着させていたからではなく、

たった今、ジルから発せられた言葉による、冷や汗だったのかもしれません。

こんなに暑く天気も良いのに、鳥や虫の声は一切無く、恐ろしいまでの静けさが、

2人を包みました。

「本物は、あなたですね？」

もう一度、ジルが問いかけました。

しかしそれは、問いかける口調ではありませんが、ジルは既に答えを知っているようでした。

答えが分からないのは、万里子の方です。

落ち着いているように見えました。すっかり混乱しておりました。

ワカラナイ。

自分は、日本で静かに、平凡に生きてきた。

自分が何か特別な存在だなんて、そんな事は今まで一度だって無かった。

超進学校の中等部1年より高等部までの生徒会長を務め、学力テストも

全国のトップ5に入り、既にいくつもの資格を持つ兄。

同じ中学から美少女コンテスト荒らしと呼ばれ、街に出ればいつもスカウトされる妹。

そんな2人の間で、あたしが唯一もらった賞は健康優良児の賞だけだ。

あたしは、どんなストーリーの主人公にも成り得ない。単なる脇役ではない。

この世に生を受けてたった17年だけでも、そう、答えを導き出すのに

17年という歳月は充分だった。

そしてそれに気付いた時、私はとても楽になれたのだ。

それが突然、異世界の姫だなんて・・・そんな事、あり得ない。そんな事・・・

ずっと厳しい表情で空を見つめる万里子を、ジルは答えを求める事もせずに、じっと見つめておりました。

「わ、私は・・・」

万里子が小さく話し出した、その時でございました。

「姫！」

「さすがでございます！ヤンテが・ヤンテが戻って参ったぞ！」

「ありがたいことだ！なんと素晴らしい！」

「さあ、早く宮殿へ！」

万里子達が出てきた神殿の裏口の反対側から、人々の歓声が聞こえてきました。

「ああ・あちらも神殿から出たようですね。」

どうやら、神殿の正門前で人々が姫が出てくるのを勝ち構えていたようで、

マリコはその人々に盛大に出迎えられているようでした。

大きな神殿の反対側にも、その歓迎ぶりが伝わってきて、その人々の歓喜の

声が、万里子の耳に冷たく響きました。

「違います。私は・姫じゃない。彼女が姫だもの。私じゃない。

私は・・・求められていないもの・・・！」

それは、忘れていたはずの万里子の心の悲鳴でした。

「では・・・私のモノに、なりますか？」

ジルが、万里子を抱き上げたまま、万里子の顔をそっと自分の胸に押し付けました。

その為万里子は、そう言ったジルの表情が見えなかったのです。

5 ・忘れていた痛み（後書き）

ジルは白いのか、黒いのか・・・？

6 私が人嫌いになった理由(ワケ) sideジル(前書き)

ジルの一人語り。

6・私が人嫌いになった理由（ワケ） side ジル

それは、はるか、はるか昔の事。

わが国、ラウリナ国はヤンテに愛されていた国だった。
ヤンテとは、空高くに光り輝く赤い星。

神が、遣わしたラウリナの守護星と言われてきた。

昼は赤く強く輝き、地上に光のエネルギーを注ぎ込む。

その星は夜は淡く光り、山々を、木々を、人々を休ませ、更なる成長を促す。

春は柔らかい光で花々を咲かせ、夏は強い日差しと多くの雨で作物を、動物を一気に成長させる。

秋は陽射を弱め、爽やかな風を送り収穫の時期を知らせる。

冬の光は辺りを照らす程の弱さになり、雪を降らせては人々を家に閉じ込め、地を整える。

ヤンテのご加護で自然に恵まれ、作物も豊富に実り、子宝にも恵まれた。

当時、人々は皆様々な特殊能力を身につけていたと言う。

ある一族は治癒能力、ある一族は空が飛べ、ある一族は植物と話が出来た。

彼らは、お互いの能力を尊重し、協力し合い、益々繁栄を遂げていった。

それぞれが能力を持っていたのも、ヤンテのご加護だった。

人々は、ヤンテを崇め、祈った。

自分の中に「欲望」を意識するまでは。

ある一部の人間が過信し、ヤンテに祈りを捧げなくなった。
人の能力を、自分の物にしようとした。

協力は騙しあいになり、一族の能力を守ろうとするが故、能力を隠そうとした。

結果、誰でも当たり前前に使っていた能力は、弱まっていった。

人々にとってヤンテは、ただの地を照らす星となった。

そんな我々に失望してか、突然、ヤンテが姿を消した。

昼が無くなり、四季が無くなったこの国が、荒れていくのはあつと
いう間だった。

今更、後悔してもあまりにも遅すぎた。

わが一族は、最後までヤンテに祈りを捧げ、自らが持つ能力を守ら
んと、

子孫に厳しく教えていた数少ない一族であった。

祖父や、父から教えられる事と、一族の敷地の外で見る光景にはあ
まりにも

差があり困惑したが、自分の体に満ちている能力の存在から、一族
に従う事にした。

わが一族は、俗に言う「魔族」であった。

聞こえは悪いが、『魔法を操る一族』の略である。所詮は人間だ。
ただ、その中でも、私は更に特別な能力が備わっていた。

それは・・・人の命の強さが熱として伝わってくる事。稀に色づい
て「見える」事もあった。

身近なところでは、一番熱心に教育してくれた祖父が、静かだが激

しい緑の炎を
体に宿していた。
ヤンテのご加護は、体に現れる。

昔は、誰でも持っていたのだと言う。

今は、神官でさえも形ばかりで、何も見えていない者が多かった。
何も見えず、神の言葉を聞けぬ者が神官を名乗る。

呆れて、私は一族の敷地から出る事は無くなった。

ヤンテの異変に気付いていたわが一族は、得意の魔法で食料も蓄え、
結界も万全にした為、

まだ自分に代替わりしたばかりだったが、このまま隠居しようかと
思っていたところだった。

あの、言葉を聞くまでは。

ある日、屋敷で瞑想していると、数年前に亡くなった祖父の声が響
いた。

「ヤンテが復活する。体に赤い石を持つ、娘を迎えよ」

正直、ヤンテの復活はどうでも良かった。

もう、殆どの人間が能力を失っている。今になってヤンテに縊ろう
とするあの

なんの熱も持たないヤツらに、今更何を？

しかし、祖父の声は私が動き出すまでしつこく続いた。王の下に行
き神殿で儀式を行えと言う。

尊敬する祖父の為、仕方なく宮殿に向かった。

案の定、この言葉に全員が飛びついた。

まるで、その娘が自分に新たな能力でも宿してくれると思っ

みたいだ。
都合のいい人間だ。

儀式は、「元」大神官のサク様が行う事になった。

「現」大神官は、名目上は私だが、殆ど宮殿には寄り付かなかった為、私が

大神官だと言う事は、下級神官は知らない。

儀式を見届けたらすぐに屋敷に戻るつもりだったから、わざわざ身を持って知らせる事でもないだろう・・・。

サク様は、年老いたとはいえ、まだ能力はあるお方だ。儀式は滞りなく行われるだろうと、思っていた。

が。

神殿の儀式の間に、一気に167人もの様々な年齢の女が現れた。

私は一瞬で自分の周りにだけ結界を張った為、押しつぶされずに済んだが、

サク様以外の神官は下級であれ上級であれ、いきなり現れた女に押しつぶされそうになっていた。

「これは・・・どういう事だ？」

聞くが、さすがのサク様も困惑しているようだ。

167人。すぐに人数を確認する。

この中に、例の娘が居るのか・・・。
集められた女の中には、命の火がもうすぐ消えようとしている者も居た。

反対に、出来立てのまだ自己を持っていない命も、感じられた。

ざっと見渡したその時……。

儀式の間の中央付近で、銀色の、丸い金物が振り上げられたのが見えた。

?なんだ?

そちらに目を向けると、そこに、強い、強い熱を感じた。
一箇所から、赤く燃える、命の熱さが、あった。

サク様が、続けて呪文を唱える。

一瞬にして、大多数が消えて息苦しさは無くなった。

(私は元々息苦しく無かったが)

中央に、ぽつりと。

銀色の金物を握り締め、座り込む黒尽くめの娘。

飾らない、とても質素な身なりをしていたが、体の中の赤い炎は眩しいまでだった。

私は、ひと目で娘に惹かれた。

だが、他の神官は・・見えないのは仕方ないとしても、感じる事も出来ないらしい。

もうひとり残った、何の熱も持たない娘が姫だと決め付けていた。
赤の姫が、黒の衣を纏っていたから、余計かもしれない。

何も分からない神官達の失礼なまでの冷たい視線の中、儀式の間の中央で

居心地悪そうに身を縮こまらせている赤の姫。
不安そうな様子でも、まばゆいばかりに赤く燃える命の強さは変わ
らず。

それなのに・・・なぜ、見えない！？なぜ、感じない！？
これほどに輝いているのに！

サク様がもう一度術をかけた時、派手な身なりの娘の体が一瞬、歪
んだ。

だが、それでもこの場に居る神官はこちらを姫だと言う。
黒尽くめの姫の方は、最初から我々の言葉に反応していたというの
に。

それすら、気付かないらしい。

私は元々、人は嫌いだ。

熱を、能力を持たない人間は、裏切りと略奪を繰り返す。

能力を持たない者同士、群れて強くなった気分になる。今回も、1
人が派手な女を姫だと

言ったら簡単に全員が同意し、残された姫を蔑んだ目で見ていた。

そんな人間達の下に、なぜ姫を置かなければいけない？

だが、何人かは彼女の真の姿を見破り、惹かれるだろう。

ならば、お1人の今、私が連れ去ろう。

そちらの女を姫だと選んだのは、お前たちだ。

本物の姫は、私が大事に大事にお守りしよう。

赤い熱に誘われるように、私は結界から一步足を踏み出した。

姫の持つ、銀色の先の丸い金物の使い方を知るのは、もっと先の事。

そして、この時持った感情が、独占欲だと知るのはそれより更に、
先の事……。

6 私が人嫌いになった理由(ワケ)

side ジル(後書き)

人嫌いが、初めて人に対して持った興味。
初めてなだけに、影響は大きそう・・・。
ところで、この世界にお玉は無いのか？

7・効かない娘

ジルの胸に頬を預けた万里子は、勿論彼の言葉は聞こえておりましたが

ここは無視する事にして、心の痛みに従い涙を流しました。

思えば、いつも出来すぎた2人の兄妹に隠れるように、でしゃばらないようにと

暮らして来た為、自分の為に泣くのは、万里子にとって久しぶりの事でした。

そっと、万里子を抱きしめる腕に力を込めるジルでしたが、

その時。

ポツリ。ポツリと、空までが万里子と同じように涙を流し始めました。

とっさに、自分達の周りに結界を張った為、濡れる事はありませんでしたが、

ジルの腕の中で静かに涙を流す万里子と、少し光を弱め空全体を薄暗くして

雨を降らせるヤンテ。

交互に見比べて、これは偶然だろうか・・・それとも・・・と、ジルは考えを

めぐらせていました。

一方、今まで知らず知らずに我慢してきた涙を、一度流してしまっ

た万里子は

その止め方を知らず、涙は激しくなるばかりでした。

しゃくりあげるように泣き続ける万里子。

空から降る雨も、どんどん強くなります。

これは・・・間違いなく、天候は万里子の涙と関係している。

とにかく万里子の涙を止めなければ・・・。

ジルはその場にそつとしゃがみこむと、泣きじゃくる万里子の頬を自身の両手で

包み込み、そつと、万里子のまぶたにキスをしました。

そして唇を押し付けたまま、舌でペロリと、今まさに流れ落ちようとしていた

滴を舐めあげました。

突然まぶたに感じた柔らかさと、それに続く濡れた暖かい感触。

あまりの驚きに簡単に涙は引っ込み、そんなに大きくない目を精一杯に広げて

ジルを見つめます。

ですが、ジルはなんだか納得のいかないような、少し不機嫌そうな表情をしていました。

ああ、あたしつてば取り乱して、この人にとんでもない面倒をかけてしまったんだ。

彼もきつと、あの華やかなマリコの方が良かったのだろう。

なのに、1人放置されていたから救いの手を差し伸べてくれたのだ。それを、なんかいきなり裸足だからってお姫様抱っこしてもらった

り、胸を借りて子供みたいにワンワン泣いたり。

そんなのはもつと華やかで、華奢で可愛い女の子の特権なのに・・・。

すーっつと頭の中が冷静になり、とんでもない失態をしてしまったものだ。

慌てて立ち上がり、ジルから少し離れます。

ジルが雨に濡れないようにと作った結界から、外に出てしまいましたが、もう雨はあがっていました。

ジルはと言うと・・・まだ大層不機嫌な表情をしておりました。

万里子が考えた理由とは全く別の理由からでしたが、離れても未だ表情が晴れない

ジルを見て、万里子は益々勘違いをするのでございます。

目立たない！迷惑をかけない！空気のような存在に！

いつも自分に言い聞かせていた言葉を、口には出さずに心の中で大きく唱え、

万里子は自分を立て直しました。

こうなつてはこの世界で生きていくしか、ないのです。

今、この世界にはジルしか話し相手がありません。

彼にとって、自分は思いつきりお荷物かもしれませんが、頼る相手は彼しかいないのです。

ジルも気を取り直したらしく、美しい顔に笑顔を復活させると立ち上がりました。

女性的な容姿から少し華奢な印象を持っていたのですが、隣に立って見ると

意外とジルは背が高い事に気付きました。

確実に、頭ひとつは万里子よりも大きいのです。

やはり男性なのだ・・・と、兄以外は若い男性と親しくした事が無い万里子は

どうにも居心地が悪くなるのでした。

この人を・・・頼るしか、無いのだろうか？

「姫、私の屋敷にご案内致します。」

すっと、手を差し出すジル。

万里子は一瞬、迷いましたが、異世界にひとりという心細さが勝つてその手を取りました。

「まず、着替えが必要ですね」

「着替え、ですか？」

「ええ。今は裸足ですし、お色が黒では・・・少し、目立ちますので」

「黒だと何か都合が悪いですか？」

「黒は、我々の世界では身分の低い者を表します。下級召使などが着るものなのですよ。」

道中、危険かもしれませんからね」

ああ。神殿での、皆の冷たい視線の理由が分かった気がする。

だから、色鮮やかなマリコの方が良かったのだ。

こんな全身真っ黒な娘を、姫と受け入れるのは困難だったのだろう。

と納得はしても、着替えもお金ありません。

やはりジルに頼るしか無いようでした。

「少し、じっとしててくださいね？」

万里子の両肩に手を置き、なにやらつぶやきますが・・・

「？」

「.....」

ふう。小さなため息と共に、ジルが手を離しました。

何があったというのでしょうか。万里子にはさっぱり状況がわかりませんでした。

実は、先ほどから万里子に対して術を使っているのですが、全く効かないのです。

本当はまぶたにキスをした時も、同時に眠る術をかけていました。

その方が泣き止むし移動は楽だしの、一石二鳥だったのです。

そして今回も・・・この世界とは全く違う趣の衣・・・しかも、黒の衣を纏った

娘を連れ歩くのは人目を引くので、こちらの世界の装いに変えようとしたのですが

それも空振りに終わったのでした。

こちらの世界の人間では無いからか？

とも思いましたが、宮殿に連れて行かれたマリコは、サクの術で言葉が通じるようになっていましたし、

そうなる・・・万里子にだけ、術が効かないという事です。マリコに対しての

術と同じ術をサクがかけていましたが、万里子は最初から言葉を理解していました。

サクの術も、空振りだったという事です。

さて、困りました。

なんでも人並み以上に出来、若くして一族を束ね、この世界始まって以来の魔術の腕！と称えられ、

最年少で大神官になったジルが、生まれて初めて本当に困りました。

1．万里子と共に、衣を買いに行く

・・・却下。人目につき、この世界の者でない娘がもう1人居る事を広く知られてしまう。

2．万里子をここに置き、一人で買い物に行く。

・・・却下。離れた時に誰かにさらわれてもしたらどうする！？離れるのは論外だ！

3．飛んで行く

・・・ジルは飛ぶ事も出来ましたが、万里子に術がかけれない為此れも却下となりました。

考えた末、馬車を用意する事にしました。

万里子の姿を人に見られず、一緒に移動するにはそれしか方法が無かったのです。

ジルがなにやらつぶやくと、少しして、枯れた大木の陰から大きな大きな

白馬が音も無く現れました。

見た目はよく知る「馬」そのものでしたが、大きさが1．5倍くらいの巨大な馬で

4本の足の付け根に小さな翼を持っていました。

そして、その背に馬車をつけているのですが・・・馬車には車輪がありません。

宙に浮いています。

よくよく見ると、馬も浮いています。

「スホは地上より少し浮いて走ります。ですから揺れませんし、足音もしない。

盗賊などにも見つかりにくいのですよ」

どうやら、この馬らしき動物は「スホ」と言うらしい。

根っからの動物好きな万里子は、臆せずスホに近づきました。

「えっと・・・よろしく願いますね」

スホは、わかった。というように、頬を摺り寄せました。

これで、誰に見られる事なく、姫を屋敷に運ぶ事ができると、考え抜いた移動方法に、ジルが心の中で安堵のため息をつきました。

ですがそれは、道中何も起こらなかった場合。の事……。安心するには、少し早かったかもしれない。

7・効かない娘（後書き）

無事に着けたら物語は進まない・・・。

8・名前を捨てる時

さて。

目の前には、車輪の無い木造のハコ。見た感じ、中は畳2畳位？真四角の、ベニヤで作ったようなハコで、左右に小さな穴（窓と言わべきか？）が開いていて・・・何の飾りもない、ただのハコが浮いている。

スホに繋がれふかふか浮いているこのハコをじっと見つめ、万里子は一体コレにどう乗るべきなのか??と真剣に考えておりました。

ジルはその様子を横目に、くすりと笑い、ひらりと馬車の狭い入り口にその身を滑り込ませ、万里子に手を差し伸べてきました。

「さあ、姫。お手を」

姫では無い。と言ったのに、ずっと万里子の事を姫と呼び続けるジル。

その呼び名は、万里子にとってはどうにもこそばゆいものでございしました。

どうしたものか。と中途半端な高さに上げた手を、ぐい。とジルに強く引かれ、

バランスを崩したまま馬車に前のめりに飛び込む形になりました。

ぶつかる!!

思わず強く目を瞑る万里子ではございましたが・・・

どふん。

そこは大小の色鮮やかなクッションが並ぶ、座面部分が広く作られた巨大なソファのような物。

その上に、うつぶせに倒れこんでおりました。

板にぶつけると思っていた低い鼻は、真四角の淡いブルーのふわふわクッションに
ふんわりと包み込まれています。

簡素なハコは、ジルの術によって豪華なリビングのようになっておりました。

その広さも外観を無視し、巨大なソファがふたつ向かい合わせにあり、その間には

テーブルにでもなりそうな、側面に豪華な装飾を施した長方形のハコ。

軽く、8畳はありそうです。

ジルは、万里子の倒れこんだソファの向いソファに、靴を脱いでゆったりと座り込みました。

どうやら、この座面が広いソファは靴を脱いで上がりこんで使うらしい。

ずっと裸足だった万里子にはとても有難いものでした。

起き上がり、ゆったりと座り直すと窓から涼しい風が入ってきました。

穴ではありません。外からは単なる四角い穴だったのに、車内から

はパステルカラーの薄布が幾重にも垂れ下がり、外からの強い夏の陽射を柔らかく車内に差し込ませておりました。

どうやらスホが馬車を引き、走り出したようです。

ジルの言う通り、揺れが全くありません。ですが窓から吹き込む風で馬車が進んでいる事を知りました。

この国の事は何も知らないけれど、更に知らない場所に行こうとしている。

少し不安だけれど、この世界に慣れて生きていかなければ。

それにはまず、この世界の事をもっと知らなきゃ。

「あたし、ここで何とか生きていかなきゃいけないんです。

ご迷惑なのはわかってるんですけど・今はジルさんしか頼る相手がいないんです。

あの、お願いします。この世界の事、色々教えてください。」

万里子は巨大なソファの上で居住いを正し、ぺこり。と頭を下げました。

ジルは驚きました。

万里子が残されたのをいいことに、さっさと連れ出したのは自分だったので、

我ながらずるかったかな、と少し良心が痛みました。

「宮殿に行って、名乗り出なくて良いのですか？」

一応、聞いてみました。これで「行かない」と言えば、自分が連れ出す事も正当化されると思ったのです。

「あの。《姫》って一体何をするんでしょう？」

実はそれは、誰も知りませんでした。

ヤンテの姫が存在するなど、過去にもありませんでしたし、言い伝えなども無かったのです。

ジルが祖父の言葉を聞き、初めて知られた事でした。

ですから、具体的に何が出来て、どのような存在なのか、誰も知らなかったのです。

ですから、ジルは想像した事を告げました。既に決定事項として。

「毎朝、宮殿のバルコニーから国民に挨拶をします。

そして午前中は謁見の間で、国民や各国から訪れる客人と会ったり、会議に出席する事もありますね。

午後は貴族の奥様方と交流し、時には病院などを周ります。

ああ、肖像画と彫刻の制作もございます。国の宝として宮殿に飾られます。」

どんどん嫌そうに顔をしかめる万里子を横目に、どんどん話を続けるジル。

既に万里子の答えは、ジルの望む方向にあるようでしたが・・・更に追い討ちをかける事にしました。

「ああ、最大のお仕事は王子との婚約です」

「こ、こんやくー！」

「今年56歳の・・・」

「む、無理です。あたしはここで自立する道を選びます！第一！姫じゃありませんから！」

今年56歳になるのは王であって、王子は見目麗しい20歳なのだが、まあ訂正しなくても良いだろう。

それに、わざと勘違いするような言い回しにしたのだから。やっぱり、ジルはするいのです。

「では、まず新しいお名前が必要です」

「名前？」

「ええ。ヤンテの姫が《サトウマリコ》という事は、既に国民全員が知っていますからね。

同じでは何かと不便でしょう。」

名前を変えなければいけない・・・それは本当に、これまでの生活を切り捨てなければ

生きていけないという事でした。

「何か、候補は無いですか？」

そんな事を突然言われても、全く思い浮かばない。

「あ。小さな頃、まるこって呼ばれてました」

幼い頃から面長で繊細だった顔立ちの兄妹とは違い、丸い顔立ちだった万里子は

同じ名前の伯母との違いをつける為、親類から《まるこ》と呼ばれておりました。

この頃はとても嫌だった呼び名だが、今、他に何か名前を……

……
そう言われた時に、ふと思い浮かんだのはこの呼び名だった。

少しでも、今までの自分を忘れたくない……。

その思いがジルにも分かったのでしょうか。

「ではマールにしましょう。その方が、この国らしい名前です。目立ちませんか？」

「マール……」

新しい名前……なんだか不思議でした。自分でもそつと言葉にしてみました。

窓からの陽射はいつの間にか無くなり、外は夜になったようでした。風も、入ってくる事は無くカーテンのような役割をしていた薄布は、揺らいでいませんでした。

でもそれは、スホが足を止めていたから……

『申し訳ありません。盗賊のようです。取り囲まれました』

車内に、というより、頭に直接響くような低い声。

ジルは、チツと舌打ちすると万里子に決して出ないように言い含め、外に飛び出しました。

万里子は車内に1人取り残されました。

8・名前を捨てる時（後書き）

意外とずるいジル。

9・夜のような男

あれはきつとスホの声だったのでしょう。

盗賊に取り囲まれた。と言っていました。

取り囲まれる、という事は相当な人数のハズ。

背が高いとは言え、細身で華奢な印象のあるジルがたった1人で、
なんとか

できるものなのだろうか？

静かだった暗闇から、何かがぶつかる音や、うめき声が聞こえてきました。

恐る恐る薄布を押し分け、そつと外を覗きました。

が、何も見えません。外は真っ暗闇です。

よーく目を凝らすと、ジルの白銀の美しい髪が、チラチラと見え
ました。

が、敵は闇に溶け込んでいるように全く見えません。
勿論、人数もわかりませんでした。

『姫、危ないから顔を出すのは止めて』

また頭に直接響く声でしたが、ジルはたった1人で盗賊達の中に飛び込んだのです。

心配で、1人で居心地の良い車内で待つなど出来ませんでした。

ずっと外を窺っていると、段々闇に目が慣れてきました。

万里子が確認できるだけでも、敵は10人以上いるようでした。

既に数人地面に倒れていましたが、光るモノが盗賊達の手元に見えるところを

見ると、武器を手にしているのは間違いありません。

大丈夫なのかな。

「あの、ジルさん、大丈夫でしょうか？」

思わずスホに問いかけておりました。

『・・・わかりません。こんなに大人数の盗賊はあまりありませんので・・・』

そんな！

また少し先で、ジルさんの髪がサラリと揺れるのが見えた。

だが。

あたしにさえ見えたという事は、敵にはもっとよくジルさんの位置が見えているに

違いない。

彼は目の前の敵に向かって何やら術をかけているらしく、目の前の3人は立っただけ

動かなくなってしまった。

だがその背後より・・・大熊でも倒せそうな大きな大きな刃物を、
ジルに向け振り下ろす男が・・・!

万里子は、心臓がぎゅうつと縮まるような感じがしました。

「危ない！後ろー！！」

思わず、叫ぶと、『いけない！』頭の中にスホの音が響きました。

馬車の近くに居た盗賊が叫びます。

「中に女がいるぞー！！」

そして馬車に乗り込もうとしました。

コワイー！！！！！！

その時、

盗賊と馬車の間に1人の長身の影が入り込みました。

万里子はあまりの怖さに、窓際近くに座り込んで盗賊が入ろうとしていた馬車の入り口を

睨みつけていましたが、恐れていた盗賊は、馬車には入ってきませんでした。

代わりに入ってきたのは・・・黒の長髪を無造作に束ね、黒っぽい服装をした夜に溶け込むような風貌の逞しい青年でした。

「大丈夫か？」

「は、はい」

車内に入ってきた青年を、灯されているランプでよくよく見ると、黒だと思っていたその髪も服も、深い深い藍色をしていました。

顔の半分が、髪で隠れてはいましたが、切れ長の目も濃い藍色をしており、

その目を気遣わしげに、万里子に「怪我は、無いか？」と問いました。

「だ、大丈夫です。あ！でも外にジルさんが・・・！」

「私は、大丈夫ですよ」

少し髪を乱したジルが戻ってきました。

「あの！この方が助けてくださったんです」

ジルの目が助けてくれた青年を睨んでいるように見えた為、敵ではない。という事を

伝えなければ。万里子はそう思ったのですが・・・

「・・・そのようですね。ここは礼を言っておきましょうか、イディ。」

「礼を言ってるようには聞こえませんがね。まさか何の挨拶もなしに、都と離れるとは思いませんでしたよ。」

何か、急ぐ理由があったんでしょうかね？」

あれ。2人は知り合いだったのか・・・。
にしては、交わされる会話のなんとトゲトゲしい・・・。

万里子は眉を寄せたまま、2人と交互に見比べておりました。

ぐーーーーー

緊迫した雰囲気でしたが、こればかりはどうにも我慢できません。
万里子は、1日何も食べていなかった為、空腹もピークだったので
す。

「す、すみません・・・おなかが空きました・・・」

2人が剣呑とした雰囲気を消し、顔を見合わせました。

「全く・・・食事を与える時間さえ、惜しかったのですか？」

「都は久しぶりだから、良い店を知らないだけだ」

「では俺がお連れしましょう。どうだい？えーと・・・君、名前は？」

「万里・・・あつと、マールです」

「よし、マール。美味しい店を紹介してやる」

近づいてきて、小さい子にするように万里子のクセのある黒髪をく
しゃくしゃくと

大きくてゴツゴツした手で頭をなでました。

「いらん。お前がすぐに降りてさえくれれば、すぐに屋敷に・・・」

く—————

「す、すみません・・・」

万里子のおなかは正直なもので、イディの言う『美味い店』にしっかり反応したようでした。

「よし、行こう。・・・その格好じゃマズイな。待ってる、用意する。」

スホを動かさないでくださいよ?」

最初の方は万里子に、最後の方はジルに向かってそう言うと、馬車を降りていきました。

「すみません。今日何も食べていなくて・・・」

「いや。私こそ、気が回らなくて申し訳ありません。」

申し訳無さそうに微笑むと、そつとクシャクシャになった万里子の髪を細く美しい指で梳き、整えてくれました。

「ただ・・・会わせたくなかったんですよ」

ジルが万里子のこめかみの髪を整えていて両耳を軽く塞ぐ形になっておりましたので、

万里子にその小さなつばやきは聞こえませんでした。

「衣を用意しましたよ」

イデイが何やら包みを持って戻って来ました。

その包みの中には、鮮やかな赤い衣・・・

毒々しい赤では無く、少し色目の明るい朱色のような赤。

着た事がない色だ。造形が地味な自分になど、似合うはずがない。

それなのにイデイは自信たっぷり「絶対似合う」と言いました。

「まるで、マールの為にあつらえたような色だ。・・・ジル殿、あなたもそう思うでしょう？」

ジルがその問いに答える事はありませんでした。

その事を万里子は、「似合わないと思ったから気を使って答えなかったのだ」と

思いましたが、

ジルもイデイも、答えは必要ない事を分かっております。

9・夜のような男（後書き）

ん？2人目登場？

10・壊れた時計

これは・・・どうやって着るのだろう？

万里子は首を捻りました。

似合う似合わないはともかく、これを身につけなければおなかは満たされないのです。

万里子は、衣を手に取って、広げてみました。

とても良い生地のようにです。

柔らかく、手から馬車の床へと、流れるように広がったそれは、ワンピース・・・

いいえ、ドレスと言った方が近い代物でございました。

ボディ部分は一見シンプルなボックスタイプなのですが、ちょうど上から4分の1の

部分辺りに、横布が縫い付けられており、自分のウエストに合わせて絞れるようにな

なっております。

ボディ部分に2本、幅広の共布がついており、これも肩の長さを調節できるもので、

着てからウエストをしぼった余り布と交差させて固定するようになっていようでした。

出来上がりは、深いV字のドレスになります。

柔らかな肌触りの布には、ところどころに繊細な刺繍が施され、唯一手芸が趣味だった万里子は

その繊細な美しさに見蕩れました。清潔に短く切られた爪でさえうっかり引っ掛けてしまいそうで

扱いにとっても慎重になってしまいます。きちんと着れるのだろうか
と心配になりました。

その時、ふと時計の存在が気になりました。

万里子はいつとも高校の入学祝いに父からもらった腕時計を身につけて
いました。

アンティーク調のそれは、おちついた飴色の華奢な腕時計で、小さな
赤い石が中心にある細かい彫刻が
美しい蓋が

文字盤についておりましたので、一見するとブレスレットのようでした。

いつもいつも、身につけておりましたので、今やっとこの存在の大きさに
気付きました。

名前も、服も、この世界に合わせなくてはいけなくなった今、今までの
自分の

存在が嘘では無かったと。家族の存在は夢では無かったと信じられる
唯一の品でした。

そっと、蓋を開けますが、万里子はちょっと失望しました。

やはり、と言うべきか・・・時計はその針を止めていたからでござ
います。

ふう。小さくため息をついて、時計をはずすべきかどうか悩みまし
た。

ずっと身につけておきたい存在ではございましたが、ドレスを着る
時にひっかかるのではないか・・・

そう考え、迷った結果今だけはそう。そう思い、時計を大切に近
くの飾り棚に置きました。

ええ。確かに、しっかりと置いたのです。

意識をドレスに戻した万里子は、考えた通りの手順でドレスを着てみる事にしました。

ある程度の体型の人なら着れるように作られているそれは、かなり大きく作られておりまして、

万里子が着ますと、ウエストを絞りましたらスカート部分はたつぷりとヒダが出来、

万里子の動きに合わせて、柔らかく足にまとわりつきました。

朱色のドレスは、自身が「不健康そうに見える青白いくすんだ肌」と思っていた

万里子の肌を健康的に見せ明るく、白さを際立たせ、「染められない程頑固なクセ毛」を艶やかに見せました。

先ほどまでの、黒尽くめのこれといって特徴の無い女子高生はどこにもおりませんでした。

しかし、馬車の片隅に術で用意された分厚いカーテンに囲まれた場所には当然鏡は無く、

着た事の無い色に、着た事の無いデザイン。どんな風になっているのか、全く検討が付きませんでした。

しかも、胸元と背中が大きく露出していたので、気持ちこそわさわわ落ち着かなくなっていました。

不安で不安で仕方ありません。

せめて、人目に晒される前に自分で確認したかったのだけれど・・・もう一度見回しますが、やっぱり鏡はありません。

「どうです？準備は出来ましたか？」

「は、はい...」

分厚いカーテンの向こうにはジルさんとイディさんが……。なぜ出会ったばかりの男性達の前に、デコルテとか二の腕とか、肩甲骨の辺りとか露になった状態で出てゆかなければならないのか……。なんだか悲しい……。

万里子は自分の姿が滑稽に思えて仕方がなかったのでございます。

「おい、俺も腹が減ってきた。早く出て来いよ」

「い、行きます！……けど、笑わないでくださいね？」

そう話すと、えい！とばかりに分厚いカーテンを押しつけ、ふたりの前に出てゆきました。

笑うも何も……

あまりに雰囲気が変わったので、ふたりは驚きの余り何も言葉を発せずにおりました。

ジルはその美しい瞳を見開き、イディは男らしい少し厚みのある唇をめいっばいに開いて……

でもそんなふたりの様子を、万里子は驚く程似合わないのだと思い、穴があつたら

入りたい心境になるのです。

「良く、似合いますよ」

「見違えたよ。やっぱり似合う」

気を取り直してふたりは言いますが、時既に遅し。

万里子は、即座にお世辞として処理してしまいました。

「お世辞は・・・いりません」

消えそうな程小さな声でつぶやく万里子に、ジルは「本当に美しいですよ」と慰めの言葉を言います。

ジルは、心からそう思っております。

朱を纏った万里子は、内から熱っぽく誘う赤の炎と共に、万里子を輝かせておりました。

俯く万里子と、見蕩れるジル。

ですから、ふたりは気付かなかったのです。

しっかりと棚に置いたはずの万里子の大切な腕時計が、柔らかなクッションの上に

音も無く落ちた事を・・・。

イデイが、時計に手を伸ばしました。

とても華奢な女物の装飾具・・・。

蓋を開けると、なにやら文字盤が出てきましたが、本来動いていたであろうそれは、動きを止めておりました。

万里子に目をやりますが、落とした事に気付いていないようです。

視線を時計に戻し、密やかに微笑むと誰も見ていない隙に自身のサツシユの内に忍び込ませました。

「さあ、いい加減行きましょう。マールも、もっと堂々とするんだ。俺が用意した衣では不満か？」

「いえ！全然！」

慌てて首を振った瞬間、正直なおなかはまだ空腹を主張し、スホを置きやつと街中へと出発したのでございます。

- - - - -

案内された「美味い店」は、見るからに高級そうで、万里子は少し緊張しましたが
他のふたりは全く気にしていないようでした。

「もう少し庶民的なお店って、無いんでしょうか・・・」

「ありませんよ。言ったでしょう？ヤンテが消えていた間、国は荒れたのだと。

ですからこういった貴族や豪商など金持ちを相手にした店しか、今はありません。

大丈夫。支払いの事なら気になさらないでください」

「はぁ・・・」

仕方なく、万里子は両脇からふたりに抱えられるように店内へと足を踏み入れたのでした。

案内されたのは、個室だったので街中で黒髪をじろじろと見られた万里子はほっとしました。

「こついう店に来る客は、仕事柄密談が多いからな」

「はぁ・・・そうなんですか」

「こちらの話も、人に聞かれてはマズイだろう？」

「イデイ、まずはマールに食事を」

食事を。と言われても、どの料理がどんな代物なのか万里子はさっぱりわからない為、

ジルの「辛いのは好き？」「苦いのは？」などという簡単な質問に答えると後はジルが、

少し躊躇しながらも注文の為に席を立ててくれました。

ふたりきりになるのを待っていたかのように、イデイがサッシュウの内からなにやら取り出します。

不思議そうにしている万里子の目の前に、万里子の腕時計が差し出されました。

「あ！あたしの時計！」

「とけい、と言つるの？これは何をする物？」

「時刻を知る為の物です。でも・・・壊れてしまったけれど・・・」

「そう・・・」

大きな手で、華奢な腕時計を弄ぶイディでしたが、実は何をする為の物なのかはどうでも良かったのです。

大切なのは、この「とけい」という物のこれからの役目。

「壊れても、ずっと身につけておくんだよ。夜の寂しさから守ってくれる」

そう言つて、万里子の手首にそっとつけてくれたのです。

会食は、思ったよりも楽しいものとなりました。

この世界で生きていくにあたって、やはり食べ物が出合っか心配しておりましたが

予想以上に万里子の口に合い、感激で涙しそうになっていた程でございます。

やはり食事のマナーなどは大きく違うようではありました。

まず、料理は大皿に盛りられ、それを取り皿に分けるようでしたが、箸などがありません。

大皿に盛りられた料理は全て小さな緑色の器に入れられ、その器を手取るようです。

「どうした？まさか食べ方が分からないでもあるまい？」

食材も食べ方もよく分からないので、最初はふたりの様子を窺っていると

からかうようにイディが話し掛けました。

それに反応するのはなぜかジル。

「彼女は・・・遠慮しているだけだろう。」

万里子は何者なのか隠しておきたいジルは、イディは既に万里子の事を異世界の

人間だと疑ってかかっているのは分かっていますが、決定打を与

えたくなくて
そつと万里子が食べ方を観察できるように、自らが手本となりました。

先ほどから、このように腹の探り合いのような会話がふたりの間で繰り広げられていたのですが
万里子は食事に集中していたので、一向に気にしている様子はありませんでした。

ジルが、角煮のように見える物が入った小さな緑色の器を手に取り・
なんと、器ごと食べました。

どうやら器も、固めの小さなレタスのようなもので出来ているらしく、器ごと
食べるのがこちらの料理らしいのです。

見ると、様々な料理が全て食べられる器に入っているのです。

恐る恐る、ジルが先ほど食べた角煮らしきものを口に運びます。

「おいしー！……！」

角煮らしきものは、やはりお肉で（何の？）煮る、というよりはしつかりと

焼かれてソースがかけられていました。

これをきっかけに、万里子はものすごいスピードで口を動かしました。

小さな器に入ったご飯のようなものもありました。色が少し茶色でしたが、

食べるのもち米のような食感。

良かった・・・これで本当に、この世界でなんとか頑張っていける・・・
心から安心しました。

残る大きな問題はあと2つ。

お風呂事情と、トイレ事情。

これも・・・試してみるしかありません。

大体、トイレと言って通じるのだろうか？そう思いましたが、そろそろ食事も

終わり。という頃、席を立てて見る事にしました。

すると、察したジルが食事していた個室から人を呼び、案内を頼みました。

・・・残された、男がふたり。

ふう。諦めたように、ジルがため息をつきました。

「もう、察しはついているのではないか？」

沈黙を破ったのはジルでした。

イデイが髪で隠れていない左目を潜めます。

「驚きましたね。もっと隠し通そうとするのかと思いましたよ」

「お前が相手では無理だろう。で・・・言うのか？殿下に」

「・・・言いませんよ。」

まだ、ね。心の中でそつと付け足します。

今度驚いたのはジルです。シワひとつないなめらかな眉間にきゅつとシワを寄せました。

「言わない？どういう風の吹きまわしだ？」

「あなたも、言わないで欲しいのでは？」

はぐらかされた。

そう、ジルは思いましたが、万里子の存在を明かさないうで欲しいのは本心でしたので、
追求する事はしないでおきました。

「たまには、俺があなたに貸しがあるのも良いでしょう？」

面白そうに言うイディに、ジルの眉間のシワは深くなりますが・・・

「仕方ない。ここは引こう。ただ・・・言っておくがマイルに魔法は効かない。

術で何かしようとは考えない事だ」

効かない？術が？

目の前に居る、当代最高の魔術師と言われているジルを、イディは驚きの眼差しで見つめます。

「なるほど・・・面白いですね。それでスホで移動していたのですか。今日の事は他言は致しませんが、あなたの領地までは俺もお供しますよ。」

ここからが、一番危険ですからね」

「・・・これも、私は引くしかないのだろうな」

「貸し、2つです」

後に残ったのは、ジルの苦々しい表情だけでした。

言わない・・・まだ、言わないよ。

あの子は殿下にふさわしいか、まだ分からない。

それに、あの子に殿下がふさわしいかもね・・・。

まだ表情から苦さの消えないジルを見ながら、イデイは酒を飲み干しました。

ジルの領地までは、宮殿のある都から2つの街を越えた場所にありました。

外交対策の為に、力の持った一族の領地を国の端に位置づけていたのでございます。

ですから、ヤンテが消えてからまず荒れたのは都と国境の街の間に位置する街でございました。

街が荒れて犯罪が多くなり、職を・・・食べ物を失った街の一部の間は盗賊になり、更に昔からの盗賊も隠れ住むようになった為、旅人を困らせていました。

イディの言う「ここからが一番危険」というのは、このような事情があったのでございます。

乗る人間が3人になっても、スホは軽やかに音も無く進み、何事もなくジルの領地に入りました。

「マール。俺はここでお別れだ。少しの間だったけれど、楽しかったよ」

また、万里子の頭を大きな手でくしゃくしゃと乱暴になでます。

この世界に来たばかりの万里子にとって、イディの言う「少しの間は、決して少しではなかったので、イディとこのまま別れるのがひどく寂しく感じるのです」。

それを見て、嬉しそうに微笑むイディは「また会えるさ」ときっぱり言い切りました。

きつと社交辞令なのだろうと、「そうですね・・・いつか、また・・・と寂しそうに返す万里子でしたが・・・

「いつか、じゃない。すぐに会えるよ」

やはり自信たっぷり、イディは言うのです。

12・胸に赤い星を

目の前には、大きな、大きな、鬱蒼とした森が。

ヤンテはもう、空でかなり光を弱めて赤褐色のような色で薄ぼんやりとしておりました。

木々が枯れ、荒れた大地の中を移動してきて辿り着いたその場所はきつと緑生茂る

豊かな森。

それがこの暗闇で、黒々と覆いかぶさるように見えました。

「ここからが、私の領地です。結界を張って守っていますから、木々もヤンテが消える前の状態を保っているのですよ」

足を踏み入れると、砂利で痛かった足が草の優しい感触で包まれました。

解放されたスホが、挨拶をするかのように万里子の頬に鼻を押し付け、その後

軽やかな足取りで森の中に入って行きました。

残されたふかふか浮いている馬車も。自力でふかふかとスホとは別方向に消えて行きました。

残された万里子とジル。

「さあ。屋敷に案内します。

・・・その前に。はつきりさせておきたい事があります。

私は、あなたを召使として置こうなどと思っただけではありません。

自分の屋敷の

ように、思っで滞在してくれば良いのですよ」

てつきり召使として働くのだと思っでいた万里子は驚きました。

「で、でも！」

「これは、決定事項です。私の気持ちは変わりません。あなたが来てくれて、

・・・嬉しいのです」

暗闇で、ジルの表情は全くわかりませんでした。最後の言葉は笑みを浮かべているかのようによし弾んでおりました。

「ありがとうございます」

「では、参りましょう」

ジルの屋敷は、ジルを建物で表したかのような外観でした。

ヤンテが薄ぼんやりとしているだけの、この空間でも青白く暗闇に浮かび上がりました。

それは沢山の塔を持つ、入り口や窓に繊細な彫刻を施した大きな屋敷・・・

「雪の彫刻みたい・・・」

その近寄りがたいまでの美しさに、圧倒されます。

「さあ。こちらです。あなたの世話をする者を紹介します」

そつと優しく背中を押され、万里子は今日から住む事になった新しい家に迎え入れられたのでございます。

屋敷の中は、壁も淡い水色でテーブルや棚などは華奢な足のついた装飾の美しいものでした。

天井が高く、上からは様々な大きさの光を放つ丸い玉が浮かんでいて屋敷の中を明るく照らしておりました。

万里子の世話をする者は、「シアナと申します」と名乗りました。シアナもジルのように色が白く、青い髪の美しい女性でした。

「今日は疲れたでしょう。ゆっくりお休みなさい。シアナ、部屋に案内して差し上げて」

「畏まりました」

案内された部屋は、30畳ほどございました。

やはり足のついた華奢な造りの家具に、高い天井近くでふかふか浮く光玉・・・

他の部屋と違う印象を持ったのは、家具が全て角が丸い事でした。部屋の奥中央に置かれているベッドらしきものも楕円形をしており、上に

お布団らしきふかふかポケットが乗っていないければ巨大なローテーブルだと

思うようなものでした。

ベッド・・・？

そう思うと、急に疲れが出てきました。

今日は万里子にとって、長い、長い1日でした。

普通に過ごせると思っていた親戚宅の法事が一転、異世界で巨大ポケットの中で

眠ろうとしているのです。

とにかく、眠ってしまおう・・・これは、長い長い夢なのかもしれない。

そう思ってベッドに向かいます。

さて、眠ろう。としたところで、パジャマが無い事に気がきます。

シアナはもう下がらせてしまいました。

クローゼットまで歩く元気もありません。疲れを意識した体は、もう鉛のように重くなっていましたのです。

結局時計をサイドテーブルに置き、その場で下着姿になって巨大なポケットの中に滑り込みました。

すると、5秒も経たずに、万里子は夢の中へと旅立ったのでございます。

万里子が眠ると、天井付近で浮いていた玉も光を弱めました。

その時、サイドテーブルの上の万里子の腕時計の蓋がカチリ。と開きます。

中からはするすると、細いが意志をもったような煙・・・段々大きく

なり、やがて
人の形を取りました。

「だから、すぐに会えると言っただろう？」

現れたのは先ほど別れたばかりのイディ。

室内の変化にも気付かず、眠り続ける万里子の傍にそっと腰掛けま
す。

あどけない寝顔だ・・・

思わず、その頬に指を滑らせ、万里子の肌の柔らかさを堪能します。

そして・・・小さく、小さく呟くイディ・・・

「・・・無理、か」

実は万里子の夢の中に入ろうとしたのでした。
が、ジルの言った通り術が効かないようでございます。

「マールの身体に直接触れる術は効かないのか？ならばこれはどう
だ？」

そっと、顔の右側を隠していた髪をかき上げ、右目を露にしました。
藍色の左目に対して、右目は漆黒・・・闇の、色をしております。

そっと、意識の無い万里子の手を取り、その手の平に唇を当てます。
漆黒の瞳は、万里子の顔をじっと、じっと見つめたまま・・・

「視えた・・・」

イディの右目に、万里子の今見ている夢が映ったのでございます。万里子は、夢の中に入ったばかりのようでした。真っ白の空間の中、出会った時のようなこの世界では見ない奇妙な格好を

しています。

段々、夢が形作られていきました。背景に、ぼんやりと風景が出来て・・

その、形が出来上がる前に、イディが話し掛けました。

「マール」

一瞬にして、出来かけていた背景が消えました。

よし、声は聞こえるようだ。夢の世界が出来上がったからでは、接触は難しい。

後は声をかけ続ければ・・・

イディはそのまま、万里子と「マール」と呼び続けました。

再び、背景が形作られていきます。

ですがそれは、先ほど作りかけていた見知らぬ風景ではなく、先ほどまで一緒だった

ジルの馬車の内装でした。

あと少し・・

「俺だよ。イディだ」

そう、手の平越しにイディが言つと、夢の中の万里子の隣に、ポン！とイディが

登場しました。

自分の声を聞かせる事によって、万里子自身の力で夢にイディを登場させたのです。

ふふ。うまくいった。

手の平に口付けたまま、ひっそりと笑みを浮かべ、夢の中に登場した自身を使って
万里子に話し掛けました。

「マリコ、だね？マールとは誰がつけたの？」

「ジルさんが・・・あれ？イディさん、帰ったのではないのですか？」

「そうだね・・・マリコと話がしたくてね」

「でも私、マールという名に慣れなきゃいけないんです」

「どうして？」

「私は・・・知らない『マリコ』だったから・・・」

「知らない？『必要なマリコ』はどこへ行った？」

「んー、多分、宮殿に？」

傍から見れば、眠る恋人の手にキスをしているような・・・この光景は、一晩中続いたのでございます。

室内が、少し明るくなってきた時、やっとイディは朝が近づいてい

る事に気付きました。

万里子との会話は、時間を感じさせずとても楽しいものでした。ですがもう止めなければいけません。万里子が起きてしまいます。

そっと、手の平から唇と離しました。

「これは、オマケだ」

そう言うと、そっと顔を伏せ・・・少し覗かせていた万里子の胸元に近づきました。

万里子の、胸のふくらみがちょうど始まるうとしているその柔い青白い肌に、

そっと、吸い付いたのでございます。

ちゅ。小さく音を立てて唇と離すと、そこには小さな赤い星が・・・

まるで、朝方の濃い霧の中にぼんやりと見える、ヤンテのようでございます。

12・胸に赤い星を（後書き）

イディは一体何者!?

13・意外な弱点

イデイは、ヤンテが光り出し室内がほの明るくなった時、名残惜しそうにまだ

万里子の傍にいました。

そつと・・・そつと自らがつけた「来訪のシルシ」を指先で撫でます。思った以上に柔らかな肌、小さな手、顔をよせると、甘い甘い香りがして・・・

時を忘れるような夜だったのでございます。

夢の中で交わした会話は、とても楽しいものでした。

異界から着た黒尽くめの娘・・・とても平凡な外見でしたが、忘れられない何かがありました。

闇に溶け込める彼だから、ジルがスホで移動したのを不思議に思い、そつとそつと

都から後を追いました。

宮殿でチラリと見た、見るからに高慢な女・・・なぜ神官があれを「姫」と言うのか？

本物とは思えなかつたのです。

だから、居るはずなのに、姫のそばに居ないジルを探したのです。答えは簡単に手に入りました。

望んだ「姫」がここに居るにも関わらず、渋い顔をしている「元」大神官が、そこにはおりました。

「サク殿、どうされました？姫は無事いらっしやったのでしょうか？」

「は？ええ・・・まあ・・・ですが・・・」

「ジル殿の、お姿が見えませんか」

はっと顔を上げ、イディを見上げたサクの表情は、後悔でいっぱいでした。

「候補は・・・もう一人、おったのです。その娘をジル殿が連れ出しまして・・・」

あの人嫌いが？？

ジルを追った理由の半分は、好奇心でした。あの、娘をこの眼で見るとまでは。

目の前ですやすや眠る万里子に目をやり、もう一度、シルシを撫でました。

ぴくり。

まぶたが動きました。

眠りが浅くなっているのです。何度も人の夢に入ってきたイディにはわかりました。

だが、目覚めるまでにはほんの少し、時間がある・・・。

彼はもう一度、そっと顔を伏せ、シルシを更に濃く、残して立ち上がりました。

針を止めたままの腕時計は、蓋を開いたまま・・・まるでふたりをじっと見つめて

いるかのようでした。

そしてイディが近づき、顔を出している文字盤にそつと指を触れさせます。

すると一瞬の内に藍の煙となり、イディを吸い込んでカチリ。と小さな音をさせ、そつと瞳を閉じたのでした。

.....

「虫さされかなあ？・・・夏だしね」

ぽつり。と胸元にできた赤い点を、万里子はぽりぽりと掻きました。けれど、腫れてもおりませんし、特に痒くもないので首を捻りました。

「おはようございます。お目覚めですか？」

シアナがなにやら持ってやって来ました。

「はい。とてもゆっくり眠れました」

万里子は元々朝に強かったのですが、今日はいつも以上に頭がすつきりしていました。

なぜか、夢の中にイディが出てきました。

こちらに来るまでの馬車の中で、とても、とても沢山の話をしました。

あまりおしゃべりが得意ではない万里子でありましたが、イディはそんな万里子からも

話を聞きだすのが上手く、つつい色々な話をしてしまいました。少々話すぎたような気はしましたが・・・「まあ、夢だからいいか」と、ひとり納得して、下着姿の体に、近くにあった布を巻き起き上がったのでございます。

「昨日はお疲れのようでしたので、そのまま眠っていたいたのですが、

身を清めたいかと思ひまして、プルソを用意致しました」

「ぶるそ?」

身を清める・・・と言う事は、お風呂でしょうか?

万里子は、この言葉に飛びつきました。ただ、「お体を洗わせていただきます」と

言うシアナの言葉は、丁重に断りました。

なんと万里子に与えられた部屋はバス・トイレ付きで、パステルカラーのカラフルな

タイルに、外国映画で見るとような華奢な足のついた、まんまるの大きな浴槽が

ありました。

ゆったりとつかると、体の力が一気に抜けていくのがわかります。

浴槽の隣には、シャワーのような物がありました。シャワーヘッドは天井から

ふかふかと浮いており、万里子が下に立つと、ちょうど良い高さまで降りてきて

泡を出しました。

シャワーヘッドから突然泡が出たのでびっくりしましたが、その泡

で全身を洗い、
迷いましたがそのまま湯船につかると、一瞬で泡だけがしゅん。と
消えました。

ゆったり、ゆったりと、この世界のお風呂・・・プルソの使い方を研
究していると・・・
外からシアナの声が・・・

「マール様、衣の用意ができました」

「は、はい！」

.....

「ジルさんはもう起きたんですか？」

「ジル様は・・・実は朝がとても弱くてらっしゃいます。日中使った
力を、
夜に蓄え御身を癒すために、休息はとても大事なのですよ。でも寝
起きが

あまりよろしくないというのもあります・・・。

あ、マール様、起こしてさしあげてください」

「良いのですか？」

「はい。是非」

連れられたのは、マールが与えられた部屋の隣にある塔でじぎいま
した。

なんでも、ジルの一族は夜の休息がとても大事で、とても深い眠りにつくので
その眠りを大事にする為にひとりひとりに塔が与えられているのだ
そうです。

「しつれーしまーす・・・」

見事な装飾の、背の高いドアを開けると、奥のベッドで眠るジルが
おりました。

美人は眠っていても美人です。

万里子は、不公平さに少しだけ唇を歪めましたが、早速起こしにか
かりました。

そつと近づき、試しに「ジルさん、おはようございます」と言っ
みたのですが・・・
パチリ。

なんと、すぐに目を覚ましたではありませんか。そして、万里子を
ぼんやりと見つめます。

一瞬、寝起きが悪いなんて嘘ではないか？と思ったのですが・・・

次の瞬間、万里子はジルの体の上におりました。

「じ、ジルさん！」

「つれない人ですね・・・ジル、と呼んで・・・」

万里子の知るジルよりも、低く艶のある声が、耳の近くで聞こえま
した。

ぶるり。万里子の体が大きく震えました。

即座に離れようとしたが、全体重をかけ、ジルの上に倒れこんだ、そのままの状態、ジルの両手に拘束されます。

万里子は焦りのあまり・・・

がぶり。

ジルの手を噛みました。

「っ！！！！！」

ジルが一瞬ひるんだ隙に、腕から逃れた万里子と、そんな万里子を改めて見つめるジル・・・
今度は、しっかりとした目つきをしていました。

「すみません・・・寝ぼけていました・・・」

「も、ものすごい寝ぼけ方ですね・・・。あたしこそ、あの・・・噛んじゃってごめんなさい」

「良いですよ。朝は苦手なのです・・・出来れば、これからもあなたに起こしてもらいたいですね」

「はぁ・・・」

いきなりベッドに引き寄せられなければ、万里子はきつと簡単に承諾した事でしょう・・・。

「あ

「どうしました？」

「ジルさん、髪が・・・」

ジルの、腰までの美しい白銀の髪が、ほんの少し絡まっていました。

「絡まっています。梳いても良いですか？」

すると、ジルは嬉しそうに「お願いします」と微笑んだのでした。

「マールは・・・やはり赤を基調とした色が似合うんですね」

今、万里子が着ているのはシアナから渡された深い青のドレスでした。

昨日イディからもらったものよりも、露出が少なく、胸元の赤い点はドレスに隠れておりました。

シアナには、このタイプが普段用なのだと言われたのですが・・・

「そう・・・ですか？」

赤よりは、青を着る方が日頃からあったので、意外に感じました。

「ええ・・・あなたのせつかくの明るい肌が、くすんでしまう・・・」

「はぁ・・・」

「しかし、もうお気づきかもしれないが、私の一族は青が守護色な

のですよ。

濃淡はありますが、大体身につけるものは青なのです。

・・・今度、新しい衣を買いましょう。」

「え・・・そんな、いいです！私には、これで充分です」

「いけません。昨日申し上げたでしょう？あなたは召使ではないのですよ」

それからというものの、朝、ジルを起こし髪を梳くのは万里子の日課となったのでございます。

13・意外な弱点（後書き）

ギャップに弱い人って、多いですよね！え？違いますか？

14・秘密のメモ

万里子にとって、毎日が新しい発見で溢れておりました。

ジルの屋敷に住むようになって、もう7回の夜を過ごしました。

7回の夢を見て、そして1日の終わりに薄くなる胸の赤は朝になると濃くなっていて・・・

万里子は不思議そうに胸をさすります。

それを7回繰り返し返しても、その意味は奥手な万里子には分かるはずもございませんでした。

屋敷は広く、万里子が動ける範囲は、自分の居住空間とジルの居住空間の一部、

そして一族の全員が出入りできる屋敷の中央と、広い、広い庭。

庭には色とりどりの花々が咲き乱れ、ランチの後には庭で寛ぐのが万里子の

日課となっております。

庭に居る時には、森の中からスホも現れ万里子の頬に鼻を押し付けました。

あの時のスホだとすぐに分かりましたので、現れた時には一緒に会話を楽しみました。

その時知ったのですが、スホとは種族の名前なのでした。

目の前の、巨大な白馬（ミニ羽根付）は、少し寂しそうに自分自身に名は無い。

と言いました。

「じゃあ、私が名前をつけて良いですか？」

「姫がですか？ 光栄です」

スホの声が、微笑んだような気がしました。

万里子は自分がつけるなら、是非和風の名にしたいと考え・・・

「白玉が良い」とにっこり笑いしました。

真っ白なスホに名を・・・と考えた時に、大好きだった白玉を思い出したのです。

「シラタマ・・・ですか？」

「・・・嫌？」

さすがに、この美しい生き物が、小さくもつちもちの白玉は失礼だっただろうか・・・と心配になりましたが・・・

「いいえ。嬉しいです。私に、名が出来たのですね」

とても嬉しそうですね。白玉に名前の由来を告げるのは止めておきました。

さて。この広い庭には、大きく丸い、ドーム型の温室がありました。この世界に来て様々な魔法を見ましたが、万里子にとっては、この温室が一番の驚きでした。

それまでは浮いてるシャワーヘッドから自動的に泡が出るのが不思議だったのですが、

それをはるかに凌ぐ驚きでした。

万里子の食事の好みを知らないからと、毎食ものすごい量が用意される食卓。

でもこの国は、荒れていたはずす。ここは緑で青々としています。光りが

無かったのですから、こんなに贅沢できる程、作物に余裕は無いのではないかと

万里子は心配し、ジルを訪ねると、この温室を案内されました。

温室が近づくにつれ、中から色とりどりの光りの玉が見えました。

巨大な温室の中には、更に小さな温室がありました。

その中には、赤い野菜には赤い光玉が。緑色の葉っぱには緑の光玉が・・・

オレンジ色の果実には、オレンジ色の光玉が・・・小さな温室の天井付近で

ふわふわ浮き、作物を照らしておりました。

「ヤンテの代わりをしているのですよ。このお陰で、わが一族は食事に困らず、

そして他の一族に売る事もできたのです」

「す、すごいです!!これは、ジルさんが考えたんですか??」

「祖父の代に隣の一族と考えたのですよ。私も術を使って手伝いましたが、今では

慣れたもので、この光玉を作るくらいですかね。私の仕事は」

なんと、温室の光玉も含め、屋敷のあちこちで動いている様々なものは、浮くシャワーヘッドも含め、ジルの仕業なのでした。

ジルが毎朝、術をかけて1日動かしているのだそうです。

「眠る頃になると光玉の明るさが弱まるのはその為ですよ。それでもある程度は

温存していますから、必要な時には光玉もプルソも使えますよ」

はあー。省エネってワケですか?万里子は様々な術を駆使するジルを尊敬しました。

おかげで、ふかふかのポケットで眠れて、毎食美味しい物をおなかいっぱい食べられ、

こうしてのんびり過ごす事ができるのです。

ずっとこうしていいのだろうか・・・そんな思いもありましたが、自分にこの世界で

一体何ができるというのだろうか?そう考えては落ち込み、結局ふかふかのポケットに

潜り込むのです。

これが夢であれば良い・・・そう願いながら眠るのですが、なぜか毎晩夢に出てくるのは

イデイでした。

一度は兄が出てきたのですが、イデイの声が響いた途端に兄はふつと消えたのです。

その時は、消えた兄を諦めきれずに「おにいちゃん！」と大声で泣いてイデイを困らせました。

そんな時、イデイは初めて会った時にしたように、万里子の頭を大きな手でわしゃわしゃと撫でたのでした。

それは・・・兄も照れ隠しによくする事でしたので、万里子はふつと落ち着き、泣き止んだのです。

「俺では兄上の代わりにはならないか？お前に泣かれると・・・心が痛む・・・」

夢の中でイデイは万里子を優しく抱きしめ、今度は子供をあやすように背中を

そつと撫でたのでした。

その行為に安心する万里子でしたが、実際は眠る万里子を黒の右目で見つめ、

手の平に口付けたままのイデイは、夢の中で自分自身が万里子を優しく抱きしめる光景を

見ている事しか出来ず、本当には抱きしめられない事を歯痒く思っているのです・・・。

万里子には、この先の不安と、もう一つ困った事を抱えておりました。

「さあ。マール、今日の散策は終わりですよ。屋敷に戻りましょう。新しい衣が

届いているでしょう」

初日に青の衣を着て以来、ジルが暖色の衣を毎日のように届けさせるのです。

万里子は、1着では確かに困るけれども、こんなに何着も自分には必要ないと断ったのですが、

そうするとジルがとても悲しそうに瞳を伏せるので、それ以上は強く止める事が

出来ないのです。

クローゼットの中には、イディにもらった朱色のドレスに加え、オレンジから

淡いピンク、落ち着いたスモーキーなピンクなどが増えていったのです。

こんなにしてもらっても、私は何も返せないのに・・・優雅に前を歩くジルの

後ろで、万里子はそっと、ため息をついたのでした・・・。

今日も、屋敷にはいつもと同じ女の子が来ていました。

女の子、と言っても、万里子と同じ位でしょうか？

ジルの一族では無いようで、白金の髪に薄い黄緑色の瞳。肌は健康的な肌色をしておりました。

「マール様の新しい衣をご用意しました」

嬉しそうに手に広げるは、熟れた果実のような濃い、濃いオレンジでございました。

「マール様は、本当にこのようなお色がよくお似合いです。ルヴェル様が、

次はもつと赤い衣を用意するとおっしゃっておいででした」

「あの・・・いつもありがとうございます」

少女は、更に顔を綻ばせるのでした。

衣を手に取り、少女を招きいれたサロンの隣の小部屋で試着する事にした万里子は、
いつも通り、衣をそつと広げて自分の胸に合わせました。

その時……

広げた衣から、小さな紙が滑り落ちました。

先ほど、少女が広げた時には無かったものです。

手に取った万里子の目に飛び込んできた文字は……

『このまま塔に閉じこめられたままでいるの？』

先の不安を感じていた万里子には、自分の弱さを見透かされている
ようで
思わず手に取った柔らかな素材の衣を、ぎゅっと握り締めたのでし
た。

14・秘密のメモ（後書き）

時々ちょっとふざけてみたくなるのです。
白玉・・・・・・・・。

15・差出人

どれ位、そうしていたでしょう。

ぎゅっと衣を握り締めたままの状態で、万里子は自分の鼓動を妙に強く、速く感じておりました。

「マール様？お気に召しませんでしたか？」

はっと我にかえりませぬ。

「いえ！すぐに行きます」

答えてから手元のメモに再度目をやると・・・指に隠れた部分にまだ文字が書かれておりました。

最初にまず飛び込んできたメッセージに、心臓がドクン。と飛び跳ねましたが、

よくよく見ると、万里子が解読できるはずのない文字でした。

英語に似ていましたが、ところどころに文字を反転されたような字もあり、

万里子には分かるはずの無い文字なのですが、文字の先に進むと自然と頭の中に

文章が入ってくるのです。

まだ、何が書かれているかは分かりません。

そっと指をずらすと・・・すうっと頭の中に文章が出来ました。

『自らの足で歩きたければ、温室にいらっしやい』

温室に・・・万里子は窓から温室に目をやりました。

そして手元に視線を戻すと・・・万里子の握っているのは紙ではなく、緑の葉でした。

「あ、あれ??」

ひっくり返してみても、やはり葉っぱは葉っぱです。そこに文字などありませんでした。

「マール様？」

「は、はい！」

万里子は不思議さに首を傾げながら、急いで着替えサロンへの扉を開けました。

室内に残されたのは、一枚の葉っぱだけ……。

その葉は、風の無い室内でふわりと浮くと、窓から外に出て行き、庭の緑に溶け込んだのでした。

「わぁ！やっぱりお似合いです！」

「あ、ありがとうございます」

照れくさそうに、はにかみながらお礼を言う万里子。それはいつもの午後のサロンでの

光景でしたが、ジルはこの日の万里子は少し様子がおかしいと訝しげな眼差しで

きました。

目の前に現れたその人は、蜂蜜色の少しクセのある髪は少し長めのショートで、

その緩やかなカーブに沿って光を放っていました。

そして健康的な明るい肌色のなめらかな肌に、明るく鮮やかな緑色の瞳をしていました。

うっすらと色づいた魅惑的な唇には常に微笑みを浮かべ、身体全体から漂う雰囲気は

艶やかで華やかなもので・・・その圧倒的な雰囲気は万里子は口をあぐりとあけました。

「ば、薔薇だ！！万里子の頭に真っ先に浮かんだのは咲き誇る薔薇の花でした。」

この世界に薔薇があるかわからないけれども、これが日本の漫画の世界だったら

確実にこの人は背景に薔薇を背負って登場する。そんな感じの男性だったのです。

「ジルの美しさとはまた別の魅力がある男性・・・」

その華やかさに圧倒されて、目を見開いて驚いていると、

「私の名は、ルヴェルといいます」

その華やかで美麗な顔を、万里子の目線まで下げて目の前で妖艶に微笑みました。

呆けていた万里子の頭に、その名が引っかかりました。

ルヴェル・ルヴェル・どこかで聞いたような……。
答えがすぐそこまで出てきているような気がするのですが、頭の中
はもやがかかった
ように、答えをぼんやりさせています。

「やはりもう少し赤い方が似合うかな」

「あ！」

『ルヴェル様が、次はもっと赤い衣を用意するとおっしゃっておい
ででした』

先ほどの、少女の言葉を思い出しました。

「このドレス！ありがとうございます！」

深々と頭を下げる万里子を、ルヴェルはその身を屈ませたまま、と
ても興味深そうに
見つめておりました。

万里子は名乗っていない事を思い出し、再度お辞儀をしました。

「すみません、名乗らなくて……。あの、マールといいます」

「マール」

「はい」

「とても強力なムバクに魅入られたようですね」

「は？む、ばく・・・ですか？」

「その胸のシルシですよ」

「失礼」そう言ってルヴェルはそっと万里子の胸元の生地を少しだけ、押し下げました。

「それはムバクの仕業でしょう？」

今日の衣は、少しだけ胸元が緩くなっているデザインでした。お辞儀をした時に、いつもならしっかりと衣に隠れている赤い星が、チラリと見えていたのです。

てつきり虫刺され痕だと思っていた万里子は驚きました。

それが、今日初めて会った人に突然聞き覚えの無いモノの仕業と言われ、万里子は眉を顰めました。

16・天と地と白と黒と

「あの。ムバクって何ですか？」

万里子には、目の前に優雅に佇む華やかな青年に聞きたい事が沢山ありました。

確かに初対面のはずなのですが、彼は『何でも知っているよ』。、
というような、そんな雰囲気
醸し出していたのです。

ルヴェルは少しだけ、眉をびくりとさせました。

「君は、ムバクを知らないのかい？・・・もしかして、ナハクも？」
知っていて当然だろうと言わんばかりのルヴェルの返答に、万里子
は少し顔を赤らめました。

「はい。あの・・・ごめんなさい。この国に来てまだ日が浅くて・・・」
それはルヴェルにも分かっている事でした。彼は万里子の無知を咎
めたわけではありません。
むしろ、知っておくべき事を、ジルが教えていなかった事に驚いた
のでした。

ルヴェルは目の前で少しオドオドする、赤の少女を見つめて考えま
した。

ジルが語らなかつた理由を・・・。
やはり、この少女を手元に置いておくためか？そう結論付けました

が、彼女を世間から隠し続けておくには
厄介な人間に既に目をつけられているようです。

ならば・・・と、ルヴェルが口を開きました。

「教えてあげようか？」

目の前の少女は、大きく頷きましたが、次の瞬間、思い直したように姿勢を正しました。

「あなたの事も教えてくれますか？」

ようやくルヴェル自身にも興味を持ってくれた事に、ルヴェルは微笑み返しました。

- - - - -

「ムバクと、ナハク。これは対極にある一族の名前なんだ。

ああ・・・でも争っているわけではない。特性がね、両極端だというだけ。

ナハクとは、この領地・・・ジルの一族だよ。

彼らは一様に白い肌をし、白に近い髪の色、濃淡はあるが青い目をしている。

様々な術を使い、力の強い者は空を飛ぶ。空飛ぶラブルと空間を駆けるスホを操る。

その力は術を使う他の一族に較べても絶大だ。だが、夜は力を蓄えその身を癒す為に深い

眠りが必要なんだ。思い当たる事もあるだろうか？」

万里子はまたもや力強く頷きました。

話の続きが気になるのか、口を挟もうとはせず、その先を促すようにルヴェルの目を見つめました。

「ムバクは・・・夜を司る一族だよ・・・。この地上を一番速く駆けるルークを操る。

その魔力は夜に力を発揮する。夜の闇でも目は見えるし、その姿は闇に溶け込む。

彼らは眠らないんだ。日中は魔力が衰えるから武術に長けている者が多い。

だから用心棒や剣士の職に就く者が多いかな。

彼らの容姿は・・・黒に程近い群青や藍の瞳と髪」

と、そこでルヴェルは万里子の表情を窺いました。

そうとも知らない万里子は、すっかり話に取り込まれており、ムバクという一族の

容姿の特徴を聞いて、素直に「あ」と声をあげたのでした。

「マール、君の知るムバクは、誰？」

その答えを促します。

「イディさん・・・です。でもどうして？ここに来た日に、一緒に馬車に乗っただけですぐに別れました」

「イディか。それはそれは・・・とても強力なヤツに目をつけられたね。

彼は何かの術を使っているのだろう。私よりも魔術に長けているジ
ルならば分かると思うが、
何しろムバクはジルの魔力が強い日中には魔力が弱る。
だから彼が作った『道』も、日中は閉じていると思うよ。彼らが術
を使って現れるのは

『夜』だ。そして君に会っている。その証拠が、コレ」

今は衣に隠れている胸元の星に、トン。と軽く指を当てました。

「会って・・・いません」

「会っているよ。夢の中でね」

「あ」

またもや万里子は素直に声をあげました。彼女の余りに無防備な姿
に、ルヴェルは彼女を

自分の腕の中に隠しておこうとしたジルの気持ち少し理解できま
した。

「毎晩。夢にイディさんが出てきます。それは本物のイディさんな
んですか？」

「多分ね、ムバクは相手の夢の中に入り込む。夢は意識が見せるも
のだ。普段よりも
無防備になって、様々な情報が得られる。そして、来訪のシルシを
様々な形で相手の
体に残すんだ」

「はあー。虫さされだと思っていました」

「虫？ジルがその強大な魔力で守っている屋敷に？」

そういえば。と万里子は今更気付いたのです。

あの屋敷も、広い広い緑豊かな庭も・・・普通なら居るであろう虫の類は一切見た事がありませんでした。

「じゃあ、これはイディさんが見つけたんですか？」

「そうだよ。こんな場所に吸い付くなんてね。余程気に入られらようだね」

ルヴェルはくすくすと忍び笑いを洩らしますが・・・万里子の頭の中にはたった今

耳に飛び込んできた「吸い付く」という言葉がぐるぐると回っておりました。

そうしてようやくその意味を理解した時・・・この自分の胸元にある赤いモノが、

日本で女子高生をしていた時に本や映画、友達の会話で聞いた所謂『キスマーク』に当たると知ったのです。

「ええええええ！！！！」

途端に耳まで真っ赤になる万里子を、ルヴェルは面白そうに宥めました。

「気になるなら、今日の夜は眠らずに彼を待つといい。ただし、眠ったフリをしていないといけないよ」

万里子はもう、恥ずかしくて今すぐポケットに潜り込みたくてなり

ませんでした。

17・唯一の望み sideイデイ (前書き)

イデイの1人語り。

17・唯一の望み sideイデイ

今日も、もうすぐ夜が明ける……。

俺はなんとか意識を外に戻して、目の前で子供のように眠るマールの顔を見つめた。

初めてマールの夢の中に語りかけてからというものの、1日と空けずにマールの元へと通った。

夢の中で、マールは様々な表情を見せた。

ラウリナに來た経緯、それまでの生活、本当の名前、家族の話、ガツコウとやらの話もしてくれた。

実際に馬車で会った彼女は、あまりお喋りな方ではなかったが、夢の中ではよく話し、よく笑う子だった。

もしかしたら、本来の姿はこちらなのかもしれない。

一晩では足りなかった。マールの声を聞き、くるくる変わる表情を観察し、時々触れる指先に……心が震えた。

夢の中では触れてもぬくもりは感じられない。それでも触れると俺の心は騒いだ。抱きしめても、同じだろうか？

その思いは、意外と早く実現した。

いつもより少し遅くマールの部屋を訪ねた時、彼女は既に夢を形成していた。

覗くと、背の高い若い男が居た。

・・・面白くなかった。だから、既に形成されていた夢に割り込んだ。

いつもより強く呼びかけると、男は背景もろとも歪んで霞んでいった。

すると、マールは子供のように泣き出した。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん！」と男が消えた方向に走ろうとしていた。

兄だったのか……。悪いことをしたかな。そう思ったが、消してしまったものはもう元に戻せない。

呼びかけによつて、もう夢の中には俺が出現し、背景はジル殿の馬車になっていた。

いつまでも、彼女は泣き止まない。俺なんて視界に入らないように別の方を見て泣いていた。

その涙に、我慢できなかった……。

自分の方に引き寄せ、そつと抱きしめた。力任せに感情で抱きしめたら壊してしまいそうだった。

やっぱり、ぬくもりは感じない。人形を抱いているようだったが、腕の中にいるのは確かに彼女だった。

夢の中だから、涙はすぐに乾く。放っておいても衣を濡らす事もない。第一女の涙は嫌いだった。

だけど、彼女の涙は見ているだけで胸が締め付けられる程、辛かつ

俺と王子は生まれた時から一緒だ。

俺の母は・・・力の強いムバクの美しい娘で、王をお守りする近衛隊に所属していた。

そして・・・王の恋人でもあった。だが幸せな時間は長く続かず、王との間に出来た

俺を生むと、隣国との闘いで戦死した。

俺はまだ生まれて間もなかった。まだ、体が本調子では無いのに戦地に向かった為だった。

王は大変悲しんだが、国の為、后を娶らなければならなかった。それが王子の母上だ。

俺の事も、自分の本当の息子のように愛してくれた優しい女性だった・・・。

だから。王子の為なら何でも出来た。大事な弟だし、俺に母の愛も与えてくれた存在だった。

王子の望む物は何でも与えたかった。彼の為なら死ねるし、彼の為なら何でも諦められる。

と、思っていた。

マールに、会うまでは。

王の長子の俺が、継承権は持たずに王子の側近として居る事に、周りは俺を

『見捨てられた王子』として見た。

「王は、イデイ様を見ると亡くした恋人を思い出すようで、自然と

「イディ様を遠ざけられたのだ」

「お母上はイディ様を欲していなかったから、すぐに戦地に赴かれたのだ」

そのような噂が真しやかに囁かれている事は、とっくの昔に本人の耳に入っていた。

どちらの噂も、続きはこうだ。

「イディ様の右目は、呪われた闇の色をしているから」

幼い俺は傷つき、笑顔で近づいてくるヤツらの裏の顔に吐き気がした。

俺自身を、見てくれる人間など、ほんの一握りだった。

この世界の国々のどことも繋がっていない異世界より、ヤンテの姫として召還された

マール。

手違いで、姫と認められずに放り出されたマールの存在を、どこか自分と重ねていたのかも
しれない。

だが、マールは戸惑いを見せながらも、全てを受け入れ、この世界で生きていこうと
していた。

小さくて華奢なマールだが、その瞳は強く俺を見つめた。

手に入れた。初めて、そう感じた……。

王子、俺には欲しいモノができました。

王が、あなたに与えようとしている娘を、俺は心底欲しいと思っています。
います。

あなたの為なら、何でも諦められると思っていました。

でも、これだけは諦めたくない。俺の人生で、たったひとつ、望むモノです。
だから。

まだ彼女の存在は打ち明けられない。

自嘲気味な笑みを浮かべ、眠りについた王子の部屋の周りに強力な結界を何重にも
張り巡らせると、俺は別の呪文を唱えた。

今宵も、君に会いに行く為に。

17・唯一の望み sideイデイ（後書き）

イデイが万里子に惹かれる理由。

18・冬の王子の乱入

目の前で表情をくるくると変え、そして今は耳まで真っ赤にしているマールを見て、

ルヴェルは初心なこの少女には、2人は少し荷が重いのではないかと心配になりました。

ジルは歴代のナハクの長の中でも群を抜く能力があり、最年少で王より大神官に任命された若者です。

が、滅多に微笑みを見せぬ人嫌いで、その容姿も手伝って冬の王子と呼ばれておりました。

そのジルが攫うように突然連れてきて、必要最小限の情報しか与えずに屋敷に置いている少女……。

今のこの少女の様子を見れば、あの人嫌いが彼女の為に様々な事に心を砕いている事が見て取れました。

そう、淡い青が一族の色であるのに、彼女の為にわざわざ高価なヤンテ色の衣を毎日注文する事も……

その代価に術を沢山使っている事も。

そして、私にまで彼女の存在を隠して会わずにいた事も……。

それにイディ。呪われた闇の目を持つと言われている王の長子。

表向きは快活で社交的。大胆で豪快。だが、それはこの国で生きていくための仮の姿。

そう、ルヴェルは思っておりまして。

亡き王妃に恩を感じ、同じ王の子でありながら継承権を持たずに王子に仕えている

彼が、毎夜ひっそりとこの少女の元を訪れる……。きっと、彼が全てを捧げているはずの

王子はまだ知らぬ事だろう……。

厄介な2人に、多大な興味を持たれているらしい目の前の初心な少女を、ルヴェルは少し可哀相になりました。

このままでは、本当に閉じ込められてしまっただろう。そうやって、少し思考を飛ばしておりますと・・

万里子はいつの間にか、気持ちを立て直しており、考え込んでいたルヴェルを今度は万里子が反対に不思議そうに見つめておりました。

「あの。私、今度はあなたの事を聞きたいです」

おや。とルヴェルは少し目を丸くしました。意外と立ち直りが早かったので少し驚いたのです。

「そのシルシの事は、もう良いの？」

「今晚、待ち伏せしてみます。どうして夢に入ったのか、イディさん本人から聞かなくちゃ」

何かと衝突する兄と妹の、いつも仲介役だった万里子にとっては、本人から直接話を聞いて

判断するのは至極当然の事でありましたが、そんな万里子の強さと冷静さにルヴェルは少し眩しそうに目を細めました。

「ルヴェルさんは、また別の一族なんですか？」

「そうだよ。私はサイナという一族だ。ジルの領地の隣が、我が一族サイナの領地だね。」

ナハクとの縁は深い。・・・領地が隣という事もあって、一族の垣根を超えて婚姻を結ぶ者も多い。

私の曾祖母とジルの曾祖父は、仲の良い夫婦だった。だから私はジルの兄のようなものかな」

「そうなんですか！」

ジルと縁が深いと聞くと、万里子は安心したように心からの笑みをルヴェルに向けました。

「でも私の一族は術は使わない。代わりに、植物と会話が出来、操る事が出来る。その能力を使って

染色して衣を作ったり、作物を育てたり、建築物などを作る。この温室も、祖父の代に

ジルのおじいさまと協力して作った物だ。

サイナはこのような能力から、職人や商人が多い一族だね」

「だったら、家で黙々と創作活動に勤しんでいれば良いではないですか」

温かな赤い光に包まれた温室の中に、冷たく静かな声が響き渡りました。

「ジル、さん・・・」

ジルが自分の塔に向かったのを見計らって、抜け出してきた万里子はバツが悪そうに俯きました。

「マール、暗くなつてから抜け出しては危ないですよ。いくら結界内とはいえ、ヤンテの光が

弱くなってからではその加護も・・・」

「え？」

ヤンテの光と私に何の関係があるのだろうか？意味が分からず、首を傾げる万里子で

ごさいましたが、ジルはルヴェルに視線を走らせると、チツと舌打ちし、ほんの少し顔を歪ませました。

その様子も、ルヴェルにとっては大変面白いものでした。常に無表情であったジルが、不機嫌を隠そうともしない。常に冷静で冷酷だったジルがこの少女を心配して思わず言葉が過ぎてしまったのです。

「ナハクの君が、赤の衣を毎日せがむからさ。その衣を、纏う姫に会いたかったんだよ」

ね。と、ルヴェルは万里子に微笑みを向けました。

18・冬の王子の乱入（後書き）

年齢的には、ルヴェル ジル イディって設定です。

19 ジルのエゴ、ルヴェルの真意

「それは、私には青いドレスが似合わないみたいで。それで・・・」
万里子はジルとルヴェルの、何かを含んだような会話には全く気付かず、そう答えました。

そんな様子を、微笑みを湛えた瞳で見つめるルヴェルでしたが、やはり万里子のあまりに素直で、駆け引きを知らない純粋な姿が少し可哀相に思っただけでした。

「マールはそんな事を気にしなくて良いですよ。私はあなたにここで快適に過ごして欲しい。それだけなのですから」

ジルがそう優しく言うと、途端に万里子は居心地悪そうに、もぞもぞと小柄な体を更に縮こまらせ俯きました。

その様子は、まるで『自分にはそこまでしてもらっ価値がないの・・・』と思っているようにルヴェルの目には映りました。

「マール、また話せるかな？私はジルと少し仕事の話があるんだ」
暗に席をはずすように言われた万里子は、ピクリと肩を震わせて、「ごめんなさい！」と
言っ勢いよくお辞儀をすると、温室の外へと駆け出しました。

とっさにジルが追おうとしますが、それをルヴェルがジルの肩を掴

み引き止めます。
掴まれた肩をジルにしては乱暴に振りほどくと、ルヴェルに対して怒りを素直にぶつけました。

「あのような言い方！マールが自分を邪魔者のように感じてしまったら・・・！」

「そうだね。彼女は面白い。そのような負の感情はとても敏感に感じるのだね」

「・・・どういう事です？」

「彼女は自分の価値に気付いていない。自信を持たず、自分を厄介者のように思っているようだ」

「それは今あなたがっ！」

「わざとそのような言い方をしたんだ。君が彼女をいくら特別に扱い、特別気にかけて特別愛情を注いでも、それには気付かない。気付く事はあっても、自分はそれを受けるに値しないと知っている。だから、あのように居心地悪そうにしていたのだ。反対に、遠まわしに君と2人にするように言うと、それはすぐに伝わった」

「だから！何が言いたいのです！」

「あの状態でこのまま、ここに閉じ込めておくのは誰のためだい？」

彼女の？

それとも……君の？」

「……閉じ込めるなど……」

核心をつかれたのか、ジルはルヴェルから視線をはずしました。

「私は……彼女を守りたいと……」

「ジル、世間から隠し、情報を与えずに結界の中に閉じ込める事は、本当の意味で守る事にならないのではないか？」

「……」

「今、彼女に必要なのはこの世界の情報と、ここで生きる術。そしてここで生きる『意味』だ。

自分に何ができるか分かっていない、何も出来ないお荷物だと思っているよ、今は」

「彼女はヤンテの姫だ！存在するだけで……」

「……彼女が本物の姫だと、すんなり認めるんだね」

「……あなたには隠しても無駄でしょう」

ジルが万里子を誰の目にも触れる事なく、少しでも早く領地に戻りたいと思ったのは彼女の価値に気付き、惹かれる者が他にも居るとわかっていなかったからでした。

それを思った時、ジルの頭に浮かんだのは、今目の前に悠然と立つ

ているルヴェル……。遠縁にあたる彼は、ジルの尊敬する祖父と同じ、静かな、しかし熱くどんな時も

揺らがない緑の炎をその身に宿しておりました。

それ故、ジル自身も幼い頃からルヴェルを兄のように慕い、祖父亡き後唯一信頼できる人間だと思っております。

ですがその分、万里子を奪われるかもしれないという恐怖にも似た焦りを感じていたのです。

「あの子は自覚が無いから、ただ存在するだけで居るのは辛いだろう」

「私は……マールが居てくれるだけで良いのです……」

「……君は、ね。だが……閉じ込めるのが君の愛かい？」

ヤンテの光が弱まり、夜が近づいた事を知らせました。

温室の赤い光玉も、その色をほんのりとさせ、温室の中にも夜が訪れました。

ナハクであるジルは、自身の力も弱まってくるのを感じましたが、今日はそれ以上に

心が弱まるのを強く感じたのでした……。

「私は……」

「今の君のやり方では、彼女は自分らしさを失って潰れてしまいうだるう」

「どっしりと……」

「君には彼女を手放す強さが必要だね」

「・・・っ!」

「そんな悲愴な顔はやめてくれ。・・・自信がないのか?」

「・・・」

返事はありませんでした・・・ですが、苦しげに眉を寄せる青白
いジルの表情だけで
ルヴェルには充分でした。

「ジル、私はね。彼女を潰したくない」

「・・・」

「・・・そして、君にも潰すような真似をして欲しくない」

その日、万里子がいくら待っても食事の席にジルはやって来ませんでした。

19 ジルのエゴ、ルヴェルの真意（後書き）

さて。ルヴェルがジルから万里子を引き離そうとしているのはジルの為か、万里子の為なのか、それとも自分の為なのか？？

20・溺れる瞳

結局、食事が終わってそのまま待っていてでもジルは戻って来ませんでした。

「ルヴェル様が温室においでなのででしたら、お話は少し長引くかもしれません。」

あの温室はお2人で管理されていますので」

ですから、そろそろ就寝のご準備を。とシアナに言われ、万里子はようやく自分の塔に向かったのです。

ゆっくりとお風呂ブルンで気持ちを落ち着かせている時、ふと胸の赤いシルシが目に入りました。

そうだ・・・今日は眠らずにイディを待ち伏せしなければ・・・。

なぜ、私の元に毎夜通うのか。なぜ、夢に入り込むのか・・・ルヴェルは、夢の中だと

警戒心も薄く情報が入りやすい。と言った事を思い出し、万里子は首を捻りました。

一体彼は万里子から何の情報を知ろうとしたのでしょうか。それに、イディはムバクの中でも特に力の強い若者だという事でした。

そんなに強大な力を持つ彼が何故・・・。そっと、シルシを指でなぞり、頑張つて眠らずに待とうと決意したのでした。

何事もない穏やかな日々をこれまでジルの屋敷で過ごしてきましたが、それでも慣れない異世界で

身体は疲れるのか、ポケットにもぐりこむと、あつという間に眠りに落ちていましたので

眠ったふりをしながらイデイの来訪を待つのは難しいと思われませんでした。

ですが、今日は1日で様々な事がありました。新しい出会い。何もかも見透かしたような

ルヴェルの眼差し、初めて見る焦った表情のジル、そして・・・毎夜ひっそりと訪れているという

イデイの事・・・彼ら一族の事、それを考えていると疲れているはずなのに、睡魔はやってきませんでした。

日中に魔力が高まるナハクだというジルは、もう癒しの眠りについてたでしょうか・・・。

ならば、ルヴェルの言った『イデイが作った道』は開けて、彼は今にもここに現れるのでしょうか・・・。

どれ位、時が経ったでしょう。

静かな静かな室内。聞こえるのは自身が動く時の衣擦れの音と、呼吸。そんな静けさの中、

カチリ。と小さな金属音がしました。

万里子は目を閉じたままでおりましたが、室内の空気がそよりと動き、一層の闇につつまれる・・・

そんな感じがして、イデイの訪れる道が開けた事を知ったのです。

万里子の鼓動は不思議と落ち着いていました。

イデイはいつものように万里子の眠る寝台の縁に音もなく腰掛けました。

そっと、万里子のむき出しの肩に指をすべらせます。

白く、柔らかく、温かい……その全てをじっくり堪能するかのように、
ゆっくりと、ゆっくりと万里子の手首に向かって自身の指を滑らせました。
そのまま万里子の小さく細い指に、指を絡ませて自らの顔に引き寄せます。
そうしてそっと。唇を寄せたのでした。今宵もまた、夢に語りかけるために。

万里子は、イディの硬く冷たい指が自分の肌を撫でるように滑り降りて行くのを
感じていました。
本来なら驚き、恐れを感じてもおかしくない感触ですが、無骨な印象のイディが、そっと自分に触れてくる
その優しい感触に、不思議と安らいだ気持ちになりました。
すると指を絡められた手が持ち上げられて、手の平に彼の熱い息遣いを感じました。

「イディさん」

目を閉じていても、イディがピクリと反応したのは手の平をくすぐる彼の唇からも
わかりました。

「起きてた、のか」

「はい」

万里子が目を開けて、そのまま上半身を起こすとそれに反応して室内の光玉がほんのりと明るくなりました。

闇に溶け込んでいたイディの姿が浮かび上がります。

そのまま、しばらく言葉も無く見詰め合っていました。

先に目をそらしたのは、イディでした。

「なぜ、責めない？勝手に夢に関わるなど」

「私には、イディさんの利益になるような情報はありませんから。それに、イディさんは『夜の寂しさから守る』って言ったでしょう？それが夢の事だったのかなあって・・・。えっと・・・この『シルシ』には驚きましたけど」

一度そらされた視線が、また万里子の顔の上に戻りました。見えているイディの

左目が笑みを湛えています。

「とても、有益だったよ。君の夢の中では時間を忘れていた。今まで一緒だった家族の事・・・ガッコウ？初めて聞く事だったな」

「・・・とても平凡な話です」

「相手が君だから、意味があるんだ。・・・誰かの指示があったこ

ここに忍び込んだりしたのではないし、君の夢の事は誰にも報告していない。それは安心して欲しい。そうは言っても俺の話は信用できないか？」

じつと、イディの目を見て、万里子はふるりと首を振りました。

「信じますよ。イディさんは盗賊から助けてくれた恩人ですもん。悪い人じゃないって分かってますから」

すると、真顔で万里子を見つめていたイディが自嘲気味に口角を上げました。

「悪い人じゃない？俺が？」

「はい」

「そんなに簡単に人を信じちゃいけない。俺の目を見たらきつと恐怖感を抱く。これは・・・」

そう言っつて、普段隠れている右目を覆う長い前髪を乱暴にかき上げました。

「あ。私と一緒にですね」

「・・・え？」

意外な反応に、意表を突かれたイディは、そのまま黒と藍、両の目でマジマジと万里子の顔を見つめました。

万里子の瞳は、薄暗い室内でも黒い瞳をしているのが分かりました。

室内のほんのり明るい光玉の光を受けて、きらきらと光る黒くつぶらな瞳と一緒だと

目の前の少女は微笑んだのです。

イデイは、今まで自分の右目が受けた悪しき表現の数々が、泡となつて消えていくのを感じて、

今にも泣きそうな笑顔で、万里子に笑いかけたのでした。

20・溺れる瞳（後書き）

イデイ、完璧に落ちたっぽい？

21・お茶飲み友達の提案(前書き)

ジルとルヴェルがごっちゃんになってる部分があるよー!と、
教えて頂いたので、修正しました!
ご指摘ありがとうございました

21・お茶飲み友達の提案

ヤンテが明るく光り始め、朝がやって来た事を告げ、万里子の1日も始まります。

毎日、特にやる事はありません。屋敷にはジルとシアナ以外にも他の使用人らしき人物や、

一族の重鎮らしき人物の訪問もあり、ジルもシアナも忙しそうに日々を送っております。

が、術の使えない万里子は手伝う事もできません。

何もかも勝手の違う世界では簡単な手伝いも見よう見まねでは出来るものでもありませんでした。

ですから、毎日が単純に過ぎてゆきます。

食事をし、散歩に出て行き、ジルに屋敷から余り離れないように言われておりましたから

遠くても温室の外まで行く事はありませんでした。

少し遠くに行こうとすると、どこからともなく白玉と名づけたスボが現れて護衛を

するかのようになり添って歩きます。

彼はいつの間にか、万里子にとってよき話し相手になっておりました。

環境は、とても落ち着いております。

ルヴェルの言った『ジルの強い結界で守られた屋敷内』では、何も危険はありません。

毎日よく食べ、よく眠り、ただただぼんやりと過ごす。ですが心は落ち着きませんでした。

本当にこれで良いのだろうか。自分ひとりが邪魔者にされたあの神

殿で、不憫に

思って手を差し伸べてくれたジルに、このまま甘えてしまっただけのいいのか……

万里子は心に小さな棘が刺さったかのような痛みと不安を抱えておりました。

そして、それは時と共に大きくなっていったのです。

いつか、自分を疎ましく思う日が来るのではないか。いつか、たったひとりでこの結界の

外に出なければいけないのではないか……。

今の万里子に、この世界で出来る事は何もなく、その事実がかえってこのように

不安を大きくさせるのでした。

「……起きぬけに考える事じゃ、ないよなー……」

まだ少し眠そうに、瞳をぱちぱちさせて呟くと、勢いよく立ち上がりこの世界に来てからの

日課となったストレッチを始めました。

「こんなだらりと過ごしてたら、さすがに身体がなまっちゃっよ」

最後にぐーんと思いつきり背伸びをした万里子は、不安な気持ちで吹っ切るかのように

大判のタオルを手に、バスルームに飛び込みました。

着替えながら万里子は、そっとイディがつけた『シルシ』に手をあてました。

あれから数日……色づきはだいぶ薄くなり、今ではほんのりと分かる程度になっただけでした。

の感情以外には

基本的には鈍い万里子は気付くはずもなく、渋い顔を直接向けられたルヴェルに至っては

そんな視線など一向に気にしていないようでした。

万里子がジルの表情に気付かなかったのは、鈍い、という以外にも理由がありました。

万里子の視線は、ジルが持ってきた新作の衣が入っているであろう右手に抱えた箱ではなく、

左手に持った小振りのカゴに向いておりました。

「今日はカルミナの蜜の焼き菓子を持って来たよ」

自分の作った高級な赤の衣よりも、焼き菓子の顔をほころばせる万里子に、思わず

自らの顔もほころぶルヴェルでありました。

そう、ふたりはお茶飲み友達となり、午後のひと時を一緒に過ごすようになっていたのです。

こちらの世界の食事にはなんら不満はありませんでしたが、甘いものに飢えていた

万里子は、ルヴェルが毎日手土産に持ってくるお菓子の数々にすっかり魅了されてルヴェルに懐いていったのでした。

お茶会は専ら社交的なルヴェルと万里子のお喋りで進みました。

ジルも同席する事が殆どでしたが、彼は無口で更に甘いものが苦手でしたので

ただ単に2人きりにしたくない。というちょっとした嫉妬心からの行動でした。

それに、ジルには少し気になる事もありました。

自分から万里子を手放すように進言したものの、毎日衣をサイナの長であるルヴェルが自ら持ってきてはゆっくりとお茶をしながらお喋りをして過ごす……。そんなルヴェルに少し拍子抜けしたジルでは

ありましたが、ルヴェルは特に動く様子はありませんでした。常に微笑みを絶やさず社交的。豪商として先祖より引き継いだ事業を、先日までの

ヤンテの無い暗黒時代にも商機を見出し、更に財産を増やした商才の持ち主。

異世界からやって来た少女の相手ではありません。

ルヴェルにすっかり心許した様子の万里子に、ジルは内心不安でした。

「ジル様・・・長老がいらっしやるお時間です」

ヤンテが現れ、この世界が以前の正常だった状態に戻る為、各地へと赴いている

ナハクの神官達に急いで連絡を取る必要があり、ジルは多忙な毎日をお過ごししておりました。

小さくため息を洩らし、立ち上がったジルにはカルミナの焼き菓子談議に花を

咲かせているふたりの様子が眩しくて仕方がありませんでした。

「ジルはとても忙しいようだね」

「・・・あなたも忙しいはずでしょう」

「私も仕事をしているよ。今日だってそれでこちらに来たのだから」

軽く顎で示した先には、ここ最近の中では最も赤が鮮やかな衣が・

。。
苦々しい思いで、ジルは長老の待つ、屋敷最奥の塔『語りの間』に向かいました。

「ジルさん、最近元気が無いのです。働き過ぎな気がするのですが。」

万里子が少し心配そうな顔をのぞかせました。

「それは・・・仕事ではないと思うよ」

先日、私が彼を少し追い詰めたからね。そうルヴェルは心の中で付け足しましたが、
勿論それは万里子には分からず、万里子は益々首を傾げるだけでした。

「さあ。それより、昨日は何を話したかな？」

「この世界の通貨についてです。まだ・・・よく計算ができませんけれど」

「どうして、そんな事が知りたいんだい？」

「このままではいけないと思うんです。自分ひとりでもこの世界で働いて生活できるように
ならなきゃ。いつまでもジルさんに甘えるわけにはいきませんから。それに・・・」

「それに？」

「ジルさんは、神殿で1人になった私を助けてくれただけなんです。こんなに長い間

居座ってしまつて、きつと迷惑だと思つてると思つんです」

むしろジルは幸福だと思つているはずだ。そうルヴェルは思いました。

途中のちよつとしたハプニングで何人かに彼女の存在はバレてしまいました。が、

それでも誰よりも一番近くに居たのはジルです。

滅多に表情を崩さないジルが微笑み、屋敷の塔を与え傍に置きたがる唯一の少女。

冬の王子の心を溶かしたのは、唯一万里子だけです。

ですが本人はそんな事を欠片も思つておらず、やはり自分の価値を知らずにかえつて

重荷になつていていると思ひ込んでいたのです。

「・・・働く。と言つても、なかなか難しいのではないか？術は、使えないのだらう？」

「・・・つ、使えません。あの、使えなきゃこの世界で働くのは無理ですか？」

「そんな事は無いよ。だつて言つただらう？私だつて術は使えない」

「でも、ルヴェルさんは植物を操る事が出来るじゃないですか」

「そつだね。でも、加工したり売ったりするのは術が使えなくても出来る事だ」

「えっ、それって私にも出来るって事ですか？」

「うん。出来るよ。やるかい？」

「やります！やりたいです！」

「じゃあ、サイナの街において」

「え？」

サイナとは、ルヴェルの一族の領地のはずです。そこに行くとはどういう事なのか・・・
万里子は首をかしげました。

「マール、ジルの一族は術者の一族だ。術が使えない者が出来る仕事は無い。

でも私の一族は、研究者や職人、商人が多いと言ったね？植物を操るその特性から、

サイナの街は商人の街なんだ。

他の大きな街よりも王都に近く、更に隣国の2カ国と国境を接している事もあり

この国では一番大きな貿易の街なんだよ。

術の使えない者も沢山働いている」

いつかここを出ていく・・・今朝、漠然と頭に浮かんだこの言葉が、近く現実の

ものとなるかもしれないという不安に、少し万里子は考え込みました。

このまま居候をしているわけにはいかない。小さな頃から華やかな兄妹の陰に隠れて生きてきた万里子にとって、活躍できないのならせめて邪魔にならないように。

そう心がけてきた性格上、居候という立場はなんとも居心地の悪いものでした。

ですが、まだ17歳。

知り合いがまだ数人しか居ないこの異世界で、いきなり自立するというのは、まず

不安や恐怖が先に立っても仕方のない事でした。

そんな万里子の様子が手に取るように分かったルヴェルでしたが、万里子自身の足で

ここを出て行くのでなければ意味が無いと思い、更に言葉を続けました。

「それにね、一番の貿易の街だからこそ、君が住む利点もある」

「私が住む利点？」

「そう。様々な国の人々がやって来る街だからね。時々君のように、黒い髪や黒い

瞳の人もあるよ。この国では・・・少し珍しい色合いだからね」

そういえば、イディも黒い右目をとても気にしているようでしたし、普段は伸ばした

前髪で隠すようにしていたのを思い出しました。

「君が来ると言うのなら、働き口を紹介しよう。だから・・・考えておいて？」

ルヴェルは華やかな微笑みを万里子に向けてそう言うと、立ち上がりました。

今ここで、答えを求められなかった事に万里子はほっとしましたが、この申し出を

受けても、それは頼る相手がルヴェルに変わるだけで、事態はあまり変わらないのでは

ないかと疑問に思いました。

「そうだ、マール。サイナに来る事になったとして、私が君に出来る事は、

街の案内や仕事の紹介くらいだ。ジルのように、何から何まで用意してあげる事が

できるわけじゃない。

勿論、相談にはいつでも乗るよ。その事もちゃんと踏まえて考えておいてくれ」

聞く人が聞けば少し冷たく聞こえるその言葉は、しかし万里子にとっては

有難い距離感でした。

何でもかんでも甘える事は、何も返せない万里子にとっては気持ちの負担は大きく

なるばかりでしたので、万里子は少しだけ、心が軽くなるのを感じたのでした。

21・お茶飲み友達の提案（後書き）

全てはルヴェルの思惑通り？

て行きます。

実現する事はない思い。形になる事はない心からの願いは、そのまま闇に溶けてゆきました。

ヤンテが明るさを増したら、あの子は出て行ってしまふ……。何よりも癒しの

眠りが必要なジルが、今宵は眠れずにおりました。

それだけ、思いは強く。ですがそれ以上にルヴェルの言葉の檻は頑丈でした。

このままこの屋敷で万里子を住まわせても、彼女の為にはならない。自分が存在しても

良いのだという自信を持つ為には、自立させる事。それには、術の使えない彼女が

働ける場が必要だという事。その場が、ナハクの領地には無い事……。

ルヴェルの発したその言葉達が、見えない檻となり、ジルを閉じ込め、苦しめました。

ルヴェルの言葉は正に正論。隙はわずかもありませんでした。

「わかって、いる。頭ではわかっているのだ!!」

だが、心は……。

そんな切ない叫びさえ、夜の闇に溶けて、万里子に届くことなく消えてゆきました。

もうすぐ、夜が、明ける。

少しして、控えめなノックが響きました。

ジルの鼓動が、どくん。と強く打ちます。

ノックだけで、万里子だと分かりました。

「おはようございますー」

この国に、朝だけの挨拶というのはありませんでした。ですから、これは万里子だけが使う特別な挨拶。別れの朝だというのに、この言葉だけで

ジルの胸にじんわりと熱がこもり、全身に広がってゆきます。

「あれっ。起きたんですか？」

万里子は、窓辺に立ち朝日を浴びて逆光になる細長い影に話し掛けました。

その影は、ゆらり。と儚げに見えて、そのまま消えてしまうのではないかと万里子は慌てて駆け寄りました。

「ジルさん、大丈夫ですか？もしかして、眠ってないんですか？」

「今日は大事な日ですから・・・マール・・・私は、あなたに・・・」

ココニ、イテホシイ・・・

その言葉は、どうしても繋げる事ができませんでした。

「ジルさんが眠っている間になんて、行きませんよ。ちゃんと眠らないと、身体に負担がかかっちゃうじゃないですか」

小さな自らの身体で、ジルを支えようとする万里子に、ジルはそのまま長い腕を巻きつけました。

「ジルさん！……えっあの！……ぐ、具合悪いんですか？」

一瞬抵抗を見せましたが、ジルが眠らずに体調が悪いとでも思ったのでしょうか。

万里子はジルの腕の中で大人しくなりました。

その様子に、ジルの腕には更に力がこもります。

しばらくその状態が続いたでしょうか……

万里子は、頭上にふーーーーーと長いため息を感じました。

「旅立つんですね」

先ほどとは違う、落ち着いたいつものジルの声が響きます。

「……はい。今までお世話になりました」

「……ッ！！……」

「……その身ひとつで行かせるわけにはいきません。せめて私にも何か手伝いを

させてください」

.....

そうして、今白玉が牽く馬車に居るのです。

心配だから、と白玉を連れて行くように言い、更に住まいにするように。と

小さな小さな馬車ハコをくれたのでした。

小さな小さな、外見からすると2メートル四方ほどのハコでしたが、内装はかなり豪華で

最初に乗った馬車より広いようでした。

なんとバストイレ、簡易キッチン付で寝室とリビングの2間ありました。

「・・・なんとというか・・・過保護？」

たつぷりとしたレースのカーテンで強い日差しを避け、室内温度も適温に保たれた

馬車の中で、万里子は結局甘えるしかなかった事に苦笑しました。

更に、特別な術をかけたという大きな鏡を馬車内に取り付けられたのを思い出しました。

通信用だというその鏡は、ジルが万里子の顔を見て話せるようにと特に気合を入れて

術を施した力作でした。

この鏡での通信はお互いの私物を所有している事が条件となっております。

一方的に盗み見たり出来ないように、そのようになっていたようでした。

「まさか、お玉がこれに使われようとは・・・」

この世界のスーブは、内側を熱した特殊な小さな土鍋のようなもの

に1人分ずつ

作るので、お玉というものは必要ありませんでした。

これが何か、ジルとシアナに説明した後はそのまま自分の部屋に放置していたのですが、

この度活躍の場が与えられ、ジルの通信用鏡の上部に恭しく飾られておりました。

そして、自分の元にあるジルの私物は……大きなしずく型の光る石がついた

ペンダントでした。

なんでも、纏う衣の色に変わり、暗闇では光玉の代わりにもなる、

これもジルお手製の

ものであり、お玉とは雲泥の差の代物には間違いありませんでした。

「……やっぱり……過保護？」

薄いオレンジの衣を着た今、胸元で淡くオレンジの光を放っている

それを、万里子は

そっと手の平に乗せました。

『姫様』

頭の中に、今ではもうすっかり聞き慣れた白玉の低く柔らかい声が響きました。

『ここから先が、サイナです。ルヴェル様がお待ちですよ』

いよいよ、新天地到着となりました。

これから1人で暮らす、新しい街！万里子は期待と不安に背中を押

されて、急いで窓辺に
駆け寄りました。

「う、わー!!」

目に入ったのは、色とりどりの花々。高くそびえる木々。遠くには
小さな、しかし
請ったデザインとカラフルな色合いの、きっと木造であろう建物が
見えました。

街の入り口と思われる大きな門に近づきますと、その横の建物前に
ルヴェルの姿を見つけました。

ルヴェルの近くまでやってくると、白玉はすーっつと足を止めまし
た。

「やあ。マール。サイナの街へようこそ。どうだい？街の印象は？」

「木や花がとっても元気なんですね！なんていうか・・・開放的で明
るい雰囲気です！」

もつと近くでカラフルな街並みを見たいと思い、馬車を降りようと
した万里子をルヴェルが
押し止めました。

「ルヴェル、さん？」

「私がそちらに乗ろう。連れ立って歩くよりは良いだろうからね」

「あ。そうですね。ルヴェルさんのファンの方に、怒られますね」

立っているだけでも優雅で華やかなルヴェルのその姿を、遠巻きに眺める女性達が
見て取れましたので、自分のような地味な人間が親しくするのはあまり良くないのだろう。と、
万里子は思ったのでした。

「スホはとても高貴で貴重な動物だ。しかも意思の疎通が出来るスホは特に珍しい。
言つたらう？スホを操るのはナハクの一族だと。」

そのスホを、ナハクではない君が伴っている。それは人々の好奇心を刺激する。

・・・良からぬ人間もね。だから、この馬車に乗っているのが君だと今は見せる必要は無い。

まあ・・・私のファンが多いのは否定しないけど？」

冗談ばく言つて明るい笑顔を見せたルヴェルに、万里子も明るい笑顔を返しました。

「それにしても、ジルは余程君が大切で、心配でならないのだね。
スホに馬車、それに・・・」

『対話の鏡』、か」

「断りきれなくて・・・」

「うん。これ位はもらっておいた方がジルの為にもなる」

自分ばかりが与えてもらつてばかりなのに、それがジルの為になるというルヴェルの

言葉の意味がよく分からず、万里子は曖昧な笑みを浮かべるしかありませんでした。

「さあ、マール。どんな仕事がしたい？色々候補はあるんだ。外国の商人が多数訪れる

この街一番の高級宿の受付に、女性が香りを身に纏う為の香油の高級品を扱う店も

看板娘を探している。

最高級のラウリナ生地や外国製品も扱う衣の店はどうだい？この街一番の大きな店だ。

他にも、色々あるがどれが・・・うん？どうしたんだマール？」

それはサイナの長であるルヴェルが万里子の為に、自らが探し歩いた特級のお薦めアルバイトの数々でした。

どれも華やかで若い女性には憧れの職場です。

綺麗な衣を着て、上品な人を相手にする仕事は、術が無くても出来る仕事の中でも特に

条件の良い仕事ばかりでした。

が、万里子の顔色はどんどん渋くなっていったのです。

「あの・・・ルヴェルさん。もっと地味なお仕事は無いでしょうか。」

聞けばそれは扱う商品や仕事内容は違えど看板娘の仕事ばかり。

スポットライトをなるべく避けたい万里子には、なんとも辛い選択肢ばかりだったので

ございます。

さて。万里子は無事、仕事にありつけるのでしょうか？

22・新たな地へ（後書き）

ジル、かなり落ち込んでおります。

23・王子の疑問

案内されたのは、沢山の人が集う華やかな商店通りを通り過ぎ、ルヴェルの言う

職人通りをも通り過ぎた小さな森の入り口でした。

白玉に止まるように言うと、ルヴェルは万里子の手を取り、一緒に馬車から降りました。

サイナの街を、初めて体中で感じた万里子は、その暖かな空気に少し緊張が和らぎました。

森と言うと、万里子はジルの屋敷の外に広がる静かな、緑の濃い凜とした空気を

感じる空間を思い描いていたのですが、辿り着いたそこは、幹の太い巨木が立ち並び

その周りを色とりどりの花々が明るく飾る、南国を思い起こさせるような森でした。

巨木を取り囲む花々は背の高いものもあれば、背の低いものもあり、万里子の視界いっぱい

鮮やかに映りました。

「こつちだよ」

ルヴェルが森の中に誘います。

森に入ってすぐの所に、背は低いのですが幹周りはきつと大人が10人位、腕を伸ばしてやつと

周りを囲える程ではないかと思えるほどにずんぐりとした巨木がありました。

その巨木は周りにある背の高い花々よりも低く、脇にはなんと、小さなドアがありました。

「あれ？もしかして・・・中に入れるんですか？」

「そうだよ。この巨木全てね。ここは長老の森だよ。今から長老に会わせよう」

長老と言えば、それはとても偉い方では・・・と、巨木と鮮やかな花の森に圧倒されて

口をぽつかりと開いていた万里子は、突然の展開に慌てました。

そんな万里子の様子を、可笑しそうに笑いながらも、ルヴェルはドアを開けてしまいました。

「ま、待つてください！まだ心の準備が！」

「長老。私です、ルヴェルです。さあ、マール、中へ」

ドアを支えたまま、先に中に入るよう促すルヴェルに、万里子は更に慌てます。

万里子は、ジルの屋敷で1度だけ見たことのあるナハクの長老を思い浮かべました。

銀色の顎鬚をたつぷりと蓄えた、姿勢の良いいかにも厳しそうな老人・・・きつと

サイナの長老もあのように厳しい雰囲気の方なのでは・・・そう思っ
って恐る恐る

ドアに近づきますと、中からゆったりとした口調の、柔らかな声が聞こえてきました。

「ルヴェル、その呼び方は止めなさいと言っているでしょう」

あれ？女性の声・・・万里子は首をかしげました。聞こえてきた声は、女性にしては

少し低いですが耳に心地の良い声でした。

なかなか中に入らない万里子に対して、ドア近くまでやって来てくれたのは

小さな老婆でした。その顔は丸々としていて、細かく刻まれたシワが優しい表情を

更に魅力的に見せておりました。

老婆は淡い緑のたつぷりとした衣を身に纏い、深緑に細かな金刺繍が入った大判のストールの

ようなものを肩からかけておりました。

万里子は自分に向けられた、好奇心旺盛のキラキラした目を見つめ、どこかで見たとような・・・

親しみを覚えました。なぜでしょう・・・。

「あ

目の前で微笑む老婆とルヴェルを見比べ、2人の雰囲気似ている事に気付いたのです。

「長老には間違いないでしょう。おばあさま」

「ものすごく年寄りになったのだと思い知らされるから、止めなさい」

ルヴェルはとてもしラックスした様子で、クスクス笑うと、立ち止まったままの

万里子の腕を引き、改めて紹介しました。

「長老は、私の祖母でもあります。おばあさま、会いたがっていたでしょう？マールですよ。」

ジルのところから攫ってきました。今日からサイナで暮らします」

「・・・会いたかったわ、マール。あなたの事を、ルヴェルから聞いてから、ずっと

会いたいと思っていました。私の事は、グリユーネと呼んで頂戴。長老と呼んではダメよ？」

万里子に微笑みを向け、優しく語り掛けるグリユーネの姿に、万里子はやっと、

何も挨拶をしていない事に気づきました。

「初めまして！マールです。あの・・・術も使えないので、私にも何か出来る仕事があればと思ってサイナの街に来ました」

ぺこりと、お辞儀をする万里子に、そっとグリユーネが手を差し出しました。

「こちらにいらして。なぜ、街のこんなに奥まで？ルヴェルがいくつか、仕事を紹介したのではなくて？」

「それが・・・おばあさま。マールはこの辺の若い娘が望むような仕事はお気に召さないようです。」

それで、先に連れてきたのですよ」

ルヴェルは面白そうにそう言つと、紹介しようとしていた店の名を挙げました。

「まあ、全てこの街では一流の、外国の要人も御用達の店よ?」

「あのう……余りにも華やかで……ちよつとそのような場は苦手で……」

グリユーネに手を引かれ、奥のゆったりしたソファに座ると、万里子はごによごによと話し始めました。

「珍しい子ね。益々気に入りましたよ。では、このおばばの手伝いをしてくれる?」

「え?」

「……おばあさまは、衣を作る名人なんだ。引退して、今は注文品だけを作っている。

でもとても腕が良くてね。注文が後を絶たないんだ。でも……若い娘は、大体

先ほど紹介したような商店通りの華やかな職場を好むのでね。

人手は欲しいが、候補者がいなかったんだ。本当はこれを機にすっぱり仕事は

辞めて欲しいと思つてただけど……君が手伝ってくれるのなら、祖母も無理せず

仕事を続けられるかもしれない」

「あの、でも、どのような? 私にも出来ますか?」

「棟続きに、作業部屋があるの。そこで染色した糸から生地を織つて、衣を作っているのよ。」

注文に応じて刺繍をする時もあるし・・・細かい作業になるけど、好きかしら？」

手芸が唯一の趣味だった万里子は、大喜びです。

「是非やらせてください！お願いします」

その返事に満足したのか、グリユーネは大きく頷きました。

話はトントン拍子に進み、手当てについても決められました。

食事はグリユーネが用意してくれる事になり、その分賃金は他の仕事よりも安いわよ。と

言われ、出された金額にルヴェルも苦笑しましたが、ジルの屋敷を出る時に、

結局買ってもらった衣は全て持たされましたし、住む家にも困りませんので、

万里子にはそれで充分でした。

白玉と馬車を、ジルからもらってきた事を言うと、グリユーネは自分の家と作業部屋が

連なった巨木の後ろ側小さな泉があり、そのほとりに、未使用の巨木と少しの空き地が

あるから好きに使うように言われ、万里子はやっと、ここからがスタートになるのだと実感したのでした。

「では、連れてきているというスホに巨木の家を使わせるといいでしょう。」

そのスホは話せる？なら後から会わせてもらおうかしら・・・。
場所はルヴェルに案内させるわ。手伝ってもらって頂戴ね。夕暮れに、またこちらに2人でいらっしやいな」

万里子が拠点をサイナに移し、仕事も決まって初めての夜を馬車の中で迎えた頃・・・
ラウリナ国の王都にある宮殿の中で、イラつきを隠そうともしない男が1人おりました。

「・・・そろそろ眠られてはいかがですか」

「どうしてだ」

「いつもならもう、眠りについておられる時間ですが？」

「なんでイラついてるんだ。兄上」

「・・・名前で呼んでくださいよ」

「イデイ兄上、これでいいか？」

「イデイって呼べって言うてるだろ！」

イデイは目の前で、してやったりという風に赤い目に笑みを浮かべてにやりと笑う

濃いオレンジ頭の青年の前で小さく舌打ちしました。

「クラムルード様」

返事はありません。

「クラムルード殿下！」

更にそっぽを向かれました……………。

「こんの……クラム!!!」

「なあ。イデイ、最近女のどこ通ってるってホント？」

クラム、と呼ばれてやっと顔を向けた赤い目をした濃いオレンジ頭の青年は、

イデイに直球を投げつけました。

んぐ!と変なうめき声を上げて、イデイの動きが止まります。

「最近ずっと夜になると結界強めて出かけてるじゃん?それってやつぱ女だろ」

「な、何を……。し、仕事に決まってるだろ!」

「嘘だ。だって仕事は俺の側近じゃん。何か他に密偵みたいな事もしてんの？」

それに、俺が最近夜更かししているとやけにイライラしてるし……。早く行かないと

会えないとか、そんな感じ?」

確かに、この王子の最近の夜更かしで万里子に会えない日が続いておりました。

万里子にバレてからは、眠る前にしか話せないようになってしまったので、あまりに

遅くなつた日は行けないのです。

万里子は眠っていたらイデイが行っても分からないかもしれません

が、イデイは
律儀に約束を守っておりました。
それを思い途端に苦々しい表情になったイデイを見て、クラムと呼ばれた青年は「図星だ」と呟きました。

「どんな女？会わせてよ」

「はあ？そんなの気にしないで、マリー様に気イ使えっの！」

「ヤだよ！あれがヤンテの姫なもんか！俺はぜってー認めねえ！」

大体、この尊大な王子の認める姫君なんて存在するのだろうか。そう思ったイデイが

小さくため息をつくとき、クラムはこんな言葉を呟きました。

「ヤンテの姫って、別に本物がいるんじゃないかな」

イデイの目がかすかに動揺した事に、クラムは果たして気付いたでしょうか……。

23・王子の疑問（後書き）

やっぱり全てはルヴェルの計算？（怖）
そして、赤い目の王子の登場です！

24・自分で蒔いた種

万里子の日常は、それはそれは穏やかに過ぎてゆきました。

最初は仕事に厳しいグリユーネの指導にへこみそうになりましたけれども、

自分の手で糸から生地にしあげていく作業に、万里子はすっかりのめりこんで

いきました。

グリユーネに止められなければ、食事や休憩も忘れるほどだったのでございます。

万里子の熱中ぶりを止めるのは、時々ルヴェルの仕事になりました。

「マール、またずっと生地を織っていたのかい？仕事熱心なのは良い事だけれど、

あまり無理してはいけないよ」

はっと振り向くと、ルヴェルが困ったように微笑みながら万里子を見下ろしておりました。

「すみません。また熱中していました」

苦笑する万里子は、室内の様子が少し違う事に驚きます。

もうすっかりヤンテの色もかげり、夜になろうとしておりました。

「おばあさまを助けてくれるのは良いが、私はマールが心配だな。サイナで無理をして

身体を壊しては、ジルに何と言われるか分からないよ」

「むくく。言わないでください。昨晚叱られたばかりなんです」

無意識の内に、万里子の手は両目の下に当てられました。

「?どうしたんだい?ジルに叱られるとは、穏やかではないね」

「昨日、余りに顔が疲れていると叱られたんです……。ルヴェルさんが無理をさせてるんじゃないかって」

「どれ。ちゃんと見せて」

ルヴェルが万里子の前に回りこみ、目の前に跪くと万里子の両頬に手を添えて、

窓から差し込む光に向けました。

万里子は目の下を押さえていた両手をとっさに隠そうとしますが、それもすっかり見られてしまいました。

ルヴェルがサイナの長だという事は、ここに越してから知った事でした。

万里子が接する相手は大体がグリユーネでしたが、それでもグリユーネの元に

手伝いに来る者や、仕事の依頼に来る者、衣を受け取りに来る者、とにかく毎日

結構な人数の来客がありましたので、必然的にグリユーネの孫であるルヴェルの

評判は万里子の耳にも入ってきておりました。

その華やかな容姿、人当たりの良い笑顔、優雅な物腰、優れた血筋・

・周りからの評判を

聞けば聞くほど、遠い人に感じられました。

華やかな容姿に落ち着いた優雅な物腰の彼は、きっと女性の憧れの的なのだろうと

予想はしておりましたが、その予想を遥かに上回る評判でしたので、自分のような者が

近づいてはいけないような、そんな罪悪感のようなものを感じて、すっと視線を外しますと、

「そんな寂しい事をするんじゃない。・・・私の行動をちゃんと見張っていないと、悪さをするかもしれないよ」

万里子の顔色を見る為に、少し角度をつけて眺めていたルヴェルが、そつと万里子の顔を正面に向かせます。

視線は少し外していたものの、顔はルヴェルの秀麗な顔と向かい合う形となり、益々いたたまれなくなりながらも、万里子は彼の「悪さをする」という言葉が気になりました。

「悪さって？」

「そつだね・・・口付け、とか？」

「・・・えっ」

慌てて視線をルヴェルに戻しますと、ルヴェルは口角を上げて笑いました。

が、彼には珍しい事に、その目は笑ってはおりませんでした。

「そつだ。そうやって、ちゃんと私を見張っていないと。目を離したら、いけない」

目の前で見詰め合った状態で、目は真剣なまま、万里子の両頬に手を添えたまま

親指だけでその柔らかな頬を軽くマッサージしました。

「こ、こんな時にそんな冗談を・・・」

「だと思っ？・・・今は、そついう事にしてあげよう」

今度は目にも笑みを浮かべると、「疲れた顔色をしているよ。治してあげる」と

万里子の手を引き、万里子の居住である馬車に連れてゆきました。

ルヴェルは自分の家である鳶の巨木へは万里子を連れて行く事はありませんでした。

万里子の性格から、恐れや緊張を招くと見透かしておりましたので、ルヴェルは

万里子の馬車を訪れる事が多かったので。

その所為か、万里子は、自分の空間にルヴェルが入って来る事に抵抗も戸惑いも

感じなくなっておりました。

「疲れには、サーネイバの葉がよく効くのだよ。さあ、目を閉じて」

寝台代わりにもなる大きなソファに万里子を横たわせると、水に浸した大きな葉を

千切り、万里子の閉じた両目に当ててゆきます。
爽やかな香りが漂い、万里子の身体から一瞬にして力が抜けていくのが分かりました。

「いつもいつも体中が緊張で固まってしまつまで仕事をしているなんて・・・」

君からは本当に、目が離せないね」

ルヴェルは、夜、仕事を終えてからも万里子が馬車で刺繍の練習をしている事も

知っていました。

サーネイバの葉の香りですつかり力の抜けた万里子の様子を確認すると、ルヴェルは

その傷だらけの指先に小さな口付けを落とし、細く小さな指にも薬草を塗り始めました。

「目を離すつもりも、元々無いけれどね」

サーネイバの葉の下、すうすうと穏やかな息遣いで眠る万里子の為、カーテンを引き

室内を薄暗くすると、ルヴェルはグリユーネの元へと向かいました。

「マールはとてもよくやってくれているわ。最初はなかなかあんなに上手くは

いかないものよ。それに単純作業だもの。よく飽きずに1日中やっているわ」

すっかり万里子が気に入ったグリユーネは、万里子を馬車で一休みさせてきたという

ルヴェルに対し、万里子の仕事振りを褒め称えました。

「まだ自分のペースをつかんでいないから、無理をしすぎないかが心配ですが・・・」

「あら。それはあなたの今の様子だと、うまい具合に止めてくれるでしょう」

「ええ。まあ」

否定せずに、微笑む孫に、思わず吹き出すグリユーネでしたが、すぐに心配そうな顔になりました。

「でもこれからもっと忙しくなるのに・・・」

「姫のお披露目式、ですか」

「そうよ。あちこちから依頼が来ていてねえ・・・。私はもう、引退したのに」

「おばあさまの腕が良いのは国中に知れ渡っておりますからね」

「嬉しい事だけれど、これ以上は受けられないわ。今は助手はマール1人ですからね。」

もうお披露目式に向けての注文は打ち切りましょう」

.....

その頃、宮殿では・・・

「で。クラム様、今日もまだ眠らないつもりですか？」

「俺はもう20歳だ！なんで毎日決まった時間に眠らなきゃいけない？ったく、

ガキじゃあるまいし」

また万里子の元へ行かせてもらえそうもない・・・と、毎日諦めるイデイではありません。

いつものイライラはどこへやら。にやにや笑う義兄に、クラム王子は嫌な予感がしました。

「では、マリー様と親交を深めたらどうです？今まだお部屋で寛いでおられるとか。お披露目式も近いですしね。仲良くなつていた方が良いですよ」

「俺は認めてない！なんでアレが姫だと皆言うんだ！・・・イデイ、段々意地が悪く

なってきたぞ。そんなに恋しい娘の元へ行けないのが悲しいのか？会わせてくれるなら、ちゃんと毎晩時間をやるのに！」

「ふん！会わせる約束をする位なら、ちよつと位我慢しますよ。クラム様は女性に優しくないのでからね。それより、お披露目式の準備をしてください。なんせ

“あの”姫をエスコートするのは王子、あなたなんですから」

先ほどからにやにやしていたのは、この所為だったようではございませぬ。

途端にクラムはその精悍な顔を歪ませました。

「大体！ヤンテの姫だってーんなら、なんで赤が嫌いなんだ、あの女！ー！おかげで

こつちも衣をアイツに合わせて新調しなきゃならないじゃないか！」

「赤が、お嫌い？」

「そうらしい！エスコート役をするなら、同じ色合いにしないと。ちっ、めんどくせえ！」

「新調するなら、やはりサイナのグリユーネ様に依頼されるのがよろしいかと思いますが」

「んー。だな。イディ、依頼してきてくれ！」

「はあ！？あなたの衣でしょう。しかも国内外のお偉方が集まる盛大な式です。

あなたにも一緒に行ってくださいます！」

会わせたくない人の元へ、王子を連れて・・・それは、イディが自分で蒔いた種。で、ございました。

25・嵐の前の静けさ

ヤンテの姫のお披露目式が盛大に開かれる事になったラウリナ国では、様々な事が、人が、動き出そうとしておりました。

まだ、万里子にその影響はありません。

強いて言えばグリユーネにお披露目式用の衣の依頼が舞い込み、その手伝いに追われるくらいでありました。

「グリユーネさん、この糸はこの色合いで大丈夫ですか？」

外の泉で染色の作業をしていた万里子が、両手にほんのり若草色の色づいた糸を抱えて作業部屋に入ってきました。

「ああ、ありがとう。綺麗に染まっているわね。マールはもう植物から色をもらう事が出来るようになったわね。私の一番の弟子だわ」

事実、今まで取っていた弟子はサイナの娘達とは言え、ここまで早く染色技術を得る事はできませんでしたので、グリユーネは心から万里子を褒めました。

「術が使えないと言ったけれど、サイナでないあなたが植物をこれだけ操れるのだからすごい事ですよ」

褒め言葉は続き、褒められた事のない万里子は嬉しいのですがとてもくすぐったく感じるのです。

その時。

胸の辺りが暖かく感じて、両手いっぱい抱えた糸の隙間から何やら光が漏れておりました。

急いで糸の束を作業部屋の隅にある竿に吊ると、光っていたのはジルから渡された

対話の鏡に反応するペンダントでした。

淡い水色の光を点滅させています。

「ジル殿が呼びのようなね。ちょうどいいから休憩に行ってきたさいな」

ジルはほぼ毎日、夕刻に対話の鏡越しに話し掛けてきましたが、日中に語りかけてくるなど

今まではありませんでした。

自身が忙しいというのもありますし、何より仕事を始めた万里子を気遣ってのことでありました。

何事かと、万里子も胸騒ぎがしましたのでグリューネの言葉に甘えることにしました。

万里子はあまり運動神経もよくありませんでしたから、馬車に飛び乗る時に肘を

したたかに打ち付けてしまいました。が、しびれるような痛さに少し顔をしかめただけで

急いで『対話の鏡』の前に座り込みました。

鏡には、既にジルが映っています。

「ジル、さん。待ちました？何かあったんですか？」

焦る万里子に対して、ジルはいたって普通にしておりました。

鏡の前に万里子が飛び込み、急いで座るまでの間、じっと万里子を見つめており・・・

「マール、手が・・・赤いですね。冷たそうです。衣が濡れているのはどうしてですか？」

やはり・・・仕事辛いのではないですか？今すぐにも迎えに・・・」

は、始まった・・・。万里子は心の中で苦笑しました。

万里子がサイナの街に引越し、鏡越しに話すようになってからというものの、

ジルの心配性は以前にも増して強くなったようでした。

それに気付いて以来、対話の鏡に座る前に必ず身だしなみを整えていたのですが

今日は急いでいたのでとてもそこまで準備はできませんでした。

「仕事は楽しいから大丈夫です。糸の染色も出来るようになったんです。それで

少し濡れてしまって・・・でも、あの、急いで来たからそのままです。

でも、とても楽しくやっていますから、本当に心配しないでください
いね」

慌てて言う万里子に、ジルは少しだけ寂しそうに微笑みました。

「急がせてしまいましたね。すみませんでした。実はあなたに大事な話があったのです」

「話、ですか？」

「ええ……。でも、直接会って話す事にします。今抱えている仕事が一番落したらそちらに伺います」

「えっ、私、本当に仕事楽しいですよ！ここで頑張りますよ？」

「わかっていますよ。残念ですが、今回は連れ戻すためではありません。せん。あなたに……。渡したいものがあるのです」

「あっ……。そうなんですか。お話というのは……」

「それも、その時に……」

「はぁ……」

急な呼び出しに慌てて来たわけですが、結局対話はそれで終わってしまいました。

「うーん……。近々、こちらに来る。って事、だよな？」

わざわざ会いに来る用事とは何だろう？万里子は一生懸命考えますが、何も思いつきませんでした。

「あ。仕事！」

来た時同様に、慌てて作業部屋に戻った万里子を出迎えてくれたのはルヴェルでした。

「あれ。ルヴェルさん、いらしてたんですか」

「うん。ちょうど休憩だそうだね。良かった。焼き菓子を持ってきたんだよ」

サイナの街でも相変わらずルヴェルの餌付け作戦は続いておりました。

困惑の表情から一転、万里子は満面の笑みを浮かべると、「お茶の用意をしますね」とキッチンに向かいました。

「ジルは何と？」

「よく分からないんです。大事な話があるって言ってて、でもそれは直接会って

話す。となつて、しかも渡す物があるって・・・」

「内容は？」

「それがさっぱり。結局聞けたのは、近々こちらに来るって事だけで」

「・・・そう。・・・気になるね」

「ジル殿がいらした時はお休みにしてあげるわよ」

「え！だって今とても忙しいのに・・・大丈夫です」

「いいのよ。今は注文も受け付けていないからこれ以上依頼が増え

る事はないわ。

この分だと、期日までには余裕で作れるでしょう」

「そう、ですか？ありがとうございます。でも最近高級な生地の依頼が多いんですね」

「盛大な式典が近いからね」

「？サイナで、ですか？」

「いや。王都のラウリナで、だよ。・・・ヤンテの姫のお披露目式があるんだ。

国内外の有力者が一堂に会するからね。その為の衣の注文だろう」

万里子の脳裏に、神殿で分かれた同姓同名の女の子の顔が浮かび上がりました。

お披露目式、という事は、彼女もこの世界から戻れずにずっとこちらの世界で

過ごしていたようです。

しかも、居場所が分からずに転々としてやっと仕事にありつけた自分とは違い、

マリコはやはり、姫として宮殿で暮らしているようでした。

ということとは、やはりあちらのマリコが本物で自分が偽者だったという事なのだろうか・・・と、これからの自分を思い不安になっておりますと、その思考はルヴェルによって遮断されました。

「ヤンテが現れてから、急激にこの国の自然は戻ろうとしている。隣国に接している

大きな部族の領地はあまり変わらないように見えるが・・・マール、

王都とその近くの
街が荒れていたのを知っているかい？」

「はい。神殿の外と、ジルさんのお屋敷までの道のりですけど・・・
緑は枯れていて
岩がむき出しでした」

「そう。それでこの国は一部荒れていたのだが・・・瞬間に緑が
復活してね。」

長い冬の間、地中で眠っていた作物も育っていて、早いものはもう
収穫できるそうだ」

「まあ！商店通りにも外国の商人がまた増えたと聞いたけれど、そ
のような

事情があつたのね。それでは・・・今回のお披露目式は大変な事にな
りそうね・・・」

グリユーネが少し心配そうに眉を顰めました。

「大変な事、ですか？」

「そう。このような早い復興は姫が現れてからだ。その姫を一目見
ようと、沢山の
要人が集まるだろう。そして、お近づきになりたいくてあの手この手
を使ってくるだろうね」

万里子はぶるり。と身を震わせました。

.....

それから何事もなく2日が過ぎ・・・また時間を忘れて生地織りに熱中していた
午後の事でございました。

「マール、また休憩を忘れているね？」

「あ！ルヴェルさん。もう休憩の時間ですか？」

クスクスと笑いながら、ほんのり甘い香りを漂わせている小振りのカゴを渡してくるルヴェルに、
万里子は「お茶用意しますので、奥で待っていてください」と告げてキッチンに向かいました。

その時

コンコンコン。とドアが叩かれました。

グリユーネの家に来客が多いのはいつもの事。ですが、衣の注文を一旦停止してからは
その数も随分減っております。

「はい？どなたでしょう？」

なにげなく万里子がドアを開けると、そこには・・・

「イデイさん！」

サイナの街に来てからというもの、現れなくなったイデイが万里子の目の前におりました。

「ま、マール！？なぜここに・・・」

驚きながらも、頬が緩むイデイに、万里子が「今こちらでお仕事を手伝わせてもらって

いるんです」と応えますと・・・

「おい。娘、さっさと中に入れる」

イデイの後方より、突然不躰な言葉が飛んできました。

そちらを見やると、そこには少し日に焼けた整った顔に赤い目が鋭い、濃いオレンジ色の

サラサラストレートの短い髪を暑そうにかき上げる青年がおりました。

万里子は、その偉そうな態度にむっとしながらも、身体をずらし入室を勧めると

背後からグリユーンの驚いた声が聞こえてまいりました。

「クラムルード殿下！？」

「で、殿下！？」殿下って事は、王子様って事？突然現れた偉そうな口調の青年が

本当に偉い人だったと知って、そのまま扉の前で慌てる万里子でありました。

その様子を鼻で笑うと、クラムは「そうだ、分かったら退け。娘」

と言い、入ろうとした時、
頭上に突然大きな影が通りました。

「なんだ？」

外に居たイデイが空を仰ぎます。

「あれは・・・ナハクのラブルだな」

頭上の大きな影は、巨大な白鷺のような鳥でした。

頭上を大きく旋回し、何度かまた万里子の上にも影を作りながら、
森の中へと

消えていきます。

何事かと奥から出てきたルヴェルも、突然の訪問客がクラム殿下だ
った事に、

片眉をあげました。

「更にラブルとはね」

「え？」

「ジルだよ。ジルが来たんだ」

静かな午後いつものお茶の風景が、一気に嵐の様相でございませす。

26・謎の招待状（前書き）

誤字発見！修正ついでに、説明が足りなかったかな？と思った部分を少し加筆しました。

話の大筋に変化はありません。

26・謎の招待状

グリユーネの住いは、数人の客人を迎えても問題の無い広さをして
おりましたが、

さすがに体格の良い青年がこつも集まると、少し手狭に感じました。

今、この部屋に居るのは、ルヴェルにジル、イディとクラムルード。
そしてグリユーネと万里子の6人でした。

6人がそれぞれにゆつたりと寛げるソファもあります。

手狭に感じるのは、それぞれのかもし出すオーラのようなもので・
・それぞれが

自己主張し、万里子は何だか押しつぶされそうな、そんな気分にな
っております。

私だけがなんだかこの場にそぐわない気がする・・・。

それぞれにお茶を出し、焼き菓子をすすめて、特にする事の無くな
った万里子は

隣の作業部屋に行つていようか・・・そう考えたのですが、隣に座る
人物にそれは
簡単に妨げられました。

「マール。久しぶりですね。やはり少し痩せたのではないですか？
指先が少し荒れている・・・。

本当にこちらで問題なく過ごしているのですか？」

ジルは周りの面々など目に入らないようで、万里子の手をそつと取
ると、心配そつに眉根を寄せました。

その光景を見る面々の反応はそれぞれで・・・

面白そうに見ているのはルヴェル、不機嫌そうに口を歪めたのはイデイ、驚きに目を見開いているのはグリユーネ。そしてクラムルードはと言いますと……

「ジル殿は……そんな表情もできるのか？」と、最初は驚いておりましたが、すぐに

「先に俺に挨拶すべきだろう！」と面白くなさそうに怒鳴りました。

「ああ。いらしたんですか。」

クラムルードに向き直ったジルは、一瞬の内に無表情に戻っておりました。

マールはその姿にハラハラしますが、他の面々にとってはこれこそが見慣れたジルの姿でございました。

「ヤンテの姫を迎える儀式の後にも宮殿に来なかったじゃないか。姫が心配ではなかったのか？」

「……あの人でしたら大丈夫でしょう？」

その突き放したような物言いに、クラムルードは眉をピクリと上げました。

だがしかし、確かに城に来た『姫』はすこぶる元気で。むしろ元気にすぎるようでしたので、

それには何も言わずに、「イデイ、戻ろう」と、クラムルードは踵を返しました。

それに驚いたのはイデイです。

「衣を注文しなくてもよろしいのですか!？」

その言葉に、クラムルードは少し振り返り、ちらりと万里子を見ました。

「グリユーン殿は腕が衰えたらしい。サイナでも何でもない娘に手
伝わせるなど・・・。

かつて、国一番だった腕を持っていながら情けない!」

そう言い捨てると、扉に向かって歩き出しました。

その時。

クラムルードの後頭部に、すこーん。と見事に何か当たりまし
た。

「なっ!!!」

クラムルードがものすごい勢いで振り返りますと、そこには顔を真
っ赤にしてこちらを

睨んでいる黒髪の少女がいました。

「娘、今何をした!」

何をしたも何も・・・万里子の手には、先ほどまで焼き菓子が入っ
ておりました小振りのカゴが

ありましたので、何をしたかは一目瞭然でした。

「おまつ!!!そ、それでこの俺を殴ったのか!？」

「グリユーネさんの腕は衰えてません！毎日とても素晴らしい衣を作り出しています！」

「な！！お前如きがこんな事をして許されると思っているのか！」

クラムルードの赤い目が、更に明るく燃えたような気がしましたが、万里子はひるむ事なくキツと睨み返しました。

クラムルードのサラサラのオレンジの髪が、彼の怒りに共鳴するようゆらりと。と
逆立ち、炎のようにも見えたその時。

ぷ。

あはははははははははは！！

その場にぞくぞくわぬ笑い声が聞こえてまいりました。

笑い声の主は、祖母であるグリユーネの傍に居たルヴェルでありました。

「今回は、殿下の負けですよ。マールは意外と勇ましいようだ」

そつと、守るようにグリユーネの丸い肩に置いていた大きな手はずし、万里子に

近づくと今度はそつと万里子の肩に手を置きました。

いつも万里子に安らぎを与えてくれるその大きな手は、こんな時に

もふうつと

万里子の気持ちを穏やかにしてくれるのです。

「俺の負けなワケが・・・！」

「負けですよ。見た目だけで判断するなど、お前の悪い癖が出た。グリユーネ殿は

この国の宝。その方に対していくら殿下とはいえ、今は失言だ」

イデイが、今にも燃え上がりそうだったクラムルードの頭をわしゃわしゃとかき混ぜ、

諭すように話すと、一瞬にしてその火は小さくなったようでした。

人前では敬語で話す事を心がけているイデイの、兄としての言葉に思う事もあったのが、

クラムルードは扉に向いていたつま先をまた逆に向け、グリユーネに近づくと

その小さな身体の前に片膝をつき、右手を胸に、左手を自身の背に回し、頭くちかをたれ

ラウリナ国の正式な礼をしました。

「あなたの・・・その才を疑い、傷つけようとしたのではない。グリユーネ殿・・・

式典まで近い。私の衣を作って欲しい。今日はその依頼に参った」

「ふふ。少しは大人になられたようですね。殿下。ですが、今の私の弟子を認めたら

その依頼を受ける事にしましょう」

「な！！それは・・・このちんちくりんの事が！？」

たれていた頭をさっと上げ、信じられないとでも言うように、声を

あげるクラムルードでしたが
驚いたのは万里子も一緒でした。確かにグリユーネの手伝いをして
はいましたが、
まだまだ見習いで、とても認めてもらえるような腕では無かったか
らです。

「あの！私はグリユーネさんの事を悪く言うのに怒っただけで、私
の事は別にどう言われても・
だって。確かにまだそんなにお手伝い出来てないし・・」

「ほら見ろ！俺の衣はグリユーネ殿だけで手がけて欲しい！」

ふと、クラムルードの目がグリユーネの後ろに注がれました。

そこには、染色されたばかりの瑞々しい果物を思わせるような鮮や
かなオレンジの
糸が置かれておりました。

「素晴らしい。グリユーネ殿。これ！これは、どこかの貴族の依頼
か？この色は

我が一族の色だ・・。こんなに濃く鮮やかな発色の橙はなかなか無
い。単なる貴族には

勿体ない。これが誰の注文だろうが、似合つのは俺以外ない！」

「それはマールが染色した糸ですよ」

「え？」

「マールを認めたら、今回の式典の衣も作って差し上げましょう」

「けど！グリユーネさん。今回はもうこれ以上依頼は受けない。と。」

「殿下直々の依頼は、無下に断れません。ですが、マール。あなたの手伝い無しには」

期日までには仕上げる事は出来ないでしょう。

ですから、マールを弟子として認めてくださる事。それが衣を作る条件です。

その糸は誰の注文の物でもありません。昨日染め上げたばかりの物。目にした

あなたの一族は、殿下以外おりません。ですが、殿下の一族の者が・
・カナムの誰かが見たら・
手に入れたくなるでしょうね」

それ程に、万里子の染めた糸は見事な橙でございました。

この色に魅入られたクラムルードは、渋々グリユーネの条件を飲む事にしました。

「わ、わかった！認める！だから・・・頼んだぞ！」

「認める」と言ったものの、その表情は苦虫を噛み潰したような表情でございました。

「お前のためではないぞ」

負け惜しみのようなクラムルードの言葉でしたが、

「え？・・・ああ。分かっていますよ」

ただグリユーネの腕でとびきりの衣を作ってもらいたいが為と知っ

ていたので、
万里子の反応は至って薄いものでございました。

「では殿下。こちらの糸で衣を？」

「いや。これは式典とは別でいずれ頼みたい。式典用には、黄で頼む」

「黄、でございますか？ヤンテの姫でしたら、赤。殿下のお色に合わせるのですしたら
橙では・・・」

「赤は嫌いだそうだ！黄が、姫の望みなのだ」

万里子の脳裏には、神殿で別れたあの女の子が浮かびました。
グリユーネの作った、黄色の衣を着るのか・・・友人にはなれそう
にないタイプでしたが、

同じ日本から呼ばれた万里子としては、やはりどのようにならして
いるのか気にはなるのです。

ですが、もう会う事は無いだろうな・・・そう思っていた時に、今ま
で黙ってなりゆきを

見守っていたジルから意外な申し出がありました。

「申し訳ありませんがグリユーネ殿・・・私からも衣をお願いしたいのですが」

「あら？ジル殿の物はもう承っておりますよ？」

「……私では無いのですよ。……マールのです」

皆の視線が、一斉にジルに向けられました。

「わ、私の??」

「マール。私は、君に渡したい物があると言いましたよね?それがこれです」

・
ジルのサツシユの内側から出されたものは、淡い橙の大判の封筒・

「招待状!!!」

声をあげたのはクラムルードでした。

「お前、どうしてこれを?」

そう聞かれても、万里子にはさっぱりわかりません。

これが何を示す物なのか、誰からの物なのかも、分からなかったのです。

ただ分かったのは、ジルが直々に持つてくる程に大切な物だと言う事でした。

「これは、何ですか?」

「……ヤンテの姫のお披露目式の、招待状です。しかも特別な物で、宮殿での

滞在が認められています」

「一体誰から!？」

横からクラムルードが、ひったくるように封筒を奪い取りました。

「マリーから……。お前、マリーを知っているのか？」

「マリーって……。誰ですか？」

「この世界に来た時に、サトウマリコと呼ばれていたヤンテの姫ですよ。今は

ご本人の希望で、マリー姫と呼ばれています」

もう会う事も無いだろうと思っていたあの子から……。

突然の展開についていけずに呆ける万里子に、ジルがクラムルードから奪い返した

封筒を握らせました。

中には、招待客全員に対して入っているであろう、日時が書かれたカードと、

特別な者に入っているという宮殿の滞在を許可すると書かれたもう一枚のカード。

それに……。この世界の物ではない文字で書かれたカードが……。それは、懐かしい

日本語でした。

文字の大きさがマチマチな、所謂ギャル文字に、(元)現役女子高生の万里子も

苦戦しましたが、なんとか文章が読み取れました。

そこには、

『これからのあなたとアタシのためにも、絶対に来てチヨードアイ』
と、書かれておりました。

27・男たちの思惑

万里子の頭の中は、真っ白でした。

マリコの言わんとする事が分かるような、分からないような、分かりたくないような・・・

とにかくとても混乱していたのでございます。

そのため、周りの喧騒は万里子の耳にはまったく聞こえませんでした。

はっと我にかえった時には、周りにはなぜか万里子が何色の衣を来て式典に行くのかについて、

ちよっとした論争になっておりました。

ジルは明るい水色が良いと言って聞きませんし、なぜかルヴェルまでもが瑞々しい新緑の緑が良いと

譲りませんでした。

イディに至っては・・・

「マールは黒髪に黒い瞳の持ち主だ。それに色がとても白い。容姿は俺の一族である

ムバクととても似ているから・・・こほん。濃紺が良いと思う！」

と、隣でクラムルドが思いっきり目を見開き、「正気か、兄上！」と目で訴えて

おりますのに、それには気がつく事もなく、論争に参加しておりました。

「濃紺は、マールの色白の肌を妖しげに輝かせる！」

「ふん。妖しくさせてどうする！マールは澄んだ水色がよく似合う」

「おや？水色は似合わない。と別の衣を毎日注文していたのではないか？マールは

好んで緑系を染色している。彼女の好みに合わせないと・・・」

「はん！どの色でも一緒だろう！」

いや・・・確かに妖しくなるのは嫌だ！！え。ジルさん・・・私には青は似合わないって言って・・・

えっと、緑系の染色が多いのは注文だからでえ〜。

自分を挟み繰り広げられる論争に、口を挟む余地はありませんでしたが、それは

万里子にとってはツッコミ甲斐のある会話でありました。

最後の発言に関しては、無視を決め込む事にしましたが・・・。

さて。このままでは、それぞれの色を寄せ集めた衣を着る事になるのではないか・・・

さすがにそれは嫌だと少し心配になった時でございました。

「殿方達・・・お静かに！」

いつもは柔らかく万里子を包み込むグリユーネの豊かな声が、この時ばかりは

巨木を揺らすほどに強く響き渡りました。

「失礼。・・・ここは、本人の意思が大切でしょう」

静かになった室内で、全員の視線が万里子に注がれます。

「あの・・・いつも赤やオレンジを勧めてくれるのに、それでは駄目なんですか？」

恐る恐る口に出しますと、ぷつと吹き出す者が一人・・・

「橙は王の一族、カナムの色だ！他の者が公式の場で着る事は出来ぬ！それに・・・

赤はヤンテの色。それもあって確かに庶民の間ではヤンテの力にあやかるうと

好んで着る者もいるらしいが、わざわざ本物のヤンテの姫の式典に着るなど・・・

お前、バカか！」

それはわざわざ見るまでもなく・・・クラムルードの言葉でございました。

更にクラムルードは見下すような視線で万里子の全身を眺めると、

「それに、お前に似合うとは思えん。どちらも高貴な色だぞ！」

この時、万里子はミルクをたっぷり入れたコーヒーのような・・・
と言えば多少は

良い表現だったかもしれませんが、要するにくすんだ茶色の衣を着ておりました。

デザインも、露出が少なく装飾も無い、それはそれはつましい物でありましたが、

万里子にとっては初めて自分で染めた記念の衣でございました。

勿論、初めての染色は失敗で、本来は淡いピンクになるはずだった

のですが・・・

それでも万里子は、グリユーネが「処分しましょう」と言ったのを断り、作業用にと

一番地味で動きやすいデザインの衣を作ったのでございます。

ですから、仕事中・・・特に泉での染色作業には、いつもは身につけているジルのペンダントも

父からの時計も、身につけてはおりませんでした。

これではみすばらしく見られても仕方の無い格好ではありましたが、ジルもルヴェルも

イデイもいつも通りに接してくれていたので、万里子はあまり気にせずに振舞っておりまして。

ですがクラムルードが、この衣を着た万里子をバカにしているの是一目瞭然でした。

改めて自分の格好のみすばらしさに気付き、万里子は唇をかみ締め、俯きました。

そんな万里子の様子を、クラムルードの暴言で傷ついたので思ったジルは

少し荒れた万里子の指先を、改めて握りました。

その仕草はとても優しいものでしたが、ジルの視線はクラムルードに冷たく向けられており、

発せられたその言葉は侮蔑が込められておりました。

「少し話が逸れてしまったようです。私の話はマールだけ居れば済む事。あなた方と

ここで話す必要は無い」

そう言うと、指を握っていた手を移動させ、万里子の両の二の腕を持つと抱えるようにして

立ち上がらせました。

「グリユーネ殿、今日は少しお休みを頂けませんか？少し疲れているようですので」

「ええ、ええ。勿論。最近は何日も返上してありましたもの。あなたにお願いするわ」

本当は、クラムルード殿下にはもっともつと言いたい事がありました。

だが・・・言つて何になる？「外」しか見ない、見ようとしないう人間に、何をこれ以上

言う必要がある？そう思い、ジルは飛び出しかけた言葉を飲み込み、万里子を連れて

部屋を出て行きました。

扉が閉まりかけるその時、チラリと見たのは赤い瞳の青年・・・その赤い瞳が

見逃した光の存在を、わざわざ教える程私は人が善いわけでもない・・・そう、ジルは心の中で呟きました。

「ジルさん。ごめんなさい。今日がいらっしやる日だと分かってたらもっとちゃんとした衣にしたのに・・・」

腕の中でしょんぼりしている少女を、ジルは困ったように見つめました。

「・・・そんな事を気にしていたのですか？その衣も素敵ですよ。あなたも最初に

染めたものでしょう？私は、王子のあの高慢な視線からあなたを助けたかったんです」

「ジルさんには、いつも助けられていますね」

「そういえば、この生地も染め上げた日に鏡越しに見せましたね。失敗したのに・・・」

そう思い出して小さく笑った万里子に、ジルはルヴェルの言葉を思い出しました。

『守るだけがお前の愛か？』

・・・彼はまた、自分の行動をそのように思うだろうか・・・でも、助きたい。

守りたいのだ。全てから・・・たとえば、それを彼女が望んでいなくても・・・。

本当に助けたいのは、自分の恋心なのだから。ジルは少し、自嘲気味に口角を上げ、眩しそうに万里子を見つめました。

その頃グリユーネの部屋では、やはりルヴェルがジルの事を過保護だと思っておりまして。

クラムルード殿下の頭に向かってカゴを振り上げたあの勢いが思えば、あれしきの言葉、

マールには乗り越えられたはずだ。と思っていたからでございませう。

ふと向かい側を見ますと、イデイが怒り心頭。といった具合でクラムルードを怒鳴りつけておりました。

「お前！さっきの言い草は何だ！見た目だけで判断するなどあれだけ……！」

「なんでさ？なんでアイツなんだ？」

「……何がだ」

「アイツだろう？兄上が会っているのは。どうかしてる！あの瞳は……！あ……」

しまった。というように口を手の平で覆うクラムルードの言葉と態度に、イディは一瞬で怒りが痛みに変わるのを感じました。

「瞳が、どうした？俺と同じ黒だが、それがどうした？」

「兄上と一緒にとか、そんな言い方はするな！違うだろう！アイツは髪も真っ黒だった。それに俺を殴るなど……」

失言を誤魔化すようにそっぽを向くクラムルードに、イディは静かな視線を向けました。

「お前はまだ宮殿の中と、出入りする貴族の事しか知らない。ちやほやされて育った

お前には、「内」は見えないか？だけどいつかお前も分かる……でも……分からなくても俺は構わない」

大きな手でくしゃくしゃとクラムルードの髪をかき回すイディのその態度は、いつもの

兄でしたが、その口調は少し苦しいでもありました。

28・意外な訪問者

「兄上。また今日もアイツのどこに行くのか？」

寝台に勢いよく後ろ向きに倒れこんだクラムルードが、そわそわし始めたイディに向かって訪ねました。

ここは宮殿のクラムルードの私室で、グリユーネに式典の衣を注文しにサイナの街に行ってから、数日経っておりました。

「また。つて……結局いつも行けないだろう！」

あからさまに機嫌が悪くなる兄を、クラムルードは不思議そうに見上げました。

「なあ。兄上、なんでアイツなんだ？」

「は？」

ごろり。と寝台の上で反転し、うつぶせになると組んだ腕の上に形よく尖った顎を乗せました。

その様子にイディは、コイツ……なんだかんだ言っただけまだ寝ないつもりだな。と、

本日の訪問も半ば諦め、椅子を引きずってきてクラムルードの前に座り、クラムルードの

話につき合う事にしました。

が、すぐに後悔する事になります。

「あの娘、別に綺麗でも無いじゃん？つか、むしろ全然綺麗じゃない。みすばらしい格好してたし、怒りっぽくて手が早いぞ！背だつて小さいし、いくつなんだ？身体に凹凸が少くないか！？いや…胸は大きかったかな。でもくびれは無かつたぞ。兄上、あんなのが趣味なのか？」

「話に付き合おうなんて、思うんじゃなかつた…。お前なあ。なんでそんなに女に敵意を持つ？マールだけじゃない。お前宮殿の女にも敵しいじゃないか。専属の女官もつけないし」

「女は……面倒だ。汚いし」

「……まだ、根に持っているのか」

「……まだ。なんて言えるほど、過去じゃないだろ」

「義母上が亡くなったのは、もう随分前だ……」

イデイが瞳を、軽く閉じました。何かを思い出すように……思い出すが、怖いように……それは自分に母の愛を与えてくれた存在…王の正妃であり、クラムの実母の優しい微笑みでした。

「母上の死後に父上に取り入って後釜に入ろうとする者がどれだけ多かつたか！」

それは同時に、クラムの義母になるという事。父王に媚びる傍ら、クラムを手懐けようと近づいてきた女達……。思い出し、ぶるり。と肩を震わせると、クラムルードは未だ目を閉じたままの兄を見上げました。

「母上が亡くなったのは随分昔だ。俺はまだ幼くて、差し伸べられる女達の手の

優しさが……本物が偽者かの区別がつかなかった。今は分かるけどな。

でも、父上に取り入ろうとする女は今だって居る。そんな…過去の話じゃない」

イデイが、閉じていた目を開き、藍の左目でクラムルードをじっと見つめました。

「マールも同じだと？お前に取り入ろうとしたと？」

「……女は信用できない！」

そう言つて、今度はクラムルードが顔を伏せてしまいました。

「明晩から、暇をやる」

「は？」

イデイは、話の流れが急に変わった事に驚き、少し左目を見開きました。

「アイツのここに行ってもいいぞ。今日はもう遅いんだろう」

「どうした？急に」

「交換条件がある。その代わりに、昼の書類仕事を代わってくれ」

「俺と違ってお前が働くのは昼だけだろう！それじゃ堂々とサボるってだけの話だろうが！」

「式典まででいいから！」

「式典まで？」

「確かめたい事がある」

「何を？」

「まだ、言えない」

何か面白い事を思いついたかのようにクラムルードの赤い瞳はキラキラと輝いて

おりました。

頬が緩んでいるところを見ますと、余程楽しい事を思いついたのでしよう。

ヤンテが復活してからというもの、仕事も倍増してなかなか忙しい日々を

送ってありましたので、このようなクラムルードの表情を見るのはイディモ

久しぶりでした。

側近としては、仕事をサボらせるわけにはいかない。だが、兄としては弟の頼みを聞いてやりたい。男としては……マールに会いたい。結果、イデイが出した答えは
勿論……

「……わかった。式典まで。だぞ！」

式典までの十八夜、万里子に会いに行く事を選んだのでございます。昼の書類仕事はクラムルード専用の書齋で行われ、同席するのはイデイのみでした。仕事の間は緊急時以外は誰も立ち入りませんので、時々代わりを務める事もございました。それが今回は少し期間が長いだけ……誰にも影響は無いだろうと思つての事でありました。

ですが、影響はあつたのでございます。

それは代理仕事が行われていた宮殿ではなく、遠く離れたサイナの街で……。

「また来たんですか？」

パチリ。と小枝を踏む音がして、泉の淵に腰掛け染色中だった万里子が振り向きますと、そこには腕を組んで偉そうに見下ろすクラムルードの姿がありました。

「別にお前に会いに来たわけではない」

「それは知ってますけど……」

「グリユーネ殿の腕は確かだが、今回のような国をあげての盛大な式典は久しぶりなのだ。

ヤンテが消えてた頃は昼が無かったからな」

「…だから？」

「グリユーネ殿が式典用の正装を作るのは久しぶりなのだ。だからこうして時々様子を…」

「あなたって本当に失礼！ならグリユーネさんの作業部屋に行けばいいじゃないですか！」

これ以上注文は受けないと言っていたグリユーネが、殿下の注文は断れないと言い、

毎日無理をしているのを傍で見ている万里子でしたので、未だグリユーネの腕を

疑うような発言は許せませんでした。

「ここに来る前に、もう見た。まあ、なかなか順調なようだ」

「当たり前です！」

肩を怒らせながら、両腕を泉に突っ込み、手にした糸の束をじゃぶじゃぶと洗っている万里子は、

今日もみずぼらしい格好をしておりました。

色は初めて会った時のくすんだ茶色ではなく、少し明るいクリーム色でしたが、それでも

何の装飾もないシンプルなデザインの衣は、動きやすそうではありましたが、宮殿の

一番身分が下の掃除婦達だってこんな格好はしません。

このようなみすばらしい格好の娘にこんな態度を取られるなど、クラムルードには

考えられない事でした。

クラムルードがこの国の王子だと知っても、目の前の娘の態度も口調も変わりませんでした。

最初は少し遠慮していたようだったのですが、クラムルードを殴つてからというもの、

なんだか吹っ切れたように、無礼極まりない態度で接します。

普段なら怒っているところですが……この娘は、クラムルードが一番嫌う事をしませんでした。

それは、独身となった父王に近寄る女達が揃って行う『女』を武器にした行動でした。

クラムルードが成長してからは、父王だけではなくクラムルード本人に狙いをつける

女もありました。狙いが変わっても、取る行動は同じ……過度な露出に、媚びた口調、

派手な化粧に甘ったるい香油、ねっとり絡みつく腕に、意識的に押し付けられる胸……

思い出すだけでも寒気がする！ぶるり。と肩を震わせ、激しく頭を振ったクラムルードを、

先ほどまで肩を怒らせていた万里子が、心配そうに声をかけてきました。

「寒いんですか？」

今日は少し風が強く、ヤンテの光もいつもより弱い為、巨木に囲まれた森には
日が差さず、万里子も今日の泉の畔は少し肌寒いように感じておりました。

「いや……そうではない」

そっけなく出迎えたかと思えば、すぐに怒る。怒っていたかと思えば、心配そうな表情で問いかける……なんなのだ。この娘は……思わず首を捻ります。クラムルードには、万里子の反応がいちいち予想を裏切りとても新鮮に映りました。

と同時に、意外すぎる行動が理解できず、少しイライラするのでした。

万里子は今度、「そうではない」という言葉を受け、「あ。そうですか」とまたそっけない

態度に戻り、また泉に糸を突っ込み作業を続けました。

「俺がわざわざ姿を見せたというのに、何かもっところ……ないのか？」

「はあ……王子という職業は思ったよりもお暇なのですね。って事くらいでしょうか……」

「俺は忙しい！今は、兄上に仕事を代わってもらっているだけだ。本来は、このような事をしている暇など無い！」

今度は万里子が首を捻る番でした。勝手に来ておいてこの言い草……

それこそ私に
どうしろと言っんだ。

「お仕事を代わってもらってまで、どうしてここに？」

「まさかお前、自分に会いに来たなどと考えないだろうな！」

「それは無いですけども」

万里子には小さく、ちっ。と舌打ちが聞こえた気がしましたが、きつと気のせいだったのだろうと
気にしない事にしました。

目の前で相変わらず偉そうに腕組みをしているクラムルードは舌打ちしても

おかしくない程に苦々しい表情をしておりましたが、今の会話で彼が舌打ちする

理由がありません。そう万里子は思ったのでございます。

「……今は式典の準備の方が大切なのだ。俺は衣の様子を見に来ているだけだ」

「ですから…それはグリユーネさんが作っている最中です。私が今染めているのは
あなたのじゃありません！」

ほら！と、万里子は勢いよく泉から糸の束を持ち上げ、手にした糸をクラムルードに見せようとしました。

ですが、泉の水を含んだ糸はずっしりと重く、勢いよく持ち上げた

万里子の腕が

一瞬抵抗感を覚えました。

「あ」

重い……！そう思った時には既に遅く……万里子の身体は糸を抱えたまま、泉に向かって大きく傾きました。

「何をしている！」

落ちる！そう覚悟したその時、万里子のおなかに力強い腕が回り、泉に向いていた視界が一気に巨木の青々とした枝に変わりました。

「……あ」

気がついた時には、万里子は背中からクラムルドに抱えられ、草の上に仰向けになっ
ておりました。どうやら今自分の下敷きになっている彼が、泉に落ちそうになっていたところを助けてくれたようでした。

「あの……ありがとうございます……すみませんでした！」

自分が思いつきり体重を預けている事に気がつき、慌ててクラムルドの腕を解き離れる万里子に、クラムルドは「危ないだろう！気をつけ……」と怒鳴りかけ、

突然沈黙しました。

「…えつと。すみませんでした?」

突然の沈黙と、一瞬で表情が固まったクラムルードが、万里子には不思議で仕方がありませんでした。

首を傾げていると、背後からふわりと大きなストールを巻きつけられました。

「!!ルヴェルさん!」

「そんなに濡れた衣を着ていては、風邪を引いてしまうよ」

万里子がふと自分の身体を見ると、衣の前面がびしょ濡れでした。

泉には落ちませんでしたでしたが、水を含んだ糸を胸に抱えていたのが原因でした。

「クラムルード殿下。おばあさまが衣を合わせたいと言っておりましたので

作業部屋へどうぞ。マール、君は着替えた方がいいね」

万里子から取り上げた濡れた糸束を畔に置いたままのカゴに入れると、更にきつく

ストールを万里子の身体に巻きつけ、万里子を馬車に連れて行くこととします。

その少し強引な仕草に驚きながらも、万里子は振り返りながらクラムルードに向かって

「ありがとうございます」と叫びました。

果たして、その言葉がクラムルードの耳に入っていたかは定かではありません。

何しろ彼はとても混乱しておりました。

「なぜ……あの娘の身体の中に石があるのだ？」

誰もいなくなつた泉の畔に、クラムルードの眩きだけが残りました。

29・老婆の愉しみ

肩からかけられた大判のストールは、少しきつく感じる位にぐるぐると巻きつけられて

おりましたので、腕も固定された状態で、万里子はルヴェルにされるがまま……

抱えられるようにして、ぐいぐいと押される勢いのまま小走りするしかありませんでした。

馬車の入り口が近づき、やっとその拘束が解かれるとほっとしたのもつかの間、

ルヴェルは突然方向転換し、馬車を避けるように更に森の奥へと入って行きます。

「あ、あれ？ルヴェルさん、どこへ？」

「私の家だよ」

「あの。着替えなら私の家にありますけどっ……」

「知ってるよ」

言葉とは裏腹に、ルヴェルの歩く速度は変わりません。どんどん馬車は遠ざかっていきます。

元々運動が苦手だった万里子は、ルヴェルの歩調に合わせてずっと小走りでしたので

とうとう息が上がってしまいました。

ルヴェルの行動の意味は分かりませんが、話すと益々息が切れるので万里子は

ルヴェルが立ち止まるまで、何も言わずにおこつと思いました。

.....

「どうなさいました？」

目にも鮮やかな黄色い衣に袖を通そうとしていたクラムルードは、突然その手の動きを止めました。

「あら。着づらいかしら……思ったよりも肩幅がおりだから、少し直したのだけれど……」

あの小さかった殿下がねえ……。殿下、殿下？」

いつまで経っても手を動かさないクラムルードの肩から、滑らかな手触りの高級素材の衣が滑り落ちかけました。

「もう！殿下！……マールと、何があったのです？」

グリユーネが、マールの名を強調するように言いますと、固まっていたクラムルードはしっかりとその名に反応しました。

「ちがつ！……こほん。俺は……その……衣の様子を、だな」

「でしたら、ちゃんと着てくださいまし！」

ぐい！と、落ちかけた衣を引っ張り上げ、テキパキと着せるグリユーネの口調は厳しいものでしたがその表情はなんだか嬉しそうでした。

「な、なぜ、笑って、いる…っのだ？」

グリユーネに腰のサツシユを引っ張られ、襟元を絞められ、袖を引っ張られ……

体勢が崩れる事はありませんでしたが、意外なほど力強いその動きに圧倒され、

言葉が途切れ途切れになりながらも、クラムルドはグリユーネのその笑みが不思議でグリユーネに問いました。

「殿下。毎日いらしても、衣はそんなに変わりませんのよ。さ、出来た。昨日と

何か変わってらして？」

「…肩が、楽になった」

「そうですね、それ位でしょう？」

「裾が少し長く…になった？」

「直してませんわ。それで充分です。それ以上長くしては、サツシユの刺繍が隠れます」

「…グリユーネ、何が言いたい？」

「衣のサイズ合わせはこれで充分。もう殆ど出来たようなものですわ。毎日いらっしやる

必要などないのです。あの子に……会いにいらしてるのでしょうか？」

「違う！だから…なぜそんなに楽しそうなんだ！」

「宮殿の衣装長を辞してから久しいですが、そのような殿下の姿を見るのは初めてです。

嬉しいのですよ。そうですね……長く生きておりますが、わたくし私が生きてきて

2番目に楽しい事ですわ」

「2番目？2番は面白くない。1番ではないのか？」

「そうですね…わたくし私、孫臯わたくし貞ですの」

「孫？ルヴェルか？」

「これ以上は言えませんわ。フェアじゃありませんもの」

グリユーネは可愛らしく口の前でxを作り、更に笑みを深くしました。

クラムルドは追求しようとしたのですが、「あら。動いてはシワが出来ます。すぐに脱いで。

仕上げにかかりますの」と、着せられた時同様、あっちこちを引っ張られて

渾身の力で脱がされにかけ、遂には作業の邪魔だと早々に追い出されてしまったのでした。

クラムルードが出て行った扉と、反対の扉は染色に使う泉に行くためのものでした。

少し前、ルヴェルがこの部屋に居た時に、彼は2人の様子を窓から見ておりました。

勿論、濡れた糸の束を抱えたまま、泉に落ちそうになったマールの事も……。

いつも笑顔で、優雅な物腰のルヴェルが、血相を変えて椅子にかけてあった

グリユーネのストールを掴み上げ、そのままものすごい勢いで外に飛び出して行きました。

ルヴェルはいつも笑顔で人当たりが良いけれど、人の為に動く事は無く、常に

冷静に…冷たすぎると感じる程に、自分と一族の為に動く男でした。

それが祖母であるグリユーネには少し寂しかったのです。

でも今日のルヴェルの姿を見て、グリユーネは、損得勘定ではなく動ける相手を

ルヴェルがやっと見つけたのだ…と、嬉しく思ったのでした。

「やっぱり私は、王族より家族が大切ねえ…」

そう呟くと、グリユーネは徐おもむろに扉を開け、出て行ったばかりのクラムルードの背に話し掛けました。

「殿下。若い娘達の間で、おなかを出したり透けさせるデザインの衣が流行してる

らしいですわ。ご存知だったかしら？」

「…いや…?」

突然何を言い出すのか…クラムルードは、そんな表情をしておりました。

「あら。宮殿にいらっしやるヤンテの姫が発信源だと聞いておりますわよ。そうそう…」

彼女を真似て、お臍に石をつけるのが流行っているのですって。それを見せるのが
目的のデザインなのですわ」

「そ、そうなのか?」

「あら。本当に女人には詳しくないのですね」

「…興味が無いだけだ。…では、戻る」

そう呟いたクラムルードのその瞳には、ほっとしたような…少し残念そうな、そんな
複雑な色を宿しておりました。

供も連れずに毎日ふらりとやって来るこの国の王子の後姿を見送りながら、グリユーネは
少しは時間が稼げるかしらね…と、考えておりました。

その頃、マールはそれはそれは巨大なルヴェルの巨木（屋敷）の
室に

連れ込まれておりました。

連れ込まれたその部屋は、どれ位階段をのぼったか、どの位の扉を
くぐったのか、

途中で数えるのを諦めたくらいに、屋敷の奥へ奥へ、上へ上へと進
んだ先の、

明るい色調の小部屋でした。

突然視界が明るくなり、思わず万里子は目を閉じました。

そっと、目を開けると……

そこには、若草色の美しい衣がありました。露出の少ないシンプル
な形ですが

たつぷりとしたプリーツのロングスカートは裾に美しい刺繍があり、
片方の肩から流れる

共布が胸元を覆い、大きめに開いた胸元を隠すようなデザインにな
っており、

それは腰の淡いピンクの大きなドライフラワーで留められておりま
した。

「これは……？」

美しい衣に、うっとりと思湧れ、ため息のような声を万里子が出し
ますと、ルヴェルは

万里子の手を取り、衣に触れさせながら「君のだよ」と言いました。

「え！？あの。着替えるって、まさかこれにですか！？」

前面がずぶ濡れで、今や巻き付けられているストールにもその水が

滲んでしまっている……その自身の姿を見下ろし、とんでもない！
という風に万里子はぶんぶんと
頭を振りました。

「今じゃない。これは式典用に作ったんだ。……まだ、行くか迷っているのだろうか？」

式典、と口にした時に、一瞬万里子の表情が曇った事を、ルヴェルは見逃しませんでした。

「まあ、ひとまず今はこちらに着替えてくれ。本当に風邪をひいてしまう」と

改めてルヴェルが差し出した衣も、とても肌触りが良くすぐに高級品と分かったため、
万里子は躊躇しましたが……

「透けているんだ。お臍の、石がね」

ルヴェルの拘束が無くなり、少し緩めに巻きなおしたストールの間から、濡れた腹部が見え、
生地が濡れて肌にぴったりと張り付き、そこから確にお臍の石が透けておりました。

万里子は慌ててきつくストールを巻きなおし、差し出された衣を大人しく受け取り、
用意された小部屋で慌てて着替えました。

「あの…お見苦しいものを…ごめんなさい」

おずおずと出てきた万里子に、ルヴェルは面白そうに目を細め、「
目の保養になったよ。」

でも、殿下には勿体無いからね」と言い、万里子の気分を和ませま

した。

「さて、マール。でもこちらに連れてきたのは、着替えの為だけではないんだ。

勿論、この若草色の衣を見せる為でも無い」

「え？」

「君が宮殿の姫からもらったという、招待状があったね？」

「はい……。あの、それが何か？」

「調べたんだが……式典に、君の席は用意されていないんだ」

「……え？」

招待されたのに、席が無い……これは一体どういう事なのか……しかも、添えられた

メモには日本語で「必ず来て」とありました。

あのメモを、他の人間が書けるはずがありません。

では、『宮殿のマリコ』の目的とは一体何なのでしょう……。

30・マリー姫の噂

夜、ヤンテの光はいつもよりもその光を弱めておりました。

ただでさえ巨木に囲まれているこのサイナの長老の森は、そのわずかな光を遮り

深い、深い闇に包まれておりました。

いつもであれば、仕事の疲れもあり、ルヴェルにもらう薬草茶を飲むとすぐに

眠りにつけたのに……今日はいつまで経っても眠れませんでした。

そんな万里子の手には、宮殿のマリコからの招待状が握られておりました。

自宅にしている馬車に戻った後すぐに、引き出しから取り出して、もう既に何度も見た

その招待状を、まるで読み落としがあったのではないかと調べるように、封筒の

裏までも確認しました。

が、既に頭に入っている情報しか、書かれてはおりませんでした。

「差出人の名前があるだけの封筒に、カードが3枚……か。ほんとうに、行ってもいいのかな」

もう何度も見たカードに、また視線を走らせた時、万里子はふっと森が静かになり、

闇が濃くなったように感じました。この感覚には覚えがありましたので、万里子は

寝台から起き上がり、腕時計を置いてある窓際のテーブルに向きましました。

視線の先で、カチリと小さな音をたて時計の蓋はゆっくり開き、何

度が見た細い

藍色の煙がすうっと室内に出てくる様を見守りました。
どンドン、煙が一箇所に集まり人の形を作っていきます。

「イデイさん、こんばんは」

万里子が声をかけた時、人の形を作った煙は、イデイに姿を変えました。

自分を待ち構えていたかのように寝台に座りこちらを見ている万里子に目を留めると、

イデイは万里子に近づき、「こら。まだ起きていたのか？」と万里子の頭をくしゃっと撫でました。

その口調は夜更かしを咎めるものでしたが、イデイの目は嬉しそうに微笑んでおり、

久しぶりに『起きている状態の万里子』と会えた事が、嬉しいようでした。

最も、当の万里子はそのような微妙な表情の変化に気付かず、咎められた事に対し、

「明日はお休みなんです」と言い訳しながら少し口を尖らせておりました。

イデイがクラムルードの書類仕事を代理をし始めクラムルードが日中万里子の前に

現れるようになった時から、クラムルードとの約束で夜は自由時間となったイデイは

毎晩万里子の元へ訪れておりました。

専ら夢の中に入り込み、万里子と様々な話をして夜を過ごしていたのですが、

夢の中の万里子は、本人には違いありませんが、体温がなく人形のような為、

こうして生身の万里子に会うのは久しぶりでした。

「手にしているのは……例の招待状か？」

寝台の端、万里子の隣に腰を下ろしたイディは、万里子から招待状を受け取り

先程までの万里子と同じように、隅から隅までチェックしました。

「なぜこれを読んでいた？出席するんだらう？」

「それが……ルヴェルさんが、式典にあたしの席は用意されていないって言うんです」

「なんだと？」

イディも初めて知ったようで、出ている左目を見開きました。

今では万里子も、イディが継承権は無いけれども王族の一員である事は知っておりましたから、

イディが知らない事に驚き、今日、ルヴェルから聞いた事を話しました。

ルヴェルが式典の席表を手に入れて見せてくれた事、そこには確かに万里子の席が

無かった事……心配したグリューネに、元宮殿勤めで今回も王族の殆どの衣装を

手がけているという事もあり、グリューネのお供という形で一緒に行く事を

勧められた事……

話していると、イディの表情がどんどん硬くなっていくのが、さす

がの万里子でも
分かりました。

イディは、横に座る万里子が自分を心配そうに見ている事に気付くと、苦笑しましよた。

「ルヴェル殿はさすがと云うか……あの人の事だから、きっと宮殿の女官にうまい事を言って入手したんだろーな」

「あ…、ハイ。そう言っていました。あつ、ナイシヨって言っていましたけど…」

口籠る万里子の頭を、イディは少し表情を柔らかくして「わかってる」とまたくしゃくしゃ撫でました。

「マールは、俺を信用して話してくれたんだろ？ルヴェル殿との約束を破ろうとした

わけでも無い。でも、不安なんだろ？俺は勿論口外しない。何でも吐き出していい。

伊達に、今まで色んな話をしたわけじゃない。俺にしか言えない事だつてあるだろ？」

万里子はイディの言葉に泣きそうになりました。

この世界に来て、沢山の人達と知り合いましたし、万里子を好意的に受け入れてくれる

人も少なくありませんでした。

ですが、その中でも万里子が異世界からやって来た事を知っているのは、最初その場に

居合わせたジルと、夢の中で元の世界の話をしたイディだけでした。ルヴェルやグリユーネにも気付かれているかもしれませんが、改めて打ち明ける事は

していなかったので、不安な気持ちの今、目の前にいるのがイディだという事が有難くて仕方ありませんでした。

「マール、これは何て書いてあるんだ？」

イディが万里子に見せたのは、日本語で書かれたカードでした。

「えっと、『これからのあんたとアタシのためにも、絶対に来てチヨーダイ』って書いてあります」

すると、イディはその端正な顔を少し歪ませました。

「マール……マリーには気をつけてくれ」

「えっ？」

まさか、そのような言葉が出てくるとは思っておりませんでしたので、万里子は思わず素っ頓狂な声をあげてしまいました。

「実は、マリー付きの女官達が、この短い間で5人辞めている」

「はあ……」

万里子は、神殿で自分を「専用のメイドにしる」と言ったマリコを思い出しました。

気の強そうな彼女でしたので、何人かの女官と上手くいかなかったのかも……と、

そう考えましたが、それがなぜ「気をつける」に繋がるのかが分か

らず首を捻りました。

「まさか…この招待状は、私をその…専属の女官にするための物なんでしょうか？」

「いや。違うと思う。式典の招待状があるのに、なぜ席が無いのかは分からないが、この滞在許可のカードを見ると、賓客扱いになっているから、それは安心していい」

「じゃあ…気をつけろって、何をですか？」

先にその話題を出したのはイディでしたが、彼はこの期に及んで言葉にする事を少し躊躇しているようでした。

「私、何か彼女を怒らせてしまって、狙われてる。とか？」

「いや。違う…と、言いたいところだが、正直、確信は…無い…。こんな事がなけりゃ、

マールには聞かせたくない話なんだが…仕方ない。これを聞いてもあまり不安に思わないで欲しいんだ。まだ噂の域を出ていないから」

そう言われて、「はい、ソーデスカ」とすんなり聞ける人間が果たしているでしょうか…。

当然、万里子は益々緊張し不安感が募っております。

そんな万里子を落ち着かせるように、イディは万里子の両手をぎゅ

つと握りました。
そして、衝撃的な言葉を落とします。

「実は、その5人は『気がふれた』とされてるんだ。すぐに宮殿からも去ったから
何があつてそうなったのか、医師団にしか分からないが、医師団の言葉も曖昧でな」

あまりに想像を超える言葉に、万里子は言葉を返す事が出来ませんでした。

一体、女官が「気がふれる」ほどの何を、マリコがしたと言つのでしよう。

詳しい話が分からないまま、マリコの個人的な招待を受ける事は、不安を超えて
恐怖になってしまいそうでした。

「あの。正直…行きたくないんですけど」

「気持ちは、分かる。けど、マリーの言う『これからのお互いのため』も、気になるだろ？」

ルヴェル殿がこの話までもを知っているか分からないが、彼の言葉に甘えた方が
いいだろうな…。

俺は殿下についてなきゃいけないから日中は動けないし、ジル殿は式典に神官長として

出席する為、もう準備の為に王都に入っている。ルヴェル殿も、サイナの長として

先に王都に入るはずだ。そうなると、グリユーネ殿と一緒に来るのが一番安全だし、

お供という事なら宮殿の部屋もグリユーネ殿と同室か隣室をあてが

われるはずだ」

そう言うと、イディは立ち上がりました。

「益々不安になったよな。悪い。でも、隠しておいて何かあっちゃ俺も嫌だからな…。」

正直に話して、警戒心を持ってもらった方がいいと思ったんだ。と言っても情報が少ないが…俺も、調べてみるよ。これでも一応、王子って立場だからな」

冗談ばく言うと、イディは真面目な表情になって座ったままの万里子の前に
跪きました。

「お前の為なら、呪われた王子って言われても、この立場を利用して情報を集め、
そしてお前を守ってやる」

万里子はその『呪われた王子』という不穏な言葉に反応し、聞き返そうとしたその時には、
もうイディは藍色の煙となり、時計に吸い込まれていくところでした。

31・笑顔の仮面 sideルヴェル（前書き）

ルヴェル視点でのお話なので、一人称になっています。

追記：8/10気になった部分加筆しました。

31・笑顔の仮面 s i d e l u ヲ エ ル

「悪いね」

「ここだ。」

女の目をじっと見つめゆっくりそのまま瞬きをする。そして、にっこりと笑う。

「いいえ！何でもない事ですわ。ルヴェル様のお仕事に必要な物ですもの」

女は顔を上気させ、見上げてくる。こんなに小柄な女だったか…？名は……

ああ、思い出せない。

手に入れたのは、ヤンテの姫お披露目式典の席表。

容易い事だ。手に入れる為の相手を見極め、親しげに近づき、ワザと人前で特別に扱い、機会を見計らって2人きりになり効果的なタイミングで微笑む。

小さく折りたたまれた紙を、マントの内側のポケットに仕舞いこむ。

「もう、行ってしまいますの？」

その様子を見て、名も思い出せない女が拗ねたように尋ねてきた。今度はすまなそうに微笑むと、女は「いいんですの…お忙しいのですものね。今宵は私わたくしの為だけに来てくださったのですもの。それだけで充分ですわ」

自分に言い聞かせるように言いながら引き下がった。

笑顔は、武器でもあれば盾でもある。

いつからだったか…こんな、生き方をするようになったのは…。

- - - - -

あれは17年前…私は11歳になったばかりだった。

その頃は、まだ計算などなく、無邪気に笑っていたような気がする。

サイナの長でもある厳しい父と、明るく強かった母、そして2人の弟と1人の妹と…

騒がしくもとても楽しく、気楽に暮らしていた。

父の教育は厳しかったが、楽しかった。例えば、それは子供に対してのものだったのだろう。

突然1人になったあの日、『生きる術すべ』を、私は何も知らなかったのだから…。

あの日、ヤンテが突然姿を消した。

ジルの祖父であり、当時のナハクの長でもあったスルグ殿がずっと警告しており、彼の熱意に押されて亡き祖父が共同で温室を開発したが、まさかその警告が現実のものになるとは思わなかった。

突然暗闇になった時、私は1人だった……。

両親は仕事で王都に出向いており、日帰りできる用事ではない為、数人の召使と

幼い弟達を連れて行っていた。

予定では、この日に帰る予定だった。だが…帰っては来なかった。盗賊に襲われたのだ。突然の暗闇……街という街は混乱し、王都でさえも殺人や

強盗、人攫いなど、考えつく限りの事件が起こった。

夜目の利くムバクや、盗賊達以外は右往左往するばかりで、あつという間に事件に

巻き込まれ命を落とした。…父や母、幼い弟達もそんな事件に巻き込まれたのだ。

たった1人残された家族は、宮殿で働く祖母グリユーネだったが、外の混乱から

王族を、そして大貴族を守るべく、宮殿の領地の門は固く閉ざされ、祖母がサイナの街に帰る事は叶わなかった。

私は……生きる事に必死だった。スルグ殿はサイナの血を引き、親戚関係にあたる為、

私を引き取るうとしてくれたが、この地を離れるつもりはなかった。だが、サイナの街もどんどん荒れていった。サイナの一族にとって命とも言える

木が…花が、果実が…緑が、どんどん無くなっていく。

サイナは職人が多く住む商人の街だ。

残された数少ない植物を使って暗闇の中かろうじて仕事は出来ても、買ってくれる者がいなかった。

それは、サイナの一族の危機でもあった。

そんな時、新しく一族の長となった男が目をつけたのが、私の容姿だった。

ある日、衣の注文を取って来いと、外国人商人の滞在する宿に行くように生地を突きつけられた。

「今や滞在してる商人も数が少なえ。失敗すんじゃねえぞ。俺たちの生活はなあ、

お前にかかってんだ」

認められたのだと思った。サイナの街を、一族を守っていく為に、自分を、必要としてくれたのだと。

行った先の宿で、隣国の女商人に気に入られ、無事注文が取れ喜び勇んで帰ってきた

私を待っていたのは、非情な言葉だった。

建物に入ろうとした時、名も覚えていないあの男の声が聞こえた。

「ルヴェルの面は使える。最悪アイツを売っちまえばいい。アイツなら

高く売れるだろう。おい、闇商人が今、宿に居るってのは間違いないんだな？」

体の中を流れる血が、全て止まって凍ってしまったかと思った。

全身が、すうっと冷たくなった。

仕事を任されたのではない。見せに行ったのは衣を作る生地じゃな

い……。商品は……自分、だったのだ……。

それからは何でもした。身を守る為、スルグ殿の下に通い修行をし、味方を得る為に

女の誘いにのる事もあった。

失う物はもう無かった。どんな手を使っても、早く……早く、大人になりたかったのだ。

あの時から、長は1年と持たずに次々と代わった。

ヤンテが消えたどさくさに乗じて長になったような人間に、勤まるような職務ではないのだ。

今度は政権争いが始まった。私はそれを尻目に、実力をつけていった。

古くからの伝統の技を持つ職人一家には頻繁に出向き、それぞれの技の教えを請い

職人からの信頼も得ていった。

一族をしっかりとまとめていた長を長年務めていた父の跡を継ぐのは自分だと

心に決めていたのだ。

それから数年……あいつらがやっと、長の座を争っているだけでは一族は滅亡する、と

気付いた時には……まともな人間は全て私についていた。

すぐに奴らを追放し、暗闇でも出来る事業を始めるべく、私が長になった。

祖母が宮殿の仕事を辞してサイナの街に戻ってくる頃には、安全に戻って来れるよう

乗り物や夜目の利く薬などを開発。ナハクの光玉を地に埋める事で

いついた。

「サイナの街において？」

さあ、遊戯の始まりだ。

サイナに来てもジルのように世話はできないよ。冷たく言っても彼女はむしろ
ほっとしたように微笑んだ。

花形の職業には難色を見せ、森の奥深くで祖母の手伝いを始めた。

どこまで…どこまで、純粹でいられる？

私自身、生きる為に簡単に捨てた純粹さを、たった1人の君がどうして持っていられる？

試したい。本当に信じられるのか。

恐ろしい。いずれ自分と同じ道を辿る気がして。

もどかしい。我々にとって当然の事に、戸惑っている君が。

苛々する。どこかで、希望を持ってしまっている自分に。

試したい気持ちも真実。

だが、沢山の可能性を持つ君を羽ばたかせたいと思う気持ちも真実。

可笑しい話だ。それは矛盾してるのに……。

「ルヴェル、最近変わったわ。昔のあなたの笑顔が時々戻るもの」
嬉しそうに祖母が言う。

まさか。あの時のように幸せそうな笑顔を今の私が出来るはずが無いのに…。

「マールのおかげかしらね？」

祖母は意味ありげな笑みを零し、なおも言葉を続けた。

マールの？

ふと、祖母の作業部屋から外を見る。そこには、自らが作った地味な衣を着て

泉のそばに佇むマールが居た。

その姿を視界に入れるだけで、相反する感情が体の中を渦巻く。

この手を取ったのは君。

でも……囚われたのは、もしかしたら、私なのかもしれない…。

31・笑顔の仮面 sideルヴェル（後書き）

あれ？ルヴェルどす黒い！？

紳士のルヴェルに好感持ってた方々すみません…。

実は一番の曲者かも（汗）

32・真逆のふたり

「お前の為なら、呪われた王子って言われても、この立場を利用して情報を集め、
そしてお前を守ってやる」

とは言ったものの、どうやって調べようか…宮殿に戻ったイデイが
思案に暮れて
おりました。

マリーも宮殿に滞在しているとはいえその敷地は広大で、謁見の間
や執務室、大広間など

外部の人間も出入りする本棟の奥に王の居住棟、王子の居住棟と賓
客を迎える棟などが

それぞれ本棟から長い廊下で繋がっており別棟同士は繋がっており
ませんでした。

棟の造りはどれも一緒に、たとえ侵入者があっても正面からは本棟
に隠れ別棟が

見えないようになっており、更にもどの棟が王の居住棟かがすぐには
分からないように

する為でありました。

イデイの部屋があるのは、クラムルードを守るべく王子の居住棟で、
マリーは近年

誰にも使われていなかった王女の棟にありました。

強い結界が張られ、術が自由に使えない宮殿ではそこに行くのも容
易ではないのです。

それにマリーという『たった1人』の姫をあらゆる危険から守る為
必要最小限の人間しか

マリーとは接する事ができません。

いくらイデイと言ってもホイホイと訪ねては行けないのです。

「直接訪ねるには何か理由が必要だしな……」その方法を探り出そうとしていた時、急に扉の外が騒がしくなりました。

隣室は自分が主としたクラムルードの寝室があり、式典までの間夜間警護の任は

解かれているとはいえ、外の騒ぎにイディは部屋を飛び出しました。すると、目の前には自分の代わりに警護にあたっていたムバクの青年と、一目で夜着と分かる薄い衣を着て自らの体を抱きしめるかのように体を小さくさせている女が1人おりました。

「ガイアス、何があつた！？殿下はご無事か！？」

突然投げかけられた声に、ガイアスと呼ばれたムバクの青年は肩をビクリと震わせ、困つたような視線をイディに向けました。

「その女は……リイナ？」

女の髪は乱れておりよく顔が見えませんでした。それでも誰か分かる位イディにとつてもよく知る女でした。

彼女は唯一王子の棟に入る事を許された筆頭女官だったからです。

「リイナ、何をしている？その答えによっては……宮殿に居られなくなるぞ？」

「わ、わたくしは……」

「イデイ様！リイナを夜、寝室に呼ぶようにおっしゃったのは殿下なのです！私が命ぜられ、そのようにリイナに伝えました」

「…殿下が？」

「は、はい。ですが、すぐに怒ってしまわれて…わ、わたくし」

クラムルードが、女を呼んだ？今まで専属女官さえも断ったアイツが？イデイは信じられない思いでいっばいでしたが、ガイアスが「本当です。殿下に確認して頂いても構いません。…私も、自分の首を懸けます」と言うので、ひとまずリイナを部屋に下がらせ、事情を分かるまでは監視するようガイアスに指示しました。

2人がこの場から去ると同時に、イデイはクラムルードの寝室に入りました。

「…リイナを、呼ばれたのですか？」

イデイは室内に居た、いつにも増して不機嫌そうなクラムルードに訪ねました。

「…そうだ。だが決してあの女が考えたような事ではない！何なんだ、すっげ香油臭かったぞ！ああ、気持ち悪い！」

「そりゃー夜呼ばれたら勘違いもするでしょう。で？ナニがしたか

「ったんです？」

「石だ」

「石？ですか？」

「今日、グリユーネから聞いたんだ。今若い女達の間で、その…臍に宝石をつけるのが流行していると…だからどんな物なのか知りたかったただけだ」

クラムルードの突然の行動の理由が分かり、リイナは職を失わなくても済みそうだな…と

イデイがほっとしたのもつかの間…イデイはクラムルードの発した一言が引つかかりました。

「殿下…今日は、グリユーネ殿のところか？まさか、最近のお出掛けはそれですか？」

「ん？…ま、まあな。それはアレだ。今度の式典は大切なものだからな。」

衣装のチェックだ」

「ふうん…。マールにも会ったな？臍の宝石とは、マールの事か？」

いつの間にか、イデイも敬語が抜けてしまいました。それにクラムルードが気付かない位

イデイから発せられる冷たい空気に彼は慌てておりました。

「は？あ、ああ…あの女か。なんか…つけてたっばいかな！」

「色は？」

「は？」

「マールは何色の宝石をつけてたかも見たのか？」

「……いや。衣から少し、透けてただけだから……色までは……」

「……リイナはつけてましたか？」

「つけてた。サイナの娘だからか、淡い緑色だった。つか、その話を振ったら

いきなり脱ぎだしてさ。すげーびっくりしてとりあえず追い出した。見るモン見たし」

見るモン見たし。って……通常の万里子のいでたちでは、臍の石までは見えないはずでしたので、

それをなぜ目にしたのか、それを思うと目の前の主を殴りたい程のムカつきがイディを

襲いましたが、なんとかそれを止めました。

先程まで話していた万里子は、一切その話をしておりませんでしたので、きつと

たいした事はなかったのでしょうか。イディがそう思いたいだけではごさいましたが……。

その思いを振り払うかのように軽く頭を振ると、新たに思い浮かんだ考えを申し出ました。

「俺が…確認してきましようか？」

「ん？」

「殿下が必死に避けてるマリー姫にですよ。臍の石の事だって、マリー姫に直接聞けば
早いのに。リイナを呼ぶから、こんな騒ぎになるのです」

「アイツは特に苦手なんだって」

「マリー姫の石も、自分でつけた物…つまり偽の姫だと思ってます
？」

「わかんね。でもアイツが姫だとは思えねえ。それに、後から自分でつけられる

石だって事は分かったからな。石だけではもう姫だと証明できねー
だろ？」

「……………そうですね……………」

「それより、なんで兄上が行くんだ？兄上だってマリーが苦手だった
だろ」

「殿下ほどでは、ないですよ」

偶然にも、マリーを訪ねる口実を手にしたイディは、密やかな笑みを浮かべると

ガイアスとリイナへの説明がありますので。と早々に退室し、2人には「今夜の

事は無かった事とする。忘れる」とだけ告げると王女の棟へと向かいました。

「イデイ様…！こんな夜更けに、王女の棟へ何用ですか？」

突然のイデイの訪問に、警護のムバクの女性が眉を顰めました。

「やあ、ドリー。殿下が至急、式典の事で聞きたい事があるらしいんだ。もしもう

お休みならまた明朝出直すが」

「いえ…その…実は……」

少し顔を赤らめたドリーの表情に、イデイは先程のリイナの光景が頭に浮かびました。

「ああ…もしかして、誰か男を呼んでるか？」

ドリーの言葉を待つまでもなく、イデイは尚一層赤らんだ彼女の顔色で答えを知る事が出来ました。

「仕様の無い方だ…この点では殿下とは真逆だな。大層な男好きでいらっしやる」

「ええと…ですから、今日はもう会われるのはご無理かと…」

「だな」

そう言って踵を返そうとした時でありました。

「わ…！…うわあああ…！…」

上半身裸の、ズボンだけの男が奥の一室から飛び出て来ました。今夜は何だか似たような光景ばかり見るな…そう思いながらも、入室のチャンスだと
思ったイディは、慌てふためき足がもつれて廊下で転倒した屈強な男をドリーに
任せ、

少し開いたドアから滑るように部屋に入ると、素早くドアノブに手をかけました。

その時、隙間から聞こえたのは「あの女！呪われてる！」という男の叫びでありました。

その言葉は、同じ部屋の中に居るマリーにも聞こえているはずです。

「…酷い言われようですね」

そう言いながらマリーに向き直ったイディは、少し意表を突かれませんでした。

なぜなら、目の前に佇む夜着姿の女性は、万里子と同じ黒い髪だったからでございます。

「何なのアレ。人の姿見ていきなりアレよ。ひどくね？」

同じような黒髪でも、与える印象は全く違いました。

「マリー…様？その髪は？」

「ああ、コレ？いつもウィッグつけてっからねー。さすがに寝る時は外すけど」

寝台の横から取り出したのは、まばゆいばかりの金の髪…もしましや。とイディは思いました。

「もしかして…瞳の色も黒、ですか？」

薄暗い室内でも、今日の前に立つ濃い睫毛に縁取られたマリーの瞳が明るい色に見えました。

「は？そーだけど？今カラコン入れてるからねー。で、アンタ。確かおーじと
いっつも一緒に居る人じゃなかったっけ？」

「ええ…今日は…通りかかった所に男の悲鳴が聞こえたので…」

「ああ…なーんか皆さ、この髪とか目とか見たら悲鳴あげるんだよね」

「この国で、黒はあまり歓迎されないのですよ」

「は？そーなの？そんな事言ったって、あたしが居たトコ、みぐんな元は黒だけど？」

「そうなのですか？」

「そだよ。皆染めたりしてるけどね。ああ、あたしと一緒に飛ばされて来た子、
あの子だってそうだったじゃん」

イデイの脳裏に、万里子の柔らかな黒髪と優しい黒い瞳が浮かびました。

その時、扉の外から人の声がありました。

「何事なのだ？」

「マリー姫の部屋からまた悲鳴が！」

「黒の女などと…そんなはずは…！」

ムバクであるイデイにはその会話までがハッキリと聞こえました。彼らの足音はまだ遠く、マリーは人が近づいている事すらまだ気付いていないようでした。

「人が来ます。この声は…神官達だ」

「あたしは何もしてないわよ！」

「でも最近姫である事を疑われている。それはご自身でも薄々気付いているのでは？」

すぐにマリーの表情が強張りました。

「な、何よ。あたしを選んだのはあんた達でしょ」

「姫として存在していたいなら、黒髪と黒い瞳は隠す事だ。神官が…君を姫だと判断した大きな理由は、髪も瞳も黒じゃなかったからだ」

「…なんで…助けしてくれるの。おーじと一緒に疑ってたんじゃないの？」

「もうすぐ神官達が部屋に到着する。早く髪を隠せ！」

慌ててウィッグを被って黒髪をその中に押し込んだのを見ると、イ

デイは傍にあつた
置物を、天井付近でぼんやりと光っている光玉に思い切り投げつけ
ました。

ぱりん！

音と同時に、部屋は闇に包まれます。

「きゃあ！」

次の瞬間、

「姫！今の音は？」

「どうぞされました？」

「誰か！明かりを持って！！！」

次々と神官達がやって来て、マリーに問いかけます。

程なくして室内に明るさが戻った時、既にそこにはイデイの姿はあ
りませんでした。

33・鉢合わせ（前書き）

久しぶりの更新となつてしまいました。

大変お待たせしましてすみません！！

今まで待っていてくださつた方々に感謝です。

33・鉢合わせ

「今日は地理のお勉強をします」

式典も近づいたある日、いつものようにグリユーネの作業部屋を訪ねた万里子は、古びた巻紙を持ったグリユーネにそう宣言されました。

「ち、地理…ですか？」

「そうです。衣装作りは終わったし、出立の日までは仕事は無いから少しこの世界の事を教えておくわね」

「はあ……」

自分は遠い外国から来たから、多少ラウリナの事を知らなくても仕方ない。という事になつていたのではないかと、少し首をかしげた万里子に、グリユーネは意味ありげな微笑みを投げかけました。

「昨日、ルヴェルが式典の準備の為に衣装を持って先に出立したの。ルヴェルに

頼まれたのよ。あなたの事はルヴェルやジル殿から聞いているから大丈夫。

大体の事はルヴェルが教えたと聞いているけれど…王都に…そして宮殿に滞在するなら話は別よ。もう少しこの国の事を知った方が良いわ」

そう言っつていつも大きな生地を広げている作業台に、手にしていた巻紙を広げます。

すると平面のはずの古紙は、広げられた瞬間に歪み出し、あつという間に目の前に

立体的な縮小地図が現れました。

三方が海に囲まれ、いびつな「コ」の字型に見えるその半島は先端に進むにつれ

傾斜がきつくなり、半島の先端部分はかなり高地に見えました。

半島の周りの海は綺麗なエメラルド色で透き通っており、本物の海のようにでした。

「触れてはダメよ。濡れてしまうわ」

「え！？ここ、触れたら濡れるんですか？」

「そうよ。地図だもの。海の部分は触れたら濡れるでしょう」

さも当然のように話すグリユーネに、万里子は慌てて手を引っ込めました。

「私達が居るのがここよ。サイナの街」

グリユーネが指で指し示した隣国との国境に位置する部分が緑色に光ります。

「サイナの街は、国境に位置する街なの。隣国2カ国と接しているから、貿易の

街として発展しているわ。それはもう聞いている？」

「はい。この街に来る前に、ルヴェルさんから聞きました」

「そしてもう1つ隣国と接している街は、ここに来るまであなたが居たナハクの街よ。」

とは言っても、あそこは強い結界と深い森に包まれていて、外国との交流は無いわ。

ラウリナ国で力の強い一族は4つ。1つは王族でもあるカナム。彼らの領土はそのまま王都になってるわ」

半島の先端の高地が赤く光りました。

「私達がもうすぐ出発するのは、この丘の上にある宮殿よ。この丘一体が王族カナムの土地。」

ヤンテが消えていた闇の期間はこの丘一体に結界が張られて閉ざされていたの。

「なぜですか？」

「国内の混乱から王族を守るためよ。だから、あなたがこの世界に召還されたという」

その儀式も、結界の外にある古い神殿で行われたはずよ。どんな神殿だったか、覚えている？」

「え〜と…冷たい石の床と、外に出るために長い階段を上らなきゃならなかったのは覚えてます」

「やっぱりね。じゃあココだね。比較的ナハクに近い神殿ね。ジル殿が選んだのかしら…」

今度はちょうど丘のふもとに当たる部分が淡く光りました。

「そしてサイナとナハクが陸続きの隣国から国を守っているって感じね。そして残る1つはムバク」

「あのお。ムバクの領土はどこですか？」

「ここよ」

半島の先端の高地は断崖絶壁かと思われましたが、よくよく見ると絶壁の下には他の場所と同じ位の低さの土地がカナムの領土を囲んでおり、そのわずかな部分が藍色に光りました。

「宮殿の後ろに控えているのがムバクよ。そして中央部分にはあまり力の無い中小の一族がいるの。グアク、ナリ、ソル……」

グリユーネの指先の動きに合わせてるように、立体地図の上で淡い光が点いたり消えたりしました。

「勿論、ラウリナ以外にも沢山の国がこの世界にはあるわ」

「はあ……」

「この国から最も離れたイルー」

「いるう……ですか」

「あなたはその出身だという事にしましょう」

「…へ？」

「……あなたが別世界からやってきた事は知っているわ。でもそれがこの世界の他の者にとってはどんな意味がお分かり？」

突然話の矛先が自分に向き、万里子は混乱しました。

「わ、わかりません」

「誰もが『意味』を考えるの。そして『姫候補』がもう1人いたのだと知ってしまう。それはとても危険な事なのよ。あなたを利用しようとして近づいてくる者もいるでしょう……。だからこの世界であなたの『過去』を作っておく必要があるの」

万里子は、やっとこの勉強会の意味を理解し、そして自分の考えの浅さを恥ずかしくなりました。

「ごめんなさい……。皆さんのお陰で、今こうして居られるのに……」

「あら。お情けで助手にしたわけじゃないから、そこは安心して。堂々とここに

居座ってていいのよ。むしろ私がお願いしたい位。だからこそ、この勉強会はあなたにも真剣になって欲しいわ」

先程まで地図上を忙しく動いていたグリューネの手が、万里子の手

を優しく包み込みました。

そのぬくもりに、万里子は勇気付けられたような気がしました。

「はい！えと、私はイルーという国から来た。っていう設定ですよね？」

「そう。ここから一番離れた島国よ。ヤンテの光からも一番遠い国…。」

ラウリナはね、ヤンテに愛されている国だと言われているの。その理由は、常にヤンテが真上にあるからよ。だからこの国の裏側は陸が無くて闇が広がる海だけだと言われてるわ。

なにせ遠いし、ヤンテの光が届かないから誰も真相は知らないけれど…。」

その他は隣国も含めて、ラウリナ以外の国は真上にヤンテを仰げないのよ。イルーは、ラウリナから一番離れているから、ヤンテの光が届く日中が短くて寒い国なの。

…マール、黒髪の人間をこの国で見た事はある？」

「えっと、この前市場でグレーの瞳に黒髪の人を見ました」

「イルーの人々には時々瞳や髪が黒い人がいるわ。だからイルーの出身とするのが

外見的には一番都合が良いのよ」

「髪も、瞳も黒いっていうのは、あまり…いないんですね？この世界で黒ってどんな意味があるんでしょう？」

「それは……」

それまで饒舌だったグリユーネが、突然言葉を切りました。視線が万里子の胸元で、ぴたり。と止まりました。

「？」

「…続きは彼に聞いたら良いわ。もう遅い時間になってしまったし」
グリユーネが指差した先には、ジルから渡されたネックレスが…ほのかな光を放っておりました。

「ジル殿が呼んでいるわ。このような遅い時間に珍しいわね。もう戻りなさい」

自分の『過去』を作るのだと言われ、グリユーネの話の合間合間に様々な質問を

しては話が脱線するのを繰り返し、いつしか勉強会に夢中になっていた万里子は

グリユーネに言われてやっと、外が暗くなっているのを知りました。

「はい。じゃあおやすみなさい！」

ジルは早くから式典の準備の為に王都へ入っており忙しい日々を送っていたようで

こうして呼ばれるのは久しぶりでした。

胸元のネックレスの光が強く激しく輝きだし、ジルが『対話の鏡』に映る時間が

迫っていると知った万里子の足は自然と走り出しました。

今ではもう飛び乗る事にも慣れた宙に浮いた家に入ると、『対話の

鏡』が様々な淡い色の光が渦巻き、人型を造ったかと思うとふつと光を失い、次の瞬間にはそこにジルが映っておりまして。少し乱れた息を整え、急いで鏡の前に座り込みます。久しぶりに見るジルの姿に、万里子の口元は自然と緩んでおりました。

「お久しぶりです！お元気ですか？忙しいんじゃないんですか？」
「大丈夫ですよ。あなたに会えない事に較べたら、忙しいのは苦ではありません。」
「すみません遅い時間に…。どこかに出かけていたんですか？」

「グリユーネさんのところに…。あっ！もう休まれる時間じゃあ？」
「ええ…普段でしたら…。ただ少しお話したい事が…。」
突然言葉を止めると、万里子を優しく見つめていた青い瞳が鋭く光り、万里子の後方を睨みつけました。

「…マール」
柔らかかった声色が鋭いそれに変わり、万里子はジルの突然の変化に驚きました。

「は、はい！何でしょう？」
「今…そこに、術の路が出来たね？」

「え？え、え？」

慌てて振り返った万里子の視線の先で、腕時計の蓋がかちり。と開きました。

そしてするするっと藍色の煙が出てきます。

「…イディ、か」

鏡の中のジルは苦々しく呟きました。

その呟きに、万里子が鏡を振り返ると、ジルが今まで見た事のないような微笑を見せておりました。

「じ、ジル、さん？」

「鏡越しというのなんですから。やはり、私も今からそちらに向かいます」

更に微笑みを深めそう告げたジルでしたが、万里子は室内の空気が一気に下がったように感じました。

「今からって…あのっ！」

万里子は鏡に向かって話し掛けましたが、鏡は再び光りを放ちぐるぐると渦を巻きました。

その光りの眩しさに万里子は思わず目を瞑りましたが、再び目を開けた時には鏡に映るのは自分と、そして背後に佇むイディだけでした。

34・緊急会議

「今すぐにつて…言ってみましたよね？」

次の言葉をかける間もなく、鏡から姿を消したジルを思い、万里子は背後のイディに問いかけました。

「…だね。俺が来るのは夜だし、まさか会つとは思わなかったけど

…」

「それです！」

「ん？」

「夜なんですよ！ジルさん、休まなきゃいけないんじゃない？」

「大丈夫だよ。俺は日中全く術は使えないけど、ナハクは力が弱まるから眠って

力を蓄えるだけで、夜でも力が無くなるわけじゃない。特にジル殿程の人なら

数日眠らなくても平気だろう」

「じゃあ…この前のように大きな鳥に乗って？」

「あ。それはムリ」

「どうしてですか？」

「鳥は鳥目だから。君を屋敷に連れて行く時もラブルは呼ばなかつ

たろう？

大丈夫。すぐ来るだろう。彼は意外と大胆だから…派手な登場をすると思うよ」

「派手？」

「そう。対話の鏡は他でも何度か見た事があるけど…あんなにやたらキラキラ光るもんじゃなくて…」

苦笑するイデイが言い終わらない内に、また腕時計の蓋がカチリと小さな音をたてて開きました。

すると、中からキラキラと青く光る雪のようなものが吹き出しました。

空中をキラキラと漂っていた「それ」はゆっくりと一箇所に集まり始めました。

「いきなり失礼な話をするな」

「ひゃっ!？」

人型を造ろうとしていたキラキラからいきなり声が聞こえ、万里子は驚き後ずさりしました。

しゅんつとかすかな音とたて、ジルが現れると、イデイに冷たい一瞥を投げかけ、

万里子に向かってすばやく移動すると、ふんわりと万里子を抱きしめました。

「私が派手好きだなんて、そんな事はありませんからね？」

優しく微笑むジルに、万里子は内心「いや…かなり派手だと思いますけど…」と

思いましたが、さすがに口に出す事は出来ませんでした。

「…無自覚ですか。つか、マールからさっさと離れてくださいよ！」

「うるさいヤツだな。ああ、この便利な道は、来る途中少々手を加えさせてもらったよ」

「まあ、これで来るだろうなとは思いましたが…早かったですね」

「ふん。宮殿内では術は使えない上に、君が自由に出入りできる場所となると

『入り口』を見つけるのはさほど難しくはないさ」

「さすがですね。…そろそろ、本題に入りましょうか。マールの様子も気になる。

ここは、全員が情報を共有するのが良いと思います」

「私？」

「少し難しい顔をしていますよ、マール。それもあって急いで来たんです」

.....

「つまり、私はイルー人だという設定になったんです。ええっと、染色や縫い物の技術を教わるためにやってきたって事で…」

「それは誰の指示ですか？」

「ルヴェルさんに言われたってグリユーネさんが…それで、今日地囃も見せてもらってラウリナの事も詳しく教わりました」

「ルヴェル殿が…相変わらず、根回しが良いというか…俺もそこまでは考え付かなかった。

確かに、宮殿に行くとなるとマールがこの世界の人間でない事がバシる恐れがあるからな。準備しておくに越した事はないさ」

「黒い瞳で、黒い髪だとイルー出身だとした方が良いのだそうです」

「……」

「……」

「どうしたんですか？」

「マール。私達の話をする前に、話しておく事があります。…本当ならもつと早く

話しておくべきだった…。この世界で、『黒』が意味する事です。

…正直、黒い瞳の

人間を、私は今まで見た事ありません」

「え？でもイルーには…」

「いる。かも、しれませんね。実際行ってひとりひとり確認したわけではありませんから。」

ただ、今まで何人もイルー人には会ってますが、黒髪はいたけれど黒い瞳はいませんでした」

「マール…この世界で、黒とは『死』を意味するんだ。この世界では死ぬと時間が

経つにつれて、体が段々黒くなる。爪、髪…一晩経つ頃には全身が黒くなる。」

そしてもう一晩過ぎたら、黒い粉になる。」

やっかいなのは『瞳』だ。黒い瞳は死の前兆と言われていて、他の部分は死んだ後

黒くなるのに、瞳だけは死ぬ直前に黒く変色するんだ…」

「だから、イデイは普段右目を髪で隠しているんです。見る者に、あまり…」

良い印象を与えませんか」

「そっか…じゃあ、黒い瞳の人も居るっていうお話は、ルヴェルさんが私に

気を使ってくれてたんですね…あ。それじゃ…」

万里子は、初めてこの国に来た時に神殿の中で受けた冷たい視線を思い出しました。

「さすがマール。飲み込みが早いようですね。神殿で、なぜあんなに簡単に姫が

どちらか判断されたのは、『色』です。あっちの方は瞳も髪も黒じ

やなかったからですよ。
神官たるもの、そんな外見だけで判断するなど、情けない話ですねどね…」

「そこで俺の話だ。今日マールに話そうと思って来た理由はそこにある。宮殿にいる
マリー姫…髪が黒だぞ」

「なっ…！！?!?イデイ、どういう事だ?」

「いつものあの金の髪は被り物です。昨夜、姫の部屋で騒ぎがあった事、既に報告が
いつているのではないですか?」

「あ、ああ…宮殿で働く男が1人、姫を化け物だと言って騒いだと…」

「ちょうど、その場に居合わせましてね。先に姫の安全を確保する為、部屋に
入らせてもらったんですけど、そこに居た彼女は黒髪でした。金の
あれは…
何と言ったかな…ウイ…?」

「ウィッグ、です」

「マール?」

「染めたのかと思ってたんですけど、ウィッグだったんですね。染めてたのなら
いずれ黒髪が目立ちますもんね」

うんうん。となにやら納得したように頷く万里子を、2人は不思議そうに眺めていました。

「マール…驚かないのか？」

「え？ええ…だって私の居た世界では皆黒髪で黒い瞳ですもん。えっと、国によっては肌や髪、瞳の色は違いますけど、私の国は基本的に黒髪で黒い瞳です」

「ですが、あの時最初に神殿に現れた他の候補者は様々な色の髪をしていましたが…」

「今染めている人が多いです。お年寄りには黒髪が白くなりますし…」
「染める！？生地や糸じゃあるまいし！！マールももう気付いてるだろう。」

一族で、大体髪や瞳の色は分かれるんだ。それはそれぞれの一族にとってとても重要で、一族の色が濃い程に価値がある。染めるという行為は考えられないな…」

「染めたらずっとその色じゃあないですよ？髪が伸びたら、下から生えてくるのは元々の色だから、時間が経つと元の髪色に戻ります」

「え？そうなのか？待て。マール…瞳も黒だって言ったな？ならあの紫の瞳も！？」

「はい…今、彼女はカラコンをしてると思います」

「カ…ラ…何です？」

「瞳の色を変えるものです。目に小さなガラスのようなものを入れるんですよ」

「目に!？」

「はい」

「そんなものがここで知られたら、どんな一族にも成り代われる…
…。大騒動になるだろうな」

「ただでさえ、彼女の臍の石は流行りつつあって、真似する女性が多いようですな」

「姫である証であるはずのものが簡単につけられるなんて…彼女は自分で自分の首を絞めてるようなものだ。マール。君のは…」

「っ、つけてませんよ?これは生まれた時からの…あ!」

思わず答えた万里子でしたが、ジルの鋭い視線に思わず真実を洩らしてしまつた事に
気付き慌てて口を閉ざしました。

「……………いいですよ。私達はマールが本物のヤンテの姫だと知っていますからね。

でもマール。どうか気をつけてくださいね…宮殿では私達が常に傍

にいる事も

出来ません。今のように油断して話しすぎたりしてはいけませんよ？」

「は、はい…ごめんなさい。気をつけます」

「ジル殿。あなたが今日持ってきた情報は？」

「宮殿の建物の近くに、ヤンテ神殿があります。丸い屋根の真ん中には丸い天窓があり、

ヤンテはそこから常に神殿に光りを注いでいる…神聖な場所です。今回の式典は、そこで行われます。ヤンテの力が一番影響する場とも言われていますからね。

式典の前より姫には神殿に滞在して頂いて、気を溜めて頂くはずだったのですが…断られました。

それで、宮殿の王女の棟に居るのです」

「それは…」

「自分がそこに寝泊りしても、力が神殿内に溜まる事など、無いと分かっているからでしょうね」

「どこまでも浅はかなヤツだな」

「今までのおバカな言動で、彼女が本物の姫なのか疑問視する者も出てきています。

それで……マール。マリーは、あなたが宮殿に到着したら、自分と一緒に神殿に

滞在する事を命じました。グリユーネ殿とは到着後、別行動になり

ます」

「えー!!」

「マールが代わりに神殿に力を満たせって？そついう魂胆か」

「…でしょうね。すっかりちやほやされてますからね。今ここで放り出されても困るのでしょう」

「グリユーネさんと別行動って…じゃあ、基本1人って事…ですよ
ね」

「式典の期間中、一部の高位の神官は神殿に滞在します。勿論部屋は別ですが、私も同じ建物内にはおりますよ。何かあればすぐに駆けつけます。ですから、どうか

今日作ったあなたの過去を、忘れないでください」

「今日聞いただけでも沢山ありすぎて…どうすればいいのか…」

基本楽天的で前向きな万里子でしたけれども、今日ばかりは自分の平均レベルの記憶力を恨めしく思うのでした。

「書き留めておけ」

「そんなー。だって誰かに見られたら…」

「こつちの文字がお前書けるのか？招待状のマリーのカード。あれ

がお前がいた世界の文字なんだろう？
なら、俺らには読めないから大丈夫だ」

「あつなるほど。そうですね。そうします。でないと、忘れてまた
余計な事を言いそう」

「ああ…もう行かないと。イディ、お前もだ。ちょっと手を加えた
から朝になっても
この道は閉じないが、お前が通れなくなるだろう」

「…ですね。じゃあ、お先に。マール、次会えるのはきつと宮殿で
だ。無事に来いよ」

「はい。ありがとうございます。お気をつけて」

「イディ。迷わず、お前の出口に帰れよ？」

「あなたは…一体どれだけ手を加えたんですか…」

ぶつぶつ呟きながら、イディはすうっと藍色の煙に姿を変えました。

35・王都へ

王都へ出立する前夜、万里子はグリユーネに取っ手のついた皮製の小さなトランクケースのような

かばんを渡されました。

かばんは、万里子でも片手で持ち歩けるほどの大きさでしたが、なんとグリユーネは

王都へ持つて行く万里子の荷物を全てこのかばんに詰め込むように言うのです。

この世界に来たばかりの万里子の荷物は少ないのですが、ルヴェルに渡された

若草色のドレス1着ですらこのかばんからはみ出てしまいそうです。

「とにかく、このイニス（かばん）に入れたら良いのよ。全てイニスの大きさに
合わせてくれるから。マール、普段着も持つて行くといいわ。部屋では堅苦しくする必要は無いのよ」

どうやらイニスとはかばんの事らしいのですが、入れた物がイニスに収まる大きさに
なる。とはどういった事が、万里子にはいまいち理解が出来ませんでした。

それでも、グリユーネは更に普段着も持つて行くように言います。
それでは到底、このイニス1つでは足りる量ではありませんが……。

「全部、これひとつに入るんですか？」

「そうよ。押し込めば良いのよ。…あなたの家と同じよ。見た目よ

りも中は広いし
家具も沢山あるでしょう。あんな要領なのよ」

確かに、ジルからもらったふかふかと浮く箱は見た目は2メートル四方ほどの箱なのに

中は水周りも、寝室とリビングもあり1人で住むには贅沢とも言える程の広さの

快適な住居になっておりました。

元居た世界の常識が未だ頭にこびりついている万里子は、このようにグリユーネが

さらりと言葉ひとつひとつに驚く日々でしたが、きっと魔法とはこのような

ものなのでしょう。

なんとかなるだろうと考え、イニスを抱えて荷造りに向かいました。

グリユーネに渡されたイニスとは、とんでもない優れものでした。

万里子が丁寧に畳んだ若草色のドレスを、試しにイニスの中に押し込めるように

入れてみると、すっぽりと入りました。

ですが、イニスいっぱいになってしまい、他に空間は無くこれ以上は入らないように

思えました。

「これが前の世界だったら絶対無理だよねえ……。無理矢理入れてもドレスがくしゃくしゃになりそうだし……。

でもグリユーネさんが嘘ついた事無いしなあ……」

絶対に必要な下着類もまだ入っていません。万里子は隅に押し込む事にして、下着類を

まとめた巾着袋をドレスの脇に入れようと思いました。すると、何の抵抗も感じることなくするりと入ります。

「やっぱり魔法なのかな？もしかして無限大に入っちゃおう!？」

その後、万里子は調子に乗って普段着も、以前ジルからもらったドレスも予備の為に…と次々押し込み、結果的にドレス7着と普段着5着がイニスに収まりました。

「もしかして、白玉も入れたり…」

『……それはご勘弁願えますか』

「やっぱり?」

いつの間にか、入り口より中を窺っていた白玉が困ったように答えました。

『明日は私も同行させて頂く事になりました』

「本当!?嬉しい!白玉を置いていくのがなんか寂しかったんだ!」
すると白玉が嬉しそうに万里子に鼻を摺り寄せてきました。

『意思の疎通ができるスホだからと選ばれました。ですが、宮殿に着いたら

お帰りまではお別れです。宮殿では私が話せる^{わたくし}というのはご内密に…お願いしますね』

「え？どうして？」

『万一王族が私わたくしを欲した場合、ジル様も姫様も断る事が出来ません。私も姫様のおそばを離れたくありませんし…』

「わ、わかった！絶対言わないから！一緒に帰ってこようね？」

白玉は嬉しそうに小さく鼻を鳴らすと、更に万里子の手にも鼻を摺り寄せてきました。

『ありがとうございます。ところで姫様…肝心のお仕事道具をお忘れですよ』

「うん？あ！そうだね！」

個人的に招待状はもらっているものの、表向きにはグリユーネの助手として宮殿入りするのです。

すっかり失念していた万里子は、慌てて机の上からお針子道具を持ち出しました。

お針子道具が入った木箱の底には、秘密のノートが忍ばせてありました。

そつとノートを取り出し、ページを開くと万里子は小さくため息をつきました。

明日から、イルー人になりきらなければいけないというプレッシャーが襲ってきます。

もしイルーの文化について聞かれたらどうしよう？気候の事とか…何も知らない…。時間が経つにつれて

万里子の不安も大きくなっておりました。

与えられる情報を書きとめ、覚えるだけで精一杯だったので。宮

殿ではグリユーネに

くつついているつもりだったのに、どうやらマリー姫のそばにいけないといけないらしく、

1人で乗り越えなければいけないプレッシャーに押しつぶされそうでした。

『姫様…どうされたのです？』

「白玉…私、頑張るね。私も、白玉と一緒にここに帰って来られるように頑張るね」

俯いたまま、自分に言い聞かせるように話す万里子の姿を、白玉は心配そうに見つめておりました。

.....

出立の朝、万里子は大荷物が入っている割には非常に軽いイニスを抱えて、

長老の森の入り口におりました。

「グリユーネさん、どうやって王都まで行くんですか？」

「ペガロよ」

「へっ……」

その時、白玉に繋がれて万里子が住むハコに較べて悠に3倍はあり
そうな大きさの
ハコがやってきました。

やはりふかふかと宙に浮いておりましたが、見た目に大きな違いが
ありました。

船の上にハコが乗ったようなその姿は、長さが10メートル程もあ
りそうでした。

「白玉、大丈夫？重くないの？」

『ええ。重さは全く感じませんよ』

「ペガロはサイナの乗り物よ。他の一族は聖獣を従えているけれど、
我がサイナは

相手が植物ですからねえ。昔から、ペガロを作って乗っているの。

これは最新型よ！マールの家は旧型のペガロね。ペガロは行き先も
道も知っているから

放っておいても勝手に進むからシラタマに負担は無いのよ。

速度の調整の為、念のため一緒に走ってもらっただけだから、心配し
ないで」

「そうなんですか！あの家も…」

「ええ。我が家と縁の深いジル殿はいくつか持っていますしね。さ

あ、マール。

従者と警護の者を紹介した後は後ろから2つ目の入り口…あの部屋
を使ってちょうだいね。

私は、^{わたくし}その後ろの部屋を使います」

まさかの1人部屋をあてがわれた万里子は、見た目以上に室内が広く快適だと頭では分かっていながらも、足を踏み入れた部屋に横になれそうな位の大きなソファと

足首まで沈みそうな程のふかふか絨毯を見た時には、「やっぱり慣れない…」と

咳きが漏れました。

1人になった万里子は、到着までにもう一度ノートでマールの設定を確認する事にして、ぱつんぱつんに詰まっても何も入っていないかのように軽いイニスを開け、お針子道具箱からノートを取り出しました。

「え〜つと。あたしはイルー人で、視力が悪い所為で目も黒い。と

……商人の父親の

紹介で、お針子修行でサイナにやってきて……こーゆー時他の人が日本語を読めないのは

便利ね。自分シナリオ書いててもバレないものね。あつ、でも名前位はこの国の

文字で書けなきゃダメ？マールってどうやって書くんだろう……記帳とかあつたら

どーすんの？あゝもう、こんなギリギリに……」

ぶつぶつ独り言を言いながらノートとにらめっこをしておりますとそこにグリユーネが現れました。

「ふふ。1人でも賑やかね、マールは。何をしているの？」

「あつ、グリユーネさん。最近独り言が増えてしまって……この国や、

黒髪に黒い瞳がこの国ではどれだけ人目を引くものかは嫌というほど分かったので

大きなフード付のマントを羽織るように言われていたのです。

まだ季節は夏でしたが、正装しての外出にはフード付マントを羽織るのが淑女の

たしなみだそう、夏用の薄手のものでも万里子の髪と瞳を隠すのには丁度良い

ものでした。

それを、こんな大事な時に忘れるなんて…万里子は自分のおろかさになり泣きそうになりました。

慌ててマントを取りに戻ったマールを、グリユーネが気遣います。

「そんなに慌てなくても良いのよ」

「グリユーネさん…私、こんな具合にすぐにボロを出しそうで不安です。」

こ、こんなに皆さんが強力してくれているのに…」

「……何をするにも、何を言うにも、一呼吸置きなさい。深く息を吸ってから、

何事も行いなさい。宮殿に着いてしまつたら、助ける事も、庇う事も出来ないのよ。

お願いね？」

『姫様：私わたくしからも、お願い致します。私わたくしは、今から

言葉を発する事は出来ません。どうか、お気をつけて…軽々しい言動だけは

なさらないように…』

「う、うん。分かった」

改めてマントのフードを深く被り外を覗くと、白玉の進む先には大きな大きな

門が見えました。

門の横には兵士のような格好をした人が何人も控えています。

「17年…」

「え？」

「この門が17年間閉ざされていたのよ……」

「17年も…私が生まれた頃なんですね」

「ふふ…そうね。ところで早速ボロが出てるわ」

もう言葉を発する事が出来なくなった白玉からも、抗議するようなため息が漏れました。

「え？」

「あなたがヤンテが消えた年に生まれたって事よ。マリー姫は、21歳だそうよ」

「あ……」

「それも、彼女が疑問視されてる理由…マール、あなたが考えてる以上に、あなた

危ない橋を渡ろうとしているのよ。全てが突然だったけれども…本当に、言動には気をつけてね」

「はい…」

「ところで、あなたはマリー姫と一緒に神殿に移って式典までの間、神殿に

ヤンテの力を溜める役割の為に呼ばれたって本当なのかしら？」

「はい。イデイさんが言うには、彼女自身疑われているのに気付いているのだらうです。

それで、ジルさんが神殿にヤンテの力を溜める為にも神殿に滞在するよう頼んでも

効果がないと益々疑われるから、今まだ女王の棟に滞在しているみたいで…」

「なるほど。じゃあ、あなたは式典が終わるまで、ただ神殿で寝泊りするだけ？」

「ハイ、多分。式典に招待はされてますが、席が無いようなので、滞在して

力を溜めるのに協力するために呼ばれたみたいです」

だから、もしかしたら他の人とはあまり顔を合わせる事もないかもしれません。と、

悪戯っぽく笑うマールに、グリユーネは益々心配そうに眉を顰めました。

「でも、準備しておくに越した事はないわ」

「へへ、そうですね。頑張ります。あ！お針子道具持ってきてるの
で、何かお手伝いする事が
あればすぐに呼んでくださいね！」

風になびいたフードから万里子の黒髪が一筋、風に踊りました。

それを中に押し込み、改めてフードを深く被り直したマールを見て、
グリユーネは

「本当にそれだけで済んだら良いのだけれど…やれやれ。年寄りの
取り越し苦労

かしらねえ…」と眩きました。

その眩きは、フードを押さえていた万里子の耳には届かなかったの
ですけれども……。

35・王都へ(後書き)

や、やっと王都に到着しました。

スピードがゆっくりすぎてすみません(汗)

えーっと、マール速度って事で……。

36・身体の変化

王都に入る関所が近づくと、ペガロはゆっくりと速度を落としました。

招待状を用意するようにとグリユーネに言われた万里子は、イニスを開けて衣と衣の間に

腕を突っ込み、身を乗り出して探り始めましたがなかなか見つかりません。

（おかしいな…確か、この衣の下に入れたのに…）

自分自身もイニスに吸い込まれそうな程に一生懸命探していた万里子は、いつの間にか

ペガロが停車した事にも気がついておりませんでした。

窓からは、招待状を催促するように関所の役人が中を窺っておりました。

なかなか万里子が招待状を出さず、苛立ち始めた役人が声をかけようとしたその時……。

やっと招待状を探し出した万里子がパツと顔を上げました。

思いもよらず、万里子の黒い瞳とすっかり目を合わせた役人は、ヒュツと鋭く

息を吸うと、慌てて万里子から目を逸らしました。

その様子に、万里子は戸惑いと、そして少しの胸の痛みを覚えました。

王都に来る前に、黒の意味を教えられ、わかっているつもりでしたが、このように

あからさまな嫌悪の感情を向けられるは、やはり気持ちのいいものではありません。

自然と、万里子の視線は俯きがちになりました。

「あの…しょ、招待状…です」

役人に向かって、封筒を出すものの、目の前の役人はやはり万里子の方を向こうとはしません。

「娘、お前を入れるわけにはいかない！王は体調を崩しておられる。死期の近い

お前を、招待状があるからとはいえ、宮殿に案内する事などできぬ！なせ来た！」

突然怒鳴られ、万里子は思わず招待状を引っ込めました。

「これ、ジェプス。この娘は、私の助手をしております。この瞳の色は生まれつき。

イルー人に、稀に居るのですよ。死期が近いなどと、そのような事申すでない！」

「…これは、グリユーネ様……し、失礼いたしました…。では…この娘…いえ、

こちらの方も、グリユーネ様とご一緒に宮殿へ？」

改めて2人の招待状を受け取ったジェプスと呼ばれた役人は、それでも万里子を見ようとはしませんでした。

「いえ。それがねえ…助手として来てはいるのですが、この子はマリー姫から個人的に

招待状と滞在許可証が届いているのよ。何か聞いているのではなくて？」

チラリと万里子に視線を向けたものの、万里子が自分を見ていると感じたジエプスは、
すぐにまた視線を招待状に落としました。

(ふう…前途多難かも…)

なんだか悪い事をしているような気がして、万里子はジエプスを観察するのを止めました。

「ええ…マリー姫の名が入った招待状が1通だけあると…。すぐに宮殿に知らせを送ります。到着する頃には、出迎えの者が居るでしょう」

「分かったわ。ご苦労様」

ペガロが再び動き出し、あっという間に関所から遠ざかりました。

「マール？突然、大人しくなったのね」

「ちょっと…びっくりして。なんていうか…化け物でも見たような視線でした。

色の意味は聞いてたんですけど、今まで皆とても自然に接してくれていたから…

実感が無かったんです。どこか他人事で、自分自身の事だって実感がありませんでした」

「そうねえ…ジエプスは特に、関所の役人だから、余計に神経質になっっているのね。

闇の時期に王が体調を崩されてね…ヤンテが消えて闇が訪れるなど、

初めての事だったから

王はとても責任を感じて…病に臥せってしまったのよ…。王都の閑所の門が堅く

閉ざされてしまったのも、それが原因のひとつね…。王を守る為、様々なモノの

侵入を防ぐ為に、一番手っ取り早い方法だったのよ。病は…伝染しますからね。

だから瞳の色にあんなに過剰に反応したのね」

グリユーネが優しい笑顔のまま、万里子の顔を覗き込みました。

「宮殿に行くのが、怖くなった？止めましょうか？理由をつけて、戻っても良いのよ？」

グリユーネの言葉にふと視線を上げると、思いのほか近い距離にグリユーネの優しい緑色の瞳がありました。

万里子に対して『あなたは忌むべき存在ではないのよ』と、そう語っているかのような優しい瞳でした。

「私、行きます。大丈夫です。それに…この目のおかげで、変に話し掛けられたり

しないで、私も余計な事言わなくて済みそうです」

「ふふ。良かった。それでこそ、いつものマールだわ」

万里子はグリユーネを心配させまいと言った言葉でしたが、それはあながち冗談では済まされないものでした。

しばらくして、一目で宮殿の入り口だと分かる豪華な門が見えまし

た。ペガロが近づくと、それはするりと開き何事も無く、万里子達は宮殿の敷地内に迎え入れられたのでした。

ジェプスの言った出迎えの者達は、建物正面に位置する巨大な扉の前で待ち構えておりました。

万里子達と同じように、式典に出席するべく到着した人々も多数おり、それぞれに

出迎えの人間が数人つきましたが、万里子達の乗ったペガロが到着すると、数十人の出迎えが

ペガロを取り囲みました。

到着の知らせと共に、万里子の容姿に関しても知らせが入っていたのでしよう。

出迎えの者は一様に、万里子とは目を合わせず、言葉を交わす事も極力控えているようでしたが、

時折ちらりちらりと盗み見るような視線を感じました。

その時折向けられる好奇心に満ちた視線から避けるように、万里子は目の前に聳え立つ

大きな大きな宮殿を見渡しました。

ふとその時、不思議な光景が目に入りました。

宮殿の後方に、光の柱が見えたのです。それは空へとまっすぐ伸びておりました。

「グリユーネさん、あれ何ですか？」

グリユーネに問いかけるも、男性の召使にペガロから式典衣装の入った特大のイニスを

持ち出すように忙しく指示を出していたグリユーネに、その問いかけは届いていないようでした。

(まあいいや……。後で聞いてみよう)

後に残ったのは、年配の女官が2人……。案内されるグリユーネの後について行こうとした

万里子を、1人の女官が呼び止めました。

「あなたはこちらへ…姫がお待ちです」

その言葉に、グリユーネも振り向きました。

「到着早々なのか？彼女は私の助手わたくしでもあるのよ。少し手伝ってもらいたいんだけど、

式典までまだ少し日があるし、それまでは仕事をさせてはダメかしら？」

「グリユーネ様のお手伝いは、宮殿の衣装部のお針子がお手伝い致します。今は何よりも、姫のお言いつけが優先されます」

そのきつぱりとした口調に、グリユーネも諦めたようで万里子に近づくと両手で

万里子の手を包み、ぎゅっと力を込めました。

「大丈夫よ。ただ、寝泊りするだけ。なのでしょう？」

「はい！大丈夫ですよ。お手伝いできなくて、申し訳ないくらいです」

明るく答えた万里子に、更に何か言いたげに口を開いたグリユーネでしたが、万里子の後ろに

控えていた女官が催促するようにこほん。とひとつ咳をすると、もう一度ぎゅっと

万里子の手を握ると、そつと離しました。

「よろしいですか？こちらです。お荷物は…」

「あ。コレだけですから、自分で持ちます」

すると、女官はすぐに踵を返し、ずんずん歩き出しました。中央入り口の広い吹き抜けホールの奥へと進むと、同じような作りの廊下がいくつにも枝分かれしており、女官はそのひとつへと歩を進めていきます。

（うわあ。迷いそう…これじゃグリユーネさんの部屋は探し出せそうもないなあ）

廊下の窓からは、またあの光の柱が見えました。

宮殿の光だと思ったそれは、宮殿とは別の建物から出ている光でした。丸い屋根から昇る光の柱……ジルから聞いた神殿の話思い出しました。

（あれがヤンテ神殿…じゃあ、あの光は建物内の光じゃなくって、ヤンテの光が注がれているんだ…）

万里子は、その光の柱に魅入られてしまったかのように、窓辺へと近づきました。

なんだか身体の芯が暖かく熱を帯びたような不思議な感覚を覚え、窓に手を伸ばしかけた時…

「何をしていますのです！姫のお部屋に着きましたよ！」

女官の咎めるような声でハッと我に返り、万里子は熱く感じたおなか部分を撫で、
慌てて女官の居る場所まで急ぎました。

.....

「ちょっと。思ったより元気そうじゃん。相変わらずの地味子だけ
ど」

入室していきなりそんな失礼な言葉をかけてきたマリー姫こと、もう一人のサトウマリコは

初めて会った時よりもインパクトのある出で立ちで万里子を迎えました。

黄色いビキニのトップスのようなものに、同色のシースルー素材の深いスリットの

入ったスカートを穿き、くびれが強調された小麦色の締まったウエストには

赤いへそピアスが光っております。

「夜までは、もう誰も入ってこないで」

マリーがマールを連れてきた女官にそう言葉をかけると、年配の女官は無表情で

「かしこまりました」と礼をし、部屋を出て行きました。

「元気だったあ〜?とか聞くほどの仲でもないしねえ。あの拾ってくれた美人の家でメイドでもしてんの?」

「いえ…今はサイナの長老の家でお針子してて…」

「サイナ?長老?オハリコ?何それ」

「何って…この世界の事、聞いてないの?」

「なんかやたらじーさんにまとわりつかれたけど、鬱陶しくてさ。ホラ、あたしじーさんの相手とか無理じゃん?適当にあしらって後は好きにしてる。ホラ、みんな姫だつてチヤホヤしてくれるしさ」

「はあ…」

「でもさ、あたしが本物の姫じゃないってのは、さすがに自分でも分かってんのよね」

「え!?!?そうなの?」

「何も出来ないもん。神殿に連れて行かれても何も感じないし、なんかさ、いちいち人が訪ねてきて握手とか、シntax?とか求められても、何も感じないし。」

具合悪いとか言って、最近はそのゆーのも断ってるの」

(シntax?しんたく…新宅?いやいや。あ!ご神託の事?)

「そ、そんなの…あたしにだって出来ないよ…」

「ふん？そーなの？でもまあ、さすがにこの式典はね、避けられな
いっばいし。残ったのがあたしとアンタだしさ。2人揃ったらどっ
ちかは本物なわけだし、
なんとかこなせるでしょ」

「はあ…えつと、神殿に気を溜めるんだよね？」

「は？」

「式典会場のヤンテ神殿に、予めヤンテのパワーを溜めなきゃいけ
ないから、式典が
終わるまで神殿に寝泊りするんでしょ？」

「寝泊り？あそこに？ナニあんだ。あたしがそれだけの為だけに呼
んだと思ってるの？」

「…ち、違うの？」

「なワケないじゃん。式典で、そのシNTAXとやらをやんなきゃい
けないのよ」

「はあ」

「でもさ。出来るわけねーじゃん。だからさ、あたしの後ろに隠れ
て喋ってくれない？」

「えー？む、無理！…！」

「なんでよ。じゃあ、全面的にアンタが出る？」

「もつと無理！！」

激しく拒絶すると、マリコはグロスでテカテカの唇の端をにやっと上げました。

「アンタ…人前に出たり目立つの苦手なタイプでしょ」

うんうん。と頷く万里子にマリコは更ににやりとした笑みを見せました。

「いい取引だと思うけど？あたしは反対に目立ちたいの。苦勞して生活するなんて御免。」

姫って『勘違い』されるだけで、今贅沢三昧なワケよ。あたしが居るから、アンタ

地味で平凡に過ごしていられるのよ。これからもあたしが成り代わってあげる。あんたは

時々隠れて『声』がけ貸してくれりゃあ良いんだからさ」

見方によってはひどい言われようですが、確かにお互いの望みは正反対でしたから

良い取引に思えました。ただ問題は……

「もし、あたしも何も感じず、何も聞こえなかったら？」

「アンタが聞こえなかったらあたしが聞こえるはずでしょ。そんな時は後ろに隠れるのが

今回だけで済むって言よ」

「そっか…。じゃあ、あたしはどちらにしても影でいいの？」

「そーゆーコト」

「わ。分かった。やってみる！」

「じゃ。取引成立って事で。部屋案内させるから、もう出てっく
んない？」

話は終わりとばかりに、さっさとマリコは背を向けると、大きなバ
ッグの中から
ポーチを取り出し、

その中からガチャガチャとメイク道具を出していそいそとメイクを
直し始めました。

「随分大きなバッグ持ってたんだね」

「え？ああ。彼氏とケンカして荷物まとめて家飛び出したところだっ
たからね。服が入ったキャリーバッグはなくしちゃったけど、コレ
は持ってたから助かったんだけどさあゝ。
でなきゃこっち着て2ヶ月以上もたないっつーの」

2ヶ月！！それを聞いて万里子は驚きました。

元の世界と時間の流れが違うのか、持っていた腕時計が壊れてしま
った万里子には、

一体どれ位の時が経ったのか分からずに過ごしておりました。

「ねえ、なんで2ヶ月も経ったなんて分かるの？ケータイ？時計？」

「それはどっちも壊れてたけど、アレがさあ…」

「アレ？」

「アレはアレよ。生理。家出荷物だったからナプキンもタンポンも、コンタクトだってあつたけどさ。」

さすがにもう残り少ないんだよね…あんたは大丈夫だったわけ？」

「う、うん…なんとか…」

本当は、生理なんてきていませんでした。だから余計に時間の流れに鈍感になっていたのかも
しれません。

先程とは別の意味でおなかに手を当てた万里子は、この部屋に入っ
てき時から感じていた
疑問を口にしました。

「あのう…」

「ナニよ？」

「赤が嫌いって聞いたんだけど…」

「アタシ？嫌いっていうか、似合わないから好きじゃないわね。な
んで？」

「へそピアスはなんで赤い石なの？」

「赤は好きじゃないんだけど、誕生石だからね…彼氏がくれたのよ。
1月生まれだから」

「そうなんだ」

「ねえ、もういいかな？案内呼ぶよ」

「あ。いいよ！部屋って隣？なら1人で行けるから…」

「違う違う。先に神殿に入っちゃってて」

「え？あなたは…？」

「明日かな？今日は人を呼んでるから。お気に入りの子。めつちやマツチヨなんだ！」

その子、神殿には入れないみたいなんだよね。だから先行つてて！しーっかりヤンテだった？パワーを込めといてちよーだい！」

追い立てられるように部屋を出た万里子を、先程の年配の女官が迎えに来ました。

迷路のような宮殿内を歩き、外に連れ出された万里子は、未だ光の柱が夜空に浮かびあがる神殿へと導かれました。

神殿の入り口へとたどり着くと、女官は1人で中に入るよう告げてさっさと宮殿に戻ってしまいました。

神殿は、光の柱が立っている以外にも、式典の準備に追われているのでしょうか…

様々な位置の窓から明かりが漏れておりました。

そつと扉を開け、「失礼します。あのう…」と声をかけますと、意外な人物が万里子を出迎えました。

「シアナさん！」

現れたのは、ジルの屋敷で万里子の世話をしてくれていたシアナでした。

「お久しぶりでございます。式典の間、またお世話させて頂きます」

「一人ぼっちかと思っていました。あの…心強いです」

「ジル様のお考えですわ。私も一応神官の資格がありますし、うってつけだったのです。わたくし

さあ、中へどうぞ。お部屋に案内しますわ。1階は式典にも使うヤンテの間と控えの間がいくつかあるだけで、滞在施設は2階より上ですの」

「シアナ。少し手伝ってくれぬか」

シアナの声が聞こえたのでしょうか。ほんの少し開いたドアの隙間から、シアナを呼ぶ声がしました。

その部屋は、扉の大きさから、控えの間のひとつのようでした。

「あら。サク様だわ…どうしましょう」

「あ。いいですよ。私待ってますから、行ってきてください」

「そうですか？申し訳ありません。少し、お待ちくださいね」

再び1人になった万里子は、この神殿から立っている光の柱を思い出しました。

きつと、その光の柱はヤンテの間に立っているに違いありません。

万里子は周りの扉よりもひととき大きな観音開きの扉に手をかけました。

なぜだか悪いことをしているような気持ちになり、そっと、そっと、静かに扉を開け、中を覗きました。すると、やはり高い天井にある丸い天窓からキラキラと光が降り注ぎ、見事な光の柱を作っていました。

「キレイ……」

覗くだけのつもりだったのに、その光の柱の圧倒的な美しさに魅了され、万里子は吸い寄せられるように部屋の中央へと歩き出しました。

その時です。

光の柱が突然直角に折れ、万里子に向かって猛スピードで迫ってきたのです。

突然のことで身動きが取れなかった万里子は、正面からその光を受け止めてしまい、

衝撃の大きさから気を失ってしまいました。

意識の無くなつた万里子は、背中から大理石の床に倒れ………る、はずでした。

背中が床に着く直前、万里子は力強い腕によって引き上げられ、その腕の中に倒れこみました。

万里子を助けたその腕の持ち主は、万里子の無事を確認すると、彼女をぎゅうっと抱きしめたのでした。

36・身体の変化（後書き）

もの凄く長くなってしまいました（汗）

37・曖昧な返答

目が覚めた時、万里子は柔らかな寝台の上におりました。

(あれ？夢だったのかな…)

光がものすごい勢いで突進してきて、ぶつかる恐怖に目をぎゅっと閉じた時からの記憶がありません。

両手を広げてもまだ余裕のある大きな寝台で、万里子はそっと手足を動かしてみました。

特に痛みも違和感も感じず、やはり夢だったのかと思った時、目の奥にまだチカチカと光の残像が残っている事に気付きました。

「お目覚めですか？」

声が出た扉の方へと視線を向けますと、安堵した表情のシアナが桶を持ち入って来ました。

「ああ、良かった。このままお目覚めにならなかつたらと考えて私
…。
おひとりにしてしまって、申し訳ございません。お体は大丈夫ですか？」

言いながら、シアナは熱い湯に浸けた布をぎゅゅと絞り、万里子の顔を優しく拭き始めました。
その口調から、少し不安になった万里子はシアナに問いかけました。

「あの…一体、何があつたんですか？」

「覚えてらっしゃらないんですか？私がすぐに用事を終えて戻りましたら、倒れられていて…」。

本当に驚きました。ひどく汗をかいていて、熱っぽかったのですよ。あの方が

いらっしやらなかったら、大事になるところでした。それで、お加減は？大丈夫ですか？

熱はひいたようですが、どこか痛みはございませんか？」

いつも冷静で優雅なシアナの焦りように、心配をかけてしまったのだと、万里子は申し訳ない気持ちになりました。

「大丈夫です。痛いところもありません。あの…あの方って、誰ですか？その人が

助けてくれたみたいです。だからどこも打たずに済んだみたいで…」

「ルヴェル様ですよ。今は別室で薬を煎じてくださっています。まもなく戻って来られるでしょう」

「私…倒れた時ルヴェルさんと一緒だつたんですか？」

「さあ…存じ上げませんが、私が戻った時は、わたくしルヴェル様がマール様を

抱き上げようとしておりましたよ」

（だ、抱き上げて！！それはかなり恥ずかしいんですが！）

反応に困ってへらつと笑顔を返したところに、ルヴェルが神妙な顔つきで入って来ました。

「ああ。気がついたようだね、良かった」

先程のシアナと同じように、起き上がっている万里子を見てルヴェルは表情を緩めました。

「気分はどうだい？ああ…もう熱もひいたようだ」

寝台に近寄ると、端に腰掛けて長い指で万里子の顔にかかった髪を一筋すくい、そのままそろりと万里子の頬をなで上げました。

「あ、あの！ありがとうございます」

思いのほか近づいたルヴェルのつややかな微笑みに驚き、慌てて距離をとった万里子はぺこりと頭を下げました。

「何がだい？」

「あの、助けられて…だって私、あんな勢いで吹っ飛ばされたのに全然痛くないから…」

お辞儀をした万里子の頬に再びかかった髪を整えようと手を差し出しかけていたルヴェルは万里子の言葉にびたり。と動きを止めました。

「マール様、ふ、吹っ飛ばされたってどういう事ですの！？」

傍らで聞いていたシアナが慌てて問い詰めると、万里子は少しバツ

が悪そうに肩をすくめました。

「あの…ちょっと神殿の光が気になって、扉を開けてしまったんです。そしたらあの…」

光に吹っ飛ばされて…そう続けようとした万里子の言葉をシアナが遮りました。

「ヤンテの間の扉をですか！？まさかそんな…だってあの扉は力のある男でも4人がかりでやっと開ける扉ですよ!？」

「え?でも…」

「…シアナ、そろそろ薬茶セリが出来た頃だから、持ってきてくれないか?」

「え?セリ…?でございますか?まさかあんな強い薬を?」

「ああ。あれは調合してすぐは反発しあって毒素を出すから、上の空き部屋を使わせてもらった。

もう、馴染んだ頃だから、取りに行ってくれ」

万里子の言葉が気になり、部屋を出るのを躊躇したシアナではありませんが急かすような

ルヴェルの視線に仕方なく部屋を後にしました。

「…それで?マール。先を話してごらん?」

「あの…嘘じゃありません。開いたんです。ほんのちょっと覗くだ

けのつもりだったんですけど
あまりに綺麗で…気がついたら部屋の中に……」

「…うん」

ルヴェルが何かを考えるような表情になりましたが、万里子はヤンテの間で光の柱を
間近で見た興奮を思い出し、その様子に気付かずに促されるままに話し続けました。

「あまりに光の柱が綺麗で見蕩れていたら、光が急に突進してきて…ドーンって」

「ぶつかつた？」

「はい。体にもすごい衝撃を感じて…そこから記憶がないんです。気がついたらここに…」

困ったように首を傾げる万里子に対して、ルヴェルは安心させるようににっこり微笑みました。

「今シアナに取りに生かした薬茶セリは、高ぶつた気持ちも穏やかにしてくれる。

それを飲んでゆっくり休むんだ。それと…この話はこれっきりにしよう」

「え？あの、ほんとですよ？ほんとに…」

「分かっているよ。君を信用していないのではない。君は、イルーから来たお針子の見習いだ。」

女官の手を借りて
やってきたのは辺りもすっかり暗くなった頃の事でございました。
口煩い年配の神官に行くわさぬよう、そつと足を踏み入れた時、視
線の先に万里子が
倒れているのを発見したのでございます。
忍び込んだ事も忘れ、慌てて駆け寄り抱き上げたその時、シアナが
現れたのでした。

（あの時は…そう、確かにヤンテの間の扉はしっかりと閉じられてい
た…。誰か、私に来る前に去った？）

吹っ飛んだ自分を受け止め、助けたのがルヴェルだとすっかり信じ
込んだ万里子は、

「ほんとに重くなかったですか？」としきりに気にしておりました
が、ルヴェルが

「私はそんなにひ弱ではないよ。何ならここでもう一度抱き上げて
証明してあげようか？」と

悪戯っぽくウインクすると、万里子は丁重にそれを断ったのでした。

38・撃沈（前書き）

大変お待たせしました！

待っててくださった方々…ありがとうございます！

「あろう…」

「ダメです」

「…まだ何にも言っていないのに…」

うなだれる万里子を、ジルが小さくため息をつきながら振り返りました。

「何も言わなくてもわかります。どうせ、部屋の外に出たいと言うのでしょっ？」

「………」

何も答えない万里子に、いつもは穏やかなジルの左眉がぴくり、と動きました。

「違いましたか？」

「イエ…そのとおりです…。でも！あの…式典の事でジルさんも忙しいんじゃないあ…」

「全て指示はしてあります。式典は今日なのですから、準備はもう出来ていますよ」

神殿に来て早々倒れてしまった万里子はそれからというものの、部屋の外に出る事を許されず、

ジルの監視の下、ただひたすらぼんやり一日を過ごしておりました。

「でも、でもですね？外からはいまだにどつたんばったんと物音がするじゃないですか。

まだお仕事あるんじゃないあ…」

「大・丈・夫、です。あれ位の仕事がこなせないようでは、神官なんて辞めてしまえばいいんですよ」

なにげにブラックな事を言うジルでしたが、優しく優雅なジルしか知らない万里子はすんなりとそれをスルーしました。

「それより…あの女…いえ、マリー姫が式典の最中、後ろで控えているように言ったのですね？」

「はい。えーっと、式典で神託？をするんですか？で、どつちかが本物なんだから後ろに控えていてくれって…」

「ええ…式典の最後ですね。ヤンテの神託があります。ですが、このように形ある神託を行うのは実は初めてなのですよ」

「え？そうなんですか？」

「ええ…。今までの歴史でヤンテが消えた事など無かったのですよ。そのヤンテの復活と共に現れた赤い石を持つ姫……。この姫が一体どんな存在なのか…まだ謎に包まれています。

ですが、ヤンテに関わりがある事は確かでしょう。闇から抜け出せ

た喜びで、各国の王族も姫を一目見たい。何かお言葉がもらえるかもしれない。そんな思いを持ってこの式典に向かっているのです。その要望に応えるために、そのような場を設ける事にしたのですが……」

まさかあなたがこのように巻き込まれるとは……と、神妙な面持ちで続けたジルの言葉よりも、万里子には気になった言葉がありました。

「なぞ！姫って謎に包まれているんですか？何か使命があったりとか、異界の娘しか取りにいけない聖剣があったりとか、そんなの無いんですか?!」

「ありませんよ？私が祖父の霊から告げられたのは、消えていたヤンテが異界から現れる少女を召還する事で復活するという事だけでした。ヤンテの姫だからと言って特に使命があるなどは……ああ。使命があるとすれば……」

「！やっぱりあるんですか!?!」

「ヤンテの復活ですよ。そのためにあなたは呼ばれたんですから。使命は果たされたと言っても良いでしょうね」

「果たされた……」

伯母の書くファンタジー小説をいつも読んでいた万里子の頭には、召還されるからには使命があり、時には危険な旅に出たり、魔王の退治という異界の大問題を丸投げされたり、時には意に添わぬ相手と結婚させられるのではないかといった考えがありました。

自己主張がなによりも苦手な万里子には、到底出来ないと恐怖を感じ、ならばいっそひっそりと手に職（お針子業）をつけて生きてい

こうと考えていたのです。

それが、ジルはヤンテの姫に使命があるのならば、それは既に果たされたと言います。

当然、万里子の頭にはひとつの可能性が生まれました。

「じゃあ…帰れるんですか？」

万里子が期待を込めた目でジルを見上げると、ジルは悲しげに微笑みました。

「すみません…。方法が無いのです。それに、ヤンテと関わりがあるのは確かですから、あなたが消えたと同時に、またヤンテが消えてしまつとも考えられるのです。それに、マールの言う使命とやらがあるのなら、果たすと同時に元の世界に戻っているはずです」

ジルにわずかな期待を打ち砕かれ、万里子はがっくりとうなだれました。

「そうですね…小説でもそうでした。帰れるか、そこで平和に暮らしてメデタシメデタシとなっていました…」

「やはり帰りたいですか？ここで…そのメデタシメデタシとはいきませんか？」

「帰り……たいです。あの！ここで皆さんのとてもよくしてもらってるんですけど、皆さんの事……とっても大切なんですけど…でも、家族に…会い、たいです」

「私達を家族のように思つて、甘えてくださつていいんですよ？私にとつて、もうあなたは何者にも変えがたい…かけがえの無い人なんです……」

ジルの熱い想いを込めた言葉は、女性なら誰しも頬を赤く染めたことでしょう。

しかし、恋愛感情に疎い万里子はまたもスルーしてしまいました。それどころか……

「ジルさんには本当に感謝しているんです。危なつかしい私をいつも助けてくれて、ジルさんが近くに居るってだけで、すごく安心するし……あの、私のパパみたい！」

「は、パパ？とは？」

不思議そうに首を傾げるジルは、次の瞬間カチン！と固まりました。

「お父さんの事です。あ！勿論ジルさんの方が若くてカッコイイですよ？」

万里子の少しのフォローも、見事に固まったジルの耳には入りませんでした。

いえ、たとえ聞こえていたとしても、何の慰めにもならなかったに違いありません。

突然固まったジルに気付いた万里子は、原因が分からずに慌てだしました。

そしてそれは、シアナが二人を迎えに来るまで続いたのです。

38・撃沈（後書き）

みじか！

すみません。うまく話を切れませんでした（汗）

39・複雑で単純なもの(前書き)

説明くさくなりました(･･････)

39・複雑で単純なもの

「ジル様、マール様、そろそろ……あ、あら？」

軽いノックの後、少しドアを開け中の様子を窺ったシアナは、室内の予想外の様子に少し入室を躊躇しました。

微動だにしない主の後姿と、そのすぐ傍をいかにも困った風にチョロチョロと動き回る万里子の姿があつたのでございます。

「マール様…一体何が？」

「それが…分からないんです…」

助けを求めるように、振り返った万里子を見て、シアナはどうしたものかと頬に手を当てました。

「シアナさん、ジルさんを迎えに来たんですよ？式典、始まるんですよ？」

「ええ…ですが、私が迎えに来たのはマール様ですよ？」

「え！？部屋から出ていいんですか？」

「はい。お倒れになったという事で、ギリギリまで休養して頂くおつもりだったようです。その…マリー姫のお手伝いをされるのですよ？マール様がおつもりなら、ジル様は協力は惜しまないと…」

「私、色々失敗するし倒れるので、式典が終わるまで謹慎なのかと思っていました！」

「ジル様も、心配なさっているようですよ。ですが、マール様が本当に望む事ならば反対は致しません。ですから、ここに私を呼んだのです。」

「……やっぱり、パパみたいです。これ以上ないって位、守ってくれようとするんです。なんでそんなに……」

「マール様…その、パパとは何のですの？」

「父親の事です。私がいた世界では、父親の事をパパ。母親の事をママと言っていました」

「それ……もしかして、ジル様に……」

「言いましたよ？家族のように思っていて欲しいと言われて、パパみただって。あ！でも、ジルさんの方が若くて綺麗で！性格の話だったんですが…やっぱり気を悪くしたでしょうか？」

話しながらしゅん。と頂垂れる万里子を見て、シアナは大きく頷きました。

「それですわ。マール様。いえ、老けて例えられたとか、そういうのではありませんの…つまり、家族のように思っていて欲しいけれど、家族のように感じて欲しくないのです」

「?????どう、違うんでしょうか……」

「微妙なようで、大きく違うのですわ。複雑な男心というものです」

「複雑なオトコゴコロ……」

なんとなく繰り返しはしてみたものの、万里子にはさっぱり理解できませんでした。

「ですがこのままでは埒が明きませんわね。ではマール様にとってルヴェル様やイデイ様はどのような存在ですか？」

「ルヴェルさんですか？えーと……ママ……かな……性別は違うけど、とにかくやってみろって私を引っ張る母だったから、ママのような存在です。イデイさんは兄みたいですし……」

「では、何度かお会いになったという殿下は？」

「うちの家族に、あんな偉そうで失礼なのいませんよー！」

今までのクラムルードの言動を思い出し、心底嫌そうに手を降る万里子を見て、シアナは満足気に頷きました。

「……だそうですよ？ジル様」

「え？」

突然話をジルに振られ、驚いて振り返ると先程まで固まっていたのが嘘のように優雅な微笑みを湛え、瞳は生き返ったかのように生き生きしておりました。

「あれ？ジルさん、もう平気なんですか？」

「勿論ですよ？さあ、マール、参りましょう。マントを忘れないでくださいね。そろそろ参列者も入場します。」

「は、はあ………」

先程からのジルの豹変ぶりに戸惑う万里子が、思わずシアナに目で問いかけますと、「男心は複雑でもあり、単純でもあるのですよ」と小さな声で返されました。その時の意味深な笑みを湛えたシアナの瞳と更に難解になった言葉に、万里子は益々戸惑ったのでした。

むー。と難しい顔をして考え込んでいた万里子に、すっかり立ち直ったジルが手を差し伸べました。

「さあ、マール。こちらへ」

室外に出たマールは、天窓から降り注ぐ明るいヤンテの光と、階下のざわめき、そして人々の熱気に驚きました。もうかなりの人数が、広間に入場しているようでした。

「ここからはシアナに任せます。彼女が裏手に連れて行ってくれますから、どうか、無事やり過ごしてください」

両手を取られ、真剣な眼差しを向けられた万里子は、大きく深呼吸するとすっかりジルを見つめ返し、「はい」とよどみなく応えました。

ジルは安心したのか、一度大きく頷くと、部屋を出てすぐの階段をおりて行きました。

「マール様、ではこちらへ……。ああ……フードはもう少し深く被って

「くださいませ」

フードを押し下げ一気に視界が狭くなったマールの手を引き、シアナはそのまま2階の端まで移動するとすばやく周囲を確認し、小さく呪文を唱えました。

すると、少し身を屈めないと入れないような小さな扉が姿を目の前に現れました。

シアナは驚いている万里子をすばやく扉の中に押し込めると、自身も後から続きました。

2人が扉を通り抜けると、扉が締まりきる前にその姿ごと消えてしまい、後には白い壁が残りました。

一気に人々のざわめきが大きくなります。

今、シアナと万里子は2階からヤンテの間を見下ろしておりました。吹き抜けになつたヤンテの間には、大きな観音開きの扉が1階中央に1つあるだけで、今はその扉も大きく開け放たれ、そこには次々に色鮮やかな衣を纏った老若男女が並んで入場しているところでした。

万里子たち2人がいる2階席は、広間を囲むような造りのバルコニー席になっておりましたが、他に人はおりません。それどころか、扉さえもありませんでした。

「扉はあの大きな扉のみなのです。2階席へは、先程のように呪文が必要で、神官の案内無しでは入れないようになっております。それに、今日は姫のお披露目式典。姫を見下ろすのは失礼に当たりますので、今日の式典では2階席は使用致しません」

「え、じゃあ、私達がここに居るの、マズいんじゃない？」

「大丈夫ですわ。あちらからは見えないようこの場所にはジル様が予め術をかけてあります。それに階下の姫は本物ではないのですか

から見下ろしたところで、問題ございませんわ」

「そ、そうですか…」

シアナの言葉に、少し居心地悪そうにバルコニー席に座り直した万里子は、もう一度階下を見下ろし、ルヴェルやイデイが参列者席に既に着席しているのを確認しました。

参列者席から少し距離を開けて、階段で5段分高くなった場所に玉座を思わせる立派な装飾の大きな椅子があり、ジルはその上手側の階段下に控えておりました。

「あれは式典の間、マリー姫が座るお席です。そのすぐ後ろに、分厚いカーテンが幾重にも吊るされております。姫の椅子のその真後ろに、一人が入れる程の空間がございます。神託の時、マール様にはそこで待機して頂きたいのです」

シアナが指差した先には、たつぷりとしたドレープの深紅のカーテンが椅子の後ろの壁一面にかけられておりました。

「どのような事が起こるか分かりませんが、ご一緒したいところなんですけれど…」

上手に人が隠れる空間が作られているとはいえ、さすがに2人で潜んでいては不自然に見えるかもしれません。

それに、高位の神官として神殿に来ているシアナが式典の間姿を見せない事を訝しく思う者もいるかもしれません。

「大丈夫です。きっと、何も起こりません。ただそこに座っているだけで済むと思います」

動きやすい普段着を着ていて良かったあ。ルヴェルさんに作ってもらったあの衣が無駄になった事は残念ですけどね。そう言葉を續けてシアナに安心させるように笑顔を見せた万里子でしたが、シアナはその笑顔を見ても心配が増すばかりでした。

「最後の神託まではここで見学してもいいんですか？」

万里子の視線は、既に階下にありました。次々と入場し、席を埋めて行く人々を物珍しそうに眺めています。

「あ！今入って来た人達はどこの人達ですか？」

開け放たれた扉から入って来た一団は、それぞれ濃淡はあるものの、全員茶色の髪と瞳を持ち男性も女性も浅黒い肌をしており、アイボリーの衣に金の装飾を付けておりました。

「あれはサイナとハナク、両方の領地に接する隣国のガルデイスという国の民族ですわ。ガルデイスは土を操る民族が暮らしており、ます。険しい岩山が多く、建築が盛んな国ですわ。ジル様のお屋敷も、宮殿もガルデイスの一流技術師が手がけたものです」

説明を聞いて、万里子はなるほど。と納得しました。

それだけ、視線の先に居る彼らは一様に大柄で遅しく、万里子が知る中でも一番背の高いイディさえも見上げる程ではないかと思えました。

「わあ！すごく綺麗な人達！あれ？顔の横に皆さん何か付いていますけど…」

ガルデイス人に続いて入って来たのは、対照的な色合いの民族でし

た。
透き通るような白い肌に、髪も目も淡い紫色をしています。衣も薄紫色をしており、姿は華奢で、細く長い手足を持って余すように歩いています。
装飾品もなくとてもシンプルに見えるその一団でしたが、全員顔の横に紫のガラスのようなものを付けておりました。

「ガルデイスとサイナに接するスイルという国の民族です。スイルは、平坦な地に湖が点在する国で、彼らは水を操ります。両のこめかみにあるあれば、付けているものではありません。身体の一部で、水眼すいがんと言つのですわ。水眼があるのがスイルである証拠。術を使わずとも水中で息が出来ますし、どんなに濁っていても目が見えるのです」

「それは便利ですねえ！もっと沢山の国があるんですか？」

「いいえ。大きな国は、あとはイルー位ですわ。あとはそれぞれの民族が混じった少数民族が居る小国が散らばっております。国とは言いますが、全てラウリナかガルデイス、スイル、イルーの四大国いずれかの国の支配下にありますのよ」

「そうなんですか。あ！じゃあ、次の人達がイルー人ですか？」

階下には銀色の衣に銀の装飾品を付けた一団が入って来たところでした。

光の加減で美しくキラキラと反射する銀の生地でしたが、一見すると灰色のようでもあり露出も少ないそのデザインは、殆どの参列者の髪と瞳も灰色であった事もあり、少し地味な印象がありました。

「あ！黒髪の人があります！なんだか嬉しい！…でもフードを被って

る人もいるし上からだとよく見えませんが、やっぱり黒い瞳の人はいないようですね…イルーは学問や研究が盛んなんですよね？」

「ええ。資源に乏しい地なのですが、学問や研究に力を入れております。ヤンテの高名な研究家一族もおりますから、本日も参列なさってる事でしょう。ラウリナなど他国からも、イルーには研究に渡る人がおりますのよ。決して交流が無いわけではないのです」

「え？そんなんですか？でもイルーは遠いのもあって、あまり知られていないと聞きましたが…」

「ええ。こちらから行くのは行くんですが、その者達が帰って来ないので、イルーに関する情報は特に少ないのですよ」

「え！何か危険があるんですか？」

「いいえ。多分…無いとは思っています。ただこちらから行った者も研究に没頭してしまって、あちらに居ついてしまうのですわ。それに場所によっては、ヤンテの光が全く届かない場所もあるようです。そのような場所にはこちらの大陸の者は寄り付きません。ヤンテが消えてしまっただけからは、海が凍りつき行き来も途絶えてしまいました。」

大柄で筋肉隆々のガルディス人に、華奢で手足が長い水眼を持つスイル人：それぞれの特徴がよく出た風貌をしておりましたが、イルー人もまた、他の民族とは違う特徴がありました。

（なんか…親近感湧くってどうか…）

万里子は自らの鼻をつまんでみました。

そう、イルー人は他の民族に較べて凹凸の少ないとても平坦な顔をしていたのです。

(この平坦さでイルー人になりきるように言われたのなら、ちょっと凹むけど…)

そんなことを考えているうちに、参列者は全て席に着き会場のざわめきは最高潮に達しました。

「姫だ！」

「あの方が…!!」

「光を取り戻してくださったのだ…!!」

「なんと神々しいお姿なのでしょう…!!」

広く取られた通路を、老神官のサクの後に黄色の衣を来た不機嫌な表情まるだしのクラムルードに伴われてやって来たのは本日の主役、マリー姫でした。

マリー姫は全身を光沢のある黄色の衣と様々な大きさの金の装飾で着飾り、この度ラウリナで流行させたというウエストシースルーでしっかりとびれと臍ピアスを強調しておりました。軽く腰を揺らし、顎をツンと上げて歩くその姿を見て、人々は感嘆の声をあげました。マリー姫はその歓声に驚くどころか当然とばかりに左右を見渡し、軽く手を振りました。

(す、すごい…何これ、レッドカーペット!?)

万里子がそんな風に少しずれたツツコミを入れる中マリー姫は手を振り続け、そんなマリー姫の様子をクラムルードは呆れたように見ておりました。

大げさなほど立派な椅子にたどり着き、マリー姫がふんぞり返るように座り足を組むと、クラムルドは階段をおり、参列席の最前列中央の空席に腰掛けました。

（すごいなあ。こんな空気の中で全員に見られて平然と座ってられるなんて）

万里子は彼女の動じない様子に感心しながら見守っておりました。この世界を救った姫が目の前に現れたのです。参列者も話す事も止め、食い入るようにマリー姫を見つめていました。

ですが、万里子の思うように全員ではありませんでした。

一対の目が、バルコニー席に向けられておりました。もつとも、結界に守られている事に安心していて、万里子はおるかシアナでさえもその視線には気付きませんでした。

40・光の声(前書き)

すみません。ちょっと短めです。キリの良いところにしてあげようと思っ
たら、短くなってしまいました(´・`・´)

40・光の声

薄紫の薄いストールを纏ったお揃いの衣を着た若い女性達が、ひらり、ひらりと軽やかに踊ります。

彼女たちのステップは足音もなく、ただただ長いストールが空中を舞う、しゅるん。しゅるん。という音がするだけでした。

式典の中盤、各種族の奉納の舞が行われておりました。

スイルの娘の舞は流れるような美しさで、万里子はほう。とため息をつきました。

対するマリー姫はと言いますと、欠伸を隠そうともせずにとうとう頬杖をついてしまいました。

先程までのガルデイスの逞しい男たちの力強い舞は、身を乗り出すように見えては手拍子をし、時には片手を突き上げ振り回していた程だというのに、です。

(マツチヨが好きって、本当だったんだ…)

「…マール様」

万里子は、シアナの声が少し強張っている事に気付きました。

「どうしたんですか？」

「そろそろ、舞台裏に参りましょう」

「え？もうそんな時間なんですか？」

万里子は焦りました。少なくとも、四大国というイルーとラウリナの奉納の舞が残っていると思っていたのです。

「いいえ…ただ、あの…」

先程まで、一緒になってスイルの舞を「綺麗ですわねえ」とつつとりと呟いていたシアナではありませんでした。

「何かあつたんですか？」

その言葉に、すばやく回りに目を配ります。

「視線を、感じるのです。移動した方が良いと思われまますわ」

「え！？だつてここはジルさんの結界が…」

「ええ…高位の術者であればある程、結界の存在は気付かれるのです。ただ、宮殿敷地内はあちこちに結界や術がかけられておりますので、結界の存在に気付かれたとしても何とでも説明できますので構わないのですけれども…念のため…そろそろ離れましょう」

「私達も、見られたでしょうか？」

「ジル様に匹敵する術者でなければ見破ることは出来ません。大抵の術者は、そこに結界が張られていると気付くだけなので、姿までは見えていないと思うのです。ただ、視線の人物が特定できないので…はつきりお答えできませんわ」

シアナは悔しそうに口を歪めると、自分のローブで万里子を隠すようにしながらバルコニー席の端にすばやく誘導しました。

に小さくなつて座り込み、分厚いカーテンの向こうの様子を少しでも知ろうと、耳を傾けていました。

すぐ目の前に、マリー姫の座る椅子があるのでしょうか。

「…頼んだわよ」

囁くような声が聞こえました。

「ガンバリマス…」

小さな声で返事をした後は、小さく呪文を唱えるジルのかすかな声と、時折杖がたん。たん。とリズムカルに床に打ち付けられる音だけが聞こえてきました。

ひととき大きく、だん！と杖が床に打ちつけられると、ジルのかすかな声さえも聞こえなくなりました。

ピンと空気が張り詰めた広間では、誰もが息をするのを忘れたかのように、マリー姫の様子を窺っておりました。

が、何も起こりません。

少しずつ、広間がざわついてきて万里子は「やはり私は姫じゃないんだ…」そう諦めのような安堵のような複雑な感情のため息を、ふと洩らした時でございます。

万里子はおなかのあたりが熱を持ち、それが段々全身に広がってゆくを感じました。

「あ…あ！あ…あ…！」

思わず声を洩らしますが、その声は徐々に大きくなる参列者のざわめきにかき消されました。

ただ、すぐ傍にいたマリー姫の耳には届いたようでございます。

「何？何なの？なにか、キタ？」

もう、その質問に答えることは出来ませんでした。万里子の意識は、身体の中で何かの力によってぐーっと奥底へと引きずりこまれてしまいました。

「何も起こらないではないか！」

1人の参列者が、とうとう焦れたように声をあげました。
すると……

『うるさいのう。また、戦でも始める気かの？ガルデイスの王よ』

万里子でも、ましてやマリー姫の声でもありませんでした。

広間全体を包み込むような、少ししわがれた深みのある声が響いたのです。

立ち上がりかけていたひとときわ大柄なガルデイスの王、ジャーレは壇上の姫をぼかんとした顔で見つめると、力がぬけたように座り込みました。

今や広間で言葉を発するものは誰もおりませんでした。

誰しもが、壇上の姫を見つめておりました。

壇上のマリー姫が、赤い光に包まれるように輝いていたのです。その姿を見て祈りを捧げる者、涙を流す者など反応はそれぞれですが、全ての視線はマリー姫に注がれておりました。

実際に白く光を放っていたのはカーテンの中に居た万里子でございます。

ましたが、離れた場所に居る人々の目には、カーテンの色を通し赤くなつた光をマリー姫が放っているように見えたのです。マリー姫は真後ろの眩い光に圧倒されて、振り向くこともできずにおりました。

『人間の前に現れることになるとは思わなんだ。じゃが、自分達の力を過信し、神の存在を忘れ古の力をなくしつつある人間に、私の思いが届くはずがあるまい』

参列者は皆一様に椅子から降り、両膝をつきました。貴族も、王も…。

『よく聞け。人間よ、我の子よ。力を失いつつあるお前達には、もう我の声を直接聞く事は出来ぬ。声を届けるには、依代よしろが必要になつたのじゃ。だが、信仰の心が無ければ我も消えるのみ。そうなれば、この世界は闇に包まれ、大地の草木は枯れ、湖は干上がり、広大な海は永久に凍るであろう』

「それは…またこれまでの闇の時代に戻るのをございますか!？」

誰かが、悲痛な叫びをあげました。

『…17年前、我は消えるだけであつた。だが、最後の力を振り絞つて1人の赤子に力を分けたのだ。その赤子に分け与えた力が回復するまでには17年というのは必要な時間だつた。だが、まだ充分ではない。この娘を依代よしろと出来る時間はそう長くない。この場で、全てを語ることは出来ぬ。神を忘れ自らの力に酔い、戦を起こした人間を、我はまだ信じることは出来ぬ。』

「では…どうすれば!?!」

『ガルデイスの王よ。国一番の岩山の頂上に、神殿を造るのだ。スイルは一番大きな湖の中洲に。イルーは我の光が届かぬ闇の森の奥深くに。そしてラウリナはここヤンテ神殿で。四大国全てで、季節が変わった最初の日に祈りを捧げよ。さすれば、我の力は今まで通り大地にも与えられるであろう。良いな?』

「お待ちください!まだお聞きしたいことがございます!」

光が徐々に薄れていくのに気付いたクラムルードが叫びました。

『なんじゃ』

万里子は、ゆらゆらと意識の湖の中で漂っておりました。

まぶしい光が、ずっとずっと上のほうに見えます。人々の話し声がかすかな振動となって身体に響きますが、何を話しているのか分かりませんでした。

ゆらり

ゆらり。

(綺麗な光…)

ずっと上で輝く光を見つめていると、急に身体を引っ張り上げられました。

気がついたら、丸く縮こまった体勢で、カーテンの隙間にちんまり

と座っております。

まだぼんやりする頭を振ろつとした万里子は、突然肩に強く手を置かれ、その感触に一気に覚醒しました。

（儀式が終わって誰か迎えに来てくれたのかな）

そう思い振り返った万里子の目の前に、見た事のないピンク色の瞳がありました。

「きゃっ！」

驚き、後ずさった万里子を目の前の少年はすぐに腕を掴み、逃げられないように拘束しました。

（どうしよう！見つかった！）

「君、誰？こんな所でなにをしているの？」

鋭く畳み掛けられた質問に、万里子は恐怖からぎゅっと目を瞑りました。

40・光の声（後書き）

きつと予想通り…衝突してきた光の柱の正体です。

41・透明王子

「ねえ。ちよつと。僕の言う事が聞こえないの？」

蹲る万里子の肩に置かれた両手に、更にぐつと力がこもります。

「ねえ、光ってたの、君でしょ？僕さ、早々に席から立ったから、横から見えたんだよね。皆はあの女が光ってたと思っただけだよ。どうしよっかな。これ、今大声出してばらしちゃおっか？」

「…や、止めて、ください」

俯いたまま、万里子はふるふると力なく顔を横に振りしました。

「なんでさ？あの女、偉そうで嫌いなんだ。君が姫だって分かったら君だって宮殿で優雅に暮らせるんだよ？」

そうだろ？そう続けると、少年は自身もしゃがみこむといつまでも俯いたままの万里子を覗き込むように顔を近づけました。

それでもなお、小さく小さく顔を振り続ける万里子の様子がおかしい事に、やっと気付き、少年は肩に置いた手を少し緩めました。

「違う…ちが、うんです。私じゃ、だめ、だから…選ばれて、ない。望まれて…て、ない…からっ」

真つ青な顔で呟くように紡がれるその言葉は、それでも少年の耳にしっかり届きました。

ふつとピンク色の瞳に宿った鋭さが消え、大きな瞳が困ったように揺らぎます。

「なんだよ、ねえ、どうしたの？これじゃ僕が悪い事したみたいじゃないかっ」

とうとう万里子はその場に両手をつき、自分の上半身をやっとの事で支えておりました。

「だい、じよぶです。ただっ身体が重くて…力が、入らな……」

「誰か呼ぼうか？」

「だめ、です。多分、事情を知ってる人が…来て、くれると思うので…」

すると万里子のすぐ背後のカーテンが乱暴に開けられました。

重い頭を、それでもゆっくりをめぐらせると、そこには目を吊り上げたマリー姫がおりました。

「ちょっと！！途中で喋るの止めてんのよ！」

「え…？ごめ…全然、私覚えてなくて…」

「はあ！？アツチは色々皆して質問責めにしてくるしさあ。アンタの中のは喋んなくなるし…」

グロスでも塗ったのか、てらてらと光るその唇を不満げに尖らせました。

（ああ…天ぷら、食べたいなー）

そんな事をぼんやり考えながらも、マリー姫を見つめていた万里子は一生懸命口を開きました。

「ごめんなさ…あの、何か、おかしい事につ…なりそう…?」

「ダイジョブだと思うけどお。とりあえずテキストに答えて、後はなんかもうアイツ居なくなったからって言って終わらせたけどさ、焦るじゃん!」

「……ちよつとさあ、聞いてりゃ自分の事ばっかだけど、この子具合悪そうんだけど見ててわかんないの?」

足元で蹲る万里子を責める事に頭がいっぱいで、その万里子を支えるように肩に腕を回した少年の存在を、マリー姫はようやく目に留めました。

華奢でまだ線の細い、女の子に間違われそうな位愛らしい顔立ちをした少年の事を一瞥すると、マリー姫はふん。と鼻を鳴らしました。

「あら、居たの。いつつも存在薄いから、分かんなかったわ。アタシがこの子をわざわざ呼んだんだから、ハンパに仕事してもらったら困らだつて。この子だつて困るでしょ」

「なんでさ?この子が本物だろう?僕、見たもの」

「……ふうん?だから何だつての?誰がアンタの言葉を聞くわけ?それに、この子が影になる事を選んだのよ、アンタと同じ。ね?透明王子さま」

『透明王子』……その言葉を聞いて瞬間、少年の瞳から一切の感情が消えました。

意識ははっきりしているのに、身体中が重くて視線を上げられない万里子でしたが、それでも少年の変化には気付きました。

「姫！一体どこへ!？」

「どこにいらっしやるのです!?!??」

マリー姫に付いていた神官達の慌てたような声が聞こえてきました。

「…ここよ！今行くわ。カーテンの裏に靴を落としちゃったのよ」

マリー姫は大きな声でそれに応えると、外に出ようとしたところで2人を振り返りました。

「お似合いかもね、アンタたち。2人とも透明人間だもん」

少年は大きな瞳で憎らしげにマリー姫を睨みましたが、マリー姫はそんな事など気にするはずも無く、すぐにカーテンの向こう側へ消えて行きました。

「あーム力つく！あのさあ、あんなに好き勝手言わせていいわけ? ……つて、ちょっと!ねえ!」

少年は万里子に視線を戻すと、その様子に慌て始めました。

「ごめ…あの。ちょっと…倒れます…」

「はあ!?!そんな宣言しないでよ!」

初対面の少年に対し、いきなり目の前で倒れるのは申し訳なく思っただ万里子は、律儀にそう宣言するとどんどん重くなる身体に耐え切

れずにとつとつ意識を手放したのです……。

.....

万里子が意識を失つてすぐ、カーテンの中から出てこない事を心配したシアナがやって来ました。

「マール様っ！……と、ネストロード様？」

すっかり意識が無くなった万里子を、困ったように抱えていた末の王子を発見し、シアナは戸惑いました。

「コイツがいきなり倒れたんだ！僕は何もしていないからな！」

シアナは無言で2人に近づきますと万里子の脈や熱、規則正しい鼓動を確認するとやつとネストロードに向き直りました。

「失礼致しました。ネストロード様……私はナハクわたくしの魔術師でシアナと申します。マール様の滞在中のお世話をしております」

狭い空間でなんとか略式の礼をとると、シアナは早速ネストロードから万里子を引き取りました。そして『お願い』を言い出しました。

「ネストロード様、『お願い』がございます」

「はあ？」

「マール様をお運びするのを手伝ってくださいませんか？」

「は？なんで僕が？」

「お一人で緊張しているマール様を驚かせたのではないのですか？それに、どうやら式典の最中にお席を外されたようですが、それは皆様ご存知なのでしょうか？」

一瞬にして、むう。と渋い顔になったネストラードは、それでも首を縦には振りませんでした。

「別に：こそそしてたわけじゃない。それに、僕が席を外しても誰も何も困らないし、誰も気付いてないじゃないか」

「あら。まんまと抜け出せても、結局後からバレてしまったては一緒ですわ。王族の一員であるネストラード様が抜け出していたとあつては、他の国の参列者に示しがつかずに：」

「わかったよ！運ぶのを手伝えばいいんだろっ！？」

「さすがネストラード様はお優しいですわ！感謝いたします」

と、取ってつけたように感謝の言葉を述べるシアナに呆れながらも、ネストラードは一度は万里子から離れた腕を、今度は労わるように優しく肩に回しました。

自分と同じ、人の目には入らない透明な人間だと言われていた万里子を見つめる大きなピンク色の瞳は、もう万里子を面白がってはおりませんでした。

「透明人間、か…。手伝わせるのだったってどうせ、僕が居たら誰かに

見られても深く追求されないからだろ？」

「そんな事は……」

困ったように微笑み、慎重に言葉を繋ごうとしたシアナをネストラードは視線だけで遮りました。

「いいよ。今回は追及しないでおく。僕もこの子を驚かしちゃったしね」

「…感謝致します」

今度の言葉は、心からの言葉に聞こえました。

「皆様は数刻後に行われます夜会の為に、宮殿のそれぞれの控えの間に向かわれていると思うのです。ですから人目は無いと思うのですけれど…」

「分かったよ。さつさと運ば？さすがに夜会が近づいたら僕も行かないやいけない」

2人で万里子を慎重に抱えなおし、周囲を警戒しながらカーテンの外に出ましたが辺りは静まり返っており、神殿に詰めているはずの神官の姿さえ見えません。

不思議に思いながらも、急いでバルコニー席への階段を上り始めました。

3人の姿が見えなくなったところで、1人の男が舞台裏の暗がりから姿を現し3人が消えた階段の先をじっと見つめると、男はすぐに舞台裏を出て正面扉に向かって颯爽と歩き出しました。

扉の前まで着くと、外側からギギギ…と重い音をさせ、扉が開けら

れます。神官の中でも、若く体格の良い4人が顔を真っ赤にしながら扉を引いております。

男は広間を出る前に、一度だけ振り返りました。

3人が消えたバルコニー席：男がいくら目を凝らしても、その赤い瞳にはジルが施した結界により空席のバルコニー席が見えるだけでした。

「クラムルード様。人払いまでしてお一人で舞台裏へなど…如何なさいました？」

広間の外から、老神官サクのしわがれた声が聞こえました。

「サク…あそこの結界が視^みえるか？」

「…強い結界ですな。ジル様の術と思われれます。あの方の施した術を見破れる人間など、おりません。私の目にも空席のバルコニー席しか見えませぬ。この式典では様々な場所に術がかけられております。ですが、何か気になる事でもございましたか？」

「…いや。もう良い。父上の元へ行こう。夜会の前に、式典の報告をしなくては」

クラムルードはもう振り返る事なく広間を出、大きな扉はまた重い音をさせながらぴったりと閉じられたのでした。

42・柔らかな肌 side クラムルド (前書き)

クラムルドの1人語りです。

今回ナレーションはお休みしてますので、いつもと語尾が違います。

42・柔らかな肌 side クラムロード

父上……いや、陛下への報告は簡単なものだった。

式典の様子を一通り話すと、大きな寝台に横たわったまま「そうかとだけ言った。

「……ガルデイスの王が起こした戦を……責めておりました……」

顔を窺いながらそう付け足すと、陛下は僅かに眉をピクリと震わせ、少しの沈黙の後、「……ご苦労だった」と告げた。そう告げられてしまうと、もう退室せざるとえない。固く閉じられた瞼は、この日も開く事がなかった。

瞳を閉じたままの陛下に向かって恭しく臣下の礼をするサクを横目にさっさと踵を返すと、陛下専属の女官によって既に部屋の扉は開けられていた。

寝室の外は陛下の執務室があり、更に隣には会議室と応接室があり、順に通り返けてやっとな廊下に出る事になる。

広大な王の棟の奥まった一角がこのような造りになったのは、約10年前だった。

あれからもう10年か。ふう、と大きく息をつくると寝室を出てから3つ目の扉を潜り抜けたところで待機していた兄上^{イデイ}が目に入った。

兄上が、寝室に繋がるこの通路兼私室に入る事は許されていない。

兄上だけじゃない。弟もだ。

廊下で待機していた姿を見て、またそれを思い知らされる。急に肩が重く感じられ、思わずもうひとつため息をついた。

「早いな。もう終わったのか」

「ああ。姫はヤンテ復活の役割と同時に依代でもあったみたいですよ。って、それしかないからな」

「そうか…陛下のご様子は、どうだ？」

避けられているとはいえ、兄上にとっても実の父親だ。やはり気になるんだろう。躊躇いがちにそう聞いてきた。

「相変わらずだ。会話らしい会話なんて無い。今日だって『そうか』と『ご苦労だった』だけだ。病状は…わからねーな。サクが出てこないところを見ると、サクには何か話してるんじゃないか？」

元大神官であるサクは、同時に陛下の主治医でもあった。

俺が先に退室してきたとはいえ、しばらく経ってもまだサクが出てこないところを見ると俺がさっさと退室した後に呼び止められたのだろう。

「そうか…目は…」

「知らね。閉じたままだった。顔を向けられる事もなかった。横になっただまま、顔は天井に向けて固定されてたよ」

陛下は、17年前のヤンテ消失で自分を責め、思い悩んだ末に病に倒れた。

当時外交があまりうまくいっていなかった。ヤンテの恩恵を一心に受けるラウリナへの侵略をガルデイスが目論み、水面下でスイルを味方に引き入れていたのだ。

戦が始まり、力のある貴族と、ラウリナに住む種族だけが持つ聖獣が狙われた。

聖獣はヤンテがラウリナに与えた恩恵のひとつだと言われている。スイルとガルデイス、イルーは聖獣を持たなかった為、妬みとなり最初に狙われたようだ。

かなりの聖獣が殺された。サイナは緑の精霊を従えていた為聖獣とは少し違うが、この戦をきっかけにして力のあるサイナ人も精霊の姿を見る事はできなくなってしまったという。陛下はこれ以上の被害を防ぐ為に、まず王都を封鎖した。その途端、ヤンテが消えた。世間ではヤンテが消えた事による混乱を避ける為に王都が封鎖されたと思われるが、封鎖の指示を出して宮殿の門を閉じたのが先だったのだ。

それが民を捨てる行為だったとヤンテが判断して見放されたのだと思ひ込み、陛下は自分を責めたのだ。

病に伏してからおよそ7年、陛下は視力を失った。

それ以来、瞼も重く閉じたままだった。それから、仕事も気を許せる貴族の重鎮ばかりを傍に置き、自分の執務室にこもるようになった。

だが取り巻きも年をとり、ひとり、またひとりと減っていき、陛下自身の病も一向に治らず、王位継承権筆頭の俺の負担は大きくなるばかりだった。

本当は……^{イディ}兄上の方が王に向いているのに……昔からそう思っていた。俺だって父上から父親らしい事をしてもらった事などない。俺が特に目をかけられているから兄上をすつとばして継承権筆頭にあるわけではない。

この『血』に拘りすぎているんだ。時々、無性に息苦しくなる。俺の赤い目は、王家の色なのだという。こんな色だけで……。

ずっと黙りこくっていると、横から伸びてきた手が俺の頭をわしゃわしゃと乱暴に撫でた。

いつもなら半歩後ろに控えるようにしている兄上が、珍しく隣を歩いている。藍色の左目は、俺を心配そうに見ていた。

「どうした？何を黙りこんでいる。何かあったのか？」

「…式典の事を考えてた。戦をせず、それぞれの神殿で定期的に祈りの儀式を行うと陛下の病気はおるか、全てが良い方向に向かうって言葉は……17年間闇の世界だったのに、そんなすぐにうまくいくもんか？」

継承権の話になると、兄上はすぐに側近の仮面をつけてしまう。俺はとっさに式典の話題を出した。

「そうだな……。また我々人間に機会を与えてくださるおつもりなのだろう。ただ、まだ我々人間を信用しきれていないともおっしゃっていたし。さすがのガルデイスの王も、もう戦は考えんだろ。ガルデイスの王子は戦嫌いだろいう噂だし……王子といえば！！ネスト！あいつどこ行きやがった！？式典の終盤、空席になってたぞ！？全く！アイツは隠れることに関しては天才的だな！」

その言葉で、ふと先程神殿広間の舞台裏で見た光景が思い出された。

アイツ、倒れて運ばれてたな。薄暗い中でも、顔色が悪いのがわかった。

まったく…よく倒れるヤツだ。

最初は泉のほとりで。次は神殿で……

そこで無意識に足を止め、両の手の平を眺めた。

吹っ飛んできたアイツの、小さな身体を抱きとめた感触がまだ残っている。

今まで女から触れられると、ねっとりとした黒いモノが這い上がってくる気持ちが悪い感覚がしたのに……。

「柔らかかったな……」

「何がだ？」

数歩先で同じように立ち止まった兄上が、不思議そうに問いを投げかけてくる。その言葉に、思わず口にしていただけと知った。

「……なんでもない。もう夜会が始まる頃だな」

「ああ。主役のマリー姫が居るから特に問題は無いだろうが……急ぐか」

.....

夜会は既に始まっていた。

マリー姫はガルディスの貴族にべったり張り付いていたし、スイル人やイルー人の多くはより多くの情報を得ようと会場に居る神官達

を捕まえては小さな集団を作り話し込んでいた。捕まっている神官の中には、ネストと一緒にアイツを抱えていた女神官の姿もあった。

会場を回りながら一通り挨拶をしていると、人々の顔色が明るいの
が分かる。

この世界にヤンテという光が戻った事と、ヤンテの恩恵を受け続けるためには何が必要かが分かりホッとしているようだった。

そんな中、しかめっ面をしている人間がいれば嫌でも目に付く。

我が弟、ネストロードがスイル人の令嬢達に付きまとわれて不機嫌
そうな顔をしているが、周囲の大人たちは相変わらずネストを見て
見ぬ振りをしていた。

という事は……………

アイツ、今…ひとりなのか。

心配なわけではない。ただ、あんな風に運ばれていくのを見てしま
つては後味が悪い。

宮殿の敷地内で何かあつては困る。

俺は自分にそう言い聞かせると、誰も見てないのを確認すると兄上
に後を任せて宮殿の広間から抜け出した。

「で、殿下…:このような時間になぜこちらへ？」

当然の事ながら、一部の神官は神殿に残っていた。神殿は基本的に

は式典など特別な時以外では神官しか入れない。よって、警備も魔法と剣術の両方腕が立つ若手の神官がおこなっている。

だが、ここは神殿とはいえ宮殿敷地内だ。王族は暗黙の了解で好きに出入りできる。

だが、夜会が行われている最中に突然王族が現れたことで慌てているようだ。それとも、何か慌てる理由があるのか……。その理由はきっとアイツだろう。と、いう事は、まだ意識は戻っていないのか？

「マリー姫が控えの間に忘れ物をしたらしい。全員しばらく1階に留まっているように」

「忘れ物…で、ございますか？それならば私わたしが取りに…」

「王族の魔除けは強力でな…置き忘れてから暫く経つから発動しているかも…そうになると、解除できるのは王族だけだが…」

「ええと…それは…真まことでございますか？そのような物など…姫は身につけておりま…」

「ああ！もう間が無いかもしれん。神殿内で発動すれば…」

「ど、どござー！」

一斉に警備の神官達が道を開けた。

「では我々は…」

「万一発動していたら、解除と清浄化をせねば。なるべく1階に…いや、全員外に出て入り口を見張っているように」

すると一際大柄な神官がおそろのおそろ前に出てきた。

「じ、実は2階に客人がおりまして…」

「知っている。マリー姫より既に聞いておる。だから急ぐのだ！」

「も、申し訳ございません！」

わざと語尾をきつくすると、飛ぶように後退さった。

「よいか。王族の魔除けを渡した件が知れたら厄介な事になる。この事は他言無用。勿論、大神官にも、だ」

「勿論でございます。我々も誰も通すなど言われております故、この度の事は誰にも申しません！どうかお氣をつけて！」

最後には、殿下のお役に立てて光栄です！と涙目で言われた。少し良心が痛むが、こうなっては後には引けない。ていうか静かにして欲しい。

扉を開けて中に入ると、ひんやりとした空気を感じた。少し前までの、大勢の感情が渦巻く熱気は既に無くなり、そこにあるのは息遣いさえ響きそうなまでの静寂だった。

勿論、魔除けの件は嘘なので2階に上がってもマリーの控えの間の扉を素通りした。まっすぐに奥まった場所にある扉まで進み、扉をゆっくりと開ける。

かちやり。と鳴った小さな音さえも辺りに大きく響いた。

細く開けた扉の隙間からするりと身を滑り込ませ、中の様子を窺ったがアイツは気付くことなく眠っていた。

ふーっと息を吐き、その時になって自分が息を止めていた事に気付いた。

緊張してた？俺が？なぜ！行き場の無いイラつきを覚え、吹っ切る

かのように大きな足音を立てて寝台に近づいた。

目の前には、質素で小さな寝台があり、天井近くにある小さな明かり取りの窓から青白い光が降り注いでいた。

アイツは寝台の上に静かに横たわっていた。窓から射し込む光はアイツの身体全体を包み込み、ほの暗い室内で白く浮かび上がっていた。

「小さ…」

俺にとっては小さな寝台でも、アイツには十分なようだった。こんなに小さかったか？

顔色も青白いし…ほんとに生きてんのか？

思わず、その頬に手が伸びた。

ぷに。

指先が触れた青白い頬が柔らかく沈んだ。

「…柔らかい」

ふにふに。ぷに。

つついてもつまんでもその感触はどこまでも優しくて柔らかくて、手に心地よくて…でも、冷たかった。

手首を掴み上げると、力なくひじが落ちた。片手でつかめるほどの華奢な足は、それまでのどの部分よりも冷たかった。

ぐに。

鼻をつまんでみると、わずかの間をおいて「ぷひゃ！」と息が吐き出された。

「あ、生きてる」

それがやっと確認できて鼻から手をはずす。すると、一瞬の衝撃から立ち直ったアイツは規則正しい寝息をたて始めた。

さっきの変な声の反動か、薄く開かれたソコは他の部分とは違ってほんのり赤く色づきふつくらとしていた。

小さな頃によく食べた大好きだった木の実みたいだ。あの実がなる木は、ヤンテが消えて少ししたら枯れてしまった。もう、長くあの実を食べてないな…。

あの赤い木の実のように、甘いだろうか？あのふくらみは、頬よりも柔らかく見えた。

俺はそれを確かめるために、息を殺して色づく赤い実顔に顔を近づけた。

42・柔らかな肌 side クラムルード (後書き)

あれ？ クラムってば…あれね？

43・必要で不必要な存在（前書き）

お待たせしました！ちょっと暗いです。注意！そろそろほのほの夕
グ変えなきやですね…（-|-;-）

43・必要で不必要な存在

深い眠りについていた万里子が、突然ぱちり。と目を覚ましました。ゆっくりと首をめぐらせますが、小さくなんの装飾もない殺風景な部屋には万里子ひとりしかおりませんでした。

(あれ？誰かがいたような気がするんだけど……それに……)

何か違和感を感じ、腕を動かそうとしたものの、まだ身体は重く腕はピクリとも動きませんでした。

(むー。ギリギリ首は動くんだけど……)

それでも、ゆっくりとまるでギシギシと音が鳴るようなぎこちなさで、扉に目を向けました。

すると、目覚めたのを知ったのか絶妙な間で扉が開きました。

「マール様！お目覚めですね！ゼス、薬茶をお持ちして！」

遠慮がちに開けられた扉から、様子を窺うように顔を覗かせたシアナは、目をぱちり開けている万里子を見ると、嬉しそうに微笑み扉の外に向かって指示を出しました。

いそいそと入って来たシアナを見て、万里子はホッとしました。

「シアナさん、あれからどれ位時間が経ってますか？」

「一晩しか経っておりませんよ。お加減はいかがですか？」

「まだ身体が重いです」

「まあ……」

シアナの繊細な美しい顔から微笑みが消えました。

「ヤンテを受け入れるのに、かなり体力が消耗したのですわ。ルヴェル様の薬茶には劣りますが、今用意させますので、お待ちくださいね」

「あ！でも痛みは無いです！ただ動かないだけです！」

シアナは寝台に近づくと、万里子が上半身を起こすのを手伝いました。

「本当ですの？何か違和感があるとか……それもございませんか？」

「違和感……なんか、部屋に誰かが居たような気がするんですけど……痺れというのか、なんか……なんか違うんです」

「誰か……ですか？……いいえ……私が時折扉から様子を窺っておりますが、ゆっくりお休みただこうと思ひまして、室内には入っておりません。夜会の時分には私もマール様の元から離れておりますが、その簡は誰も入れぬようジル様が警備の者にきつく申し付けておりましたし……。痺れがあるのはどこですか？ひどく痺れますか？」

「いえっ、あの。うまく表現できなくて。痺れのような感覚なんですけど、痛みは無いし……誰かが居たような気がするっただけなのか……でも、誰も来ていないからそれもきつと気のせいだと思いません。夢を見たのかも……」

「きつとそうですね。とても深く眠っておいででしたのよ？」

「はあ…そのせいですかね？頭はすごくスッキリします」

万里子の答えに安心したのか、シアナは再び微笑みを浮かべました。その時、控えめなノックが聞こえました。

「ゼスが薬茶を持ってきたのですわ。お入りなさい」

最後は扉に向かって声をかけると、大きな身体の若い男性がその巨体を縮こまらせて、小さなゴブレットを大切そうに両手に持ち入って来ました。

「シアナさま、薬茶をお持ちしました」

「ありがとうございます。そうだね、ゼス。あなた夜会の際の警備団長だったわよね？」

「は、はい」

「マール様。この者はゼスと申しまして、神官兼警備団団長なのです。神殿のように基本的に神官しか入れない場所はゼスのような警備団が警備するのですわ。」

昨晚の夜会の際にもこの神殿を警備しておりました。ゼスに昨夜の事を聞いてみてはいかがでしょう？」

「は…あの、昨夜の事とは……」

思い当たる事があるゼスは、息をするのも忘れてシアナの横顔を見

つめました。

次の言葉を待ちながらもゼスは背中に嫌な汗が流れ落ちるのを感じました。かすかな震えが、ゴブレットの中のとろりとした金色の液体を僅かに波立たせます。

「ゼス、昨夜の夜会の間、ここに誰か来て？」

「っ！…いいえ。どなたもいらっしやっておりますん」

一言ずつ、その言葉をかみ締めるようにゼスは答えました。

「昨夜は、私わたくしを含め7名で警備しておりましたが、誰も異常は無かったと申しております」

「…そう。そうね、私もそのように報告を受けております。マール様…」

「あの！いいんです！多分、夢だったんだと思うんです」

「マール様、きつとお疲れなのですわ。まだお体も動かないようですし、薬茶を飲んでゆっくりお休みください。ゼス、ありがとう。薬茶をこちらへ。もう下がっても良いわ」

「は…」

ゼスは、まだ困惑したような表情を浮かべる万里子を一瞥すると、そそくさと部屋を出て行きました。

「さ、マール様。これを…ああ、お手伝いしますわ。少し上を向いてくださいますか…ええ。そうです。苦いですけど、一気に飲んでくださいませね」

「はい。……に、にがつ!!」

「あらあら。苦いと申し上げましたのに…。明日には少し動けるようになると思いますわ」

「そうですね。式典も終わったしまた帰るのに私が動けないんじや迷惑をかけちゃいますもんね」

「すみません。とこてんと頭を下げる万里子を、シアナが慌てて制しました。」

「違いますの。まだ数日は他国の王族も留まるようですよ。神殿造りのためにもつと情報を収集しようとしているようです。ジル様やサク様もその対応に追われております。数日は解放してもらえないでしょう。それに各国の王族や貴族の女性達はグリユーネ様に衣の依頼をしたいと殺到しているようですわ。ですから、マール様は安心して、ゆっくりなさってください」

「ええー！グリユーネさんですか！？もう引退するって言ったのに……でも、グリユーネさんがもしまたお仕事始めるなら…私もまだお手伝いできることがあるでしょうが」

今の万里子にとっては、仕事がなくなることが一番不安でした。何も出来ない状態でただただお世話になるだけなのは、考えるだけでも落ち着きません。

式典で体験したことで、召還されたのがやはり自分であったのだと分かった今でも、その不安は消えません。

むしろ不安は増すばかりでした。自分が求められているのは器だけなのか…なら、今この不安に押しつぶされそうな心はどこに行くの

だろう…この世界では必要な私（身体）と必要じゃない私（心）がいる…そう考えると、思考はどんどん暗い方に沈んでいきました。

（せめて、せめて仕事があれば神殿での事は割り切って考えられるのに…）

自分が姫だとバレてしまったら、ここに閉じ込められて周りの都合で身体うづわを使われてしまうのだろうか…自分の意思とは関係なく？そう考えて、万里子はゾツとしました。

目をギュツと閉じた万里子を、シアナが気遣わしげに声を掛けてきました。

「マール様？大丈夫でございますか？」

「え？あ、ハイ！大丈夫です。ちょっと考え事をしてました」

「あの…実は、面会をご希望の方がいらっしゃるのですけれど…入って頂いても大丈夫でしょうか？」

「え？そうなんですか？誰でしょう？大丈夫ですよ。お待ちせしちやったんじゃないですか？」

「まだ目覚めておりませんでしたので、別室で待つて頂いております。気付かれたとはいえ、お体がまだ動かないのですから、ご無理はなさらないでくださいね」

「え…でも、待つて頂いてるんですよ？大丈夫ですから」

重く沈み込む気持ちを面会する事そこから逸らせるならと、万里

子は努めて明るく答えました。

「そうですか？それでは…お連れ致しますわ」

「はい。お願いします」

ちよこんと頭だけでお辞儀すると、シアナは心配そうにしながらも部屋を出て行きました。

少しして、短いノックの後に再び開けられた扉から、ぴよこんと顔を覗かせたのは、昨日倒れる直前に見たあの大きなピンク色の目が愛らしい少年でした。

43・必要で不必要な存在（後書き）

42話の直後のシーンは直接的な表現はしませんw
でも痺れつつ事は…え???て感じで！

平和ボケした日本から、しかも自己主張せず目立たないように平凡に生きてきた万里子は、43話になってもぐりぐりです。すいません…いずれ成長させるつもりです！どうかもう少しぐりぐり万里子にお付き合ってくださいませm)——(m

44・共感

少年は、扉からぴよこんと顔を覗かせはしましたが、なかなか部屋には入ってきません。

ついには自分から訪ねて来たにも関わらず、万里子の姿を目にした今になって戸惑っているように俯いてしまいました。

(ええと…声をかけるべきなんだろうけど、名前知らないしなあ…)

「あの一！」

思い切って声をかけると、少年ははっとしたように顔を上げて万里子を見つめました。

「私、まり…えーっと、マールっていうの。あなたは？」

「は？」

少年は益々戸惑いました。

「なんでいきなり自己紹介なわけ？他に言う事あるでしょ」

「えーっと。あ、ありがとう？」

「なんでさ！お前、訳わかんない。僕のせいで倒れたかもしれないのに、なんでありがとうなんだよ。なんでのんびり自己紹介してんだよ！」

「えええ？違うよ。それはホラ、あの、諸々の事情があつて動けなくなつたけど、あなたのせいじゃないし。それに今ここでひとりでのんびり寝てたつて事は……」

「事は？なんだよ？」

「誰にも言わないでいてくれたんでしよう？」

だから、ここはありがとうだよ。と言い淡く微笑んだ万里子を見て少年は驚愕に目を見開きました。

彼は馬鹿ではありませんでした。周りの大人達は、彼を能力が無いと決め付けて無関心に接していましたが、彼はそれを悲しんだり寂しがったりする事は幼い頃に諦めました。そして彼は反対にそれを利用する事にしたのです。

どこに居ても何をしても空気のように扱われるのをいい事に、彼は周りを注意深く観察し、宮廷内の力関係も自分の中でどう振舞うべきかも全て分かつていたのです。

そんな彼は、あんな場所で倒れた万里子や都合よくマリーがそこに現れた事などで、大体何が行われていたかは察していました。

それでも、ただ利用されるだけのみすばらしい格好をした地味な少女には何の関心も持てませんでした。

ただ、ヤンテ復活の日に突然宮殿にやつて来て、それから常に横暴だったマリーに対する小さな復讐のためにカーテン裏でのやり取りを夜会で大々的に暴露するつもりでした。

いつも自分を軽んじていた人々の騒ぎを想像すると、それはとても魅力的な事だったので。

その為には、自分もみすばらしい少女を利用するつもりでした。彼女から、自分と同じような寂しさを感じるまでは……。

「僕……ネストロードって言うんだ」

そう呟いた少年の表情は、穏やかなものになっておりました。静かな足取りで寝台に近づくと、傍らに置かれていた質素な椅子にストンと腰を下ろしました。その姿には、もう万里子に対する警戒心はありませんでした。

「ネストロード？」

「…一応、第3王子だから皆ネストロード殿下と呼ぶけど…」

「…そうなんだ。私が今までいた世界で、そんな偉い立場の人と知り合いじゃなかったからどうも慣れないんだけど、私もやつぱりネストロード殿下って呼んだ方がいいのかな…年下に敬語って何か変な感じなんだけど…」

「僕より年上なのか？お前が！？」

「多分？あなた、いくつ？」

「僕…15歳だよ。お前は同じ位か少し下に見えるけど…」

「失礼ね。私17歳だよ」

「…ヤンテが消えた年に生まれたんだな」

万里子は「んぐ！」と声を出し、手が動くものならば頭を抱えたい気分になりました。

（ま、またやつちゃったよ！しかも自分から年齢の話題振っておい
て…）

変な声を出したきり、自分から目を逸らしそのままきよときよと視線を彷徨わせる万里子を見て、ネストラードは思わず吹き出ししました。

「安心しなよ。これも言わない。お前、そんなんでよくヤンテの姫君だって事隠してこれたね」

「言わないで…自分でも情けないの。すぐくすぐく周りの人にも迷惑かけてるんだよ」

はふう。と大きなため息をつく万里子の姿がネストラードには不思議で仕方がありませんでした。

彼が小さな頃から観察していた人々は、常に相手の顔色を見、言葉の裏を読み、貼り付けたような笑顔を浮かべ、人の隙を執拗に探るような狡猾な人物ばかりでした。

目の前の彼女のように、心の動きそのままに表情に出すなどもつての外ほかでした。

呆れながらも、どんどん警戒心という心の囲いが取り払われていくのを感じます。それはもう戸惑いではなく、心地いいとさえ思えました。

(なんだ、コイツ。面白いな)

この国の王子だと言っても、畏まった態度に変わる事もありませんでした。ネストラードは、ふと自分の名前を殿下と呼ばなければいけないのかという問いに、まだ答えていない事に気づきました。

本来ならばいくら透明王子だと揶揄されるネストラードでも、呼称をつけずに呼ぶ事は許されない事でございます。

彼と接する大人達の、その貼り付けた笑顔の裏に侮蔑の表情がある

事をネストロードは知っています。そうとは知らない彼らは口先だけは彼を「殿下」と呼びますし、必要な場では恭しく礼をとります。皆と同じ呼び方を、目の前の彼女に強要すれば今自分が感じているこの心地よさも無くなってしまふ…と、彼は思いました。

(それは嫌だな…)

家族以外の誰かの心が自分と距離を置こうとする事を、嫌だと思ったのは初めてでした。

「…殿下はつけないくていい」

「へ？何？」

「さっきの話だよ。お前、僕の名を殿下と呼ばなきゃいけないのかって聞いたじゃないか」

「えっと、じゃあ、ネストロード？」

「ネストロードだ！」

「ごめん。だって長いんだもん。ねえ、ネストって呼んじゃだめ？」

「……いい…許す」

「ありがとう。じゃあ、私の事もお前じゃなくてマールって呼んでね？」

「マール？」

小さな声でそう呼ぶと、ネストロードの頬が緩みました。もつとも、本人は気付いておりませんでした……。

「ま、マールは、どうしてマリーの好きにさせてるんだ？お前…いや、マールを見る他の者の視線は僕に対するものよりも冷たい」

昨日、倒れた万里子を控えの間に運び込む際に数人の神官に会いました。

その時の目つきといたら、悪意のようなものさえ感じられたのです。

「ここに来てすぐに、あの子が姫だと決められて、私は放置されたんだよ。すごく寒くて…心細くて…」

万里子はぼつり、ぼつりと言葉を紡ぎ出しました。

最初は姫でないのならすぐに帰れると思った事、神官がすぐにマリ―を姫だと決めて、放置された心の痛み、自分かもしれないというかすかな予感があったけれども自信がなかった事、それには特に優秀な兄と美しい妹の間に隠れるように過ごしてきた少女時代が影響している事…。万里子の話はよく飛びましたし、まとももありませんでした。

ですが、心の中から溢れてくるようなその素直な言葉にネストロードはじつと耳を傾けていました。

「たとえば、本物の姫が私であったのだとしても周りが認めてないのなら意味がないと思ったの。実際、ヤンテは復活したんだし。もう私は本格的に用無しだわって。でも帰れないし、どうしよう。ってすごく焦った。ジルさんの所はすごく穏やかで大切にしてもらってるなって思っただけけど、でも私、ほんとに何も出来ないんだよ。

何もとりえが無いの。何も、返せないんだよ。このまま私、死ぬまでお世話になるの？って思ったら…途中でまた邪魔者にされたら…ううん。ジルさんはそんな事する人じゃないって分かってるの。でも、甘えていいわけじゃない。だから、仕事を探さなきゃって思ったの。せめて自分ひとりが生きていけるだけのお金が稼げたら、誰の迷惑にもならず済むんだって。でも…結局色んな人にお世話になって。迷惑かけて…どうしたら役に立てるんだろって思ったの。すごく、すごく考えたんだよ」

万里子の顔が、悔しそうに歪みました。先程まで表情をくるくる変えて自分よりも幼いのではないかとさえ思えた万里子の顔が、ネストライドには少し大人びて見えました。

自分と似てる…そうネストライドは思いました。マリーが言った『同じ』の意味も分かりました。ですが、根本的に違うところがありました。放っておかれていたのをいいことに好き勝手し、誰が誰を陥れるのか…その様子をじっと観察しては自分の知識にしています。それも全て、自分の為に…ですが、万里子は自分を信じて守ろうとしてくれた数少ない人達の役に立とうと危険な場所に足を踏み入れる決心をしたのです。そんなところは正反対でした。

「なら、そのあの子の影にだってなるよ。それで皆の役に立てるなら、そうする。でも、表の姫にはなれないよ。だって選ばれたのはあの子で、あの子も私も両方共がこの世界に存在するには…あたしが影で居た方が、いいと思ったの」

そう話すと、ふう。と小さく息を吐きました。

「疲れたのか？」

「少し…ごめんね？私が話してばかりで。えーっと、ここまで話

しておいてこんな事言うにもアレなんだけど…」

「言わない。誰にも言わない」

即答したネストロードに、万里子は小さくお礼を言いました。

「僕の事、信じるのか？」

「うん。なんで？だって倒れたの気にして来てくれたんだし、ネストって呼んでいって言うてくれたじゃない。それって…」

友達でしょ？そう続けられた言葉に、ネストロードはくすぐったさを感じ笑みがこぼれそうになりました。

それを誤魔化すように、ネストロードは突然立ち上がり背を向けると扉へと急ぎました。

「あれ？どしたの？もしかして、迷惑だった？」

少し戸惑ったような万里子の声がネストロードの背に投げかけられました。

扉にたどり着いたネストロードは、ゆっくりと振り返り万里子にこう告げました。

「明日、また来てもいいか？今度は僕の話を聞けよ。だって、と、トモダチなんだろ？」

きよとん。と目を丸くした後、へにゃ。とまるで可愛くない笑みを返した万里子を見ると、ネストロードは静かに部屋を出て行きました。

44・共感（後書き）

そして部屋の外で待機していたシアナに生温い視線で迎えられました。
たどさ。

45・消えた宝物

どんな流れでネストロードの気持ちが変わったのか、万里子には理解出来ませんでした。が、どうやらネストロードは万里子の秘密を守る決意をしてくれたようでした。

「良かったですわね、マール様」

入れ替わりに部屋にはシアナが入って来ました。

「シアナさん」

「申し訳ございません。念のため、部屋の外で控えておりました。ネストロード様がいらっしゃった時には少し表情が硬くて……。どのようなお考えか分かりませんでしたので……。ですが、マール様にご好意を持たれたようです。あの方がご自分の方から他人に興味を持つなど、ありませんでしたのよ」

「そうなんですか？」

「ええ……。お母様……。お妃様が亡くなられたきっかけが、ネストロード様の出産だと聞いております。体調を崩されて、そのまま回復する事なく亡くなられたのですわ。そしてカナム人としては、色素がとても薄いのです。お妃様がスイルの貴族だったからでしょうか……。カナムの血が薄いと見なされ、冷遇されて来たのです。そしてご自身もとても冷めたお人柄になってしまわれたのです」

「……そんな子には見えませんでしたよ？」

「ヤンテが消えてからは、あまり子供も生まれなくなりました。ここ10年などは全くありません。同年代の友人に恵まれなかったのもあるでしょう…ネストロード様にとっては、年齢が近いというそれだけでマール様の存在は大きかったのかもしれないわね」

「私も、ここに来て友達って言葉は初めてです。なんか、嬉しいですね」

ほっとしたように微笑むと、ぎゅるる、とおながが鳴りました。

安堵した途端に、おなががほぼ丸1日何も食べていない事を主張し始めたようでした。

「あらあら。昨日から何も召し上がっておりませんものね。すぐにお持ちいたします」

しばらくすると、シアナが深さのある木の器を持ってやって来ました。

「汁物の方がよろしいかと思いましたが。ああ、お手伝い致しますから、どうぞそのままですらしてくださいませ」

中華料理のれんげのような木のスプーンですくい、万里子の口元にそっと運ばれました。

「熱いですから、気をつけてくださいませね」

万里子は小さく口をとがらせ、ふーふーと息を吹きかけると、そつと橙色の液体に口をつけました。

「…イタっ!」

汁物は思ったより熱くなかったため、とろりと喉を通りましたが、唇にぴりりと痛みが走りました。

「あつ！大丈夫でございますか？もう少し冷めてから…」

「いえっ熱くはないんですけど、口に染みたんです」

「違和感があるとおっしゃっていたのはお口元ですか？」

「下唇の内側がピリっとなりました」

「…ちよつと失礼しますわ」

シアナは汁物の器を一旦傍らの木のテーブルの置くと、万里子の唇をぴろん、とめくりました。

「んが！」

そのシアナの行動に少しひるんだ万里子でしたが、手が動かせないのでされるがままでございました。

「あら…？唇の内側が少し血が滲んでおりますわ…これは…マール様、唇を噛む癖などございますか？」

「…ひひへ（いいえ）」

「場所柄塗り薬も無理ですし…滲んでいるだけですから、数日経てば治ると思いますけれど…」

「らいりよふれふ（大丈夫です）」

「右側ですわ。染みないよう、上手に食べてくださいませね」

「ひゃい(はい)」

それから万里子はゆっくりと時間をかけ、汁物を完食しました。もしかして、あまりの空腹に自分の唇を食べてたのかな？そんな事を考えながら……。

翌朝、まだ早い時間に目が覚めた万里子は無防備に両手を万歳させて眠っていた事に気付き、手足を動かしてみました。

「は！動く！！」

起き上がる事はまだ出来ず、上体を起こすのがやっとでした。それでも手足が動くだけで、万里子は嬉しくてはしゃいでしまいました。

「そっだ。口ってどうなってるんだろっ」

唇を噛む癖なんてなかったのに…昨日、シアナは血が滲んでいてと言っていました。食べる時に気をつければ痛みもありませんが、それでも確認したくなりました。

「でも立てないしなあ…あ！そっだ！」

万里子は父親からもらった腕時計を思い出しました。蓋の裏が鏡代

わりに使えるのです。友達や妹ほどメイクに興味があるわけでは
ありませんでしたが、それでも身だしなみには気を使っていたので、
あちらに居た頃は日頃からそれを使ってチェックしていたのです
が……

「……な、無い！なんで？なんで？」

腕時計はなるべく身につけるようにしていましたので、式典に向か
う時にも腕につけたはずでした。それなのに、左腕には何もありま
せん。

「なんで？もしかしてつけてなかったとか？」

キヨロキヨロと部屋を見渡しますが、寝台横のテーブルには水差し
があるだけでした。

寝台と反対側の壁にある机には、何もありません。

「……どうしようー！」

あの腕時計は、父親からの贈り物だという以外にも、イディヤジル
が万里子に会いに来る為の通路の出入り口となるよう術がかけられ
ています。

それを無くしたとなると……もしも見つけた人が術の存在を知った
場合、それはマズい事になるのでは？そう考えると、さすがにの
んびり屋の万里子も背に冷たい汗が流れるのを感じました。

「マール様。お目覚めですか？」

「し、シアナさん！大変なんです！」

万里子は大切な腕時計がなくなったとシアナに説明しました。が、腕時計がシアナに通じなかったので、腕輪のような装飾品だと伝えました。

「式典の際つけていたというのは間違いありませんの？」

「…多分…もしかして、私式典の時に落としたかも…」

「困りましたわ…広間は普段は神官とて入れませんのよ…」

もはや泣きそうになっている万里子に、シアナは申し訳なさそうに答えました。

「そ、そうなんですか？」

「あ！でも昨日、広間の片付けをしております。担当した神官に聞いてみましょう」

「お願いします！」

連れてこられたのは、またもやゼスでした。ゼスは困惑した表情を浮かべています。

「シアナ様。夜会の警備の件でしたら……」

「いいえ。違うの。ゼス、式典の片付けの際、何か落とし物が無かったです？」

「は？」

予想していた件ではなかったと知り、一瞬安堵した表情を見せたゼ

すが、ぽかんと口を開けました。

「ごいませんでしたが…何かお探しなのですか？」

「腕輪のような装飾品よ。女性物で、華奢なつくりの物なの」

サラリと告げられたその言葉に、ゼスは凍りつきました。

「ゼス？何か知っています？」

「いいえ……昨日広間の片付けを致しましたが、何もありませんでした」

「そう…。分かったわ。もう下がって良いわよ」

「は」

パタリと扉を閉めたゼスは混乱していました。

（ではあの警備の日、殿下が神殿（じいん）から出てきた際に手にしていた物は難だったのだ！？）

ゼスは夜会の日からの出来事を、一生懸命思返しました。

（警備の日、クラムルード殿下は王族が渡した魔除けをマリー姫が神殿の控えの間に忘れたと仰って、たったひとり現れた。

神殿に入りなかなか出ていらっしやらない殿下に外からお声をかけると、華奢なつくりの腕輪を手にし、出ていらっしやった。確かにそれを手に、目的の物がみつかったと仰っていた。その腕輪を、あ

のイルー人の娘が探している……何故だ!?)

ゼスは、ふっと顔を上げました。

(殿下には内密にと言われた。だがしかし……)

「サク様…サク様にお話しなければ…」

突然出来た友達^{ネストラード}は、毎日万里子の部屋に来るようになっておりました。

待遇はどうあれ、第3王子であるネストラードには当然の事ながら護衛がついております。ですが部屋にやって来るのはいつもひとりでした。

この世界も成人は20歳という事で、まだ15歳であるネストラードは日中家庭教師がついて勉強をしているのですが、時折それを抜け出して来るためやって来る時間はまちまちでした。

その際、大体はシアナが部屋の外に控えておりましたが、この日に限っては途中シアナがサクに呼ばれ宮殿に出向かなくてはなりませんでした。

少し躊躇しましたが、万里子に宮殿に行く事を伝えると、万里子とネストラードは笑顔でシアナを見送りました。

留守にしても大丈夫だとシアナに思わせる位に、2人は親しくなっていたのです。

ですが、そんな2人を苦々しい思いで見つめる人物がおりました。

（なんでここにネストがいるんだ！？）

せつかくいつも万里子についているシアナを、サクを使って引き離れたのに、これでは近づく事も出来ない……！数日前に神殿こゝろから持ち去った腕輪を手に廊下に佇んでいました。クラムルードは部屋からもれ聞こえる2人の親しげな笑い声に更にイラつき、そんな感情を打ち消すかのように、手にした腕輪を少々乱暴に自身のサツシユに仕舞い込むと踵を返しました。

46・衝動

クラムルードは、ざわつく気持ちに任せてただひたすら歩きました。

（なぜあそこにネストがいるんだ！）

神殿の裏手にまわり、更に足を進めます。

すると、クラムルードの目の前に大きな切り株が現れました。

名も知らぬ大木…あの、赤い実をつけ、幼い頃よく大人達から自分の姿を隠してくれた木でした。

ヤンテが消えてから徐々に枯れ始めたこの木は、今は切り倒されて大きな切り株だけが残っていました。

「もう、俺の姿を隠してはくれないんだな……」

クラムルードは、小さく呟くと切り株に腰掛けてサッシュユの中を探りました。

すぐに長い指が細い金属に当たり、そのひんやりとした冷たさが伝わってきました。

先程の乱暴さとは違い、今度はそつとそれを取り出します。

「すぐに返すつもりだったのに……」

手の中で鈍く光るそれに目をやると、また胸に苦々しい感情が込み上げました。

あの時……赤く甘い……とてつもなく甘く柔らかな唇に自分を見失い

そうになった時、階下から扉を叩く音が聞こえました。その音は控えめでしたが、クラムルードは横つ面を張られたかのような衝撃で我に返りました。

目の前には黒い睫毛に縁取られた瞼が、先程と変わらずにしっかりと閉じられておりました。ですが、視線を落とした先にはクラムルードが惹きつけられた赤い実が：先程よりもふっくらとし、朱を増して艶やかに輝く唇が、彼を誘っているかのように薄く開かれておりました。

その柔らかなふくらみに、朱を差したのは自分：その事実には、クラムルードの心臓が大きく打ちました。

また、目が離せなくなりそうです。

「で、殿下っ。大丈夫でございますか？何か問題でもっ？」

今度はトトトントンと、やはり控えめなノックと共に警備団の神官の声が聞こえてきました。

「チツ」

クラムルードは身体を起こすと、部屋を見渡しました。

万里子が眠っている部屋は、昨日マリーがしようしていた控えの間の半分程しかない、とても狭い部屋でした。

その部屋には小さな寝台とテーブル、反対側の壁際には机と衣類がまとめられたカゴ、そして万里子が持ってきたであろうイニスがあるだけでした。

「何も無い部屋だな」

何かを持って出ないと神官達が怪しむかもしれません。

マリーの控えの間に行けば何かある気はしましたが、マリーが好ん

でつけているあのきつい香油の香りがまだ残っているような気がして、とてもではありませんが行く気にはなれませんでした。その時、窓から差し込む光に、何かが鈍く光ったのです。

「ん？何だ？……腕輪？」

グリユーネの所で会った時にも身につけていた、みすばらしく思える程の衣には似合わないそれは、細く華奢な造りの金属の腕輪でした。

「殿下っ……」

クラムルードには自覚がありませんでしたが、神殿に入っただいぶ時間が経つのでしょうか。

またもや外から神官の焦ったような抑えた声が聞こえてきました。

「……少しの間借りるぞ」

そう呟くと、クラムルードはそっと腕輪をはずし、扉に向かいました。

ですが、部屋を出ようとしたその時、誰かに呼び止められたような気がして、寝台で眠り続ける万里子を振り返りました。

扉からじっと見つめますが、もう一度すばやく寝台の近くまで戻ると、そっと頬に手を触れました。

「お前、こんななあってまで何がしたいんだよ？……早く、目を覚ませよ」

そう呟くと祈るようにそっと柔らかな唇に自身のそれを重ねると、今度は振り返る事なく部屋を出て行きました。

外に出ると、あの大柄な神官が寄って来て礼を取りました。

「心配致しました。殿下、何も問題はございませんでしたか？」

「問題ない。ちゃんと魔除けは回収した」

手にした腕輪をチラリと神官に見せると、驚いた表情を浮かべ半歩下がります。

(いや…ただの腕輪なんだけど…)

内心苦笑しながら、クラムルードは真面目な顔で続けます。

「発動はしておらぬ。安心しろ」

「は。失礼致しました」

腕輪を王族の魔除けと信じて疑わない神官は、恐ろしいものを見るようにクラムルードの手の中の腕輪を見つめておりましたが、すぐに腕輪から視線を外しクラムルードに向き直りました。

「殿下、先程は申し訳ありませんでした。そろそろ夜会も終盤のようで、宮殿外より声が漏れ聞こえます。こちらの様子を気にする方もいらっしやるかと…」

夜会に出席している各国の王族を始め代表団体は必ずしも宮殿に滞在するわけではありません。

城下町の高級宿に滞在する者もあり、宿に戻ろうと外に出てきたよ

うでした。

(そんなに時間が経っていたのか?)

「構わぬ。では私も夜会に戻るとしよう。良いな?この件は…」

「承知しております。誰にも申しません。警備団全員にも申し付けて御座います」

そうして、クラムルードは夜会に戻ったので御座います。

「どうした?気分転換にしては長い不在だったな」

そつと扉から身体を滑り込ませたクラムルードの姿を目ざとく見つけ、イデイがすぐに近づいてきました。

「後をまかせてすまない」

「いいさ。今日の夜会、主役は『姫』だ。それにしても、気分が悪くて中座したんじゃないか?顔が赤いぞ?」

「えっ!?!い、いや…平気だ。何でも…ない」

(あれから、広間で何人かの他国の王族や貴族に話し掛けられたが、どんな会話を交わしたのか正直覚えてない。)

上の空で受け答えをする自分を、イデイが心配そうに見守っているのは覚えています。

それ以降、常にサツシュに忍ばせた腕輪の影響か、思考の中に度々万里子が登場するようになりました。

(返さなきゃ。そうだ。腕輪こねを何も言わずに持ち出したから気になるんだ。返したらアイツも俺の頭の中から消えてくれるはず。)

そう思い、今日はわざわざシアナを宮殿に呼びつける用事を準備したのです。これでアイツは部屋にひとりで居るはず…見舞いと称して部屋を訪れ、そっと部屋のどこかに置いてこよう。そう考え、神殿に向くと、弟のネストラードが万里子と仲睦まじく笑いあっていたのでした。

「くそっ！俺は何をやってるんだ…」

頭を抱えたクラムルードは、そのまま赤い髪をわしゃわしゃと掻きまわし天を仰ぎました。

そこには、万里子の体調が優れないためか、いつもよりくすんだ光を地上に注ぐヤンテと、その上にうつすらと白い星が見えました。

「星？」

「そう。この世界の常識だよ。ヤンテの周りにある小さな星さ。その星の位置で季節が分かるんだ」

式典で万里子の身体を借りたヤンテが話した『季節が変わった最初の日』について万里子が尋ねると、ネストラードは窓を指差してそう答えました。

窓から空を見ると、曇り空で朧おぼろげに見えるヤンテの上に、白い星が見えます。

「気付かなかった。夜は星が沢山見えるのに、この星は昼でも見え

るんだね」

「そう。ヤンテの上に出るのは夏の星、ヨーク」

「夏の星？じゃあ他の星もあるの？」

「あるよ。ヤンテの右側に出るのが春の星ラディガ。下には冬の星エル。左側には秋の星クリーヴ。ヨークの光が結構弱くなってから、もうすぐクリーヴも見えるかもしれない。ヨークが完全に消えてクリーヴだけになったら、それが秋の最初の日って訳」

「へえ！道理で暑さが和らいだと思った」

「実は僕も季節星を見るのは初めて。僕はヤンテのいない暗黒の時代に生まれたからね。光玉のような魔法で作られた光の中で育ったんだ」

「そうなの…」

「うん。だからね、ありがとう。マール」

「えっ？私、何もしてないよ？」

「うん。でも、ありがとう。ヤンテも嬉しいけど、ヤンテを知らない僕にはそんなに価値はわからないんだ。でも、マールが僕の前に現れてくれた事は嬉しい。だから、ありがとう」

その言葉に、万里子は照れたように空を見上げました。

その視線をネストロードも追います。ふたりが見上げる白い星を、同じ時クラムロードも見上げておりました。

「夏が終わる」

「夏が終わっちゃうんだね」

「夏が終わるんだよ」

発した言葉は同じでしたが、その思いは3人ともバラバラでした。

47・帰ろう(前書き)

誤字脱字見つけたので、修正しました！内容は変わってません！。
8/25 AM 1:30

47・帰ろう

万里子の体調はほぼ元通りに回復し、時間を持って余しておりました。

「シアナさんはお仕事もあるし、ジルさんは夜遅くに疲れた顔で立ち寄る位だしなあ……」

「別にいいでしょ。僕がいるんだし」

当然のように隣に腰掛けているネストロードが、万里子を上目遣いで見て口を尖らせました。

そのようにされると万里子は困ってしまうのですが、同時にそんなネストロードが可愛らしくも感じ、つつい甘くなってしまうのです。

「そうだね、ありがとう」

へにゃ、と笑い崩れると、ネストロードは安心したかのように万里子の肩に頭をもたせかけました。

突然できた年下の友達は、時折万里子に甘えたようなしぐさを見せます。

ネストロードは万里子よりも少し背が高いのですが、ぱっちりとした大きな目と、まだ線の細い体つきで男性というよりは少年ぽさが目立ち、甘えられると守りたくなるようなそんな気持ちになるのでした。

ふわふわの柔らかかな明るい山吹色の髪が首筋をくすぐり、その軽やかな感触に思わず万里子の手が伸びます。

(ふわふわだー。気持ちいい…)

「…僕、頭を撫でられるの初めてだよ」

「えっ？嫌だった？」

手を止め、ネストラードの顔を覗き込むと、万里子の視線を避けるようにネストラードは俯いてしまいました。

「ううん…もつと、して欲しい。マールの手は優しいね」

少しくぐもった声が聞こえると、万里子は先程よりもゆっくり、ゆっくりと手を動かしました。

それは自分と同じ心の傷を抱えるネストラードを労わるようでもありました。

「……お前達は一体何してるんだ…」

「あれ。イディさん」

「兄上！」

「え」

飛び起きるように扉に身体を向けたネストラードの言葉に万里子は驚きました。

「兄弟なの!？」

「そうだよ。知らなかったの？僕は第三王子なの」

「…て事は…」

「クラムルードとネストラードとは腹違いなんだ。俺の母上は…幼い頃戦争で亡くなったんだ。その後には陛下はスイル人の姫君を妃として迎えられた。最近会ったネストラードはともかく、クラムと俺が兄弟だったのは知ってると思ってたが…」

「…そういえば、兄上がどーのとか言葉では聞いた事があるような気がします…それがイデイさんだとは思いませんでした。え、じやあ、イデイさんは第一王子で、いずれ王様になるって事ですか？」

「いや……」

イデイが少し苦しそうな表情を見せ言いよどんだ事で、万里子は聞いてはいけない事だったのだと気付き、小さな声で謝りました。

「いいんだ、マール。俺は継承権を放棄して、今は弟の側近だ。俺が王になる事はない。却ってアイツには苦勞をかけてると思う。全ての責任を負わせてしまったからな」

「でもなんか…いつもふんぞり返って偉そうにしてるのしか見ませんけど……」

サイナの森での出来事を思い出し、万里子は思わず反論してしまいました。

「悪いな、まあそんな色々な事情でちよーっと甘やかしたところはあるけどな。あいつは素の自分を見せられる相手があまりいないんだ。マールにはいきなり悪印象だったと思うけど……」

「…クラムルード兄上は素晴らしい方だよ。大きな責任を背負っていつも沢山の大人達に囲まれて忙しくしてる。あまり会えないけど…他の大人達と違って僕の事を見て見ないふりなんてしないんだ」

「おい。俺もそんな事しないだろう？」

イディは苦笑すると大きな手をポンとネストラードの頭に乗せるとわしゃわしゃと乱暴にかき混ぜました。

「いつ、痛いよっ！…イディ兄上は僕の教育係でもあったからちよつと…コワイけど…」

「ふうん？俺がお前の小さな頃、教育係だったの覚えてるんだ？なら、今お前は宮殿のお前の部屋で勉強してるはずだったのも、覚えてるか？」

イディは手をぴたりと止めると、一気に指先に力を入れました。

「いー！！痛いっ！痛いー！お、覚えてるよ…ちよつと、ちよつとだけ休憩で…兄上っ！ごめんなさい！痛いー！！」

「へえー？すぐに戻るなら俺の胸に留めておくけど？」

「戻る！戻ります！だから離してえー！」

飛び上がって抵抗するも、その身長差では上からかけられる圧力は弱まらず、抵抗する分締め付けられる力は強くなり、ネストラードの目にはつつすらと涙が浮かびました。

「へえー？すぐ戻るか。よーし、じゃあ誰にも言わないでおこう。」

でも今日だけか？」

「ごうごうごめんなさい！もう二度とサボりませんー！ー！」

そのまま誘導されて扉に向かうと、イディは空いた片手で扉を開けてネストロードをばいっと外に放り出しました。

その様子を口をあぐり開けて見守っていた万里子は、これじゃ怖がられても仕方ないや……と思いました。

「悪いなマール。あなとこ見せて……。式典後の事はジル殿から聞いているよ。ネストロードが助けになって良かった。お前の体調の変化まで考えにいれるべきだったよ……ごめんな？」

「ううん。大丈夫です。私がここに来た意味が段々分かってきてななんていうか……少し前向きになれました。それに……友達も出来たし」

「友達？」

「ネストです」

そう嬉しそうに話す万里子の笑顔を見て、イディは子供だと思っていた末の弟に嫉妬に似た感情を抱きました。

「せっかく友達が出来たところ悪いが、そろそろ帰り支度をしないとな」

「そうですね。私、もう体調は殆ど元通りになってます。他の国の人達はもう皆さん帰国したんじゃないですか？」

「スイルとガルデイスの王族の一部はまだ宮殿に残っている。無駄だと思うが、それぞれがマリーに会おうとあの手この手を使ってな。あとは神殿建設の為に早々に帰路についた。イルーの一行はまだ宮殿と城下町にそれぞれ滞在している」

「そうなんですか？イルーの人達はどうして…」

「スイルとガルデイスは陸続きだからすぐに帰れるが、イルーは島国だからな。イルー人は天候や風などを見て海が穏やかになる日に海を渡るんだ。今はまだ海を渡る時期では無いらしい」

「グリユーネさんは…」

「…うん、スイル人やガルデイス人のご婦人達に囲まれてたけど、その数もだいぶ減ったしな落ち着いたみたいだが…グリユーネ殿と一緒に来た従者も侍女もまだ残っているよ」

「良かったあ。私だけがこんなに長居してるのかと思って心配してたんです」

「そこは遠慮しないでくれ。俺たちの配慮が甘かったんだ。体調が戻ってほんと、良かったよホント」

イデイは今日の前で屈託の無い笑顔を見せている万里子を、いとおしく思いました。

夜会の後になって、式典で万里子が倒れたと聞き自分達の浅はかさを責めました。

翌日には目が覚めたと聞きホツとしたものの、多忙でなかなか部屋を訪れる事が出来なかったのです。

「ほんと、良かった」

万里子を確認するように優しく万里子の頭を撫でました。

「あの、私の頭は驚掴みしないでくださいね……」

47・帰ろう(後書き)

すみません。中途半端なところで切れちゃいました。

48・胸騒ぎ(前書き)

2011年8月27日午前4時33分、大幅に加筆しました。

既に48話を読んでくださった方々にはご迷惑をおかけし、申し訳

ありませんm()m

48・胸騒ぎ

「荷造りはどれ位時間がかかりそうなんだ？」

「すぐに出来ますよ。持ってきた荷物はまとめてますし…すぐですか？」

「ああ。マールがいいなら。式典は終わった。お前だってマリーに頼まれた事をやり遂げたじゃないか。あいつが姫として宮殿（こ）に居る以上、お前にとってはここは危険だろうからな…」

「じゃあ、荷物まとめてから着替えたいんですけど…」

「分かった。じゃあ、俺は外に出てるよ」

“ 帰る ” ……元通りの生活に戻るんだ…万里子はそっと息を吐き微笑みました。

今ではサイナの作業小屋が、ふかふか浮いたペガロの家や、白玉と一緒にまどろんだ泉のほとりが…懐かしくて仕方がありませんでした。

（そこに、戻れるんだ）

飛び上がって喜びたい気持ちを抑え、万里子はカゴにまとめていた衣をイニスに詰め始めました。

部屋を出たイディは、シルの部屋に向かいました。

トトン！と軽くノックすると、返事も聞かずに中に入ります。

「マールはすぐに準備できるそうですよ」

「…そうか。ありがとう。出立まで念のためついでにはもらえないか。私はサク殿に会わねばならない」

「マールが本物の姫ではないかとサク殿に進言した神官の事ですか？」

ジルは疲れた顔をしてゆらりと立ち上がると、美しく長い指でこめかみを押さえました。

「ああ…なぜそのように思ったのか、直接の理由は言わないのだが…サク殿は最初から疑っていたからね…」

「最初から？召還した日からですか？」

「ふたりとも条件が当てはまっていた。だが、周りの神官達がマリ―を選んだのだ。サク殿は躊躇していたのだが…いずれにせよ、選ばれなかった1人を隠す必要があった。その役目を私が申し出たから送り出してくれたのだが……」

「それで俺にももう1人のマールという存在を打ち明けたのですね。きつと陛下には話してないでしょうね。クラムから聞くところによると、陛下はほぼ寝たきりらしいですから余計な心配はかけたくないでしょう…」

「…マールを宮殿（こく）に置いておいたらとことん利用され、マールの意

志など無視される。マリーのようには太くないんだ。マールが…壊れてしまう」

「このまま帰しても連れ戻されませんか？」

「そこは上手くやるよ。式典だつて無事終わつてマリーも見事に演じきつたんだ。ラウリナの人間だけではなく、他の国の要人だつてあの娘を姫だと信じている。公式にそう発表した後だしね…昔戦をけしかけて来た国を刺激するのは避けたいだろうから、余程の証拠が無ければ姫は別にいました、などと言いたくはないだろう。そうになると、あの娘がいる限りマールは自由だ。そうだろう？」

その言葉にイデイが力強く頷くと、ふたりは部屋を出てそれぞれの左右に分かれました。

お互い背を向けていても、お互いの胸の内は痛いほど分かりました。ジルが万里子を儀式の後すぐに連れ去り隠そうとしたのも、イデイがクラムルードに真実を告げないのも…姫になる事を万里子自身が望まないから…そう言い聞かせても、時折どす黒い本音が顔を覗かせるのです。

『万里子が姫になつてしまつたら、もう…手の届かない場所に行つてしまう…』その思いがふたりを苦しめました。生まれて初めて手に入れたと思った相手は、世界を救うためによばれた女性でした。この世界の為には彼女を利用しなければいけないのです。でも、彼女を守りたいという矛盾…偽者マウに人々の関心が集まっている時間を少しでも伸ばしたい…もはやそれは、万里子の為なのか、自分達の為なのか思いは複雑に混じり合っておりました。

万里子がグリユーネの一行と合流するべく宮殿の入り口ホールに入

ると、そこは人で溢れかえっております。床のそこかしこに様々なデザインのイニスが置かれ、万里子と同じように国に帰ろうとする人々がいるようでした。

「グリユーネさん達がいませんけど…。もしまだなら準備をお手伝いしにお部屋まで行っちゃダメですかね？」

「構わない。じゃあ、行くか。こっちだ」

イデイは人々で混みあうホールをぶつからずに上手にすり抜けて行きます。

万里子は慌ててその背中を追いました。

万里子が小走りで追いかけないといけない程の速度でずんずんと歩いていくイデイの後姿を、万里子は不思議そうに見つめました。

(どうしたんだろ…イデイさん、何を焦ってるんだろ…)

数人にぶつかり、何個かイニスを蹴飛ばしたような気がします。「すみません!」「あつごめんなさい」何度も謝りながらイデイの背中を追いかけてました。

「イデイさん、待って!」

「イデイさん?」

「イデイ、さんっ!ちょっと待ってくださいー」

ホールから伸びる廊下のひとつに差し掛かった時、やっと万里子の呼びかけが聞こえたのか、先を歩いていたイデイがハツとしたように足を止めてやっと万里子を振り返りました。

「…悪い。速かったか？」

「もー。途中何人もぶつかっちゃいましたよ。急いでるんですか？ペガロの用意がもう出来てるとか??」

「いや……グリユーネ殿の部屋はこの先だよ。行っておいで。俺はここで待つてるから」

「そうですか？えと、じゃあ行つてきますね」

ノックの後、顔見知りの侍女に出迎えられて笑顔を見せながら部屋に入った万里子を見送ると、イデイは廊下の壁に寄りかかり深いため息をつきました。

「…まったく。俺は何をしてるんだ」

苦しそうにシャツの胸を掴み、万里子が消えた扉に目をやります。どうしようもなく心がざわついて、イデイはホールに視線を移しました。

……誰かが、こちらの様子を窺っているように感じました。

ざわり。更なる胸騒ぎが、イデイを襲いました。

視線の先では、国へ帰ろうとする各国の人間が入り乱れておりました。

今まで王都に残っていたスイル人やガルディス人に加え、イルー人の一行も今日海を渡る事にしたのか、旅装束でホールに集まっております。

ざっと見渡しますが、すでに先程の視線の気配は消えておりました。

(なんだ？くそ。胸騒ぎがする…早く…早くマールを出立させなければ…)

イディはホールに控えていた宮殿の下働きの男に声を掛けました。

「サイナのグリユーネ殿ご一行のペガロを用意しておいてくれ」

「グリユーネ様…で、ございますか？一度ご用意したのですが…使わぬから戻すようにと先程申し付けられましたが…」

「…なんだと？確かか？」

「はい。本日は出立なさる方々が多く、混雑しますので申し付けられてすぐに下げてしまいました…如何致しましょう？」

「…直接グリユーネ殿に確認する事にしよう」

「では、御用の時にはまたお言いつけくださいませ」

丁寧に礼をすると、男は後方で呼びかけるスイル人のご婦人の下へと急いで駆けて行きました。

「おばあさまはサイナへは戻らないよ」

「ルヴェル殿……」

グリユーネの部屋の扉をノックしかけた時、ホールからルヴェルが現れました。

「君は…殿下の側近だろうか？なぜここに居る？」

「クラムルード殿下は最近どうもふさぎこんでいらっしやって…今日は暇を出されたのです」

「…その殿下のご命令だよ」

「……は？」

「おばあさまに、また衣装部に戻って来るようにとのご命令なのだよ。聞いてなかった？」

「え、ええ……」

「そう…まあ、入ろうか。君がここに居るといふ事は、マールが来ているのだろうか？まとめて話す事にしよう」

（グリユーネ殿が、再び宮殿で働く事に…？では、グリユーネ殿の助手であるマールは……）

室内では、珍しくグリユーネの言葉に万里子が反論しているところ

でした。

「私だけ帰るなんて嫌です。出来ません」

「マール……」

「だって。せつかくグリユーネさんの助手になれたのに……グリユーネさんがまたここでお仕事するなら、私もここでお手伝いを……」

「いけません。あなたは戻るのです」

「どうしてですか？」

グリユーネが宮殿の衣装部で仕事をするという事は、今まで以上の忙しさになるという事です。それが分かっているながら自分だけ戻るなど、万里子には考えられませんでした。

「そうですね、おばあさま。マールにも残ってもらったら良いではありませんか」

そう言葉を発したルヴェルに、イディは驚きを隠せませんでした。

「ルヴェル殿：それはっ」

ち。小さく舌打ちしたイディは、室内で動向を見守っていた侍女達に、控えの間に下がるよう伝え、全員が退室したところでその苛立ちをルヴェルにぶつけました。

「ルヴェル殿、マールが宮殿で暮らすなど……正体がバレる危険性が高くなるではないですか！正体を隠したまま式典をやり過ごす……そ

のように貴方も協力していたのに、それを今更…そのような危険なことをマールにつ！」

イデイの胸騒ぎは大きくなるばかりでした。一刻も早くマールを宮殿から出したいのに、簡単なはずの事が上手く進みません。その焦りが声にも表れておりました。

「だが、今ひとりで戻ってどうする？マールは仕事をして自立したいではなかったか？主であるおばあさまと離れてしまっっては、する仕事も無いじゃないか」

「そっそれは困ります！あの、イデイさん。そんなに怒らなくても、きつと大丈夫だと思えます。極力出歩かないようにしますし、それに助手つて立場だと女官部屋に寝泊りするって聞きました。偉い人達とは会わないと思うし、それにマリー姫が居る以上、私に目を向ける人なんていませんよ」

「だめだっ！」

イデイを落ち着かせようとした万里子でしたが、反対に益々声を荒げさせてしまい、その迫力にビクリと身体を震わせ、半歩退いてしまいました。

「マールを驚かすんじゃないよ、イデイ。マールは僕の話が解かったんだらう？なら宮殿でまたおばあさまの手伝いをしてくれるね？」

「止めなさいルヴェル。マールはサイナに戻します」

「おばあさま！」

「ふたりとも、落ち着きなさい。殿下のご命令ならば衣装部でまた仕事を致しますが、なにもずっと居るわけではありません。私ももう年ですからね。それに、マールがここに居ては危険なものも本当。マール、もし、誰かがあなたの存在に気付いてしまったら、利用されるかもしれないのよ？マリーのように公で発表されていれば、堂々と守ってもらえます。却って安全なの。でもお前は？お前を守れる人間は少ないのよ。それを解かって頂戴」

すると万里子は目に見えてしゅんとしてしまいました。

「は、はい…ごめんなさい…私、お手伝いがしたかっただけなんです…」

「サイナに戻っても仕事はあるわ。私の家は巨木自体よ。生きてるでしょう？部屋を放置する期間が長いと荒れてしまうの。綺麗に維持する事と、他の職人から糸の紡ぎ方を習い、私が帰るまでに習得しておいて欲しいわ。ね？一緒じゃなくても、ちゃんと私の手伝いは出来るのよ」

「はい…わかりました」

「ですがおばあさま……」

「ルヴェル、これは決定した事よ。雇い主の私が決めて、マールは了承したの。…宮殿に残るのは私だけで良いわ。他の者も帰します。マールだけではないわよ。不公平でもないでしょう？」

「ですが…」

「ほら！さっさとペガ口を用意するよう伝えて来て頂戴！全く、勝

手にペガロを下げて…。イデイ、あなたも少し頭を冷やさない。
マールが怖がっているわ」

「…え？」

「イデイさんも、ルヴェルさんもいつもと違ってなんだか怖いです。
私、先にホールに行ってますっ」

万里子は部屋を出ると、イニスを抱えホールに向かって駆け出しました。ふたりのやり取りに、まだ胸がドキドキしています。口論の原因が自分である事が情けなくて仕方がありません。

万里子はホールの片隅に空いた場所を見つけると、イニスを置きその横に座り込むと膝を抱えました。

すぐに万里子に追いついたイデイは、万里子のそんな様子に声をかける事が出来ず、ただ少し離れた場所から見守るしかありませんでした。

49・とある侍女の日記（前書き）

49話「とある侍女の日記」別タイトル「侍女は見た！」を読まれる前に：前の48話は投稿翌日に約2000字加筆しています。もし、そちらをまだお読みでない方はご面倒ですが、加筆分の確認をお願いしますm——) m

この49話はとある侍女視点の一人称となっています。

49・とある侍女の日記

私の名はニコラ。^{わたくし}キリエの侍女をしております。

あ、キリエとは私の国の古の言葉で、主人・師・尊敬する人物いじしえに対する呼称でございます。

四季星ヨークが明るく輝く暑いある日、街の神官が封筒を持ってやって参りました。

そこにはラウリナ国の王家の刻印が……待ちに待ったヤンテの姫様のお披露目式典の案内に違いありません！
私はキリエの元に走りました。

招待状を読んだキリエは、私を供に選んでくださいました。大変光栄な事でございます。

私は胸が躍りました。この世界を救い光を取り戻した姫様をのお姿を、尊敬するキリエと共に見る事が出来るのです。興奮しないでいられましょうか！

私は途中何度もキリエに落ち着くようにたしなめられながら、出立の3日前には全ての準備を整えたのです。

「ニコラ、落ち着きなさい」

キリエはもう口癖になってしまった言葉を今日も私におっしゃいました。

「ですがキリエ！キリエはもう慣れていらっしゃるかもしれません
が、私はただでさえ各国の王族が勢揃いするような場は初めてなのです！それなのに更にここに今から姫様がお越しになるのですよ？

落ち着いてなど……！」

「……わかったから、ではせめて静かにしなさい……」

呆れたように諭すキリエの言葉に、私はやっと周りの様子が目に入りました。

ヤンテ神殿の式典が行われる広間には、全ての参列者が揃ったところでした。

それぞれが、やはり初めてお目にかかる姫様を想像しているのでしょう。あちこちで話し声が聞こえ、それぞれと落ち着かない人々が多いようでした。

それでも私の声は少し大きかったようで、数人こちらを見ている人もおります。

私は慌てて口を噤みました。

「申し訳ありませんでした、キリエ」

こほん、と咳払いして自分に落ち着くようにと言い聞かせると、不思議と気持ちが凪いだような気がします。

さすがだわ、私。これ位出来なければキリエの侍女は務まりませんもの！

すると、入り口の方で歓声が上がりました。

「姫様だわ！」

「なんとという輝き！」

興奮したような声が聞こえ、否が応でも私も気持ちも高ぶります。

(ダメよ、ニコラ。落ち着くのよ。落ち着かなければ……落ち着……)

「キヤアア！きっ！キリエ、姫様ですわ！」

「ニコラ…」

キリエは諦めたように小さく首を振ると、私が指差した先を見つめました。

「なんとという神々しさでしょう！あの輝く黄金の豊かな髪！装飾品が沢山ついて、まるでこの広間の参列者を照らし出しているようですわ！まあ！なんて神秘的な紫の瞳なのでしょう！まあ！こちらに手を振ってください！キリエ！素敵ですわ！まあ！キリエ、あのお臍に輝く石をご覧ください！」

「…違う」

隣で同じように賞賛の音が聞こえると思っておりましたが、聞いてきたのは意外なほどに冷めたキリエのお声でした。それを聞き、私の気持ちもあつという間にしぼんでしまいました。

「え？何とおっしゃいましたの？」

「あれは…姫ではない」

キリエは周囲に聞こえないよう、私だけに聞こえる小さな声でそう告げました。

ですが、その言葉は私には大変衝撃的で、頭の中で大きく響きました。

「ですが…しっかりとクラムルード殿下にエスコートされておりま

すけれど…。ほ、本物ではければこの式典は成り立たないのではないでしょうが…」

なぜか私、泣きそうになりました。やっと世界に光が戻ったといいますが、本物ではないとは…これは一体どういう事なのでしょう？

「キリエ…」

キリエは私の声など聞こえないかのように、鋭い視線で広間を見回しておりました。

参列者をざっと見渡した後、その視線を上に向けるとキリエの視線が止まりました。

「…居た」

「えっ？本物の姫様ですの？あの、私には誰もいないバルコニー席しか見えないのですが…」

確かにそこは2階部分に席が設けられているバルコニーがあるので、ヤンテの姫様を見下ろすなど言語道断。今回の式典は王族であつても台座下に列席しております。

誰もいるはずの無いバルコニー席は、どう目を凝らしてもやはり空席にしか見えませんでした。

「強い結界が張られている。その中に姫が…なぜあのような事に…」

結界！それでは私には見えるはずもございません。その結界を見破つてしまわれるなど、さすがキリエでございます！

ですが、本物の姫様の所在がわかりましたのに、キリエの表情は晴れません。

どうやら、キリエの目に映る本物の姫様の処遇に納得がいけないようです。

後から聞きましたところ、とてもみすばらしい衣とマントを着ており、偽者の姫の飾り様とは雲泥の差。おまけにキリエの視線に気付いた供の者が姫様を抱えるように移動し、陰で扱代として利用し、壇上に居た偽者の姫はその間ずっと聞こえる声に合わせて演技をしていたと言っています。

そう言われますと、ヤンテの声が広間に響き渡った時、偽姫様は少し驚いていたように表情が固まっておりましたわ！

「キリエは舞台裏の出来事もお見通しだったのですね！すごいですわ！」

式典ではあの後、塞ぎこむように無口になってしまわれたキリエでしたが、夜会を終え宮殿のあてがわれた部屋に戻りますと、居てもたってもいられずに私はそう切り出しました。

「見えるはず無いではないか。あの姫が偽者で神託の儀式直前に本物の姫が舞台裏の方へ連れられて行ったのを分かっていたら、おのずと答えは導かれるもの……さて、これからどうするか……」

さすが！素敵ですわ！キリエは推理力もおありなのですわね！本当は声に出してしまいたいところでしたが、キリエの思考の邪魔になつてはいけません。私、ぐつと我慢致しました！

「…早く姫を連れ出さなければ……」

「え？今何とおっしゃったのですか？」

「姫があのような待遇なのは許すことが出来ない。我々が連れ出し

保護しなければ…」

「でも…どのようにするのです？」

「時が経ち情報が少し揃えば、好機に恵まれよう」

キリエはそう言うと、以降その話題には触れませんでした。

決行日は、突然やってまいりました。

キリエは、どこからか本物の姫が今日宮殿を出てどこかに移動するという情報を手入れたのです。

ちょうど、その日は海が凧ぐ日でもあり、イルー人も多くが出立する日でもありました。ホールにはスイルにガルデイス、イルー人が入り乱れて大変な混みようでした。

私とキリエも旅支度を整えるとその集団に紛れ込み、姫がやって来るのを待ちました。

その時です。

ラウリナの第一王子のイデイ殿下がものすごい勢いでホールを突っ切ろうとしており、それに少し遅れて大きめのマントに身を包んだ小柄な少女がまるぶようにして後を追って来ました。

人ごみを上手に抜けながらも速度が落ちないイデイ殿下とは違い、少女は手にしたイニスやマントの裾が人々や他の者の荷物に当たったり倒したりしてしまい、あちこちに謝ったり頭を下げたり忙しくしながら必死に歩いておりました。

もしやこの少女が……

私はキリエに教えていただくばかりで実際の姫様のお姿は存じ上げませんでしたので、自信がありませんでした。

ですので、キリエに確認しようと思いましたが、声をかけるのを躊躇ってしまいました……。キリエは、それはそれは悲しそうな顔をなさっていたのです。

「姫が…あのような扱いを……」

「やはりあの方がそうですね？いくら付き添いが第一王子とはいえ、姫様自身に荷物を持たせ、歩く速度も合わせないなんて！あの扱いは酷いですわ！早く私達で保護しなければ！」

姫は客間が並ぶ廊下に向かいましたが、少しするとたったおひとりでホールに戻って参りました。

フードから覗く小さなお顔は悲しげに歪み、私達の近くの壁際まで来ると力なく座り込んでしまわれました。

程なくしてイディ殿下も現れましたが、そんな姫のご様子に近づくとを躊躇っているようです。

……好機チャンスは、今しか無いかもしれません……。

キリエを振り返ると、キリエは強く頷きました。

私は姫様の背中に手をあて問いかけました。

「おおおおお嬢さん？どこか具合でも悪いのかしらっ？」

背後でキリエが脱力していましたが、それどころではございません

んでしたの。もう私、必死でした。

「え？」

びっくりと身を震わせ、姫様が私を振り返りました。

もう！！びっくり致しました。黒くキラキラと輝く瞳が、まっすぐに私に向けられたのですから！
でも、不思議と怖くは無かったです。それどころか、とても美しいと思いました。

「具合が悪いのでしたら、私達の部屋で休みませんか？」

今度は心からすんなりとその言葉が出てきたのです。

ですが、お返事を聞く事はできませんでした。

少し距離を置いて見守っていたイディ殿下がすぐさま駆け寄り、姫様の腕を掴み上げたのでございます。

そしてなにやら姫様の耳元に呟くと、そのまま姫様を引っ張って行ってしまわれました。

姫様は私にちよこんと頭を下げますと、慌ててイニスを引っ掴み引っ張られるがままに走り出しました。

その勢いでまたもやあちこちにぶつかり、あちこちのイニスが倒され、私達のイニスも中身が散乱してしまいました。見るとそのような被害を被った人達は他にも何人かいらっしやるようです。その元凶となったおふたりは姫様の「ごめんなさいー！」という声を残し、あつという間にホールから消えてしまわれ……は！いけない！絶好の機会を失ってしまったではありませんか！

「もっ、申し訳ありません！キリエ！せっかくの機会でしたのに……」

ですが、がつくりとうなだれる私をよそに、キリエは落ち着いた様子で散乱した荷物を集めておりました。

「は！キリエ！いけません。私が拾います！……キリエ？何を笑っておいでなのです？」

「ニコラ、そのように落ち込まずとも良い。姫はご自分から我々の元に来る。必ず」

私には、キリエがなぜそう確信出来たのか、全く理解できませんでした。私、まだまだ修行不足でしょうか？

49・とある侍女の日記（後書き）

というわけで、バルコニー席で感じた視線はネストではありませんでした。

50・1/167 (前書き)

この小説の中では、王族に仕えている女性を「女官」。貴族や金持ちに仕えている女性を「侍女」と分けています。

「サク殿、陛下のご様子は？」

ジルは、自分よりも数段やつれた顔をしているサクに問いかけました。

王の主治医でもあるサクは、このところ診察のため王の下へ行く回数が増えておりました。

「あまり……よろしくありません……。ヤンテのお言葉では、体調は回復し、また国民の前に元気な姿を現すとの事だったのじゃが……」

「が……？なんですか？」

「果たして、それは本当にヤンテの言葉だったのじゃろうか？」

「……どういう……事です？」

「あの時、ヤンテはもう消えかけておった。それを呼び止めて、こちらが問うたが……途中からその声はマリー姫のそれに変わっておった。それに、ゼスの言葉も気になっての……ヤンテの姫は、貴方が連れ出した少女の方だったのではないだろうか……」

ジルに大神官の座を譲ってからというもの、一歩引いたような態度に徹していたサクが、初めてジルに意見しました。

「彼女を……姫ではないと突き放したのは、儀式の間に居た神官達ですよ？私は残された少女を引き取ったまで」

「ジル殿……わしの術が精確でなく複数の候補が残った事はわしの落ち度じゃ。それを病に臥せっておられる陛下に告げる事ができず、『それらしい方』に姫になってもらった。ヤンテは復活したのじゃ。ひとりには姫として宮殿に。もうひとはジル殿、貴方が引き取った。どちらかは本物なのだからふたりがこの世界に居る限りヤンテは再び消える事はないじゃろう。サトウマリコなる人間を召還したのはヤンテ復活の為。その者はこちらに来た瞬間に役割を終えたも同然……役割を終えたふたりは、もう形だけの姫を演じていれば良かったのじゃ。だから、『姫を演じるのはどちらでも良かった』のじゃ。もうひとりの待遇も、貴方にまかせれば不自由は無く過ごせるじゃろう。ならばわざわざ陛下に全て報告して煩わせる事はないと思っただのじゃ……だがそれは、抛代としての新たな役割が判明するまでの話……ヤンテが現れても姫が元の世界に戻らなかった理由がこれではつきりした。そうなる……『姫は本物でなければ意味がない』のじゃ」

普段穏やかに微笑んでいる、沢山の皺が刻まれたサクの瞳が、今は別人のように厳しくジルを見つめておりました。

「ゼスは…なぜマールが本物の姫だと？」

わざと話題を逸らしたジルに、サクは片眉をピクリと動かしませんが、追求はしませんでした。

「詳しくは話さぬ。ただ、あの少女に王族が関わっている事だけは分かった。関わったという王族が、もしゼスに口止めしていたら…ゼスにそれを破る事は出来ぬ。これ以上詳しい事は聞きだせんだろ…ただ、言い出したのが式典翌日じゃ。殆どの者が、式典後は夜会に出ておりお互いがお互いの姿を見ておる。お出になれなかった

陛下と……途中誰も姿を見ていないクラムルード殿下以外はな……」

「クラムルード殿下が……マールに接触したと？」

「多分の。……クラムルード殿下が……グリューネ殿に衣装部の責任者に戻るよう申し付けられた。それは知っておりますか？……その少女が関係していると思うのじゃが……確かあの少女は今……」

「サイナでグリューネ殿の手伝いをしております。この度もグリューネ殿の供という名目で王都に入っております。グリューネ殿を引き止め、マールの事も帰さないおつもりだと？」

「そう単純な話かは分からぬが……そのように命ぜられたのは、式典の翌日じゃ。何か……その日から動き出したようでのう……」

その時、サクの部屋の壁にかけられた鏡がぼんやりと光りました。

「……サク殿、対話の鏡が……」

「……陛下付きの女官にはすぐに連絡できるよう神官を配してあるのじゃ。何か、あったか？先程診察したばかりなのじゃが……」

ぼんやりとした光は、色を濃くしたり途切れたりとかかなり不安定な輝きでした。

程なくして映し出された中年の女官服の女性はかなり取り乱しております。

「サク様……サク様！陛下が……早くいらしてくださいませ。早く……」

その様子に、サクもふらりと足元が覚束なくなりかろうじて杖で身体を支えました。

とっさにサクの瘦せた背に手を回したジルは、サクの身体がかすかに震えている事に気がつきました。

「サク殿…もしや…?」

「ジル殿、悪いが王の棟まで連れて行ってもらえぬか。もしもの時には…大神官であるジル殿の力も必要じゃ。間に合うといいが……」

- - - - -

「おおおおお嬢さん?どっどこか具合でも悪いのかしらっ?」

突然声をかけられ背中に手を置かれた万里子は驚いて振り返り、相手の顔をまともに見つめてしまいました。

(あ!また嫌な顔されちゃう!)

すぐに俯こうとしましたが、予想外に優しい声が降ってきました。

「具合が悪いのですしたら、私達の部屋で休ませんこと?」

(あれ?怖がらない?)

万里子が嬉しくなつてまた顔を上げようとした時、急に強い力で腕を引かれました。

「イタツ！イディさん??」

「悪い。マール。緊急事態だ。すぐに出るぞ」

「え?え?」

何がどうなったのか、聞く暇も抗う間もなくホールから引きずり出されます。

イディの勢いについて行けずに、またあちこちのイニスを倒し、人にぶつかり、でもなんとか先程の優しい声の女性にお礼の言葉を叫びました。

外に出ると久しぶりに会う白玉がおりました。万里子を見つめて首を上下させています。

話さなくても、白玉も万里子に会えて喜んでるのが分かり、万里子は白玉の毛並みの良いつやつやの首元に抱きつきました。

そここうしている間にも、イディはペガロの連結をはずしにかかっておりました。

手際よく万里子を使用していたペガロだけにすると、白玉に繋ぎ、万里子を抱えるとペガロの中のソファに少し乱暴に座らせました。

「イディさん?どうしたんですか?なんか…怖いです。皆も来てないですよ?ね、連結はずしちゃって、どうするんですか?」

声が震える万里子を安心させるように、イディはいつものように大きな手で頭をかき混ぜました。

「悪い。詳しくは王都を出たら白玉から聞いてくれ。ここからはひとりだ。無事、帰ってくれ」

そう言うで一瞬だけ、ぎゅーっつと万里子を抱きしめると、イデイはあつという間に外に消えました。

強い力で抱き潰され、「うぎゅ！」と声を発した万里子でしたが抗議しようとした時、既にイデイの姿は無く、ペガロは走り出しておりました。

強い圧迫から急に解放された体がなんだか心もとなく感じ、窓から身を乗り出して後ろを振り向くと、大きな大きな宮殿の棟のひとつから黒い煙が見え、次の瞬間、大きな鐘の音が鳴り響きました。途端に騒ぎ出しうるたえる人々…その様子がどんどん小さくなっていくのを、万里子はただただ眺めておりました……。

ゴーン　ゴーン

鳴り止まない鐘の音に、マリーは苛立ちを隠せませんでした。

ただでさえ式典の後、贈り物や面会の申し出が急に増え、その多さに辟易していたのです。

最近ではそれを取り次ぐ女官の存在すら鬱陶しくなり、必要最小限しか用事を頼まず、後は棟に入れないようにしておりました。

そうでなければ安心して本来の姿になれないのです。カラコンはもう限界でした。まつげエクステだって、メンテナンス出来てません。ナプキンの在庫も底を尽きました。ウィッグだって最初の艶やかさはもうありません。

盛ったり結ったりで、もうボロボロです。

「あーイライラする…っ」

こんな時は気分転換が必要だと、新しく作らせた衣を試着してみることにしました。

今着ているものはシースルーの生地を何枚も合わせグラデーシヨンになっているミニ丈の衣で、宮殿の若い女官には大好評でした。生地が薄く柔らかいためひとりでは脱ぐのが少し大変ですが、今は人を呼ぶ気にもなれませんでした。

慎重に上半身を脱ぎ、そのまま衣を下ろそうとした時でございます。

ピーッ

へそピアスに引っかかり、ほつれた糸が衣を持っていたマリーの指を傷つけました。

「いった!」

指先を見ると細い線が走っており、そこからじんわりと血が出てきました。

生地は緩く編まれた箇所がピアスに引っかかっておりました。

とつさに口に含んだ指先から感じる血の味に、マリーのイライラは募ります。

「くっそ。なんで引っかかんのだよ!」

ふと、あの身代わりの少女の言葉を思い出しました。

『赤が嫌いって聞いたんだけど…へそピアスはなんで赤い石なの?』

「アタシ、バカみたい。彼氏がくれた誕生石だからって、好きでもない赤いピアスなんてさ。大体、アイツが浮気して家飛び出したんだっつーの。なのに、なんでつけてんだろ」

マリーは知りません。この世界に来てからろくに神官の話も聞かず、なぜ自分がこの世界に残ったのか、それすらも知りませんでした。ただ皆がピアスを褒めるのが気持ちよかった、ただそれだけだったのです。

だから躊躇いもなく、ピアスに手をかけました。

「もっつ！要らない、こんなの！タカシとは別れたんだからっ！」

突然の王の崩御に神官達は混乱していました。

「ヤンテの言葉は嘘だったのか!？」

「我々を騙したのか!？」

「姫に会わねば!！」

取り乱した神官達がマリーの部屋を訪れました。事が事だけに、警備の者もすんなり神官を通し、自らも後について来ました。

「姫！マリー姫!！」

「今は何としても会っていただきますぞ！」

返事はありません。

「姫！失礼する!！」

神官のひとりが大きく扉を開けると、勢い余って数人が部屋の中になだれ込みました。

ですが、外の騒ぎとは打って変わって室内は静まりかえっております。

「…姫はおらぬのか？」

質問を受けた警備担当のドリーは驚きました。

「いいえ！昨日からずっとお部屋に…間違いなく一歩も出ておりません！」

「だが、おらんではないか！」

「…待てギーシュ。これを……」

声を荒げたギーシュを手で制止したひとりの神官が、床に落ちていた光るものに気がつきました。

それは正に先ほどまでマリーのお臍にくっついていたピアスでした。ピアスを取った瞬間、マリーはこの世界から消えてしまったのです。

万里子はとうとう、たったひとりのサトウマリコになってしまいました。

50・1/167(後書き)

やっとタイトルの1/167になりました。

51・緑の道

「マリー姫が消えた？」

ジルはたった今聞いた報告を、呆然とした表情でただそのまま問い返しました。

「はいっ！お部屋を訪ねましたところ、ここここっこれがっ！」

見るからに取り乱しているギーシュは震える手をジルに差し出しました。

ぶるぶると大きく震え、神官らしくないゴツゴツした硬い手から小さな光る物が飛び出し、ジルの足元でカツリと小さな音をたてて転がり落ちました。

「ああっ！申し訳ございません！」

慌ててしゃがみこみ拾おうとしたギーシュをジルが制しました。

「赤い石……これを、マリー姫のお部屋で？」

ジルは流れるような仕草で小さな赤い石をつまみあげると、窓から差し込む光にかざしじつくりと観察しました。

赤い石には、銀色の金属のようなものが付いております。

「お前達は……私にもサク殿にも何も言わず、勝手に姫の所へ？」

手にした赤い石を観察していたジルは、冷たい視線を目の前で縮こまっているギーシュに移しました。

「も、申し訳ございません!!」

慌てて頭を下げるギーシュでしたが、隣に居た男はついと前に出ると落ち着いた声色で話し始めました。

「確かに私達の一存で出来る事ではありませんでした。ですが、突然の王の崩御となれば、ジル様もサク様も陛下の下へ行かねばならぬはず。ただでさえ、今は他国の王族も宮殿に滞在中で混乱は避けられません。ヤンテのお言葉がこうも早く違えるとは問題でありますので、姫に面会し、確認が必要と考えた次第でございます。事後報告となりましたが、間違った事とは思っておりません」

「君は……」

「イルーの地方の神殿に配属されており、ライカと申します」

ジルは、ギーシュよりもかなり若く落ち着いた淡い青色の双眸を持ったライカに会うのは初めてでした。

身につけたローブのデザインでライカが中位の神官である事がわかります。もっとも、中位の神官はジルに会う事はあまりありません。自分とそんなに変わらない年齢のように見える事から、彼はイルーで生まれ育ちそのままイルーで神官となったナハク人かもしれません。それなら会った事が無いのは当然でした。

でも……

(この男、『力』がある……)

「そうか……。ではライカ。姫は消えたのではなく、思いもよらな

い事態に身を隠しているだけなのでは？なぜ消えたと思うのだ？」

「『コレ』を最初に見つけたのは私です。拾った際、まだ『温度』を持っておりました。私達がお部屋に入る直前まで、どなたかの身体につけられていた物で間違いございません」

ぎよつとした顔をライカに向けたギーシュは、ジルによってすぐさま部屋から追い出されました。

その簡、じつとジルの動きを見ていたライカに、ジルがようやく向き直りました。

「『温度』を感じたのか」

「はい。微力ながら力を持っているもので……」

ライカはそう控えめに言いましたが、ジルはマリーの部屋に乗り込んだ神官達の中にライカが居た事を不運に感じておりました。

ジルには、中位の神官にしては強すぎる程の力を持つ、ライカの身体から発せられる光が見えておりました。

（まさか、これ程能力がある人物がイルーに隠れていたとは……。見抜けないとはイルーに派遣されている高位の神官がいかに無能かが分かるというもの。だがしかし、迂闊だったな。気付いていれば遠ざけておいたものを……！）

悔やんでも後の祭りです。それ以上の事を気付かなくてくれれば良いのだが……。そう思ったジルにさらにライカが言葉を続けました。

「ジル様……この石でございますが、ここに付いている金具はどうも身体に取り付ける為の物のようです。取り外しが自由に出来ると

なると、これは最初に予言された姫の条件とは異なります。マリー
姫は偽者なのではないでしょうか」

その言葉に、ジルは嘆息すると窓の外に視線を移しました。

(マールは……無事、王都を出ただろうか……)

マールは、遠ざかるざわめきに耳を傾けましたが、人々が口にして
いる言葉までは聞こえませんでした。

「白玉。ねえ、白玉には聞こえる？なんか随分騒がしくなっただけ
ど、何かあったのかな？」

問いかけても、答えは返ってきませんでした。

(あ、そうだった。王都では話せないんだった)

その事を思い出し、大人しくソファに座る事にした万里子でしたが、
やっぱり外の様子が気になります。

(門を出たら大丈夫なんだよね？もうすぐかな……)

関所が近づいてきて、万里子はやっと白玉を話せると門をくぐるの
を今か今かと待っておりまして。

不思議な事に、関所には誰もおりません。

(入る時に居たあの怖い男の人もいないし……厳しかったのは式典
前だけだったのかな?)

そんな事を思いながらすんなり関所を通ると、手入れのされていない鬱蒼とした緑が万里子と白玉を迎えました。

すると、白玉は速度を上げ、道を逸れて大きな木々の生い茂る森へと向かいました。

「あれ？白玉どしたの？こっちは道はないよ？」

思わず窓から身を乗り出して、ペガロを引く白玉の後姿に向かって呼びかけました。

『姫様、これからもつと速度を上げます。危険ですから、身を乗り出すのはおやめください』

「…どしたの？何かあったの？みんな…みんな変だよ。なんて言うてくれないの？何かあったんだって事は、私にだって分かるよ！」

『姫様……』

いつもはゆっくりと静かに走る白玉は、森の中を猛スピードで走り抜けます。

その速さに木々の間をすり抜ける際、しゅん！ひゅん！と鋭い音がし、万里子は慌てて窓辺を離れました。

「何があったの？どうしてサイナの皆と離れて、道も外れて森をこんな速く走らなきゃならないの？」

『おひとりにして申し訳ありません……実は…ラウリナ国の国王陛下がお亡くなりになりました。先程の鐘の音はその報せです。大神官であるジル様がこの世界全てに響き渡らせたのです』

「え？だってあの…ヤンテが国王の病状は回復するって言ったんじゃないの？」

『そうです。ですから今、まだ各国の王族や有力な貴族の滞在する王都は大変な混乱の中にあります。……もしかしたら、姫様にも火の粉が及ぶ可能性があります』

「……ごめんなさい。私…ほんとにみんなに迷惑かけてる……」

『……ギリギリだったんです。国王陛下の病状は思わしくはありませんでしたが、まさかこんな早くに亡くなられるとは……イディ様も想定外だったのでしょう。本当はマリー姫が本格的に疑われる前に姫様を王都から遠ざけるおつもりでした』

「あ！……ヤンテの言葉が間違ってたから？あの子が疑われたら……」

そこまで考えがたどり着き、万里子は言葉にしましたが、白玉はその問いには答えませんでした。

（あの子が疑われたら、私かもしれないって話になるんだ……）

この世界に来た時、神殿には沢山の神官がおりました。

その全員が、最後まで残っていた万里子を知っています。そして、万里子の居場所をシルが知っているであろう事も……。それなのに、今自分はどこに向かおうとしているんだろう… たったひとりで、どこに行けるっていうんだろう… 万里子は、どんどん濃くなる緑の木々を見つめました。

「あの、どこに行こうとしてるの？森の奥に何かあるの？」

『サイナの長老の森ですよ。あの泉のほとりに戻りましょう』

「でも、道から外れてるよ？こつちでいいの？」

森の奥に進むに連れて、どんどん暗く木々の隙間も狭くなっていき
ました。そんな中でも白玉はぶつかる事なくすり抜けて行きます。

『最短経路を進んでおります。精霊と聖獣はお互いを傷つけません。
友好関係にありますから、ぶつかる事なく、道を作ってくれますので
す』

すると、ちょうどペガロが通れる幅まで道を作られていきます。
それはまるで緑の精霊には白玉の行き先が分かっているかのように
でした。

ただひたすら真っ直ぐ突き進んでいたある瞬間、突然緑森の動きが
変わりました。

何かに反発するかのように、ざわざわと不快な音を立てて進路を作
っていきます。その形は、先程までのようなまっすぐな道ではなく、
いびつな形を作っていました。

葉が窓にぶつかり、ペガロの中に数枚はらはらと落ち、がくんと軽
い衝撃を感じることもありました。

「どしたの？何かが起こってるの？」

『申し訳ありません…精霊の心が荒れております。進路が曲がって
しまつて、これでは……』

「これでは??何?」

白玉の話の先を促そうと聞いた途端、今までにない衝撃でペガロが突然止まりました。

「な、何??」

恐る恐る窓から外を覗くと、木々を無理矢理動かしたかのようないびつな形の小さな広場が出来ており、一際大きな木のそばに長身の人影が見て取れました。

『やはり……あなたですか』

男は木の幹をひとなですると、広場の中心へと歩を進めました。ぽつかりと空いた広場の上から差し込む光を受け、次第に姿を現した男は、万里子にとって余りにも身近な人物でした。

「ルヴェルさん……」

「おかえり、マール。さあ…みんな君を待っているよ」

その言葉と共に、また木々がざわざわと嫌な音を立てて移動します。完全に開けたその先には、遠ざかったはずの王都の関所が見えました。

52・距離

万里子は、現れた人物がルヴェルである事に心底驚いておりました。

「ルヴェルさん……どして？」

「どうして……か。迎えに来たんだよ。君がヤンテの姫君だからね」

いつもの優雅な微笑みを浮かべ、スツと差し伸べられた手に、万里子はとつさに自分の手を乗せてしまいました。

そのまま手を引かれ、外に一步出ます。万里子にはまだ、なぜルヴェルがここに居て、なぜ自分達がだいぶ前に発ったはずの関所前にいるのか分かりません。

万里子には分からないことが多すぎて、ついつい誘こゝろわれるがままにペガロを降りてしまったのです。

「姫様！ いけません！」

万里子よりも冷静に状況を見ていた白玉が、不用意に外に出た万里子を叱りました。

「えっ？ だ、だって……」

いつもは穏やかな白玉の鋭い声に驚きながら振り向いた万里子は、それ以上の驚きに襲われて次の言葉が出てきませんでした。

真っ白で毛並みの美しかった白玉の体は、小さな切り傷が無数に出て来っており、特に顔と宙に浮いた足には傷が集中しており血だらけでした。

「や、やだっ！なんで？」

慌てて白玉に駆け寄り寄ろうとした万里子の手を、ルヴェルがものすごい力で引き止めました。

「いたっ！！……ルヴェルさん！？離してっ！」

「大丈夫だよ、そんなに酷い傷じゃない。君をここまで無事に届けてもらわなきゃいけなかったからね」

そんなことを穏やかな口調で話すルヴェルが信じられず、万里子は恐る恐る聞き返しました。

「それってどういう…」

視線の先で白玉がぶるる、と小さく鼻を鳴らしました。すると大きな目の横に一際長く走った横傷から血が滴り落ちます。

「いやだあ！白玉！こんなに血が出て…大丈夫じゃないよ！」

（おかしい。だってさっき白玉は、聖獣と精霊は友好関係にあるから決して傷つけたりしないって言ってたのに！）

その時ふと、頭の中でバラバラだった疑問が、出来事が、ひとつに繋がった気がしました。

振りほどこうとしていた手の力を万里子が緩めると、ルヴェルも指の力を弱めました。それでも逃げられないよう、ギリギリの強さで万里子を押さえ込んでいました。

「どうすればいいんですか？私に用事があるんですよね？なら、も

「白玉を傷つけないでください」

万里子は静かに問いかけました。するすると動き綺麗な道を作っていた木々が、突然ざわざわとおかしな葉ずれの音をさせ、いびつな道を作りそれに抗うように全身に傷を負った白玉の姿の原因は、自分を宮殿に戻らせる為の罠であり、そのように緑を操ったのはルヴェルである、万里子は悟ったのです。

「ヤンテの姫君として、宮殿に戻ってもらおうよ。最新型のペガロで迎えに来たんだ。速いだろう？後はここで戻って来る為の術をかけた。ここまで抵抗するとは思わなかったが、まあ戻ってきたんだから良しとしておくよ。でも…連れて行くのは君ひとりだ。スホが近くにいると逃げ出そうとするだろう？逃がそうとする人間も出てくるだろうしね…」

動きを押さえつけるために万里子の手首を掴んでいた手をすりと手の平に移し、優しく万里子の手を包み込むと、ルヴェルは自身に乗ってきたペガロへと連れて行くこととしました。

『姫様！行ってはなりません！！』

白玉の悲痛な叫びが聞こえてきました。

その言葉に再度白玉に目をやると、周りの木々が白玉に迫っているのが見えました。

先程ルヴェルがさらりと撫でた大木が一際大きくうねり、耳障りなほどの葉ずれの音を響かせます。それは大木の叫びに聞こえました。その音に影響されたのか、周りの木々もざわざわざわ……と、周囲の音が掻き消される程の葉の音をさせ、とうとう白玉が飲み込まれそうになってしまいました。

「止めて！私、ひとりでいきますから！白玉をこれ以上傷つけないでください！」

すると、一瞬で耳が痛い程のざわついた音はなくなり、木々もピタリと動きを止めました。

「白玉を、逃がしてください。ちゃんと、傷を治せる場所に、逃がしてください！約束してくれたら、ちゃんとひとりでいきますから！」

「交渉の余地は無いけれど……ふむ。良いよ。どっちみち、彼は置いて行く事になるんだから。拘束も解いてあげよう」

じつと木々の攻撃を受けるだけだった白玉が、よろりと足を動かしました。

「白玉、ごめんね。ごめんね、いっぱい痛い思いさせて、ほんごめん。ちゃんと怪我を治してね。サイナの……うっん。元居たジルさんのお家に、戻ってね」

一生懸命言葉を紡いでいたその間、白玉は大きな宝石のような瞳を潤ませ、悲しそうに万里子を見つめていました。

すると、一瞬で万里子と白玉の間に、周りの木々が壁のように立ちはだかり白玉の姿が見えなくなりました。白玉からも、愛しい姫の姿が見えなくなってしまったのでございます。

ルヴェルのペガロは今まで見たどんなペガロよりも豪華で華やかで優美で堂々としていて、まるでルヴェルそのものようでした。ゆっくり休むようにと、大きな寝台に案内されましたが、万里子はゆるく首を振ると一番小さなソファに膝を抱えて座り込みました。

(考えなきや。ちゃんと、考えなきや……)

泣き出しそうになると、必死で堪えてそう自分に言い聞かせるようにしても何も考えられず、頭の中では綺麗な顔から沢山血を流しながらも、自分と一緒に居ようとしてくれた白玉の大きな瞳が浮かんで、万里子はペガロが止まるまでの間、ずっと唇をかみ締めておりました。

「着いたよ」

ルヴェルにそう言われ、重い頭を持ち上げると、窓の外には宮殿への門が見えました。人々の声が聞こえます。

ルヴェルのペガロが到着した事で、その声は益々大きくどよめきました。

ルヴェルに手を引かれ、外に一步出てみますと、辺りはしんと静まり返りました。門をくぐると、左右に一列に並んだ各国の王族や貴族達が万里子を出迎えました。

男達は皆片膝をついて右手で剣や杖を横に置き左手を胸にあて、女達は立ち膝で両手を胸の前で置いておりました。

その中には、イディも、ジルも、ネストラードも、シアナもグリユーネもおりました。

皆、他の人々と同じように頭を垂れるその姿を見て万里子は悲しく

なりました。

今まで笑い合ったりふざけあったりしてきた大切な人達との間に距離が出来たのを感じてしまったのです。

万里子はその中をまっすぐルヴェルに手を引かれ歩きました。その先には、周りの人々と違い、仁王立ちになって待つ人物がおりました。

その人物とは、亡き国王陛下の後を継ぎ、国王となったクラムルドでございます。

52・距離（後書き）

いつか、いつか万里子は幸せになります！（そのはずですよ！）

53・意外な行動

ルヴェルは万里子を連れてクラムルードの前まで進むと、万里子の手をゆつくりと離し、居並ぶ貴族達の横に移動して、彼らと同じように跪きました。

冷たい風を手の平に感じ、ぶるりと小さく震えた万里子は胸の前で両手をぎゅゅと握ると、目の前に立つクラムルードを見上げました。

すると、クラムルードの赤い瞳とかち合いました。その時初めて万里子はずっとクラムルードに見られていたと知ったのです。

その不躰なまでの視線に、万里子はムツとしました。でも万里子はただでさえ大人しい性格で、大勢の前で注目されるのは慣れておりませんでしたので、ちよつとした反抗心をとある行動で現しました。口を尖らせ、クラムルードを睨んだのです。

そんな万里子の様子を見て、クラムルードの眉がびくりと反応しました。

万里子はそれを自分の不満が伝わったと思い、少しだけ胸が軽くなったのですが、実際は全然違いました。

万里子の柔らかな唇が突き出され、上目遣いで見つめているのを見て、クラムルードは万里子の意図とは全く別の感情が胸に沸き起こっていたのです。

もつとも、夜会があつた夜の事を知らない万里子には知る由も無いのですが……。

（今日もきつと何か嫌な事が起こるんだろうな…いや、きつとじゃなくて絶対ありそう！）

クラムルードに会うと嫌な事が起こるのです。

思わず殴ってしまふ程腹が立ったり、泉に落ちそうになったりと過去の嫌なことが頭をよぎります。

更にはこんな形で目の前に現れたのですから、万里子が用心深くなくても仕方ありません。

万里子は、目を逸らしたくなるのをぐっと我慢してクラムルードを見していました。

すると、先に目を逸らしたのはクラムルードでした。

「……部屋に案内する。ついて来い」

「へ？」

有力者ばかりのこの場で、姫として担ぎ出されるか、申し出なかった事を責められるかだと思っておりましたので、万里子は思わず呆けた返事をしてしまいました。

クラムルードがさっさと後ろを向き、宮殿に向かおうとした時、同じようにクラムルードの意外な行動に呆気に取られていた人々は万里子よりも早く立ち直り、一斉に意義を唱えました。

そんな中でもガルデイスの王、ジャーレはすばやく立ち上がり、一気にクラムルードとの距離を縮めると大声で詰め寄りました。

「クラムルード殿！このような時に何を！」

山のような大男が大きな声をあげるのは大変な迫力で、万里子はその声だけで身をすくめ、イディも剣を持ち、ふたりの間に割って入ろうとしました。

そのイディをクラムルードは手を出して制します。クラムルードは

自分に覆いかぶさる程の大男を相手にしても落ち着いていました。

「ジャーレ殿。先程申し上げたはずですよ。初めから姫の候補はもうひとり居た。」

式典でも、裏で控えていた。実際、扱代……本物だったのは、今ここに居る彼女だったという、それだけの事。儀式は滞りなく行われた」

「だが!!」

「神託の儀式の後半!」

更に畳み掛けようとしたジャーレの言葉に、クラムルードは強い口調でかぶせました。

「…儀式の後半、ヤンテ自身のお声が消えた後、マリーの声になってからの言葉を信用したのはこちらの落ち度。却ってどの言葉を信じたら良いのか、これで分かったのでは? 貴方方あなたがたの国にはまだ影響がないはず」

「ヤンテのお声だと? それでは神殿を作り、儀式を行えというそれだけではないか!」

「そうだ。それは全員が条件は同じはず」

「あの娘が今度こそ本物の姫だというなら、あの娘を使ってもう一度ヤンテに出てきて頂ければ良いではないか!」

今までクラムルードに向いていた、怒りに燃えた目が突然万里子に向けられ、万里子は身が竦む思いでした。

クラムルードは大丈夫だと踏んだのか、イデイが万里子の前に立ち

はだかり、ジャーレの目から万里子を隠しました。

「ジャーレ殿……貴方も聞いていたはずだ。ヤンテは長く出てくる事が出来ない。儀式の時はあれが精一杯だったのだろう。実際、彼女は寝込んでしまった。今私達が出るのは、神殿を作る事。違うか？」

「くっ！ならば、なぜあの娘は消えた！？そしてなぜ本物の姫が逃げ出したのだ！」

「彼女にまで被害を及ぼさないためだ。父王が亡くなり、神託に疑惑が生じた。いくら本物の姫が彼女だと分かったとしても、混乱に乗じて身が危なくなるともしれぬ。だから少しの間王都から離しておこうと思った。だが、マリーが消えてそうはいかなくなった。だから連れ戻した。体調を考えると、再度の儀式は出来ぬ。

何かあれば、マリーにした時のように面会を申し込めば良い。客室は空けておく。これはジャーレ殿だけに限らぬ。スイルもそうだし、イルーもだ。他に何か質問は？」

全員が無言になり、クラムルードが踵を返そうとした時、列の後方から声があがりました。

「国王陛下。私どもは帰国致します。今日を逃せば、ヨークの内にイルーに上陸するのは難しいので……連絡は神官に……神官のライカに任せます」

発言したイルー人の女性の横でただひとり、旅装束のフードを脱いだライカが万里子に向かって頭を下げました。

「またお会いできる日を、楽しみにしております」

「は、はあ……」

「そうか。足止めして申し訳なかった。気をつけて行くが良い」

万里子がライカと呼ばれた青年に気を取られておりますと、前方から鋭い声が飛んで来ました。

「おい！早くしろ。客人をいつまでも外で跪かせておく気か？」

そう言われて万里子はあたふたと周りを見渡しました。

数人が先程の騒ぎに腰を上げておりましたが大半はまだ跪いたままです。

「あわわわ！す、すみませんでしたっ！」

慌ててびよこんとお辞儀をすると、どんどん遠くなるクラムルードの背中を急いで追いました。

マリー姫とはかけ離れたみすばらしい格好の地味な容姿の『本物の姫』の慌てようを、人々は呆気にとられて眺めておりました。

その身体には大きすぎるマントにもたつきながらも、万里子の小さな背中がやつとクラムルードに追いついた頃、ジャーレの向かい側でクスクスと笑い声が起りました。

「ミルファ殿」

ずっと黙って様子を見ていたスイルの女王、ミルファでした。

「よろしいのではなくて？経緯に疑問は残るけれど、クラムルード

殿の言う事も正論ですわ。そんなにカツカなさらない方がよろしいわよ？ 姫様に何かあってまた闇の時代に戻るのだけは、避けないと……」

「た、確かにそうだが、だがしかし……」

「また面会を申し込んでみましょう。相手が変われば、意外とすんなり会って頂けるかもしれませんわよ？」

ミルファはそう言うと、ストールで口元を隠してホホホホ…と楽しそうに笑ったのでした。

「ああああああの！今のって何ですか？説明済みとかナントカ……」
「言葉通りだ」

クラムルードの歩みについて行くには小走りにならなければならず、万里子は息を切らしながら目の前の背中に問いかけました。

（まったく！歩くのが速いのは兄弟一緒？）

ホールでイディに置いていかれそうになったのを思い出し、今自分の後方を守るように歩いているイディを振り返りました。

でも、イディは困ったように苦笑するだけです。

「もしかして、庇ってくれたの??」

「お前、あほか。ああでも言わないと、血の気が多いジャーレはまた戦でも始めかねない。せつかく世界に光がもどつたのに、元の木阿弥だろ」

「な、なるほど」

「後は女官から聞け」

「によかん？」

ホールから伸びるひとつの廊下を歩いておりましたが、グリューネの部屋があった廊下とは違い、柱の彫刻も壁に描かれた紋様も凝つたものでした。

「今日からこの棟の主はお前だ。一番奥……ここが寝室だ。中で待ってる」

「ひ、ひとりで？」

「俺を誘ってるのか？」

「ち、違うもん！ただ聞いただけじゃない！」

「悪いが俺にも好みがあるんでな。もうじき女官が来るから入ってる。この棟は警備もちゃんとしてるが、室内の方が結界が強い。兄上、行こう」

「ああ……では姫様……今日はゆっくりお休みください」

イディはそう言うと、クラムルードの後を追いました。

いつも兄のように接してくれたイディの変化に、万里子の心は追いつけないでいました。自分が姫になるとはこういう事なんだと頭では分かっている、悲しくて仕方がありません。

「あ！でもまた夢で色々話せるかも！」

そう思いつき、一瞬気持ちが浮上した万里子でしたが、すぐに壁にぶつかります。

「室内は結界が強い……って事は、悪い人も入れないけど、親しい人も入れないって事？時計も結局見つからなかったし……ああああ……どうしよう……」

先程まで目の前にいたクラムルードのサッシュの中に、万里子の探す腕時計があるのですが、勿論この事も万里子は知りません。万里子はがっくりと頂垂れたのでした。

53・意外な行動（後書き）

「面会」と「謁見」で迷ったのですが、物語上で、ヤンテの姫「王族と対等っていう扱いで、対等な王族からの申し出で「面会」を使いました。でも立場で使い分けるのもややこしくなるので、面会で統一したいと思います。

それと、教えていただいた誤字修正しました。ありがとうございましたー（＾v＾）

54・面会ラッシュ

項垂れていても仕方ありません。
万里子はゆっくりと顔を上げました。

ですがその瞳に映った光景に、またもや項垂れなくなりました。

「なに、このキラツキラな部屋は……」

見渡す限りの金色に黄色。窓から差し込む光にキラツキラと乱反射し、それは目に痛い程でございました。

間違いなく、この部屋はマリーが使っていたのでしよう。

大きなソファも寝台も、テーブルすらキラキラの金色猫足で、クッションや豪華なりボンで括られているたっぷりとしたドレープや刺繍が美しいカーテンは黄色です。更に、高い天井から寝台を柔らかく包み込んでいる天蓋も白いレースのところどころに金糸で繊細かつ美しい刺繍が施されており、どこを見渡しても目がチカチカしてしまう程にキラキラしておりました。

「……ものっすごく居心地が悪いんだけど……」

先程、クラムルードに今日からこの棟の主あまじだと言われた事を思い出しました。

「外で、あの子マリーが消えたって言ってたけど、何があったんだろ？」

誰かに聞きたいのですが、どうしたらいいのか、急変したイディヤルヴェルの様子からも、万里子は誰に聞いたら答えてもらえるのかも分からなくなっておりまして。

自分のイニスも白玉が引いていたペガロに置いたままです。

豪華な天蓋の向こうに衣装タンスらしい物を見つけて開けてみましたが、中にはやたら露出の多いものやシースルーの生地を幾重にも重ねた繊細なデザインの衣が並び（しかもその殆どが黄色）、幾分普通に見えた衣でも万里子にとっては胸元が大きく開きすぎているような気がして、結局は諦めて扉を閉めました。

とりあえずマントを脱ぎ、金色の猫足が繊細なソファの背にかけましたが、ソファを汚してしまわないかと心配になりました。

それだけの事で、ものすごく疲れた気がします。万里子はこの部屋で本当に過ごしていけるのだろうかと早くも不安を感じました。

その時、ととん。と軽やかなノツクの音が聞こえました。

（だ、誰か来たっ！）

返事をする間もなく、カチリと扉が開けられます。

入って来たのは、ふたりの若い女性でした。

ひとりは鮮やかな緑の長い髪を頭の高い位置でお団子にしており、背が高くすらりとした女性で、もうひとりは小麦色の肌に明るいオレンジ色の髪が丸い顔の周りでくるくるとカールした万里子よりも背の低い少しぽっちゃりした女性でした。

ふたりとも同じデザインの膝丈の衣を着ておりましたが、衣は色違いでサイナ人であろう背の高い女性は黄緑色を、カナム人であろうぽっちゃりした女性は淡いオレンジ色でした。

「姫様。お初にお目にかかります。私は姫様の専属女官を勤めさせて頂く事になりましたセシユラと申します」

セシユラが切れ長のほんの少しつりあがった淡い緑：萌黄色もえぎいろの瞳を
まっすぐに万里子に向けて言いました。

視線の先に居た万里子が旅支度を選んだのは用意していたドレスで
もなく動きやすさで選んだ普段着でした。

その姿を見て、セシユラは片眉をくつと上げ「お召し替えをなさっ
てくださいませ」と言い万里子を困らせました。

「ええつと、ここにある衣はちよつと私には着れないし、あの、私
の衣が入ったイニスをルヴェルさんに会った時それまで乗ってたペ
ガロに忘れてしまったんです」

すると、大げさにため息をつき更に何か言おうとしたセシユラを、
セシユラよりも頭ひとつ分小さなもうひとりの女性が制しました。

「まあいいじゃないのセシユラ。まずは私にも自己紹介させて頂戴。
こほん。改めまして、姫様。私はレニーと申しまして、こちらのセ
シユラと共に姫様のお世話をさせて頂きます」

片やレニーは、丸い大きな杏色あんずいろの瞳を好奇心も露に輝かせ、にこや
かに話し出しました。

その様子を見て、万里子は少しほつとします。人の笑顔を見たのは
なんだか久しぶりな気がしました。

「よ、よろしくお願ひします」

ふたりが深々とお辞儀をするのを見て、慌ててお辞儀をした万里子
に、セシユラはやはり片眉をくつと上げたのでした。

「姫様、まずはお召し替えをしていたただかねばならぬのです。マリ

「様の衣が着れないお気持ちは分かりますが……では、姫様が置いてきたというイニスはどこにあるでしょうか？」

「王都の関所の外に広がる森の中です。あの……神官のシアナさんに会いたいんですが、無理ですか？」

「それよりも早く会っていただきたい方々がおりますが……そのシアナという者であれば、姫様の衣のありかが分かりますか？」

「会っていただきたい方??というか方々って言いました？」

「ええ。左様で御座います。宰相様やガルデイスのジャーレ国王陛下、それにスイルのミルファ女王陛下が姫様にお目にかかりたいとの事でございます。三国を代表するような方々から一度に申し入れがありましたのよ！」

(宰相様に国王陛下に女王陛下!?!なんてそんなお偉い方々が!?)

「ええええええ!!むむむむ!むむ無理です!」

万里子はその身分を聞くだけでも緊張でもってしまいました。ただでさえ日頃から平々凡々で居たい万里子にとって、そのような身分の人達とは関わりたくない一心でしたが、セシユラは違う意味で受け取ったようでした。

「そうですわね。まずは少しでも見れるお姿になっていただきませんと。それで、そのシアナという者であれば、姫様の衣がどうかになりますの?お答え次第では、どの面会よりも先にシアナという者を探しますが……」

「ほんとですか！？お、お願いします！！」

思わずセシユラの手に飛びつき、ぶんぶんと振って必死にお願いする万里子を、セシユラは変なモノでも見るように上半身を引き、「わ、わかりましたわ」と言うのが精一杯でした。万里子がようやく手を離すと、セシユラはほっつと息を吐き出しました。その様子を、レニーは面白そうに見ています。

「姫様、先程はノックのお返事も聞かず入室して申し訳ございませんでした。今後は、私達を呼ぶ時や、入室を許可する際は2回手を叩いてくださいませ。なお、私達はシアナを探しますので一旦棟から離れますが、外出は決してなさらないようお願い致します。棟の入り口には警備のドリーがおりますので、こっそり抜け出す事はまず無理ですが……私達が居ない間の用事は彼女に申し付けてくださいませ。では、一刻も早くシアナをお連れ致しますので、お待ちくださいませね」

ふたりが出て行くと、扉が閉まった部屋の外から、遠ざかるふたりの声が聞こえます。

「おかしな姫だわ……あんなにみすばらしくて……」

「まあまあ。王都を出るよう指示されていたようだし、一般市民に紛れ込むなら正解の格好だわ。それに私は偉そうにしないのを好ましく思ってたわ。少なくとも前の偽者よりはね」

「レニー！でもそれは……のは、どう……」

（むむむ。聞こえなくなった。ここって結構壁が薄いのか？結構ハッキリ聞こえたけど……結界強いつて言ってたっけ？）

みすばらしい、と言われ、万里子は自分の衣を見下ろし普段着の中

でもお気に入りにミルクをたっぷり入れたコーヒーのような、浅黄うすき色の衣を摘み上げました。

ちよつとやそつとじゃ破れませんし、そう簡単に皺もつきません。どこにだって気にせず座れる、そんなところが気に入っていました。

でも、今は目の前にある金の猫足ソファが豪華すぎて自分の格好とそぐわない事が気になって座れません。万里子は諦めて壁際の床に座り込むと、手近にあった黄色いクッションを抱えてごろんと寝転がりました。

（あの子はどうして消えちゃったんだろう……日本に帰ったのかなあ。いいなあ。私も帰りたい……）

こちらに来て友達も家族のような人も、仕事も出来て、もしこのまま帰れなかったとしても、なんとか生きていけるかもしれないと思った矢先に、それらは簡単に崩れてしまい、ここ最近はなかったホームシックにかかったようでした。

もつとも、そう感傷に浸った次の瞬間には、もう口を大きく開けてかくかくと寝息をたてておりましたけれども……。

54・面会ラッシュ(後書き)

長くなったので二つに分けます。

55・入れ替わり

どれ位の時間が経ったでしょう。

万里子は心労もあり、あのまま眠り続けておりました。その眠りを破ったのは、レニーの明るい声とノックでした。

ととん。

「姫様。シアナをお連れ致しました！」

嬉しそうに報告するレニーの声に、万里子は飛び起き「はいっ！」と返事しました。

が、扉は一向に開きません。

「えとー。どうぞ?？」

やはり扉は開かず、万里子は扉を開けようと立ち上がったところで思い出しました。

ええっと……あ！手を叩くんだった！

慌てて両の手の平を合わせ、パン、パンツと叩きました。

かちゃり。と扉が開き、レニーが入って来ます。

続いてシアナが万里子のイニスを抱えて入って来ました。

「マール様、イニスをお探しだと聞いたのでお持ち致しました」

「シアナさん！会いたかったですー！」

思わず飛びつく万里子を、シアナはしっかりと受け止め、優しく背中を撫でました。

いつものように、微笑みながら自分の事を呼んでくれて、万里子はどれだけ嬉しかったか知れませんが。万里子はシアナの背に回した両手にぎゅうつと力を入れました。

「私わたくしもです。ご無事でなによりですわ」

「はい。私は無事です。あのっ、これ、イニスがあるって事は、もしかして白玉に？」

「ええ。会いましたわ。心配なさらずとも大丈夫ですわ。あの…お話がしたいのですが、女官を下げていただく事はできませんか？」

後半、声を潜めて話すシアナに、万里子は「何て言えばいいんでしょう？」「と聞くと、「ああ、やはりマイル様はマイル様ですわねえ」と、褒められたのか呆れられたのか分からない答えが返ってきたのでした。

シアナに教えられた通りにレニーに告げると、レニーは「では御用の際はお呼びください」と礼をし出て行きました。

「でも、ここ話が筒抜けですよ？壁が薄いのか、外の声が丸聞こえなんです」

「それはそのように術がかかっているからですわ。この部屋は、扉が閉まったと同時に発動する結界術がかけられております。侵入者や不審者の存在をいち早く知るために、外からの物音は聞こえやすくなっております。反対に、中の物音は外には漏れません。重要な

話を聞かれたら困りますからね」

「そうなんですか！それで最初私が返事してないのにレニーさん達が入ってきたんですかね？」

「まだ手を叩く合図など、マール様も知らなかった時ですか？それならばまだ分かりますが……手を2回叩く合図だけが、室内から結界を破って外に聞こえるようになっております。もともと、外の物音が中に筒抜けなのは秘密ですわよ。誰にも申してはなりません、専属女官にもです」

「トップシークレットですか？」

「とつぷ……？よく分かりませんが、ごく一部の人間しか知りません。私は……この術をかけたジル様より聞きました。マール様……ジル様は、貴方をお守りしたいというお心ひとつで、様々な手立てを講じられてきました。様々な想定をされ、それに対する対応をお考えになり……私がいくつか秘密を知っていることが必要だと判断されたのです。それが……当たったようですわ」

「ジルさんが……」

ジルの思いを知り、万里子は目頭が熱くなるのを感じました。

「ところで、白玉スホの事ですけれども……」

「あ、はい！ほんとに白玉は大丈夫ですか？傷が沢山あったし、血も……」

「ええ。殆どが浅い傷ですので、大丈夫でございます。あの方も白スホ

玉があれ程抵抗するとは思わなかったのでしょうか」

「あの、方かたですか？」

「……ルヴェル様です。マール様、グリユーネ様が宮殿に引き止められている事はご存知ですか？」

「はい」

シアナは「実は……」と少し言いよどみ、しばらく考え込むと、決心したようにルヴェルの過去を話し出しました。

「ルヴェル様は、闇の時代にサイナの長であつたお父上を始め、お母上とご兄弟全てを盗賊に殺されてしまい、ひとりで生きていくしかなかったのですわ……血を吐く程の努力をされたと聞いております。様々な努力をし、やがて長の座を取り戻したのです。グリユーネ様は事件当時宮殿で衣装部を任されておりまして、ヤンテが消え門が閉ざされて、サイナに戻る頃が許されなかつたのです。グリユーネ様がサイナに戻るまで、ルヴェル様は愛に、家族に飢えていたのですわ……」

この度引き止められましたのも、マール様が絡んでいると思って、クラムルード陛下の指示に従って連れ戻しに向かつたのです」

「そう……だつたんですか。私が原因だつたんですね」

「勿論、宮殿側もグリユーネ様の腕が欲しいのは確かですから。ルヴェル様は少しの可能性に賭けたのだと思います。ですから、実は私ルヴェル様が煎じた薬を持ち、後を追つておりましたの」

「え!？」

「あれ程^{スホ}白玉が身体を張るとは驚きましたが、それでも手元にあつた薬で治療は出来ましたわ。私の術や薬では応急処置にしかならなかつたかもしれませんが、さすがルヴェル様でございます。傷口は完全に塞がり、痛みも無いはずですよ。まだ傷が線として身体に残つてはおりますが、二晩も経てばそれも消えるそうです。白玉^{スホ}には、ナハクに戻るよう言つてありますから、どうかご心配なさらずに……」

「良かった……ほんとに怖かつたんです。白玉沢山血を出して……」
「ルヴェル様が……許せませんか？」

万里子はじつと空^{くう}を見つめ考えると、ゆっくりと首を横に振りました。

「私が出発の時に先にグリユーネさんの部屋を飛び出してなかつたら……ちゃんと、話してたらそんな事にならなかつたかもしれませんが、それに、私がもしルヴェルさんの立場だったら、家族の為なら同じ選択をしたと思います。方法は違つてたと思うけど……やっぱり連れ戻す道を選ぶと思います」

「そうですね……おひとり不安でしたでしょうに……一緒にできず申し訳ありません……ですが、今は浸っている時ではございませんわね。面会が控えているのでございましょう？」

その言葉に一気に現実に戻され、万里子は文字通り頭を抱えましました。

「そうなんですー！なんでも宰相様とガルデイスの国王陛下とスイ

ルの女王陛下から申し入れがあったとかで…三国の代表とまで言われたらプレッシャー以外の何ものでもないですよー！」

「あらまあ。勢揃いですわね。いくつかドレスはお持ちになっておられますか？」

シアナが身体の後ろからイニスを持ち出し、万里子に渡しました。

「あ！ありがとうございます！ジルさんに作ってもらったものと、ルヴェルさんに作ってもらったものが入ってるんですよ。確か何着か持ってきたはずなんです。どうもこの部屋にある衣は私には合わなくて…」

シアナはキラツキラに輝く室内を見渡すと、「そうでしょうねえ…」と呟きました。

が、万里子に視線を戻した時、万里子の様子がおかしいことに気がついたのでございます。

「マール様？如何いたしましたか？」

「ちがうんです……」

「え？」

「中身がちがうんです！あの、シアナさん、これ、これですか？白玉のところにあつたの、これですか？？」

必死な様子の万里子に押され、冷静なシアナが少し焦ったように答えました。

「え…ええ。間違いございませんわ。確かにこれです。ひとつしか
ございませんでしたし……」

「で、ですよ。どうしよう……どこかで入れ替わっちゃったのか
な……」

焦りが強くなる中、万里子は色々な事が起こった今日一日の事を必
死に思いかえしました。

（ええと…今日私がイニスから手を離れた時は……ペガロの中だけ
だったと思うんだけど…他にあったかな？ええと…ええと……）

「あ！思い出しました！」

「いつですか？」

「今日、帰国する方が沢山居て入り口が混雑してたんです！人も沢
山居て、色々なイニスがあちこちにあつて……私、ずっと抱えてた
んですけど、一度だけ…ペガロに乗る直前座り込んで、その時は
離れました…急に発つ事になって慌てて掴んだだけ……」

「それが近くにあつた別の方のイニスだったのですね？故意にすり
替えられたとは考えられませんの？」

「それはないです！だって間違つて持ってきたのは私だし、すり替
えられて困るような大事なものなんて……あああー！」

そこまで言つて万里子は思い出しました。ジルから渡された対話の
鏡に必要なペンダントの事を……。

万里子はこうして、ふたつめの宝物をも失ってしまったのでござい

ます。

56・贈り物

「ジルさんにもらったペンダントが……イニスに入っていました」

「それはもしか対話の鏡の為に贈られたものでしょうか？」

「は、はい……」

「まあ……戻ってくれば問題ないのですが、もしも別の人間が所有欲を出してそのペンダントを自分の物としてしまうと、マール様の対話具としてはもう効果が無くなってしまいます。でも却ってその方が都合が良いのですわ。代わりの品を用意すれば済むのですから。対話の鏡の道具は、盗み聞きを防ぐ為にひとつしか対応しないのです。現在どなたのお手元にあるか分かりませんが、ペンダントをそのまま放置していたらいつまで経っても代わりの品を対話具として使えませんのよ。ペンダントの所有者が変わったかどうかは、数日様子を見た方がよろしいかと思えますわ。今はそれよりも……衣は如何いたしますか？」

「ど、どうしましょう……」

「そのイニスには何が入っておりますか？」

万里子を入れ替わってしまった、誰のものかも分からないイニスに視線を戻しました。

「ええつと……本とか、紙が殆どです。あとはなんだろ？珠のような物とか……ガラクタ？」

「どなたの物かしら…書物を後で調べたら分かるかもしれないわね。でも今はそれどころでは…では、衣のような物は…」

「な、ナイデス……。私のはあのイニスに全部入ってましたし、ここにあるのは（あの子）マリーのだけで……」

「そうですね……それではやはりマリー姫の衣を拝借して…いえ、拝借と申しましても、もうお戻りにはならないのですけれど……それしか方法が無いのではないのでしょうか……ちよっと、デザインはあの…奇抜ですけれど…」

イニス入れ替わり事件で、すっかり意識がそれてしまいましたが、万里子はシアナの言葉に、『マリー失踪事件』を思い出し、早速食い付きました。

「シアナさん！彼女…ええと、マリー姫が消えたって聞いたんですけど、消えたってどういう事なんですか？もう戻って来ないって本当ですか？なんでですか？」

「ま、マール様……落ち着いてくださいまし」

「落ち着いていられません！だって、帰るヒントがあるかもしれないのよ！」

それまで覗き込んでいたイニスを押しつけ、身を乗り出して聞いてくる万里子に、シアナは心苦しく思いながらも口を開き、真実を伝えました。

「それは……無理ですわ。マリー姫が消えた事こそが偽者である証拠ですのに……。マール様。彼女は、臍に付いていた石を取ったの

です」

「へ？……それだけ……ですか？」

「ええ。姫である証拠はふたつありましたわよね？ひとつは、名をサトウマリコという事。ふたつめは、お臍に赤い石がある事……そのひとつが無くなったのですもの。国王陛下が亡くなられ、動揺した神官が数人マリー姫のお部屋……つまりはこのお部屋に、乗り込んだそうです。ですが、既にお姿も気配も無く、床に赤い石が落ちていたそうです」

万里子は開いた口が塞がりませんでした。

（あんなに！あんなに姫っていう立場に執着してたのに、こんなおバカな消え方ってある！？神官が付きまわってうざすぎて相手にしてないって言うてたけど……ちゃんと聞いてたら、ピアスなんて外さないよね！？）

「しかも、纏っていた衣の一部も残されていたみたいですね。一体半裸でどちらに行かれたのでしょうか？」

そんな事をにこやかな微笑みのままサラリと言うシアナに、万里子は思わず心の中で祈りました。

（あの子の事は正直好きではなかったけど……でもせめて帰った先の日本が夜だったり、人目の無い場所でありませうように！！）

トントン。

とても几帳面なノックが響きました。

万里子がまだ慣れない入室の許可をすると、セシユラが箱をいくつか抱えておりました。

「お話中のところ申し訳ございません。姫様にお届け物です。念のため調べさせて頂きましたけれども、危険な物ではございませんでした」

セシユラは箱をテーブルの上に並べると、一旦シアナに向き深々と頭を下げました。

「シアナ様は神官様でいらっしやっただのですね。この度は大変失礼致しました。陛下が呼びでございます。扉を出たところに、使いの者を待たせてございますのでどうぞ」

「陛下……クラムルド国王陛下が私を？」

「えっ！シアナさん行っちゃうんですか？」

「ええ……衣の件は気になるのですが、陛下のご命令となると……。その後にはすぐ手配致しますわ。マイル様がジル様のお屋敷に置いておりました衣がいくつかありましたでしょうか？それをすぐはこちらにご用意致します。ただ当面は……」

「お話中申し訳ございませんが……衣の件とは……イニスに衣は無かったのですか？」

セシユラの厳しい視線に、万里子は思わず肩をすくめました。

「ええ……イニスが今日の混乱で、ホールで入れ替わってしまったよ
うなの」

するとなんと、今まで無表情だったセシユラが少し誇らしげに大きな箱の蓋を開けました。

中から、真つ赤なドレスが見えました。夏でも涼しい薄く軽やかな生地とさらりとした感触のレースが重ねられ、レースの縁は銀糸で細やかな刺繍が施されており、刺繍の中心にある赤く輝く宝石が見事に映える豪華なものでした。

「これ……」

万里子はあまりに素晴らしいドレスを見て、胸がつまりました。

「これ、グリユーネさんの作品ですね……」

「マール様、お分かりになりますの？」

「はい……短い間でしたけど、お手伝いさせてもらってましたもん。分かります。すごい……キレイ」

思わず手を伸ばし、生地を持ち上げると間からカードがするりと落ちました。

万里子はすぐに拾い上げ、カードを開きました。

『ルヴェルがした事、代わりに謝るわ。本当は直接謝りたいのだけど……今は混乱させるだけでしょうから、先にこれを贈るわね。これはお詫びではないのよ。式典の衣作成を手伝ってくれたお礼と、私にとっては孫も同然の存在となったあなたへの思いを込めたの。あなたに休みを与えた後、ひとりで作ったのよ。あなたの気持ち花落ち着いたら会いたいわ』

流れるような美しい文字は、そのところどころ滲んでいました。それは、グリユーネの涙のように思えました。

「私も、会いたいです……」

「マール様……お会いになりますの？」

「はい！絶対会いたいです！面会って、私からも申し込めるんですか？こんなに綺麗な衣もあるんだから、部屋から出て面会に行けますか？」

「え、ええ……」

トントン。

シアナが何かを言いかけてましたが、催促するようなノックに、言葉をつなげようと開いたその口を閉ざしました。

「…申し訳ございません。陛下をお待たせしてはいけませんわね。では私はこれで……」

「シアナさんにもまた会えますよね？」

「勿論ですわ。では後ほど……」

万里子を安心させるようににっこり微笑むと、シアナは部屋を出て行きました。

「さあ、お体に当ててみてくださいませ。グリユーネ様の作ですから、お直しはしなくてもよろしいかと思えますけれど…」

「ハイ！ピツタリです。すごい綺麗！」

元の世界でも動きやすい服を好んでいた万里子でしたけれども、やはりドレスというものに憧れはありました。

グリユーネが作ってくれたドレスは胸元の開きも少なく、気になるぷにぷにの二の腕も隠してくれるデザインでした。

自分の体型の悩みや好みを覚えてくれたのだと、そのグリユーネの優しさに万里子の顔には自然と笑みが浮かびました。

「他の衣や下着などは、レニーに用意させましょう。姫様はやはり赤がお似合いですから、カナム人のレニーなら手早く用意できるかと思えますわ」

「ありがとうございます！」

「……専属女官である私達にお礼など必要ありません」

「……でも、ありがとうございます。そっちの小さな箱は何ですか？」

「こちらはガルデイスのジャーレ国王陛下からですわ。ガルデイスの特産品ですよ」

その名前を聞き、万里子はピタリと動きを止めました。

（ジャーレって…あの怖い人？あの怖い人！？何？何を寄越したんだろ！？）

テーブルに置かれた小さな箱がとんでもなく危険な物に見えます。調べた後ですから、安全だとはわかっていても、神殿や先程外で見た山のような大男の剣幕が思い出され、開けたくないなあ…と思っ
てしまいました。

そんな万里子の変化に気付かないセシユラは、そのまま更に爆弾を落
落としました。

「ああ、グリユーネ様のドレスがあつて助かりましたわ。レニーに
急いで手配してもらつても晩餐会用のドレスは無理でしたもの」

恐ろしい言葉を聞いた気がして、万里子はギシギシときこちなく首
をめぐらせ、セシユラを見ました。

「……今何て言いました？」

「明日の晩餐会にちょうど良いお召し物ですわ」

「ば、ばんさん、かい？」

「ええ。陛下が企画しましたの。本日弔いの儀式がありお忙しいそ
うですわ。姫様もお疲れだろうから今日はゆっくりお休みになるよ
うにとの事でございます。神託の儀式を改めて行つつもりは無いそ
うで、そうなりますと姫様と各国の要人のお顔合わせが出来れば良
いわけですから。明日、姫様を正式に皆さんの紹介する晩餐会を行
うそうですわ。姫様も面会の前に皆さんのお顔を覚える良い機会で
すわ」

「という事は……その、その晩餐会とやらには面会の申し込みがあ
つたという人全員参加するんですか！？その、その……」

「勿論でございます。宰相様もジャーレ国王陛下も、ミルファ女王陛下もいらっしやいます。イルーの方々だけが既に発たれてしまつて残念ですわ」

万里子の脳内には、綺羅綺羅しい豪華な広間に巨大なテーブルが置かれ、生まれも育ちも上流階級の紳士淑女が並ぶ光景が浮かびました。その中にひとりぽつんと座り、人々の注目を浴びながら楽しく食事を……

(無理いいいーーーー！出来ないよーーーー！)

そんな万里子の心の叫びは、勿論セシユラには届きません。

却つて「今日中にマナーをしっかり覚えていただきますわ！」と、張り切つて宣言したのでした……。

57・無自覚な気遣い

「嫌ですー！それって断る事は出来ないんですか？」

恐る恐るセシユラに問いかけますと、セシユラの細く形の良い眉がくつと上がりました。

「ごめんなさい。すみません。ガンバリマス」

「……まだ何も申してませんけれども…姫様は……」

「何ですか？」

「……こちらの調子が狂いますわ」

その言葉を、どう受け止めて良いのか分からずセシユラの顔を見上げます。

相変わらずの無表情ではございましたが、セシユラの口角がほんの少しだけ上がっていたように見えました。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

シアナを迎えに来たのは、クラムルードの側近のひとりのガイアスでした。

側近の中でもイディに継ぐナンバー2と言われておりましたので、

彼の存在は勿論知っておりましたし、その彼を迎えに寄越した事にシアナは驚きました。
ガイアスの後ろを歩いていると、彼の足が思わぬ方向に足が向きました。

「あの、こちらは確か……」

「ああ。クラムルード陛下はただ今王の棟におります。本来なら本棟のお部屋でお会いになるところなのですが、儀式の合間を縫ってお会いになりますので、こちらへどうぞ」

「は、はい」

シアナはもう一度背筋を正すと、棟の棟へと足を踏み入れました。

(そこまでして私わたしに何の御用かしら……)

通されたのは、一番手前の小さな応接室でした。

「こちらでお待ちくださいませ」

軽く礼をすると、すぐにガイアスは出て行きました。

その部屋は、王の棟を訪れた人物がまず通される場所で、持ち物等に上手く魔法を隠して持ち込んでいないか、まず側近が面会し確認する部屋でした。

ですから、少ししてクラムルード本人が入って来たのにはさすがのシアナも驚きの声を上げました。

「へ、陛下……」

「……まだその呼び名は慣れないな」

慌てて正式な礼をとるシアナに向かって、クラムルードは苦笑を投げかけました。

「この度は……」

「よい。決まりきった挨拶などよせ。お前がシアナか」

「は、はい！」

「女性では唯一の神官だと聞いているが……今までどこで仕事をしていた？」

シアナはクラムルードの質問の意図がわかりませんでした。ですが、嘘をつく事は許されません。

「ナハクの長であり大神官であるジル様のお手伝いをしておりました」

「これから、宮殿で仕事をする事は可能か？」

「え？それは……どのような仕事でしょう？」

「ジル殿の下に居たのなら、ヤンテの姫の事も？」

「……存じております。マール様のお世話もさせて頂いております。もつとも、その時には『姫ではないが帰れなかった少女』としてですが……」

慎重に言葉を選びながら話すシアナを、クラムルードはじっと見つ

めておりました。

（わ、私わたくし、嘘はついておりませんわっ！落ちついて。落ち着くのを、シアナ！）

「ならば話は早い。ヤンテの姫は、扈代という名目上その身分は神殿預かりとなる。よって、側仕えの神官が必要になるのだ。他の王侯貴族が後見を申し出る前に、私の方からおまえ達に頼みたい」

「え？どれはどういう……」

あまりに意外な提案に、シアナの思考はついていけませんでした。

「つまり、後見人をジル殿にお願いし、側仕えの神官をシアナ、君にお願いしたいのだ。ジル殿からは了承をもらっている。召還されてからすぐにジル殿が動いてくれたのが幸이었다」

「お、お願いだなんてそんな……！喜んでお受け致します！」

「そうか……感謝する。それと……あいつは……マ、マールは元気か」
クラムルードを前にしてからというもの、警戒したり驚いたり感動したりと感情の動きが激しかったシアナが、この瞬間初めて冷静になれた気がしました。
これは……これはもしかして……。

（試してみようかしら……危険かしら？）

シアナはひとつ深く息を吸うと、落ち着いた所作で向き直りました。

「マール様は混乱しておりますが……お元気ですわ。あの……僭越ながら陛下、先の国王をお送りする儀式に、マール様は参加せずともよろしいのでしょうか？」

「お前は……^{グランデ}宰相のような事を言う……。俺は、そこまで背負わせる必要は無いと思う。あいつが正式なヤンテの姫として現れたのは父王が亡くなった後だ。ただでさえ混乱しているし疲れているだろう。もっと慎重にすべきだった。父王の死は……想定外だった。今日はゆっくり休ませてやってくれ。明日の晩餐会は中止できない」

「晩餐会でございますか？それは……マール様を皆様に正式に紹介する場として設けるものでしょうか？」

「グランデやジャーレなどが、早速面会を申し込んだと聞いている。初対面が面会で、いきなり政治的な駆け引きを持ちかけられても困るだろう。一堂に会していれば、あいつらも直接的な発言は避けるだろうし、あいつ……ま、マールも一度に全員覚えるのは無理かもしれないが、多少なりとも人となりは分かるだろう。側仕えとして、色々支えてやって欲しい。気心知れた相手が側に居たら気持ちも違ってくる。今日からでも王女の棟と一緒に滞在してくれ」

多少ぶつきらぼうで淡々とした言葉遣いでも、そこには細やかな気遣いが見えました。その奥底にはもつと深い感情も……。

(……自覚なさってないのかしら？)

「陛下は……お優しいのですね」

そう返されるのは想像もなかったでしょう。クラムルドは目をぱちくりとさせ、次の瞬間には大きな手を口元にあて表情を隠し

てしまいました。

「なっ何がだ！私はあるのおつちよこちよいに大切な弔いの儀式を邪魔して欲しくないだけだ！せめて今日はぐっすり眠って明日は失敗するなと伝える！……少し時間を取り過ぎたようだ。私はもう行かねばならん」

「あ。お部屋があまりにもマリー様仕様で煌びやかになっておりまして、ゆっくりお休みになれないかと……」

「何？あの女、そんなに部屋を好き勝手飾ってたのか？わかった。すぐに元に戻させよう。……い、言っておくが、寝不足では明日の失敗の繋がるからだからな！」

「お心遣い感謝いたします」

見送るために礼を取りましたが、既にクラムルードは退室しておりました。

（残念すぎますわ、陛下……今のところ、その気遣いはマール様には全然伝わっておりませんわ……）

そしてシアナは、さて誰を応援したものかとそんな悩みを抱きながら万里子の元へと急いだのでした。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「セシユラさん」

「姫様、私のことはどうかセシユラとお呼びくださいませ」

「……じゃあ、慣れたらそうします。ところでセシユラさん。ちょっと晚餐会の話題から逃げていいですか？」

すると、少し打ち解けたと思っていたセシユラの眉がまったく上がりませんでした。

「ごめんなさい。スイマセン。あの小さな箱が気になっただけなんです!」

「まあ！私とした事がうつかりしておりました。こちらはガルデイスのジャーレ国王陛下からでございます」

「ジャーレさんって、あの怖い方ですよ？その方が私に何の贈り物でしょうか。気になって仕方が無いんですけど」

「ジャーレ国王陛下が怖い方ですって？とんでも御座いませぬ。あのお方はダンディーな大人の魅力でとても人気のある方ですよ。声を荒げる事も滅多にありませんのに……」

(その滅多に無い光景をもう2度も見てるんですが……)

万里子は頭を捻りました。

いそいそと箱を持ち上げ、蓋を開けたセシユラは、中身が見えるように万里子に差し出しました。

「まあ！カードも付いておりますわ！なんて素敵なんでしょう。皆様、こちらはチロルと言いましてガルデイスの特産品なんですのよ。特に白色の物が希少なのです。真ん中の列が全て白ですわ！高級品で、滅多にお目にかかれるものではありませんのよ？」

チロル？その言葉だけ聞けば、万里子の頭には殆どの女の子が大好きなチョコレートを思い出します。

そして万里子も勿論例に漏れずチョコレートには目がありませんでした。

目の前の箱の中には、親指ほどの大きさの、少しいびつな丸い形の塊が5個ずつ5列で敷き詰められており、セシユラの言う通り真ん中の3列目は白い塊が並んでおりました。

「ま、まずはカードから……」

手に取りカードを開くと、荒々しい大きな字が飛び込んで参りました。

『姫様、先程はお恥ずかしい姿をお見せし申し訳御座いませんでした。これはほんのお詫びでございます。チロルがまた取れるようになったのも姫様のおかげ……感謝致します』

「まあ……なんと男らしい力強い筆跡なのでしょう……」

気がつくくと、頬を寄せてセシユラがカードを覗き込んでおりました。

（もしやとは思ったけど……セシユラさんはジャーレさんのファンなのかな？いや、間違いなくそうだよね……）

「甘くてとろける魅惑のお菓子ですよ。是非召し上がってみてく

「ださいませ！私、お茶を入れて参りますわ」

その俊敏な動きといい上ずった声をいい、それは恋する乙女のような様子でした。

とてもではありませんが、少し前に無表情で挨拶したセシユラと同一人物とは思えません。

（でも……これで少しは仲良くなれそうかな？）

そう思った万里子は、トレーにお茶を乗せてやって来たセシユラをお茶に誘いました。

「ひとりでは食べきれないし、寂しいのでセシユラさんも一緒に食べませんか？」

その言葉に、ひどく躊躇して見せたセシユラではありましたが、ジャーレからのカードをひらひらさせると、観念して向かいのソファに腰を下ろしました。

「お、お寂しいのでしたら、今日はお付き合いさせて頂きますわ」

（ツンデレだわ！セシユラさんツンデレ！）

セシユラの感情には目ざとく気付いた万里子でございましたが、その様子は、後から戻ってきたシアナに、なぜセシユラに気付いて陛下のお心遣いに気付かないのかと不思議に思われるのでございました。

3人で囲んだお茶の席、チロルとはやはり予想に違わずチョココレートのような食感と甘さで、万里子はその至福の味から、ジャーレへ

の警戒を少しだけ解いたのでございます。

ただ……お茶の後に戻ってきたレニーが、チロルを食べられなかったことにひどく落ち込み3人ともが様々な手を尽くしてレニーを慰めたのでした。

レニーが立ち直るまでは大変でしたが、この件で少しだけ女官のふたりと打ち解けられた気がして、万里子はこの日初めて心から笑ったのでした。

57・無自覚な気遣い（後書き）

チロルって名称を使うのはマズイですかね？

一応、たまたま偶然あちらの世界でチヨコのようなものをチロルといい、名前からして万里子が反応したっていう、それでチロルにしたんですが、そのものズバリでなくてもマズければ直します。

「シアナさんがずっと一緒に居てくれる事になったんですか？」

万里子は嬉しそうに顔を綻ばせました。

その様子を見て、シアナも嬉しそうに笑います。

「そうですね。マール様はヤンテの抛代という事で神子ですから、身分が神殿預かりとなります。その為神官がひとりお側に仕える事になったのですわ。私がそのお役目をさせて頂く事になりました。そしてジル様が後継人となる事に……」

「て事は、ジルさんがシアナさんに頼んでくれたんですね！良かったです！嬉しいです！」

「……ええと……まあ……そう、なのでしょうが……」

万里子はすっかりジルのお陰でシアナと一緒に居る事になったと思
い込んだようでした。

（おかしいわ…私^{わたくし}、そう聞こえるように話してしまっただかしら？）

陛下の名誉のためにも一応訂正しておいた方が良いのではないかと、
シアナは一瞬考えたのですが、まあ…良いのかしら。と思い直しま
した。

（本当にジル様が陛下に掛け合ってくださいましたかもしれませんね）

本当はクラムロードがひとり考えての事だったのですが、手柄は
すっかりジルに奪われてしまいました。

- - - - -

グリユーネに贈られた真つ赤なドレスを纏った万里子は、ガイアスの後ろを足にふあさふあさと纏わり付く裾に苦勞しながら歩いておりました。

「…マール様、少しスカートを持ち上げると歩きやすいですわよ」

横からこつそりとシアナに教えられ、横を見ますと、いつもの神官装束とは違う青いドレスを纏った女神のように美しいシアナが軽くスカートをつまんでいるのが見え、真似すると足回りが楽になり歩きやすくなりました。

「アリガトゴザイマス……」

万里子は小声でお礼を言うと、お嬢様やお姫様っていうのは大変だなあ、と他人事のように思ったのでした。

今、ふたりは晩餐会が行われる本棟に向かっています。

万里子はもしやひとりで参加しなければいけないのかとビクビクしていたのですが、シアナが同席できるという事でホツとし、シアナを側に置いてくれたのはジルだと思い込んでいた万里子は、ジルに心の中でもう一度感謝しました。

シアナはマールの側付きの神官という立場ではありましたが、高位

の神官であり、時として神子の代理人という役目を担う為、専属女官よりも上の立場になり、今回のような晩餐会や式典の日に行われたような夜会でも同席が許されるという事でした。

「これも全部ジルさんにはお見通しだったんでしょうか？だとしたら凄いです！私があー！困ったなーって時に直面したら、全部するするって最悪な方向から逸れていくんです」

興奮気味に話す万里子の姿に、シアナはそういえば…と、万里子に再会した時の事を思い出しました。

（そういえば、私が様々な秘密わたくしを知っている事をお話した時に、ジル様は様々な手立てを講じてこられたともお話したのですわ…まさかそれをここに結びつけるとは…）

「今日はジルさんはいるんでしょうか？もし会えたら、直接お礼が言いたいんです！グリユーネさんへのお礼も直接出来なかつたし…」

…」

昨夜、万里子はすぐにでもグリユーネに会って、ドレスのお礼がしたいとセシユラにお願いしたのですが、各国の王族等、立場が上の方々を差し置いて先にグリユーネと会う事は出来ないと言われたのです。そして手紙を届けてもらう事で妥協して、遅くまで手紙をしたためていたのでした。

その姿を知っているシアナは、申し訳無さそうに万里子に言いました。

「ジル様は今日はいらっしゃいませんわ。甲いの儀式を行った神官は、数日清めの眠りにつくのです。身体から『死』の匂いが取れ消耗した魔力が回復するまで、ヤンテの神殿のジル様のお部屋でお休

みになっております」

「そうなんですか……昨日はジルさんも大変だったんですね。そんなに大変だったのに、こんなに気を使ってくれて……ジルさんが元気になったら、絶対会いたいです。会ってちゃんとお礼が言いたいし、ジルさんの顔が見たいです」

「ええ。そうして頂けたら、ジル様もお喜びになるでしょう」

そのやり取りを、背中で聞いていたガイアスは自分の主であるクラムルドが不憫でなりませんでした。

儀式や他国の王族達への対応に追われる中、少しの時間を見つけてはヤンテの姫が宮殿で過ごしやすいようにと配慮したものが、まさか全て人の手柄になっているなど……立場上、ここで発言する事も叶わないガイアスは、いつか主人が報われるようにと願うだけでした。

- - - - -

晩餐会が開かれる部屋に案内されると、それまで談笑していたであろう軽やかな空気がひたりと静まり、万里子は気軽に入って来るんじゃないかった……！と後悔しました。

シアナと一緒にいう事で、すっかり心が軽くなっていた万里子でしたが、室内にいる人物の全ての視線が自分に注がれているのを感じて入り口で固まりました。

「マール様……落ち着いてくださいませ」

「……」

（お、落ち着けてこの状況ですか！？）

じりじりと横に動くと、皆の視線もじりじりと移動します。万里子は体中から変な汗が出てくるのを感じました。

（レニーさんが綺麗にお化粧してくれたのに、もうドロドロのデロデロに崩れてる気がする……）

「皆様……姫様はあまりこのような場に慣れておりません。どうかお手柔らかに」

「イデイさん……」

沈黙の中、最初に声を発したのはイデイでした。イデイもまた、いつもの動きやすい紺色の服ではなく、紺色に銀の刺繍が入った上着を上までボタンをきっちり留めた正装をしておりました。どうやら全員がひとり供の者を連れて来ているようでした。

「姫様、シアナ嬢こちらへどうぞ。ガイアス、ご苦労。後は外を頼む」

「イデイさん、あの……」

自分に見せる表情とは違う、硬い表情のイデイはその声に応えず、万里子の背に軽く手をあてると空いている席に案内しました。そんなイデイの行動を、万里子は寂しく感じましたが席についたそ

の時、触れているだけだった手で背中をぼんぼんと優しく叩かれるのを感じました。

「大丈夫だよ、落ち着け」

耳元で小さく囁き、取り皿をそつと万里子の手に持たせました。周りから見たら晩餐会という公の場に初めて出席する万里子に、説明していたように見えたでしょう。

万里子がヤンテの姫君として宮殿にやって来てから、距離を置いていたようにいえたイデイでしたが、今のほんの少しの触れ合いだけで万里子は凝り固まった心がゆるゆると解かれていくのを感じました。

クラムルードの隣の席に戻ったイデイは、もうすっかり真面目な表情になっていて、万里子の事などなんの関心も無いように見えませんでした。

万里子達が最後だったようで、席に落ち着きますと僅かながらまた談笑が始まったようです。テーブルの上を見ますと、美味しそうな色とりどりの料理が所狭しと並んでおりました。

この世界にはスプーンはあっても食事の為のナイフやフォークはありません。全て小さな食べられる器に入っており、手に取り食べるのです。料理は大皿に乗せられており食べたい物を取り皿に取って食べるのです。

万里子はこの方式の食事にはもう慣れたものでしたが、ナハクやサイナは野菜が豊富なため、器も野菜である事が殆どでした。

ですが、今日の前に並ぶのはライスペーパーのような物に包まれている物やタルトのようなものが器になっているものもありました。その中には、瑞々しい果実が入っているものもあります。

見た途端に万里子のおながぐううう。と鳴りました。

ここ数日は気持ちの休まる事が無く、食事らしい食事をしていなかったのを思い出しました。

昨夜もシアナが滞在の準備の為に棟から出てしまい、たったひとりの食事（セシユラとレニーにはさすがに食事は同席できないと断られた）が味気なくて殆ど残してしまっただのです。

ぷっ。と噴出すような笑いが聞こえ、慌てておなかを押さえるとしわがれた声が聞こえました。

「せっかくの料理も時間が経っては勿体ありませんな。この席はクラムロード陛下がご用意くださった席です。姫様との顔合わせを兼ねてのものじゃ。それぞれ思う事があると思うが……今日は和やかに食事を楽しみましょうかの」

続いて自分をグランデと名乗った老紳士は、その言葉に色々な含みを持たせておりましたが、急に空腹を覚えた万里子には、最後の言葉しか耳に入りませんでした。

（つまり……食事会だね！？ただ食事を楽しんだらいいって事なんだよね？）

安心した万里子は、早速目をつけていたライスペーパーのような食べ物に手を伸ばしました。

晩餐会はグランデの言った通り、和やかなものになりました。

美味しい食事に楽しいお喋り。果実のようなものが入ったものは、想像通りフルーツタルトのようなほのかな甘みが口の中に広がり、万里子の頬を綻ばせました。

王族だなんて話が合うはずが無いし、ジャーレに対してもまだ少し怖い印象がありました。

丁度斜め向かいに座るジャーレは、精悍な顔立ちに柔和な笑みを浮かべ、万里子に話し掛けました。

「アレは姫様のお口に合いましたかな？」

「あつ、はい！とても美味しく頂きました。あの、ありがとうございます」

「あら、まさかもう接触をはかっていたのかしら？」

反対の斜め前に座る、紫の髪と目を持つ妖艶な美女が会話に入ってきました。

小さな面長の顔に、細く長い手足と、それにそぐわないほどの豊かな胸を持つ美女は、聞き捨てならないという風に身を乗り出しました。

（ええとこのお色気だだ漏れの美女さんは……スイル国のミルファ女王陛下だ）

「お見苦しいところを見せてしまったお詫びですよ。このように可愛らしい姫君を怖がらせてしまったのではないかと思ひましてね。お口にあったのなら良かった。あれを更に加工したのもあるのですが……今如何ですか？」

「あらあ。今って事は、チロルね？私も分わたくしもあつて？」

「勿論ですよ。ここにいる皆さんの分ありますよ。ジェルミ、お持ち下さい」

すると、ジェルミと呼ばれた若いガルデイス人の男性がクラムル

ドに許可を取り部屋を出て行きました。
戻ってきたジェルミは大きなトレーを持った女官を引き連れており
ました。

他の談笑に加わっていた人々の視線もトレーの上に集まりました。
それは勿論万里子もです。

トレーに乗った大皿には、タルトのようなものが乗っていました。
テーブルに乗っているものとともによく似ています。
でも中に入っているのは果実ではありませんでした。

「チロルを最近柔らかくする技術が開発されました。国外に持ち出
すのは初めてなのです。柔らかいのでチロルよりも食べやすいとガ
ルデイスでは評判でした。皆様おひとつどうぞ」

初めて見る菓子に皆少し戸惑っておりましたが、それを意識してか
最初にジャーレが手を伸ばしました。

その次に手を伸ばしたのは万里子でした。

「お。おいしいです！」

その声で皆一様に手を伸ばしました。

その時万里子はあまりの美味しさに目を閉じてその味を堪能してい
ました。

ふうわりと口の中でとろけるそれは、正にチョコクリームのようで
した。

ジャーレはそんな万里子を満足気に見ておりました。

この晩餐会の間、それぞれが万里子の行動から様々な情報を得てお
りました。

ジャーレは勿論、万里子が果実が入った焼き菓子によく手を伸ばしていたのも全て見ていたのです。
この場で和やかに食事を楽しんでいたのは、万里子ただひとりだったのです。

59・格蘭デの思惑

「はー！おなかいっぱいです。久しぶりにご飯食べたー！って感じがします」

万里子は満足気にそう言うと、ぽっこりと出たおなかをさすりました。

ドレスでは満腹になったウエストがキツすぎた為、部屋に戻って来てからすぐにレニーが用意してくれたゆったりとした衣の着替えたのです。

レニーは恐縮していましたが、それでも渡された衣は普段万里子に着ている作業衣よりも何倍も上質である事はその肌触りからすぐに分かりました。

「最後のチロル、ふわっふわのとろっとろで美味しかったですよ！シアナさん、どうして食べなかつたんですか？」

万里子の話を微笑みながら聞いていたシアナは、少しだけ考える様子を見せるとからかうように答えました。

「あまりにもマール様が物欲しげに見るのですもの。お譲りする事にしたのですわ」

「ええー！そ、そんな事ないですよ？次は一緒に食べましょうね？」

「次…でございますか？」

シアナは万里子の言葉にわずかに眉を顰めました。

「はい！ジャーレさんがまたくれるそうです！次はレニーさんと一緒に。昨日は拗ねちゃいましたからねえ」

勢いよく寝台に座った万里子が楽しそうに笑いました。心配していた専属女官の人選がうまくいったようでシアナは安心しました。

なるべく、マリー姫を快く思っていなかった人物で親戚縁者に王族と深く関わりのあるような人物がいない者をこの短時間で探すのは困難だったはずです。

それを行ったのはイディでした。マールをペガロに乗せて送り出し、ルヴェルの不在とシアナに託した事を知ると、彼はすぐに動き出したのです。

「ジャーレ様が……そうでございますか。マール様はあの方を恐れていたのではないのですか？」

万里子からの返事はありませんでした。

「マール様？マー……」

万里子は大きな寝台の上で小さく丸まり、すこすこと不思議な寝息をたてて眠っております。

「マール様……そんなに無防備に人を信用なさらないでくださいませ……私は心配です。皆、あなたを道具のようにしか思っておりますのよ？私は正直食事どころではございませんでしたわ……。皆様マール様の一挙手一投足をずっと観察してらしたのに……明日からが心配ですわ」

シアナは相変わらずすこすこと寝息をたてる万里子の髪をゆっくり

と指で梳きました。

晩餐会では、皆が万里子を観察していました。それぞれに思うところがあり、でもそれをグランデの言う通り、表面に出す事はなくただ観察して自分に有利な情報を仕入れていったでしょう。

万里子はただの楽しい食事会のように振舞っておりました。急に同席する事になり、自分さえ気をつけていれば良いと考えていたシアナでしたが、食事中に度々話し掛けられて万里子から注意がそれ、会話を聞き逃す事がありました。それはとても巧みでした。いくらシアナ高位の神官とはいえ、一国を背負ってきた中枢の人物達に駆け引きの点で叶うはずありません。

マール様は何をお話したのかしら……どんな情報を与えてしまったのかしら……私に、マール様をお守りする事が出来るのかしら……シアナは万里子の元を離れ窓際に向かうと明るく光を注いでいるヤンテに祈りました。

.....

「ひとりずつ、順にお会いになるのですか？」

「はい。今日はグランデさんに会っんです」

「まあ……ジャーレ国王陛下とミルフア女王陛下がよく引き下がりましたこと」

目の前で朝食の果実をもりもり食べている万里子は、時折口をもぐもぐさせながら昨日の出来事を話し始めました。

「面会の話になったら、お互い譲り合ったりかと思うと主張したりして、途中すぐ面倒な展開になったんです。だからゲームをしました」

そんなことをケロリと言う万里子に、シアナは目を丸くしました。

「ゲーム？あ、それはアレでございますか？」

途中、万里子がゴブレットを逆さにしだして、皆一体何が始まるのかとおしゃべりを止めて万里子の手元を見ておりました。

そして指にしていた指輪をひとつ外すと、逆さにしたゴブレットの中に入れてしまったのです。

すると他の空になったゴブレットも逆さにし、トレーに並べるとすばやく入れ替えました。

何度も何度も入れ替えを繰り返し、指輪が入ったゴブレットはどれかと聞いたのです。

「そうです。最初に当てたのがグランデさんだったんです」

「まあ、お上手ですわね。それを面会の順番にするなど……誰にも角が立ちませんし、公平ですわ」

「最初がグランデさんだったのでホツとしてるんです」

「まあ、どうしてですか？」

「昨日、晩餐会が始まる時に和やかな会にしましょうって言ったじゃないですか。それで一気に空気が軽くなったような気がしたんです。グランデさん、ずっとニコニコしていたし、人の好いお爺ちゃんだと思っんです」

「ですが、マリー様とクラムルド様のご結婚を計画してらっしゃったのはグランデ様だと聞きますが……」

「大丈夫ですよ！クラムルドさんだって私じゃ嫌でしょうし、それはちゃんと断りますから」

「そうですか？くれぐれも、気をつけてくださいましね」

こうして朝食の間中、シアナは万里子を心配し続けたのでした。それは面会は基本的に万里子と面会相手と一対一で行わなければいけない為です。

平等であるはずの王族が特定の人物の考えに染まらないようにとの決まりからで、王族と同列となる神子の万里子にも適用されると通達があったのでございます。

この場合、特定の人物とは側付きのシアナを指しておりました。シアナは神子の代理として万里子の言葉や考えを伝える事は出来ても、反対に神子の行動や思想に対して意見し、操る側に居てはならないのです。

シアナは相手側の従者と共に隣接する控えの間に待機する事になりました。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「姫様、お待たせしましたの。いやいや、もっと楽にしてくださいって結構でございますぞ」

「あ、ハイ」

面会が行われる王女の棟の接見の間で先に待っていた万里子は、入って来たグランデの姿を見ると椅子から立ち上がるうとしてそれを制されました。

グランデはこの国の男性としては小柄で、背は万里子よりも少し低い程でした。

血色の良い丸い顔は若く見られがちですが、目じりには沢山の細かな皺が刻まれておりかなりの高齢だという事が分かります。

それは手にもよく現れておりました。グランデは、その爪の硬くなつた皺くちやの手を万里子に差し出し握手すると、目を細めて万里子に笑いかけました。

つられて万里子も笑顔になります。

お互い椅子に腰掛けると、グランデの足は椅子から少しだけ浮き上がり不謹慎ながらも万里子は「なんか可愛い……」と思い、少し緊張が解けました。

「まだまだお疲れだろうに、面会を申し込んですまなかつたの」

「いいえ。あんなに豪華なお部屋で何もしないで過ごすのはなんだから却って落ち着かないんです」

「今日はその件で伺つたのじゃ」

「え？」

「マリー姫が飾り立ててしまつてお部屋が居心地が良くないと聞いております。陛下もそれを気にしていらっしゃる。元に戻すか、更に改装するかと話が出ているのですが」

それを聞いて万里子は声に出して笑いたくなりました。今朝耳に夕
コが出来るかと思う位、シアナにはグランデから結婚話が出るかも
しれないから気をつけると言われてきたのです。

いくらなんでも相手が私では嫌だろうと言っても、シアナは聞き入
れませんでした。でもやはり、自分にそんな話は持つてくるはずが
ないのです。

そう思いながらもどこか警戒していた自分が恥ずかしくて、万里子
は笑い出しそうになったのです。

「その為だけにわざわざ今日いらっしやっただんですか？」

「左様。我らにとつても大事な姫様じゃ。その姫様が居心地の悪い
思いをしているなど、あつてはならん事じゃ」

「はあ……」

「だかのう」

そこでグランデは皺くちゃの指で丸い顎をなぞり、「どうしたもん
かのう」と続けました。

「何がでしょう？」

「あそこのお部屋はマリー様のご要望で、色々揃えては改装を繰り
返し、やっとご満足いただけただけばかりだったのじゃ。費用も時間も
それはそれはかかりましたのう……」

それはそうかも……部屋を思い浮かべながら、万里子も思いました。
天蓋や金の猫足の寝台に椅子、テーブルと……あれらを全て一から

揃えたのであれば莫大な費用と時間がかかったでしょう。

「ええと…あの、じゃああのままで……」

「いや、なりませぬ！姫様が居心地良くなるようにと陛下も望んでおりまする！」

万里子は困りました。あの部屋を作り上げるのにどれだけ散財したかと聞かされては諦めるほかないと思いましたのに、そうはいかないと言われては一体どうしたらいいのでしょうか。

見るからに困り顔の万里子をグランデは横目でちろりと見ますと、勿体ぶったように口を開きました。

「そこですがの、私わたくしに良い考えがあるのです」

「良い考えですか？」

「棟を移ればよろしいのです。この城には他にも使用していない棟がありますので」

「な、なるほど！そこはもっとあの……落ち着いた色合いのお部屋ですか？」

「勿論でございます。なに、遠慮する事はございませんぞ。その棟もこの棟同様に、ずっと主はいらっしゃらなかったのですからすぐに引越す事ができます。それともやはりもう一度この棟に手を入れ……」

「いえっ！そんなわざわざ勿体無いです！お引越しでお願いします！」

確かに城には王族それぞれが自分の住まいとして使う棟がいくつも
あり、主がない棟もございました。

ですが、その棟が王妃の棟であるなどと、万里子は思いも付かなか
ったのでございます。

こうしてグランデは、婚約や結婚などといった言葉を出さずに、万
里子をクラムルードの婚約者に仕立て上げる事に成功したのでござ
います。

59・ケラントの思惑（後書き）

いつまでもあほはロインでいめんない……（……）

60. ジャーレの誤算

面会を終え、部屋を出てきたグランデは何やら満足気で、従者に向かつて

「さあ、すぐに準備に取り掛からねば。急ごうかの」とそそくさと王女の棟を後にしました。

その様子にシアナは不安になり、急いで接見の間の扉をノックしました。

すると返事を待たずにすぐに万里子が現れました。

「あ、シアナさん！お待たせしました！」

出てきた万里子もまた、満足気な笑みを浮かべておりました。

「あの……大丈夫でございましたか？」

「はい！シアナさん、シアナさんが心配してたような話は全然ありませんでしたよ？結婚どころか、婚約の話も出ませんでした。それどころか、今の部屋がキラキラすぎて私が居心地悪く思ってる事を気にしてくれたんです。やっぱりグランデさんは良い人でした」

万里子のその言葉を聞き、シアナはホッと息をつきました。

「私の心配が杞憂に終わったのならそれで良いのです。良かったですわ。ではお部屋に戻ってから詳しく聞かせていただけますか？」

そうしてふたりは万里子の部屋に戻ったのですが、面会の様子を詳しく話すどころではなくなっていました。

部屋に戻り、間もなくすると廊下が騒がしくなったのでございます。

ドドドスと荒々しい足音が聞こえたかと思うと同時に、ドドドドン！と強く扉を叩かれ、ソファーに身を落ち着けたばかりの万里子は飛び上がって驚きました。

「な、何！？」

扉の外では入室の許可が無い事に焦れた声が聞こえてきました。

「おい！離せ！」

「いけません。いくら陛下といえども許可もなく入るなど……」
「うるさい！」

中で万里子がおろおろしておりますと、扉は乱暴に開けられました。

「おい！居るならさっさと返事しろ！」

入って来たのは、燃えるような赤い目をつり上がらせたクラムルードでございました。

「ななな、なんですかつ！いきなり怒鳴り声が聞こえたらびっくりして慌てるのは仕方ないじゃありませんか！」

「お前が怒鳴らせてるんだろっ！」

身に覚えが無い万里子は首を傾げました。

「私が？どうして？なるべくなら関わりたくないのにどうしてわざわざ怒らせたりなんて……」

本気で焦った万里子はぐるぐると考えながら、少々失礼な事までも口に出してしまい、益々クラムルードを怒らせたのですがそれには気が付きませんでした。

「関わりたくない、だと？ならなんで王妃の棟に引越す事に合意したんだっ！！」

「なんですって？マール様、本当ですよ！？」

「え？引越し？…は確かに良い考えだと思ったけど、王妃って何！？」

万里子の目の前まで歩みを進めたクラムルードは、万里子を上から見下ろすように睨み付けました。

とっさに怯みそうになった万里子はぐつと顎を引きなんとか睨み返しました。

「使っていない棟に移動した方がわざわざ改装するより手っ取り早いつて言われたんだもん。そっちの方が良いって思ったけど王妃なんて知りません！」

「ほほう。ならもつと勉強しておくべきだったな。使っていない棟は王妃の棟のみだ。そこにお前が移る事は、俺と婚約するって事なんだよ。なんて言われたかは知らんがな、お前はグランデのじーさんに嵌められたんだ！」

「ええー！ー！ー！ー！ー！嫌だあー！ー！」

「おっ、お前が言うな！俺のほうこそ願ひ下げだ！」

叫んでも後の祭りでございます。その話はふたりが言い争っている内にも、瞬く間に広がっていきました。

.....

ジェルミは父の滞在する最上級の客室目指して急いでおりました。宮殿の中では、先王が亡くなられた悲しみの色よりも浮き足立つような喜びの色が濃くなっておりました。

クラムルード国王陛下が婚約なさった……ヤンテの姫君と!!この報せは宮殿内のラウリナ国民を大いに喜ばせました。

(ダメだ。まだ早い!父上にお知らせしなければ……)

「父上!」

ジェルミは父の部屋の前まで来ると、ノックもせずに扉を開けました。

息子の慌てぶりとは打って変わって、ジャーレは落ち着いた様子でソファに深く越し掛け、繊細な紋様の入った小さな箱を片手で弄んでおりました。

「何だジェルミ。そんなに取り乱して……王族らしくないぞ」

チラリと視線だけ投げて寄越した父に向かって、ジェルミは焦れたように問いかけます。

「父上は……まだご存知ないのですか！？ヤンテの姫君はクラムルード国王陛下とご婚約なされたそうです！これでは……儀式に来て頂きガルデイスの神殿を拠点としてもらうように働きかける計画は無駄に終わります！」

「そうだな。本物の婚約であつたなら、な」

「父上……では、もうご存知で？」

ジャーレは、ジェルミが部屋に飛び込んで来てから初めて真っ直ぐに息子を見詰め、鼻でフンと軽く笑いました。

「これだけの騒ぎだ。当然知っている」

「何もなさらないのですか？準備が整い次第、姫は王妃の棟に移られるのだそうです、早ければ明日とか……なぜ……なぜラウリナばかりが優遇されるのですか！」

「せめてガルデイスを見てから決めてもらいたいものだがな」

「そうですね！他国を何も知らずにラウリナを選ぶなど、我々を愚弄している！我々だってヤンテと姫のために立派な神殿を作ろうとしているのに！婚約が整つては、儀式を理由に来て頂くのも難しくなります！」

「来てもらわなくても結構」

ジャーレは口角を上げ、不気味な笑みを浮かべました。

「……父上？」

そんな父の様子に勢いを削がれたジェルミは眉を顰めて父を見つめました。

その視線の先で、ジャーレは手にしていた小さな箱をテーブルの上にコトリと置きました。

「来てもらうのが難しいなら、連れて行くまでだ」

「ち、父上……」

次の日、万里子はむくんだ目をこすりながら着替えを済ませました。いつでもどこでも眠れる万里子が、昨夜は殆ど眠れなかつたのです。気がつけばため息ばかりついている万里子でございましたが、周りには正反対でした。

「王妃の棟へ行かれるという事は……通例でしたらご婚約やご結婚の儀式を済まされてからなのですが……逆というものなんと申しますか、こう、ぐっときますわね！」

昨日のクラムルードの剣幕を知らないレニーが、憂鬱な気分の万里子に止めを刺しました。

「その話は止めてください……」

「あらもう、姫様ったら照れてらっしゃる」

(いや、さっきからため息ばかりなんですけど……)

もはや口で言い返す元気の無い万里子は、心の中で言い返しました。

「それではこれから忙しくなりますわね。今日の面会は早い時間で良かったですわ」

「面会……やらなきゃダメですかね？」

「勿論で御座います！そのためになんかわざわざ宮殿に留まっておいでなのですから。きっと面会が終わるまでお帰りになりませんよ」

更に憂鬱な気分になりながらも、ふらふら立ち上がると万里子は澁々接見の間に向かいました。その後を心配そうにシアナが追いましたが、万里子が不憫すぎて声をかける事ができませんでした。

万里子が接見の間でソファに座っていると、扉が軽くノックされ、シアナが顔を出しました。

「ガルデイス国、ジャーレ国王陛下がいらっしやいました」

「姫様、お越しになってまだ間もないというのに、既にご婚約とは進展が早いですな」

苦笑しながら入って来たジャーレは、ソファの横に立ったまま万里子の反応を見守りました。

「ええと、それは違ってですね、部屋の内装が合わないという話から、使っていない棟に移ったかどうかって言われただけなんですよ。それ以上に意味なんてないんです。それに昨日、クラムルドさんにもお前なんか願い下げだーって怒られちゃいましたし……」

するとジャーレは軽く目を見開き、面白そうに笑いました。

「そんな誤解は早く解いてしまった方がいい。あなたがそんな暗い顔をしているからか、ヤンテの光も弱い。少し風を入れて気持ちを整えては？窓を開けても？」

窓際に移動しながらそう問われ、万里子は軽く頷きました。

「王女の棟とか王妃の棟とか、棟の意味がそんなに大きいなんて知りませんでした。私はグランデさんの提案が良いと思ったただけなのに……」

「ははっあの人は策士ですからな。気をつけないと……」

ようやくジャーレは向かいのソファにゆったりと座り、正面から万里子を見つめました。

「あの、ジャーレさんの面会の目的はなんですか？」

「もうすぐ秋になる。ヤンテのお言葉通り、ガルディスでは祈りの儀式を行います。それにあなたを招待したい」

「それだけ……ですか？」

「そうですね？すぐにお返事を頂くことは難しいかな？」

万里子にはまだラウリナで気にかかる事が沢山ありました。ジルはまだ目覚めておりませんし、グリユーネにも会えておりません。それに、あれ以来ルヴェルの姿を見ていないのが気になっておりました。

「すぐには……難しいと思います」

すると、万里子をじっと見つめていたジャールレが上着の内側から小さな箱を取り出しました。

「あなたのお返事はそうだと思いますよ。ではせめてこれを……先日の晩餐会で新しい柔らかなチロールをお出ししたでしょうか？お気に召していただけたかと思っていたのですが……」

「はい！とても美味しかったです！」

ジャールレが柔らかな笑みを浮かべます。

「それは良かった。あの商品にはあなたの名前を頂きたいんです。如何かな？」

「マール、ですか？」

「そう。ヤンテの姫君も認めた味として評判になるでしょう」

「私の名前で良ければ構いません」

「それは良かった。これはね、姫。まだ試作品の段階なのですが、柔らかなチロールの中にとろりとしたクリームを入れたものなのでよ。このクリームがまだ大量生産できなくてね、ひとつしか無い。ぜひ姫に召し上がっていただきたくてお持ちしたのです。如何かな？」

ジャールレは手にした小さな箱の蓋をそつと開けると、中身を万里子

に差し出しました。

「そんな貴重なチロルを……」

「姫のお名前をつけるのだから、まず姫に召し上がって頂かないと」

「そうですね…それじゃ、いただきます！」

箱の中央にコロソと入っている親指ほどのチロルを手にすると、万里子は躊躇いも無くそれを頬張りました。

柔らかなチロルは噛むまでもなく口の中で溶け、中からとろりと甘いクリームが出てきました。

「甘い！このクリーム、チロルの甘さが増す気がします！」

「そうですね。それは良かった」

「はひ。これはひよってみよ……にゃんだ、か……」

飲み込むと同時に、舌が痺れてその違和感にとっさにジャーレを見ました。

「すぐに来て頂けないとは残念です。でもね、そんなに待っていないんですよ」

その言葉を、万里子は最後まで聞く事はできませんでした。

ジャーレはソファに倒れこんだ万里子を抱えると、すぐに窓際に移動して外を確認しました。

階下にはジェルミの他、従者が数名配置通りにこちらの指示を待っておりました。

万里子を抱えたまま、右手を高く挙げたその時で御座います。

世界は再び闇に包まれ、ひとりの気配が世界から消えてしまいました……。

61 ジルの目覚め(前書き)

お待たせしました！でも話は進んでません……期待させてごめんなさい！

61 ジルの目覚め

この世界が再び闇に包まれる少し前……ジルはヤンテ神殿の大神官の、つまり自分の部屋で深い眠りについておりました。

先王の弔いの儀式にかなりの魔力を消耗していたジルの意識は深い深い闇の中に漂っており、この状態は数日続くものと思われておりました。

そんなジルの意識の闇に、突如として明るい光が現れます。その中から、ひとりの艶やかな黒髪と、黒曜石のような吸い込まれそうな闇色の瞳を持った凜とした風情の美しい女性が現れました。

今まで何度も弔いの儀式を行ってまいりましたが、このような現象は初めてです。

女性は迷う事なくまっすぐに歩き出しました。それをジルはただ見守っておりました。女性の様子は歩くというよりも滑るように移動している事に気付いたのは少ししてからでした。足元が見えない程裾の長い一風変わった衣の所為かもしれませんが、女性は空に浮いているようにも見えました。

その衣から見えているのは、憂いを帯びた瞳が印象的な上品に年を重ねた色白の顔かんはせだけでした。

裾をほんの少し揺らしてすうーっと自分の目の前にやって来たのを確認し、ジルは驚きました。

と言いますのも、この光景をジルは離れた場所から見下ろすようにして見ていたのです。自分は単なる見物人のひとりだったのが、今突然舞台の上の登場させられたような感覚でした。

「え？」

ぱちぱちとまばたきをするその眼前で、女性はまばたきもせずジルを見据えておりました。

『お主、我が見えるか？』

女性が真つ赤な唇と薄く開くと、そこから零れ出たのは老女の如きしわがれた声でした。

確かに目の前の女性の声だと確信したのですが、その声は不思議なことにふたりが佇む場所に反響し全身に突き刺さりました。

ジルはこの感覚に覚えがありました。それに気がつくのと、どこか納得したように女性をじっと見つめ返します。それはまるで、女性の問いに対して態度で示したようでした。

『私の声が聞こえるじやろう？あの娘を介さずともなれば、お主にしかもはや私の声は届けられぬ。お主が“ここ”に居たのは幸いじゃ。穢れはすぐに被ってやろう。……あの娘を、助けておくれ』

そこまで聞くと、ジルはカッと目を見開きました。

「何が……何があったのでございますか？」

小柄な両肩をがっしりと掴んで揺さぶり詳細を問い詰めたい衝動を、ジルはなんとか心の奥底に押し戻しました。

『目覚めれば分かる。……我に、これ以上人間を憎ませないでくれ』

潤んだ瞳が一瞬揺れたような気がしました。

『私の力を少し貸そう。あの娘に会えたならば伝えるのだ。我を…』

……りが既に手にし……け』

女性を包んでいた眩い光がジルの身体をも包み込み、空気の流れが

キーンと音をたてまるでそこからジルを切り離そうとしているようでした。女性のほんの少しの表情の変化と空を切る鋭い音に時折途切れる言葉を聞き逃すまいと覗き込んだジルは、すぐに眩しいまでの光に身体を包まれ、何も見えなくなりました。

パチリと目を覚ましたジルは、いつものように寝ぼけてはおらず、すぐに立ち上がると大神官のローブをその身に纏い部屋を飛び出しました。

驚いたのは神殿に居た他の神官達です。

まだ目覚めないはずだと思われていたジルがものすごい勢いで部屋から飛び出てきたのです。

同じく眠りについていたサクはまだ目を覚ましておりません。

居合わせた神官が、通り過ぎていったジルの後ろ姿を慌てて追いかけました。

「ジル様！お体はもうよろしいのですか？まだお早いのでは……あの！どちらに行かれるのです？」

「宮殿へ……ヤンテの姫君はどちらにご滞在か分かりますか？」

「王女の棟へ……あ、ですが王妃の棟に移動なさるとか……」

その言葉に、ピタリとジルの足が止まりました。

突然目の前で歩みを止められて、後を追っていた神官は避けきれずにジルの左肩にぶつかりました。

ジルはその衝撃にも微動だにせずに自分よりも背の低い彼に冷たい声で問いました。

「王妃の……？」

「は、はい。グランデ様がそのように引越しの準備を指示なさって……姫君も了承なさったとか……。今は宮殿中がその噂で持ちきりです」

チ。

小さな舌打ちが聞こえ、思わず顔を上げた神官は思わず「ひ！」と声を上げ、後退りました。

「ああああああの、ジル様？」

「準備を指示……では、まだ姫は王女の棟にいらっしゃるのだな？」

「は、はい。ですが、本日はジャーレ国王陛下との面会だそうで、すぐにはお会いできないかと……。それにイデイ様より神官を数名貸し出すようにとのご命令がありました……今神殿には私しか……」

「ジャーレ国王陛下が！？……イデイの所に行きます。お前はついて来なくても結構」

用は済んだとばかりにまた早足で歩き出したジルを、神官はただ見送りました。

彼は同行しろと言われなくて、彼は心の底から安堵しました。

それほどにジルの纏っていた空気は冷ややかなものだったのです。

（マールの後見にとおっしゃる陛下のお話を受けたのは、後見につけば各国や他の貴族への牽制になると同時に、マールに会うために面会という面倒な手続きが不要な為であったからなのに……同じ後見人でもマールの立場が王妃の棟の正式な主人ともなればそれも難しくなる。簡単に会えなくなれば、近くで見守る事も側で忠告す

る事も出来なくなってしまう！私が眠っているこの間になんと卑劣な！）

おまけに今日がジャーレとの面会日で、イデイが神官を数名借りて行ったとなれば……そこまで考えると、ジルは走り出しました。

（嫌な予感がする……ジャーレはまた何か企んでいるのか！？）

.....

「ジル殿。思ったより早かったですね」

運良く王の棟の前でイデイを捕まえる事ができたジルは、珍しく息をはずませておりました。

「ヤンテに助けられてね。だがまだ……体力は戻っていないらしい」

「ヤンテに？それはどういう……」

「すまないが、悠長に話している時間はない。ヤンテがマールの危機を予言した。今ジャーレ国王陛下と面会しているそうだな？」

「ジル殿……それは本当ですか？相手が相手だけに、神官を数名お借りしたところです。いくつか宮殿にも“穴”がありますからね」

ふたりは話を聞かれないため、王の棟にあるイデイの部屋に急ぎました。

「強い結界を作ろうとすると、結界と結界の狭間に“穴”が出来るのは仕方の無い事だ。何事も完璧は無い。だが、その“穴”の存在をガルデイスが知っているととは思えないが……念のため調べよう」

「お願いします」

目を閉じて結界の様子を探り出したジルを、イデイはじっと見守りました。

ヤンテの予言に時間の猶予がどれ程あるのか分かりません。気持ちは焦るばかりでしたがなんとか押さえつけました。

「接見の間の…結界が緩んでいる。窓だ。……イデイ、神殿から呼んである神官を集めてください。早く！」

「分かりました。少しお待ちください」

イデイが魔法が使える結界の“穴”の近くに散らばっていた神官を呼び戻します。

その間ジルは目を瞑ったまま他の結界に緩みが無いかを探っておりました。

「ジル殿！その後変化は？」

イデイが急いだ様子で戻って来ました。少し遅れて息を切らした神官が駆けてきます。

最後尾にはサクより少し若いだけの老神官がヨロヨロと現れました。

「変化はないが……相手が王族だけに、その“変化”が無いと踏み込めない。なんとももどかしいな」

「ええ……それ相当の理由がないと乗り込めません。もともと、その心配が杞憂に終われば良いのですが……」

「それならばヤンテが夢に出てきて私の穢れを祓うのを手伝い、早くに眠りから覚めさせるだろうか。……お前達は宮殿の外周りの結界の強化をお願いします。私は宮殿内部の結界を全て緩めます。万一の時の為に宮殿内で魔法を使えるようにしておきたい。結界が緩んでも、宮殿内では魔法が使えないという思い込みが相手の出足を鈍らせるには充分でしょう。……ラブス殿は私を手伝って頂けませんか？」

ジルは一旦集められた神官達が、ジルの指示により再度散り散りになっても杖に身を預け息を整えていた老神官に声をかけると、ラブスと呼ばれた老神官は頬骨が出た痩せこけた顔に安堵の表情を浮かべました。

「今……夢にヤンテ様がお出になったと申されましたかの」

「……はい。姫を助け伝言をと……」

「後で詳しくヤンテ様のご様子などもお聞きしたいですな。まずはこの老いぼれもお助けになるよう頑張りますかの」

「ありがとうございます」

ふたりが目を閉じ、それぞれの術に入りました。

ジルは胸の高さに手の平を上に掲げ薄く閉じた口の中で呪文を紡ぎます。それと背中合わせにラブスは骨が浮き出た細い手で杖をつかみ、先端をゆらゆらと揺らしながらジルの呪文に対する補助呪文を

眩きました。

宮殿内に仕掛けられた結界がひとつひとつ、泡がはじけるように消えていきます。それは力の小さな者には分からないであろう微々たる変化……ですがイディはそれを肌で感じておりました。

しかしそれは突然途切れました。

呪文を紡ぐ事を止めたジルが、王女の棟がある方向を見て眉根を寄せました。

「接見の間の緩んだ結界を、今誰かが通り抜けました」

次の瞬間、辺りは闇に包まれたのでございます。

一番早く反応したのはムバクのイディです。腰の剣に手を添えると素早く王女の棟に向かいました。

ジルは再度呪文を紡ぎ出し、慌ててラブスもそれに従います。闇に包まれた今、彼らの術は弱くなり完了には当初の予定より時間がかかりましたが、程なくして宮殿内でも魔法が使えるようになり、光玉を作り出すとふたりも共に王女の棟に向かいました。

(間に合ってください……マール、どうかご無事で……！)

61 ジルの目覚め（後書き）

宮殿内には魔法が使えない結界が張られてますが、結界を張った神官達はその結界を強化したり緩めたり、かけ直したりといった術は使えません。

62・闇に溶けた手

ジェルミは面会の始まった接見の間の窓をずっと見つめておりました。

先程父王がその窓を開け放ち、扉を閉める事で発動する結界が緩みました。王女の棟には幾重にも結界が張られておりますが、これで少し緩んだ事になります。

窓を開けたという事は、この結界の特色でもある“発動したら室外の物音が筒抜けになる”仕掛けも消えてしまいました。

これでは万が一室外で異変に気付いた者が居ても、その様子を室内の姫が知る事はありません。

ジェルミは計画を冷静に自分に伝えた父王が恐ろしくて仕方ありませんでした。

父はヤンテが消えるきっかけとなったあの戦争を仕掛ける少し前から様子がおかしくなっております。

それまでの父は非常に快活な人物で、率先して現場に立ち平民からも慕われる人柄で、よく大きな口を開けて豪快に笑う気持ちの良い人物でした。正妃である母に愛情深く接する姿は子供心にも心が温かくなる光景でした。

そんな父が、いつしか笑わなくなり、建設現場にもチロルの採取工場にも足を運ばなくなり、宮殿に籠もるようになってしまったのです。

自分を荒々しくも愛情をもって遊んでくれた父は、遊んでくれる回数も少なくなり、相手をしてくれる時でも時折その顔からは表情が抜け落ちており、その時初めて父を怖いと思ったのです。

父はとうとう母とも寝所を別にするようになり、母は細い肩を震わせて泣く事が多くなりました。それでも母は言つのです。「お父様を信じて、お父様のおっしゃる通りにするのよ」と……ですが、まもなく大国ラウリナを相手に戦争を仕掛け、その最中母が病気で亡さなかく

くなくても母の元にはやって来ませんでした。
闇の時代になつてからもそれは変わりません。

宮殿には戻つて来ましたが、まだ幼い自分を乳母に押し付け遊ぶどころか共に食事する事もなくなりました。

専属の教育係を数名つけられ、帝王学や剣術、歴史に戦術……ありとあらゆる事を叩き込まれました。

母の大切にしていた、花々が咲き乱れていた大きな温室は、高価な光玉が眩い、剣術の実技訓練場になっておりました。ヤンテが消えてもじつと耐えて小さな花を咲かせていた花は無残に踏みつけられ、大きな植物は剣の切れ味を試すかのように沢山の切り傷がつけられました。やがてそれは、大きな音を立てて倒れます。その音は母の悲鳴にも思え、涙が止まりませんでした。その姿を父は冷たい目で見ていました。いえ、父だけではありません。父の側近も、教師達も、一緒に訓練していた他の貴族の子息達も……皆が冷たい視線をジェルミを見つめていました。

父の狂気が他に伝染してしまつていたのです。ジェルミは自分もいずれそうなるてしまうのではないかと恐れられました。ですがその内、自分だけが異端だと思つようになり、なるべく皆に溶け込むよう自分に言い聞かせ日々を過ごしました。

自分の意思を無視し、自己を押さえつけて母の愛する場所を剣の傷で覆い、ラウリナを敵視する教育に、ジェルミは心で泣きました。人を人とも思わない振る舞いをしなければならぬ事もあり、容赦なく神官やラウリナ出身の女官を厳しく罰した夜、ジェルミは心を弱らせ、自室でこっそり食べた物を全て吐き出してしまつ程で、罪のない者を罰した事で感じる後悔や申し訳なさも自分が弱いからで恥ずかしいもののだと自らを戒め、奮い立たせました。

そうしてでも頑張つたのは、そうすればいつかまた父が自分に目を向けてくれると思つたのです。

それはある日突然訪れました。

突然視界が明るくなつたのです。それはぼんやりとでしたが辺りを

包み込み、歴史学の勉強中だったジェルミは光玉よりも明るいその光を信じられない思いで全身に浴びました。

「き、奇跡ですじゃ。殿下！ヤンテが……ヤンテの光が戻りましたぞよー！」

腰が曲がり、枝ほどにやせ細った歴史学の教師が珍しく興奮した面持ちであります。その様子をジェルミは不思議なほど冷静に見つめました。ヤンテの光はその教師の顔いっぱいになる皺にできる薄い陰をもくつきりと見せ、「ああ、この人も年をとったのだな……」など、そんな事をぼんやりと考えておりました。

そこに力強いノックが響きました。

「ジェルミ殿下、ギーシュでございます」

訪ねてきたのは、ガルデイスにある神殿に務める神官長でした。何名かいた神官長候補の中で、父が推して神官長になった男です。以前スイルの宮殿勤務の神官であったそうで、スイルとの強いパイプを持つこの男をジャーレは何かと優遇しておりました。

「入れ」

入って来たずんぐりした体型の男は、形だけは恭しく礼をとるところ告げました。

「ジャーレ国王陛下がお呼びでございます」

ジェルミは胸が高鳴るのを感じました。ようやく父が私に目を向けてくれた！それに私も行動で応えなければ！その思いを強くし、父

の元に向かったのでございます。

そう決意は致しましたが、ジェルミは窓を見上げながらも不安な気持ちは大きくなるばかりでした。

確かにこの世界を闇から救ったヤンテの姫が、他の国をロクに見る事もしないでラウリナの王妃となる事を決めた事に対して不満は持っておりましたが、無理矢理連れ去るのは卑怯な手だと思いました。父の言葉に驚き、父がテーブルに置いた小さな箱の蓋を祈るような気持ちで開けました。

そこには、従来のいびつな形とは違う、完璧な球体に仕上げられ美しい光沢を放つチロルがぼつんと一粒入っているだけでした。

「……チロルではないですか。随分綺麗に仕上げられたものですね。姫様にですか？チロルは好物なようですし、お喜びになるでしょう」

するとジャーレは喉の奥でクツクツと笑いました。

「それがルドウツリの蜜入りでもか？」

ジェルミは思わず箱を取り落としそうになりました。ルドウツリとは、チロルの実によく似た実ですが、その実は劇物で死には至らないものの、舌が痺れて話せなくなり、そして痺れは全身にゆっくりと行き渡るのです。

ルドウツリの実の中を煮詰めると光沢のあるトロリとした“蜜”になり、その効果は何倍にもなると言われています。

その症状は確か、舌と手足の自由を無くした後程なくして気を失うのではなかっただろうか……そこまで思考が辿り着くとジェルミはジャーレに視線を転じました。

その先でジャーレは、ジェルミに向かって不気味な笑みを見せておりました。

「ち、父上……それはいくらなんでも危険です。気を失うというのは、この実に耐性のあるガルデイスの人間の症状。ルドウツリに慣れていない人間ではどうなるか……」

「お前はまだそんな生温い事を……！ガルデイスに入れば解毒剤もある。姫の偽者騒動のおかげで計画が二転三転し、解毒剤をここには用意できなかったがすぐにガルデイスに入れば問題あるまい」

「ですが……！」

「ええい！お前は甘すぎるぞ！そんな様子では立派な王になれぬ！」

反論しかけたところでそう言われ、ジェルミは唇をかみ締め押し黙ってしまいました。

本当に大丈夫だろうか……おいしそうにチロルを頬張る姫の顔が浮かんで、ジェルミはその感情を切り捨てるようにぎゅっと目を瞑りました。

すぐに目を開け、窓を睨みつけると開け放たれた窓からコトリと小さな音が聞こえました。それはそう……まるで空っぽになった箱が床に落ちたような、そんな軽い音でした。

（動きがあったのか？）

身を乗り出したい気持ちをなんとか抑え、少しの変化も見逃すまいと見つめると、窓辺に父が顔を出しました。その腕の中には、ぐったりした姫が居ました。

ジャーレの拳手を合図にジェルミが窓の真下に走り、投げ落とされ

る姫を受け止めなければなりません。

目を凝らして見ていると、ジャーレはジェルミを確認し、そして右手を挙げました。

走り出したその時、急に辺りが真っ暗になりジェルミは一瞬方向感覚が無くなりました。

位置を確認しようと再度見上げたその先で、父の腕が闇に溶けていくのが見えました……。

.....

いち早く接見の間にとり着いたイデイは、窓辺で倒れている万里子を発見し、すぐに走り寄りました。

ぐったりとした万里子はいくら揺さぶっても頭をぐらぐらさせるだけで、一向に目を開けようとはしません。

見渡すと室内にジャーレの姿はありませんでした。窓の下では数人の男が動く気配がありません。

(窓から外に逃れたか!?)

接見の間は二階にあります。ジャーレのように鍛えている人間には、二階から外に脱出するなど簡単でしょう。

イデイは迷いました。外の気配はまだ遠ざかろうとはしておりません。暗闇に目が慣れないのでしょうか。今ならば容易く捉える事が出来ます。ですが、腕の中でぐったりしている万里子を放つてはおけませんでした。

「マール様！マール様！何がありましたの？」

隣室からシアナの声と、何かが倒れる音がしました。きっとこちらに来ようとはするものの、何かにぶつかり倒してしまったのでしょう。

「シアナ嬢！落ち着いて！ジルの術で、宮殿でも術が使えるようになりまして。光玉を灯してこちらに来てください！」

「は、はい！」

すると扉の向こうでぼんやりとした光が灯されたのが分かりました。外に意識を戻すと、数人の気配が散り散りになるうとしておりました。まとめて捉えるにはこの機会を逃せません。

「シアナ嬢！姫様は気を失っております！私は犯人を追いますので！まもなくジル殿がいらっしやるはずです。後をお願いします！」

視線を外に向けたままそう叫ぶと、そつと万里子を床に横たえようと、一気に床を蹴り上げ跳躍しました。

「マール様！！！」

光玉で辺りを照らし、部屋にたどり着いたシアナは倒れている万里子に駆け寄り、ひしと抱きしめました。

そしてふっくらとした万里子の頬に手を添えると、何度も何度も優しく撫でました。

「目を覚ましてくださいませ、マール様……」

撫でていると、シアナはふとあることに気付き、愕然としました。

そこに、ジルが到着しました。シアナよりも大きく明るい光玉を手
にしているため、室内が一気に明るくなります。
光に浮かび上がったシアナは、万里子を抱えて呆然としておりまし
た。

「どうした、シアナ？マールは無事か！？」

その言葉でシアナの目がジルに向けられ、シアナの目からは涙が一
粒流れ落ちました。

「シアナ？」

「マール様が……マール様が……」

「どうした？」

「息を……していないのです……」

62・闇に溶けた手（後書き）

またちよーっとしか話が進まずすみません（・・；）

ぐずぐず万里子に辛抱強くお付き合いくださりありがとうございます！
す！

そろそろぐずぐずから脱出したいです！がんばります。

63・裏切り

シアナの言葉に、ジルは一瞬怯みましたが素早い動きで万里子の元に駆け寄ると、そつと喉元に手をあて顔を覗き込みました。

「ラブス殿、ソファ付近を照らしてください」

「うむ？」

「何かを飲まされた可能性があります。何か手がかりが残っているかもしれません」

「うむ。……何か箱が落ちておるの。それと……これはチロルの欠片か？ありゃ、光玉の光で溶けてしもうた」

「箱をこちらへ！」

ジルはラブスから箱を受け取ると、かすかに残った香りを確認してシアナに渡しました。

「近くに蓋が落ちていると思う。すぐに蓋をして大事に持っていないさい。ジャーレ国王陛下はどこへ！？」

「きつと窓から逃げたのだと……イディ様が追ってます」

それを聞くと、ジルは手にしていた光玉を大きくして万里子に近付きました。

「ジルさまっ、何を……！？」

シアナは驚いたように声を上げますが、ジルから返ってきたのは答えではありませんでした。

「シアナ、マールを床に横たえるんだ。早く！」

「は、はい……！」

そっと、でもすばやく先程まで倒れていた床に再び万里子を横たえると、ジルの行動をじっと見守りました。

ジルの光玉が大きくなるにつれて、ジルの冷たい美貌にうっすらと汗が浮かびました。

その光玉がジルの姿さえも飲み込みそうな程に大きくなったところで、ゆっくりと光玉を万里子に近付けます。

いつの間にか、シアナは汗ばんだ両手で箱をぎゅっつと握り締めておりました。

大きな光玉が万里子に触れると、あっという間に万里子は光玉の中に吸い込まれてしまいました。

「ああっ……！」

シアナが驚きの声をあげてジルを見ますと、今やジルの汗は額から頬をつたい、細い顎の先端からポタポタと流れ落ちる程でした。

「ジル様……まだお体が万全でないのでは……！」

「……そんな事を言っている場合ではない。ラブス殿、あなたの光玉でもっと私の手元を照らしてはもらえませんか」

「うむ。こづかの？」

未だ光玉に右手をかざし、その大きさを調整していたジルはラブスの持つ光玉で更に手元に光を集めると、左手の指を右手の甲に当て早口で呪文を吹き、左手の指で強く右手を押ししました。

すると、ズボツと光玉の中にジルの右手が手首まで入り込みました。

ジルが何をしようとしているのか理解出来ず、シアナはただオロオロし、ラブスはじっとジルの挙動に目を凝らしておりました。

「ジル様……何をなさろうとしておりますの……？」

「マールは術がかからない。こうして光玉で周囲を遮断した空間に閉じ込め、空間魔法をかけなければマール自身には影響しないと思う。ただこれも……有効かどうか……くっ！」

マールを閉じ込めた光玉の中の空間に治癒魔法をかけ続けていたジルの腕がプルプルと震えだしました。

「そんな……マール様に直接治癒魔法がかけられないなんて……」

「……っ、私もこれで万全だとは考えて……いない。シアナ、頼みがある。急いでグリユーネ殿下の下へ。その箱を忘れずに持って行くんだ。解毒できるか聞いてくれ！」

「はい！」

ジルは震える声でシアナに指示を出すと、更にマールに誰も近付けないよう王女の棟を完全封鎖するように言いました。

シアナはもう一度力強く頷くと、部屋を出る前にもう一度振り返って万里子を見ました。

万里子は強く輝く光玉の中でふかふかと浮き、まるであやされている赤子のようにも見えませんでした。

(マール様……必ずお助け致しますわ！もう少し……どうかもう少しだけお待ちくださいませ！！)

そうしてシアナは部屋の外に駆け出したのでございます。

ジルはそれを尻目に、万里子から目を離さずにただひたすら空間魔法をかけておりました。

(もう少し……もう少し濃度をあげればマールの身体にも外から影響がいくはず……！)

震える右手を左手を必死に支え、術を続けていました。

「まだかの？もう……中の気はかなり濃密になつとるようだがの？」

ラブスが戸惑い気味に話し掛け、やっとジルの腕から力が抜けました。

ずるりと光玉から抜け落ちたジルの右手は、手首から先が赤くただれており、そこに放たれていた術の強さを感じ、ラブスは息を呑みました。

「何事だ！」

ガイアスに伴われてやって来たクラムルドが、入室するなり声を荒げますが、部屋の中に大きく浮かぶ光玉と、その中でふよふよ漂う万里子を見て言葉を失い、部屋の入り口で足を止めました。

「な、何だこれは……どうなっている！？コイツは無事なのか？」

ソロソロと光玉に近寄り、手を伸ばしますが、その手はパチン！と光玉にはじかれてしまいました。

「生きてるのか？この暗闇はもしかして……」

「生きてますよ。……まだ……かろうじて。息はしていませんが、鼓動は感じます。だがこの暗闇はマールの状態に関係していると思われるます」

「なぜだ！？今日はジャーレと面会しているはずだ！」

「……よく把握していますね……そのジャーレの罠だと思いますよ？現に逃げたと思われる彼をイディが追っています」

「……逃げた？仲間と合流してからだ、逃げられるのではないか？念のためガルデイスの訪問団が滞在していた部屋に行ったが、既に蛻の殻だった」

「逃げられる事はないと思います。術の使える神官達に宮殿の外の結界を強化させています」

「……ガイアス、兄上の手助けを。この闇の中ではお前達の方が有利だろう」

「ですが……」

「俺の事は良い。早く！」

「は」

返事をするなり踵を返したガイアスは、あっという間にその姿を闇に溶け込ませました。

- - - - -

一体どれ位の時間が経ったでしょう。

暗闇の中、光玉の中でふかふか浮いている万里子から、誰もが目を話せずにおりました。

光玉は少し形を崩し、今は楕円形になっていました。

中の魔法が枠となっっている光玉を破ろうとしているのです。もう一度巨大で、しかも更に堅牢なものが作れるだろうか……そう考え、ジルはただれた右手を左手でぎゅっと握りました。

「ジル殿は…なぜここに？もう身体は良いのか？その…手を見る限りでは無事には見えないが」

「ジル殿はヤンテに起こされたそうじゃ」

「は?!」

「夢に出てきたんですよ。そしてマールの危機を教えられた。結果……間に合ったとは思えない……っ」

傷ついた右手を押さえながら、ジルが吐き捨てるように言いました。

その時、棟を警備していたドリーが控えめに声をかけました。

「すみません。あの…イデイ様が戻られました」

「それは本当か!ジャーレは捕らえたか!?!」

「それが……いらっしやらないのです。ガイアスがまだ周辺を捜索中でございます」

「よし!そちらに行こう。ジル殿……どうする?兄上がついているから大丈夫だと思うが、大神官として、ヤンテの姫に害を成した者達の裁きの場には貴下にも同席して欲しい」

「……お話は分かりますが、マールをこの状態のまま置いていくわけにも……」

その時、ドリーの後ろから長身の影が現れました。

「私がマールについていよう」

「ルヴェル殿!」

「この闇はマールの身に異常があったんだろう?サイナの長の座に

賭けてでも、彼女を助きたい」

そう語るルヴェルの表情を、クラムルードはじっと見つめておりました。

確かに万里子が宮殿に留まるよう仕向けたのはクラムルードでしたが、それでもルヴェルが万里子を連れ戻すためにした事を考えると、ルヴェルの言葉を信じていいのか見極めなければならなかったのです。

ルヴェルは、とても静かで穏やかな瞳をしておりました。

その瞳に真っ直ぐ見返され、クラムルードは決断しました。

「ルヴェル殿、アイツを姫を頼む。ジル殿、俺と一緒に来てくれ」

「……分かりました。ルヴェル殿、光玉の中の空間に治癒魔法をかけてますが、もつのはあと少しかと……」

心配そうに話すジルのただれた手を見て、ルヴェルは労うようにジルの肩に軽く手を置きました。

「充分だ、ありがとう。後はまかせてくれ」

ドリーに引き続き警護をまかせ、ラプスが作り出す光玉を頼りに王の棟接見の間に向かいました。

宮殿内は恐ろしいまでの静寂に満ちておりました。

「ミルファ殿の動きが気になりますね」

「この暗闇だ。警護と称して腕の立つ数人のムバクの兵士を部屋につけている。他の滞在客も同じだ。容疑者は増やさない方がいいだろう」

「だから陛下の警護が手薄な訳ですか」

「……仕方ない。王の替えはきくが、ヤンテの姫の替えはいないのだから」

足早に向かった王の棟では、男達の怒鳴り声が聞こえてきました。

「この期に及んで何を騒いでいる！」

声を荒げクラムルドが入室すると、室内の喧騒は途端に静まり返りました。

部屋の中では、男達が数人後ろで縛られて膝をついています。その中に、ジルは見慣れた服装の男を見つけました。

「お前……」

マリーが消えたと報告に来た神官でした。何の力もないのに、高位の神官に名を連ねている男です。

「ギーシュと言ったか。そうだ、お前は確かガルデイスの神官長だったな」

ジルの鋭い言葉に、身体を強張らせるとギーシュは必死に首を振りました。

「いいえ！これは何かの間違いでございます！！イディ様が何をおっしゃっているのやら、私にはまったくわかりません！私達は、ただお庭を散歩していただけでございます！」

周りの男達もその言葉に一様に頷き返しました。

「ほ、ほれ！皆様もそう申しておるではないですか！だっ、第一！ジャーレ陛下の指示だと言いますが、そのジャーレ陛下はどこなのです？」

「お前達が匿っているのだろう！」

「そのようなことはございません！接見の間の窓が開いていたからといって何なのです！それならば窓の下をお調べになったらいいでしょう！飛び降り逃げた後などございません！」

「だからお前達が！」

すると、それまで何の言葉も発さずにいたジェルミがぼつりと呟きました。

「父は、飛び降りておりません」

部屋の中に居た全員が目がジェルミに集まります。

「ほれ！ジェルミ殿下もこのように申しております！」

「だからな、お前うるさいんだよ！」

イディはギャーギャー喚くギーシュの後ろ手を少し捻り上げました。

「いっデデデ！殿下！もっとはつきりおっしゃってください！」

再び全員の視線がジェルミに集中しました。そんな中でどこかすつきりした表情のジェルミは言葉を紡ぎ出しました。それはとても静かな声でしたが、その場に居た全員に大変な衝撃を与えました。

「父は接見の間から逃げていません、それは確かです。僕は父の腕が闇に溶けるのを見ました。単に闇に見えなくなっただんじゃない。

父は、ヤンテの怒りに触れ消えてしまっただんです」

63・裏切り（後書き）

気配が消えたのは、ジャーレでした！

サブタイトルの「裏切り」は、ルヴェルだったりギーシュだったり
ジェルミだったりりの行動でつけました。

その行動は、誰かにとっては裏切りだからです。

あ、でもルヴェルの最大の裏切り行為は連れ戻した時？

64・愛情と友情

ジルの言う通り、形を崩しながらもふよふよと空中で漂っていた光玉は、徐々に光とその輪郭を弱め、内側からの強大な魔力に耐えられなくなつたかのように突然はじめてしまいました。

その衝撃から一瞬身体が浮き上がった万里子をルヴェルは難なく受け止めると、暗くなった部屋の中でも迷わずに出口へと向かいました。

万里子が私室として使っている部屋は、棟の一番奥にありました。万里子を横抱きにしたまま、すっかりとした足取りで棟の奥へと向かうと、薄く開けられた扉からほんのりと小さな灯りがもれているのが見えました。

「……………セシユラか？」

その声に、ぼんやりとした灯りを背にして細長い影が振り向きました。

「ルヴェル様！！なぜここに……………姫様！！もしかやと心配しておりましたが、やはりこの闇は姫様の影響だったのですか！？では……………では姫様は！！！」

普段冷静なセシユラも、淡くもれる光にぼんやり照らされる万里子を見て慌て出し、心配そうに眉根を寄せました。

「大丈夫。まだ最悪な状況では無いよ。だが急いで治療しなければいけない状態だ。お前がマール付きの侍女なのは嬉しい偶然だな。まずは寢室に案内してくれ。それと、揃えて欲しいものがある。足

りないものは、おばあさま…長老に聞いてくれ。なんとしても用意するんだ。なるべく早く」

セシユラはルヴェルが伝える薬の材料を必死に覚えました。

その指示は、葉の先だけ刻め。や、球根だけを形が無くなるまで煮込め。青の実は全て捨てて青緑の実だけをすり潰せ。など非常に細かいものでした。

「以上だ。覚えたな？」

(お、覚えたか？では無くて覚えたな？なのですね。ルヴェルさま……)

セシユラの顔から色が失われ、返事に窮していると背後からしつかりとした返答が返ってきました。

「はい！大丈夫ですわ、ルヴェル様！今のお言葉全て書き留めました！」

扉の内側からレニーが飛び出してきて、セシユラの手を引きました。

「行きましよう、セシユラ。私にも手伝わせてちょうだい。ルヴェル様、寝室にご案内致します。こちらへ」

「ありがとう。君は……カナム人か？では、よろしく頼むよ。それと、マールが目を覚ますまでここには誰も近付けないようにドリーに伝えて言ってくれ」

「承知致しました」

ふたりが急いで出て行くのも確認せず、ルヴェルはさっさと寝室に向かい万里子をそつと横たえました。

意識の無い万里子の身体は、柔らかな寝台に受け止められ、最後までルヴェルの腕に引っかけかかっていた右手もポトリと寝台に落ちました。

「ねえ、ほんとにマールを起こしてくれるの？」

突然聞こえた声に驚く事もなく、ルヴェルは寝台を挟んで反対側に佇み万里子の顔を覗き込んでいるネストラードにちらりと視線を投げかけました。

「いつからここに…とは、聞かないでおきましょうか。さすがですね、殿下」

「今廊下で侍女のふたりとすれ違ったよ。ふたりとも僕には気付いてなかったけどね」

「スイル人の血がなせる業ってワケですか」

スイル人が水の中で陸上と同じように息ができ、目が見え会話まで出来るのは、水眼の存在も大きいのですが、元々は人としての気配を消す事が出来る為でした。

つまりスイル人は人間と水の精霊の混血一族なのです。

もともと、精霊の血が薄くなり、スイル人も最近では水眼に頼るようになって精霊の特徴を失くしてしまいました。今ではスイル人の起源ルーツを詳しく知る者も少なく、ネストラードのように陸上で自在に気配を消す事が出来る人間はとても稀有な存在でした。

「まあね。望んで出来るようになったワケじゃないけど、今は感謝

してるよ。暗闇でもこうして動けるからね。だから正直ヤンテはどうでもいい。でも、マールが目を覚まさないのは嫌なんだよね。で……今度はマールをちゃんと助けてくれるの？助けるつもりでここに連れて来たの？返事によっては任せておけない。だってルヴェルは一度マールを泣かせたじゃないか」

自分よりも頭ひとつ低い位置から睨みつけてくるネストロードの視線に、ルヴェルは先程同じような目で自分を見たクラムルードを思い出しました。

もう子供ではないという事が……一瞬目を細めて、ルヴェルは真剣な表情でネストロードを見返しました。

「助けますよ。私はそのために戻って来たのです」

そう言つてルヴェルはさつさと視線を万里子に戻します。

「それを素直に信じていいわけ？僕はマールの一番の友達なんだ。マールに少しでも被害が及ぶなら、僕は立ち向かう」

「友達？たかが友達の為にそこまでなさるのですか？その思いは本当に友情ですか？」

万里子の呼吸の強さを確認しながら、何でもないように「愛情では？」そう聞き返したルヴェルにネストロードは噛み付くように話し出しました。

「僕はっ！…レンアイってよく分からない。特定の異性が大切に愛しいって事だろう！？なら、なんで大切にされるはずのマールが苦しむんだ？なんで困らせるんだ？それなら、僕はレンアイなんていらない。僕は立場とか、異性とか関係なく僕を見てくれるマールだ

から好きなんだ。笑って欲しいし、苦しめたくない。だから、レンアイなんて要らない！」

テキパキと万里子の処置をしながら、ネストラードの言葉を適当に受け流そうとしていたルヴェルが再びネストラードに向き直りました。

「殿下……」

「ぼつ僕は、マールを泣かせたお前をまだ信用していない！だから、ここから離れないからな！」

ルヴェルは短く嘆息すると、ネストラードを受け入れる事にしました。

「なら、そこでただ喋ってないで手を貸してくださいませんか。マールを助けたいんでしょう？私が信用できないなら、信用できるまですべて見張っていたらどうです？ただし、ここに居るなら手を動かして頂きたい。さあ、これをこちらに半分だけ入れてすぐに混ぜてください」

命令とも思えるその言葉と共に乱暴に渡された小さなふたつのガラス瓶には、薄い水色と薄い黄色の液体がそれぞれ半分ずつ入っていました。

既に蓋を開けられていたそれを、危なっかしい手つきで慌てて受け取りました。

「えっ？どつちをどつちに？」

「ミリエリユーラの樹液を、サンドクの蜜に、きっちり半分だけ混

「ぜるんです」

「みみみ、ミリエ…何だ？」

「……青を黄色に半分だけ混ぜるんです。すぐに振って混ぜてください。混ぜりきるまで異臭がしますからね。すぐですよ」

「わ、わかった。きつちり半分だな？」

ガラス瓶には小さくメモリが刻まれており、ネストラードはガラス瓶の口をカチカチと振るえ合わせながら、トロリとしたミリエリユーラの樹液をサンドクの蜜に流し込みました。

「うっ！！！！」

ガラス瓶を持ったまま異臭に悶えるネストラードを、ルヴェルが冷たく一瞥しました。

「さあ。きつちり半分入れてさつさと混ぜないと、もっと辛くなりますよ」

「くそっ！なぜお前は平気なんだ！」

「嗅覚を麻痺させる薬を服用しましたので」

しれっと言い放つルヴェルに、ネストラードは文句を言おうとして大きく口を開け、強烈な匂いにむせてしまいました。

「ずっ、ずる……ずるいぞー！」

「薬を調合する時には当然の事です。不勉強ですよ。殿下？」

結局はうまくあしらわれているネストロードだったが、ルヴェルの心には彼の言葉が鋭く突き刺さっていました。

（恋愛とは、大切に愛しいという事……か。つまり、利用したり傷つけたり……自分の感情や都合を優先してるのは間違いだという事が……。まさか小さな殿下に教えられるとはな……）

そんな中、頼んでいた材料も届き調合は更に複雑で細かい作業となり、先程の腹いせとばかりに、ルヴェルは次々とネストロードに調合を指示して薬を仕上げていきました。

ずっと闇が続く中、人々は時間の流れがもはや分からなくなっておりました。

関所の門は再び閉じられ、門の前に押しかけていた城下町の人々は呆然と佇んでおりました。

この状況が長引けば、また草木は枯れて人々の心に悪が忍び寄りつてしまい兼ねないと、イデイは関所の様子を窺いながら舌打ちしました。

ジャーレは結局見つかりませんでした。術を使って搜索の範囲を広げても気配の欠片も見つけ出せません。

（あの息子の言う通り、ヤツは本当に消えてしまったのか？）

そのままもういくつかの闇の朝が過ぎたでしょうか……万里子が眠る寝室には、疲れ果てて床に転がるように眠るネストラードがおりました。

「まだかい？ マール。もう目を覚ませるだろう？」

休まずに看病していたルヴェルが、血色の良くなった万里子の頬をそつと撫でると、万里子は目を閉じたままくすぐったそうに少し身をよじりました。

「マール……すまなかった。不安にさせて……傷つけて……泣かせて……悪かった。起きてくれないと、ちゃんと謝れないじゃないか……」

使えるだけの薬は使い、今ではじっと寝台について見守るだけでした。

万里子の少しの変化でも見逃さないように、室内は常に光玉で煌々と照らされています。

万里子は時折身体を動かすことはありませんでしたが、目は堅く閉じられたままでした。

「おっと。少し唇が乾いてきたようだね」

万里子に語りかけるように囁きながら、冷たい水の入った小さなゴブレットを持ち上げると、小さな頭に手を添えてゴブレットを万里子の口に当てました。

「……………ん……うん……」

「…！…マール？気がついたかい？私に分かるかい？」

目の前でうつすら開いた黒い瞳がしばらくぼんやりと辺りを彷徨うと、ルヴェルの緑の瞳にカッチリと合いました。

（罵られるか…目を背けられるか…？）

とっさにそれを怖いと感じ、手にしたゴブレットの中で水が波立ちました。

「…マール…私が、分かるか？私は君に……」

謝りたかった…そう続けようとした言葉が、目の前でへにやりと力なく笑んだ瞳を見て喉の奥に留まりました。

「る、るべる、さん。あり…と、ざいます」

ありがとうございます…途切れ途切れでも、確かにそう言うと、万里子は再び目を閉じてしまいました。

「起きたのかっ！？」

いつの間にか身体を起こし、寝台に飛びつくようにやって来たネストラードに、ルヴェルは皆を呼んでくるよう伝えました。

「なんで僕が！お前！僕はこれでも王子だぞ！」

「ええ。勉強不足のね。でも今は私の助手を条件に人払いした寝室に残っていたはずですよ？」

「むう…っ、わ、分かったよ！マールにおかしな事するなよ！？」
そう捨て台詞を残すと、ネストラードは慌てて部屋を飛び出して行きました。

彼の視線を避けるように背けられていたルヴェルの瞳には、うっすらと涙が浮かんでおりました。

64・愛情と友情（後書き）

やっと起きましたー！＼（＾o＾）／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1314k/>

1 / 167

2011年11月17日04時45分発行